

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

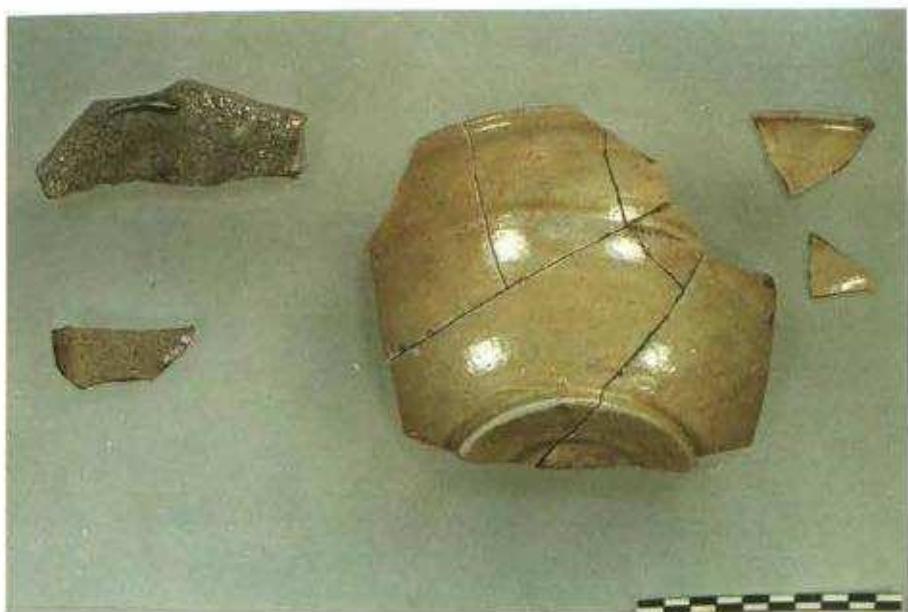
1973

新潟県教育委員会

北陸高速自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1973

新潟県教育委員会



半ノ木遺跡出土彩釉土器



枳迦堂遺跡出土青磁

## 序

県内を縦貫する「北陸」「関越」の二大高速道路の建設をはじめとし、「上越新幹線」「北越北線」等のいわゆる交通網の整備と共に伴う諸開発事業の推進により、いまや新潟県は大きく変わろうとしている。その良否は別として、それは、私たちがこれまで想像し得なかった速度と規模で進行している。

県教育委員会は、これらの諸工事に伴なう埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、適切な措置を構ずるため、予備調査や現地立会いを繰返しつつ、慎重に検討をかねててきた。昭和47年に法線が発表された黒崎～長岡間で7ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。

本書は日本道路公団の依託を受け、県教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した、「大墓」「积迦堂」「半ノ木」の3遺跡の発掘調査記録の報告である。

大墓遺跡では近世火葬墓の諸形式を明らかにし、积迦堂では室町時代の陶質土器・青磁の出土をみ、低湿地における古環境の復原につとめた。また、半ノ木遺跡では平安時代の集落址及び綠釉陶器の発見など、幾多の新しい事実が発見され、学術的な成果を得ることができた。本書がひろく斯界研究のための一助となれば、これにすぎるよろこびはない。

終りに、本調査に参加された調査員各位はもとより、多大のご協力・ご援助くださられた地元町村及び教育委員会関係者各位、また計画から調査実施に至るまで格別のご配慮を賜わった日本道路公団・県高速道路課・燕用地事務所の方々に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和48年3月

新潟県教育委員会

教育長 白井哲夫

## 例　　言

1. 本報告書は北陸高速自動車道建設に伴って消滅する埋蔵文化財包蔵地のうち、昭和47年に日本道路公団から新潟県が委嘱を受け、発掘調査を実施した3遺跡の発掘調査記録である。
2. 昭和47年度に発掘調査を実施したものは大墓遺跡（西蒲原郡黒崎町大字木場）、糸迎堂遺跡（西蒲原郡黒崎町大字板井）、半ノ木遺跡（南蒲原郡栄村大字岡野新田）で、本報告書はこの順序で掲載した。
3. 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当の職員があたった。
4. 遺物の実測・写真撮影及び図版などの作成は関雅之（糸迎堂遺跡）、本間信昭（半ノ木遺跡）、戸根与八郎（大墓遺跡）が主としてあたり、発掘担当者と協議しながら作業を進めた。
5. 本報告書の執筆は発掘担当者を中心に、各調査員と討議検討の上、分担執筆したもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
6. 発掘調査にあたり、参加者各位、黒崎町及び栄村当局、区長・地主ならびに住民各位のあたたかい支援とご協力を賜わった。また、日本道路公団高速道路東京建設局、日本道路公団新潟工事事務所、県高速道路課、燕用地事務所から種々のご配慮を賜った。記して感謝の意を表したい。
7. 本報告書の作成にあたり、次の諸氏から適切なご指導と助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）青木宏・阿部義平・石川県立郷土資料館・石川秀雄・伊藤信太郎・出光美術館・上原甲子郎・奥田直榮・金子拓男・川辺昌一・保久常晴・黒田領治・小林達雄・小村茂・小山富士夫・坂詰秀一・田島明人・田中琢・常滑陶芸研究所・植崎彰一・室岡博・安原啓示・吉岡康暢・四柳嘉章

# 目 次

## 西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告

I 序 説	1
1 発掘に至る経過	
2 発掘調査	
II 遺跡の立地と環境	4
1 立 地	
2 歴史的環境	
III 外 部 形 態	7
IV 内 部 構 造	9
1 葦石を伴う骨蔵器	
2 単独出土の骨蔵器	
3 埋 納 穴	
V 出 土 遺 物	13
1 泥 器	
2 陶 器	
3 磁 器	
4 鉄 製 品	
5 石 製 品	
VI 考 察	28
1 新潟県における火葬墳墓	
2 出土遺物の年代	
3 埋葬形態について	
4 人骨に関する所見	

## 西蒲原郡黒崎町积迦堂遺跡調査報告

I 序 説	37
1 遺跡発見の経緯	
2 発掘調査の経過	
II 遺 跡	40
1 遺跡の立地	
2 遺跡の地理的・歴史的環境	
3 グリットの設定	
4 遺物の出土状況	
III 地 質 調 査	44
1 地質調査について	
2 地質の概観	
3 地質断面	
4 珠藻遺骸群集	

5	花 粉 分 析	
6	大型植物遺体	
7	遺跡の環境について	
IV	遺 物	52
1	土器及び陶磁器	
2	土 製 品	
3	鐵 製 品	
4	錢 貨	
5	石 製 品	
V	考 察	64
1	陶質土器の年代	
2	新潟県における珠洲焼	
3	中世における土師質土器	
4	积迦堂遺跡の性格	

### 南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告

I	序 説	69
II	遺跡の地理的・歴史的環境	71
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
III	グリットの設定と層位	73
1	グリットの設定	
2	層 位	
IV	遺構と遺物	77
1	住居址・出土遺物	
2	井戸・出土遺物	
3	ピット状遺構	
4	溝 状 遺 構	
V	遺 物	94
1	土 師 器	
2	須 惠 器	
3	墨 書 土 器	
4	土 製 品	
5	石 製 品	
VI	考 察	112
1	土器の編年的考察	
2	土師器、須恵器の製作について	
3	井戸枠について	
4	半ノ木遺跡の性格	

## 図版目次

### 大墓遺跡

- 図版第1図 大墓・积迦堂遺跡付近の航空写真  
図版第2図 大墓遺跡付近の航空写真  
図版第3図 墳墓全 景  
図版第4図 1号葺石  
図版第5図 2号葺石, 1号葺石(骨蔵器出土状態)  
図版第6図 1号骨蔵器の出土状態  
図版第7図 3号骨蔵器, 2号骨蔵器の出土状態  
図版第8図 4号骨蔵器の出土状態  
図版第9図 埋 納 穴 群  
図版第10図 埋納穴断面状況・グリット  
図版第11図 埋葬施設, 鍋, 茶碗の出土状態  
図版第12図 第二群埋納穴伴出の皿, 第二群埋納穴伴出の茶碗・皿  
図版第13図 埋 納 穴 各 種  
図版第14図 埋 納 穴 各 種  
図版第15図 出土遺物(骨蔵器)  
図版第16図 出土遺物(骨蔵器)  
図版第17図 出土遺物(陶磁器・骨蔵器・鍋)  
図版第18図 2号骨蔵器の入子状態, 出土遺物(陶器片)  
図版第19図 出土遺物(陶磁器片)  
図版第20図 出土遺物(鉄製品・石製品)  
図版第21図 骨蔵器・擂鉢穿穴状態

### 积迦堂遺跡

- 図版第22図 积迦堂遺跡付近の航空写真  
図版第23図 积迦堂, 遺跡より弥彦山・角田山をのぞむ, 発掘グリット  
図版第24図 発掘スナップ, 全面発掘をしたグリット  
図版第25図 遺物の出土状態(甕形土器)  
図版第26図 遺物の出土状態(擂鉢形土器)  
図版第27図 遺物の出土状態(甕形土器・擂鉢形土器・土師質土器)  
図版第28図 土層断面(20C・38B・62B・100C)  
図版第29図 94Gグリット出土の自然木, 60Cグリット出土の自然木

- 図版第30図 珪藻  
図版第31図 大型植物遺体  
図版第32図 大型植物遺体  
図版第33図 須恵器、陶質土器  
図版第34図 陶質土器  
図版第35図 土師質土器・磁器・土錐・鉄製品・砥石

### 半ノ木遺跡

- 図版第36図 半ノ木遺跡付近の航空写真  
図版第37図 半ノ木遺跡の遠景・遺跡の近景  
図版第38図 第1次調査グリット、第2次調査グリット  
図版第39図 第1号井戸・第1号井戸断面  
図版第40図 井戸枠の外側から出土した土器  
図版第41図 丸木舟の井戸枠  
図版第42図 第2号井戸・第2号井戸断面  
図版第43図 第3号井戸・ピット状遺構  
図版第44図 第1号溝・第3号溝  
図版第45図 土師器長胴甕の出土状態・須恵器甕の出土状態  
図版第46図 第10号ピット出土の土師器・住居址出土の綠釉陶器  
図版第47図 須恵器大甕底部の出土状態・須恵器の出土状態  
図版第48図 須恵器の出土状態  
図版第49図 出土遺物（土師器・彩釉陶器・須恵器）  
図版第50図 出土遺物（須恵器）

## 挿図目次

### 大墓遺跡

第1図 大墓遺跡周辺の地形図	5
第2図 遺跡付近の地形図	6
第3図 墳丘断面図	7
第4図 墳丘実測図	8
第5図 1号葺石実測図	9
第6図 2号葺石実測図	10
第7図 4号骨蔵器埋置断面図	10
第8図 第一群埋納穴	12
第9図 第二群埋納穴	12
第10図 第三群埋納穴	13
第11図 骨蔵器	15
第12図 骨蔵器	17
第13図 骨蔵器	19
第14図 骨蔵器・鉢類	21
第15図 陶磁器	23
第16図 第二群埋納穴伴出の陶器	24
第17図 鉄製品	25
第18図 石製品	26
表1 埋納穴計測値一覧	35

### 积迦堂遺跡

第1図 积迦堂遺跡付近の地形図	40
第2図 土層断面図(17C・76C)	42
第3図 积迦堂遺跡のグリッド配置図	43
第4図 地質柱状図	折込
第5図 花粉分析図	折込
第6図 木本花粉と草本花粉の割合	47
第7図 イネ科花粉の大きさ	49
第8図 須恵器・陶質土器(蓋・擂鉢)	53
第9図 陶質土器(擂鉢)	55

第10図 陶質土器(擂鉢) .....	57
第11図 陶質土器(擂鉢・甕) .....	58
第12図 陶質土器(甕) .....	59
第13図 土師質土器・青磁 .....	61
第14図 皇宋通宝 .....	62
第15図 土鍤・鉄製品・砾石 .....	63
表1 珪藻遺骸群質リスト .....	折込
表2 花粉種組成 .....	折込
表3 植物遺体リスト .....	折込

## 半ノ木遺跡

第1図 半ノ木遺跡付近の地形図 .....	72
第2図 遺跡全測図 .....	74
第3図 グリット土層断面図 .....	76
第4図 住居址・井戸・ピット状遺構全測図 .....	78
第5図 住居址出土の土師器・綠釉陶器 .....	80
第6図 住居址出土の土師器 .....	82
第7図 住居址出土の須恵器 .....	84
第8図 住居址出土の須恵器 .....	85
第9図 第1号井戸 .....	87
第10図 第2号井戸 .....	88
第11図 第3号井戸・第3号井戸出土の椗 .....	89
第12図 井戸出土の土器 .....	90
第13図 ピット状遺構・ピット状遺構出土の須恵器・第10号ピット出土の土師器・第2号溝状遺構出土土師器 .....	91
第14図 第1号溝・第2号溝・ピット・第3号溝 .....	92
第15図 土師器(甕) .....	95
第16図 土師器(甕) .....	96
第17図 土師器(甕) .....	97
第18図 須恵器(杯) .....	99
第19図 須恵器(杯) .....	101
第20図 須恵器(杯) .....	103
第21図 須恵器(杯・蓋) .....	104
第22図 須恵器(壺・甕) .....	105

第23図 須 恵 器(甕・横瓶) .....	106
第24図 須恵器(叩目文の組み合せ) .....	107
第25図 須恵器(叩目文の組み合せ) .....	108
第26図 墨 書 土 器 .....	110
第27図 土 製 品 .....	111
第28図 石 製 品 .....	111
第29図 第1号井戸出土の丸木舟井戸神 .....	117
表1 須恵器叩目文の組み合せ .....	102

# 西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告

# I 序 説

## 1 発掘に至る経過

黒崎町は、新潟市の郊外にあって、信濃川の形成した低湿沖積平野に発達した町である。東に信濃川から分流した中ノ口川が、大字金巻地内で再び合流して日本海に注いでいる。西に新川、西川が町域を画するように流れている。西川は、砂丘後背地をぬうようにして蛇行しながら信濃川に注いでいる。北は単調な蒲原平野の水田が続いているが、西南部には笠峰弥彦山(638m)が平野の単調さを破るかのようにそびえている。

この地域は潟湖地帯で、古代より近世に至るまで水との戦いであり分水の歴史でもあった。治水の歴史は、上杉氏が越後一円を統一した中世末から盛んとなり、その代表的なのは、上杉氏の家老、直江兼続によって始められたという中ノ口川、西川等の直江工事である(1582年)。しかし、河川改修工事による流路の固定化だけでは、洪水のたびに溢水する潟湖地帯の水害は解決されず、江戸時代に入っても下流域で大きな水害が40数件を数え、特に宝曆7年(1757年)5月の信濃川の大洪水はひどかった。<sup>(註1)</sup>幕末、文政元年に新川の開鑿が起工され、同3年に完成している。分水史に終止符をうったのは、明治42年から大正12年(1906年～1923年)までの15年間を要して完成した大河津分水であった。これによって、信濃川下流域は完全干拓が行なわれた。その後、数回の大規模な土地改良工事等が行なわれ、かつての水郷的景観は全く残していない。

信濃川は、越後中世以来の生活物資及び年貢米の重要運搬路であり、新潟與羽米送りの西廻り航路の寄港地として栄えた新潟港を中心として、各河川の本流、支流の通行可能範囲にはほとんど船運網が広がっていた。信濃川のものは長岡船道、西川のものは蒲原船道と呼ばれ、新潟と長岡を結んでいた。<sup>(註2)</sup>本町に大野町という地名の所があって、信濃川通船の川渡となっている。信濃川、中ノ口川の内水面の湊町として発展した事が充分に想定される。

今日、黒崎町は新潟市のベットタウンとなりつつあり、特に寺地、立仏、山田と金巻の一部は新しい住宅街を形成している。

大墓遺跡は、黒崎町市街地より西南へ約2kmの木場地内に所在している。本遺跡は、『新潟県遺跡目録』<sup>(註3)</sup>、『全国遺跡地図(新潟県)』<sup>(註4)</sup>にも掲載されておらず、昭和39年発刊の青木宏氏『越後木場城一戦乱の蒲原歴史と木場城について』<sup>(註5)</sup>の中で、金塚友之蔵氏の一文を引用しておられる。それによると、『八幡宮の近くに御墓と呼ぶ塚あり』と記され、本遺跡紹介の最初である。

昭和47年に北陸高速自動車道建設工事の法線(長岡～黒崎間)が発表された。当時の文化財保護室では、新潟～長岡間の計画路線上を踏査した結果、本遺跡が法線中央にかかる事が判明したのである。その後、昭和47年5月～8月にかけて数回現地踏査をし、遺物の採集、伝承の聞き込み等を行なった。

発掘は文化庁と日本道路公团による覚書に基いて、日本道路公团高速道路東京建設局局長が委託

者、新潟県知事が受託者となって昭和47年8月21日から9月5日までの19日間にわたって、大墓遺跡の発掘調査が実施されるに至ったのである。

(戸根与八郎)

## 2 発掘調査

発掘調査は調査対象地の墳墓の外側、現畠地までを含む225m<sup>2</sup>である。調査に際しては、どこにどんな遺構・遺物がどんなあり方で存在するのか全く不明であった。このため、遺構の追求が第一の課題であり、遺物は小片を含めた一点一点に一連番号を付し、出土地点の混同をさける様に努めた。発掘は、最初トレンチ方式をとり、遺構の存在等により全面発掘に切り替えてゆくことを基本的態度とした。

調査員一行は、21日午前中に現場へ到着し、墳墓の全面測量並びに周辺地形図の作成を行なった。同時に青木宏氏の案内で、地元関係者への挨拶回りを行なった。翌22日には墳墓前面に於て、日本道路公团新潟工事事務所、県高速道路課、燕用地事務所、黒埼町当局、地主並びに調査員、補助員が出席し、慰靈祭を挙行した。終了後ただちに墳丘中央部に幅35cmのセクションベルトを十字に裾まで残す様に、排水路と平行するトレンチ2本、これに中央部で直交するトレンチ2本を幅1mで裾部まで計4本を設定した。トレンチはL字形をし、便宜上北側より反時計廻りでA、B、C、Dトレンチとした。とりあえずA、B、Cトレンチの内部主体の探索からはじめた。各トレンチ共、表土下約20cmまで掘り下げる。遺物は陶磁器の破片で散在して出土し、特にBCトレンチに多かった。Aトレンチでは砂層が認められ、遺物は全く出土しなかった。調査3日目の23日には表土下50cm近くまで掘り下げる。骨片及び形のしっかりした人骨片がかなり出土する様になり、群として把握される様になってきた。Cトレンチでは、2号葺石(第6図、図版第5図)が検出された。また、西側に於ては石を内蔵した骨蔵器が検出され、これを1号骨蔵器と呼ぶ(図版第6図)。出土土器は、相変らず陶磁器破片である。24日には、Dトレンチの掘り下げを開始すると共に、Aトレンチを更に墳丘裾外へ2m拡張する。骨片が出土しているが、墳丘寄りの所から分散的に認められた。また、Dトレンチでは、墳丘裾部より2号骨蔵器が検出された(図版第7図)。翌25日からは、各トレンチ共にⅢ層に達した模様なので、全面発掘に切り替え、トレンチと同じ方向へ回る様にA、B、C、D区とする。C区南側では1号葺石が検出され、B区北側裾部より小形3号骨蔵器(図版第7図)が検出された。また、D区のセクションベルト第3層上部より染付の徳利が検出された(図版第10図)。Aトレンチ拡張区では現地表面下70cmで灰色粘土層になり湧水線となる。Bトレンチ、Cトレンチでも旧状を把握するために拡張をはじめめる。27日には各区とも3層に達し、陶磁器の破片出土量は少なくなる反面、人骨群が顕著に認められる様になり、この掘り込みの確認に調査の主体が移る。この結果、28日、29日、30日には掘り込みが確認され、人骨の埋納穴と判明する。一方、1号葺石は骨蔵器を伴うものであることが判明する。墳墓断面図の作成。翌31日より9月2日にかけては、更にIV層を切って底面はV層上面に構築された埋穴群が検出され、埋納穴にもそれぞれ特色がある事が明らかとなる。31日には鉄鍋、黄瀬戸皿が入子になっている茶碗が14号埋納穴西側で検出された(図版第11図)。またC区南側裾外より4号骨蔵器が検出され、埋置状態も確認された。9月3日には、第V層を切って構築された埋納穴群が検

出された。完掘後写真撮影、実測を行う。午後より墳墓の埋め戻しを始める。5日には、遺跡整備、器材整理、遺物を格納し、多大なる成果をおさめて発掘調査は完全に終了した。(戸根与八郎)

- 註 1 西蒲原郡教育会 『西蒲原郡志』明治40年  
2 井上鏡夫 『新潟県の歴史』昭和45年  
3 新潟県教育委員会 『新潟県遺跡目録』新潟県文化財年報第6号 昭和42年  
4 文化財保護委員会 『全国遺跡地図(新潟県)』昭和43年  
5 青木宏 『越後木場城』昭和39年

調査団員の構成は下記の通りである。

調査担当者	関 雅 之	(県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
調査員	本間 信昭	(県教育庁文化行政課主事)
	戸根 与八郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	家田 順一郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	駒形 敏朗	(県教育庁文化行政課嘱託)
	苅部 啓子	(県教育庁文化行政課嘱託)
	上原 甲子郎	(県文化財臨時調査審議委員・日本考古学協会員)
	青木 宏	(黒埼町役場住民課長)
	金子 拓男	(県立長岡大手高等学校教諭・日本考古学協会員)
	中島 栄一	(市立新潟工業高等学校教諭・日本考古学協会員)

#### 人骨に関する調査員

小片 保	(新潟大学医学部教授・日本考古学協会員)
森沢 佐歲	(新潟大学医学部助手)
加藤 克知	(新潟大学医学部助手)
石野 辰夫	(新潟大学医学部副手)
丸山 総次郎	(新潟大学医学部文部技官)

調査補助員	鶴尾 年秀	(緒立八幡宮神官)
	布川 忠一	(緒立遺跡保存会会員)
	横山 勝栄	(山北町立南中学校教諭)
	伊藤 裕助	(明治大学学生)
	小島 幸雄	(立正大学学生)
	田辺 早苗	(国学院大学学生)

#### 作業員 3名

協力員	黒埼町役場
	黒埼町教育委員会
	山際 泰司 (地主)
	桜井 市助 (地主)
	吉井 平作 (黒埼町役場建設商工課主事)
事務局	柴野 達男 (県教育庁文化行政課管理班係長)
	小野 栄一 (県教育庁文化行政課管理班主事)

## II 遺跡の立地と環境

### 1 立 地

大墓遺跡は西蒲原郡黒崎町大字木場字本田に所在している。第1図は大墓遺跡付近の地理的景観を示したもので、北には日本海に臨む高度20m前後の浜堤または砂丘が形成され、この砂丘後背に広大な信濃川の後背湿地と氾濫原低地が形成されている。この後背湿地には多くの湖沼群が存在したが、今では大部分が干拓されて水田地帯となっている。

黒崎町は西川と中ノ口川にはさまれた堤間低地部で、ほとんど1m以下の平坦な地形を呈している。図版第1図の航空写真は、河川流路にそった樹枝状の自然堤防に木場部落が立地していることを示している。図版第2図によると、大墓遺跡は中ノ口川から分流し木場の自然堤防を形成した、旧河道上に位置している。しかし、かつて河川の流路であった時代は大墓遺跡の成立より、はるか以前であったと推定される。

(関 雅之)

### 2 歴史的環境

黒崎町は中ノ口川、新川、西川によって囲まれ、かつて潟湖が大きな面積をもっていたものと思われる。この自然の制約は歴史的な環境に大きな影響を与えたものと推察される。

第1図に示した1~7の遺跡はほとんど自然堤防に位置し、現在の集落立地と規を一にしている。

1は黒崎町大字黒鳥小字川根潟に所在する縦立遺跡である。諸立八幡宮の西方約200mの地点にあり、遺跡一帯は微高地状をなす畠地と水田である。<sup>(註1)</sup>昭和32・33年に発掘調査がなされ、縄文晩期終末の土器群と古式土師器が出土している。本地域で最も規模が大きく、唯一の縄文遺跡である。

2は縦立八幡宮の社殿下になっているが、縄文晩期と古式土師器を出土し、古式土師器に伴う石組の遺構も発見され、現在も保存されている。

3は黒崎町大字北場にある的場遺跡である。的場潟の南側にある微高地に遺跡が立地し、弥生後期の土器と管玉・須恵器などが出土し、戦国期の的場館跡と重複している。館跡は半壌しているが2重の堀を残しており、中世陶磁器・羽口・鉄鍔などが出土している。<sup>(註2)</sup>4は黒崎町大字木場の大墓遺跡で本調査の対象となった遺跡である。<sup>(註3)</sup>5は黒崎町大字板井字本田に位置する御迎堂遺跡である。この南600mに御堂があり、この付近から天保年間に御迎堂が出土している。遺跡は御堂を中心とする付近一帯で、平安時代の須恵器と室町時代の陶質土器が出土している。

6は黒崎町大字木場に所在する木場城の推定地である。天正9年(1581年)、上杉景勝は木場城本丸に夢沼藤七を、山吉玄蕃を二ノ丸の将として、新発田重家にそなえた。この推定地からは陶質土器・青磁・天目などの陶磁器と共に、羽口・鉄片などが出土している。

7は味方村吉江に所在する館跡で、吉江氏の館であるとされている。高念寺より東方100mのところに通称本田屋敷と呼ばれるところがあり、ここが館跡である。

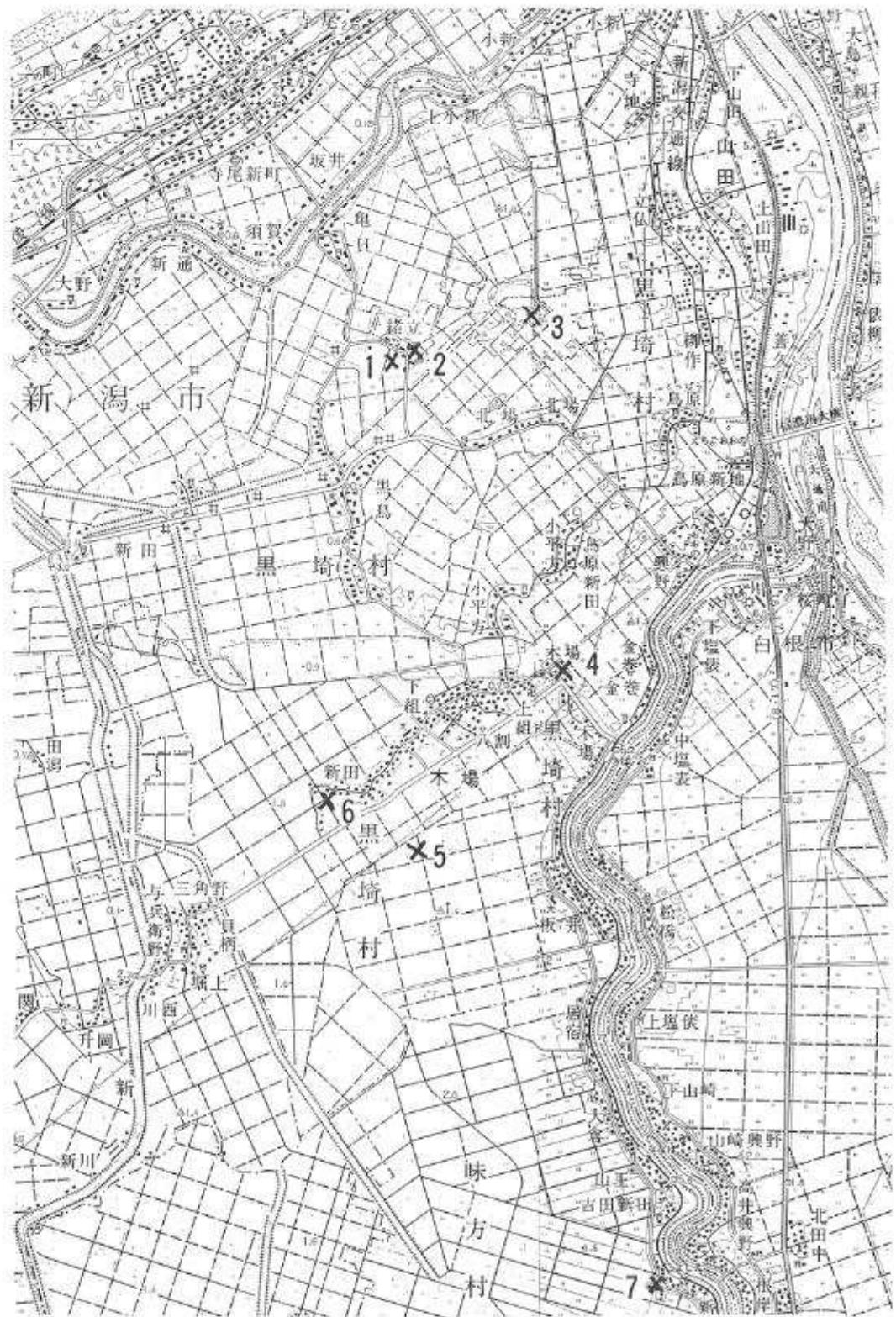
(関 雅之)

註 1 稲崎正彦・上原甲子郎「亀ヶ岡式文化の外縦圓における終末期の土器型式—新潟県・縦立遺跡出土の土器をめぐって—」石器時代第9号 昭和44年

2 上原甲子郎他「越後縦立遺跡の古式土師器」考古学雑誌第52巻3号 昭和43年

3 青木宏「新潟県の場遺跡緊急調査報告書」昭和46年

4 青木宏「越後木場城」昭和39年



第1図 大墓遺跡周辺の地形図  
(国土地理院発行 昭和16年「内野」「赤堀」「新潟」昭和45年「新津」1:50,000)



第2図 遺跡付近の地形図

### III 外 部 形 態

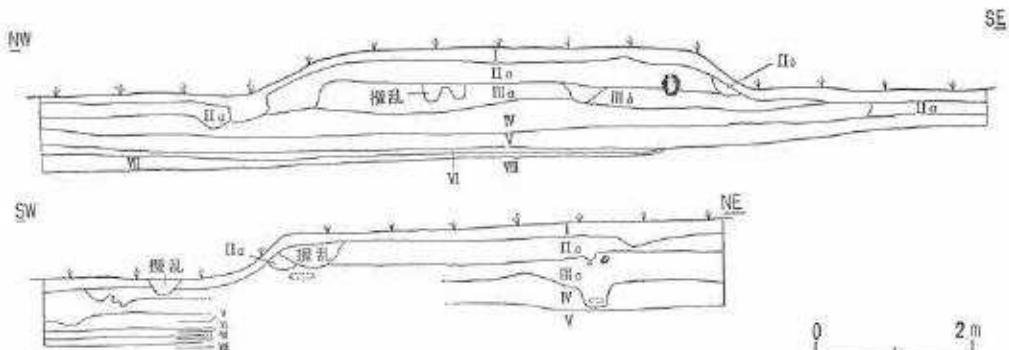
本墳墓は木場幹線排水路の左岸堤防に隣接した標高1m弱の平地に立地している(第2図)。現状の規模は、北東部が堤防のため墓域の境界が明らかではないが、長軸5.7m、短軸5.0m、高さ約70cmを測る土壇を呈している(第4図・図版第3図)。

墳丘上部は北東部堤防から南西部にかけて緩かに傾斜し、40~60cmラインで急におちている。北西部から南東部にかけては、墳丘中央部でわずかに高くなる程度である。北側に目通りのまわり124cmの松と目通りのまわり83cmの樺木があり、中央部に数株が合体して生長した樺が植えられている。樺周辺部には陶磁器破片が一部露出していた。

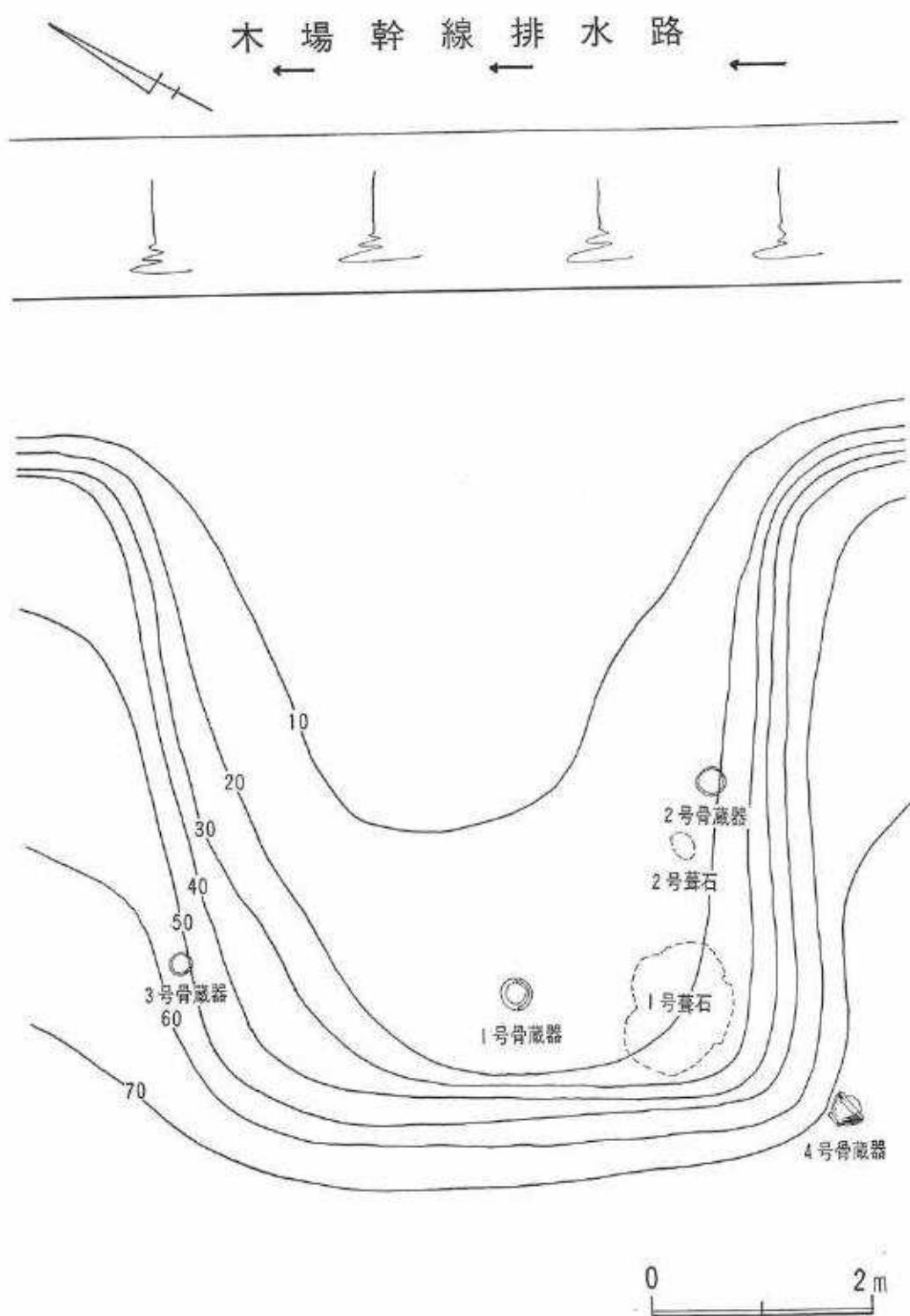
本墳墓の基盤層は、第Ⅳ層の赤灰色粘土で、その上に第Ⅲ層の黒褐色土が盛られ、封土を形成している。北西部で厚さ約40cmを測るが、南東部・南西部端では薄くなり、流れ込む様になって攪乱され、後世に削り取られたものであろう。第Ⅳ層は水平堆積をなし、厚さ20~40cmを測るが、南東部・南西部で切れ、第Ⅱ層が入ってくる。北西部では落ち込みが見られ、墓域を画するものであろうか。その上に第Ⅱ層が盛られている。

遺物は、第Ⅱ、第Ⅲ層中から多く出土し、下層へ行くに従って減少する傾向がある。本墳墓は、土層断面図、火葬骨埋納穴の分布範囲などから、現状よりも大きい方形土壇を呈していたものと推定される。

(戸根与八郎)



第3図 墳丘断面図  
I 暗茶褐色土 IIa 明茶褐色土 IIb 木炭 IIIa 黒褐色土  
IIIb 暗黒褐色土 IV 赤灰色粘土 V 茶褐色砂 VI 青灰色粘土  
VII 茶褐色砂 VIII 青灰色粘土



第4図 墳丘実測図

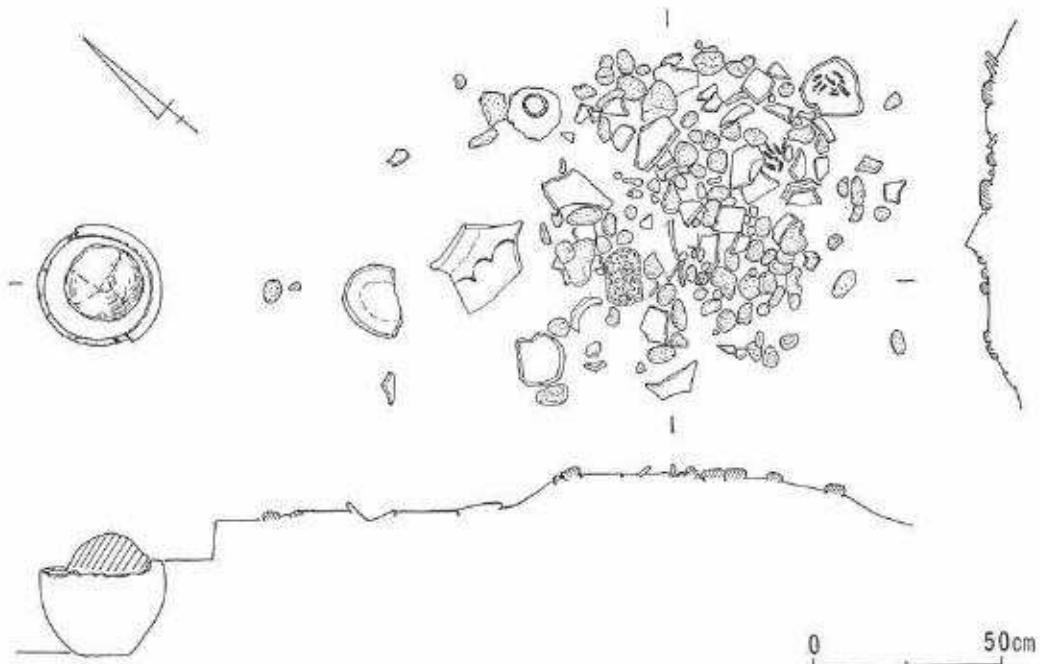
## IV 内 部 構 造

本墳墓で検出されたものとしては、葺石を伴う骨蔵器、単独出土の骨蔵器、火葬骨を埋納した小形埋納穴の3種に分けられる。

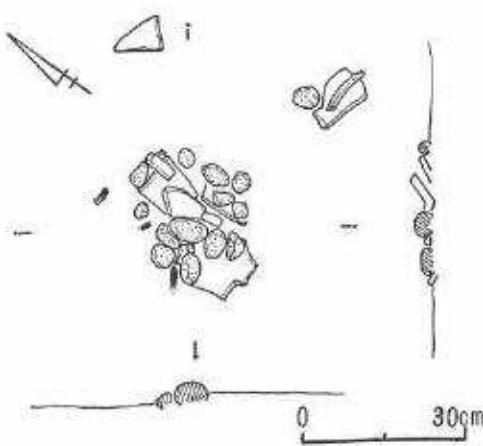
### 1 蔷石を伴う骨蔵器

1号葺石（第5図・図版第4図） C区で検出されたもので墳丘の南側隅に位置し、第Ⅰ層中より第Ⅱ層上面にわたるものである。葺石の範囲は所によって多少の濃淡を有するが、直径80cmの円形状になつておらず、中央部はかなり高くなり厚さも約10~15cmを測る。葺石の上には、大形甕破片、火葬骨の入った壺もしくは甕破片が散乱していた。葺石下には2個の完形骨蔵器（第11図6、第12図13）が直立した状態で埋置されていた。掘り込みは土層不明瞭のため確認することはできなかった。なお、骨蔵器周辺には木炭塊が数点と火葬骨骨片が散乱していた。葺石下には骨蔵器の同一個体破片及び火葬骨骨片が多く散乱した状態で検出された。火葬骨骨片はこれらの骨蔵器に入っていたものと考えられ、人為的もしくは自然的条件によって破碎されたものであろう。葺石の大きさは3~7cmの川原石及び角礫で、共に花崗岩質、安山岩質のものである。

2号葺石（第6図、図版第5図） 1号葺石の北東部で検出されたもので、表土に近いため部分的に範囲を確認したにすぎない。第Ⅱ層上面に構築されている。葺石の範囲は長径25cm、短径20cmを測る楕円形のもので、厚さ10cm弱を算し、直径3~5cm大の川原石を使っている。骨蔵器は上から何ら



第5図 1号葺石実測図



第6図 2号墓石実測図

かの力が加えられ、押しつぶされたような出土状態を示し、破片となって周辺部に散乱していた。また骨片がその付近より検出されている（第12図15）。

## 2 単独出土の骨蔵器

1号骨蔵器（図版第6図） 墓丘南西部、墳丘下47.3cmで検出され、火消甕を骨蔵器に転用したものである。直立した状態で出土し、その中に最大幅約20cm、厚さ約15cm、底面の平らな不整台形の川原石を内蔵している。おそらく、板様の蓋の上に川原石を置いたものが、腐蝕して骨蔵器内に落下したものであろう。骨蔵器の底部中央には直径3.4cmの穴が旋成後穿たれている。内部には、火葬骨が充満した状態で八分目程入っていた。

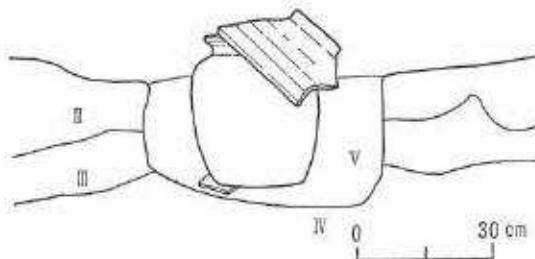
2号骨蔵器（図版第6図） 墓丘南東部、墳丘下44cmで検出されたものである。直立した状態で出土し、本骨蔵器は、入子の状態で（図版第18図）もう1つの骨蔵器を内部に蔵していた。人骨は四分目程底部に入っていた。一方、入子の骨蔵器（第11図4、図版第15図3）には火葬骨が充満した状態で八分目程入っていた。

3号骨蔵器（図版第7図） 墓丘西北西部、墳丘下51cmで直立した状態で検出されたもので、火葬骨が八～九分目程充満して入っていた。

4号骨蔵器（第7図、図版第8図） 墓丘西南の墳丘外、墳丘下82cmで検出されたもので、擂鉢を蓋として利用しているものである。掘り込みプランは、長径54cm、短径50cmをはかる円形のもので深さは28cmを算する。第Ⅱ層の暗褐色土、第Ⅲ層の黒褐色土を掘り、底は第Ⅳ層の赤灰色粘土層に達し、レンズ状を呈している。掘り込みの内部充満土は灰茶褐色土である。直立した状態で蓋をかぶせ、甕底部には陶器片が密着して1片検出された。おそらく骨蔵器の安定をはかるために人为的に置いたものであろう。なお、1～3号の骨蔵器を埋設するための掘り込み状態は、土層不明瞭のため確認はできなかった。

## 3 埋 納 穴（第8・9・10図、図版9・13・14図）<sup>(註1)</sup>

埋納穴は調査対象地範囲内で合計51箇所確認され、これらには火葬人骨が充満した状態で詰まっていた。全部同一レベルのものではなくある程度のレベル差を有し、大略三群に分けることができる。なお、実測図埋納穴番号と埋納穴計測値一覧表（表1）の埋納穴番号は同一番号である。



第7図 4号骨蔵器埋置断面図

第一群埋納穴（第8図） 墳丘面下69~79cmで検出されたもので、第Ⅲ層の黒褐色土中に底面を有するものである。本群は墳墓中央部より西側に位置し、その分布範囲は西側中央部に広がっている。

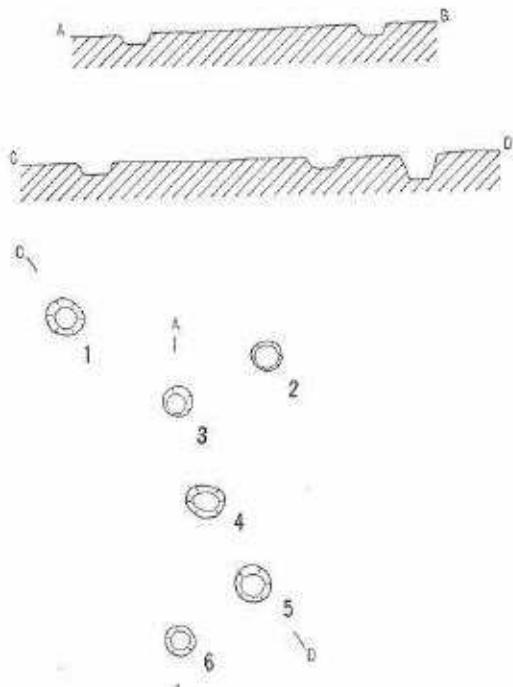
形態はほぼ円形のものが主で（4）の如く梢円形を呈するものもある。埋納穴掘り込み角度は70度から80度を測るものと、ほぼ垂直に掘り込まれたものとがあり、底面は平坦である。埋納穴内部からは人骨片に混じって微量の炭化物片が認められたにすぎない。

第二群埋納穴（第9図） 墳丘面下84~90cmで検出されたもので、第Ⅳ層の赤灰色粘土下部より掘り込まれ、底面が第V層の赤褐色砂上部に達するものである。本群は、第一群同様、墳墓中央部より西側に位置し、その分布範囲は南側に広がるもの（15, 16, 17, 18）と（21）のように単独に存在するものとがある。形態は、ほぼ円形のものが主で（8, 9, 13, 18, 19）のように梢円形のもの、（17, 21）のように方形に近い円形のものもある。埋納穴の掘り込み状態は第一群とほぼ同じであるが、底面は平坦なものとレンズ状を呈するものとがある。埋納穴内部からは人骨片に混じて微量の炭化物片及び焼土塊が認められたにすぎない。深度は深いもので14cm（10）、浅いもので4.5cm（9）をはかり、その他は6cm~10cmを測る。本群と同一レベルで碗・皿・鍋など（図版第11・12図）が出土している。碗は（17）の北西約60cmの所で、黄瀬戸小皿を内蔵して、鍋は碗の南西約40cmの所で伏せられて、また図版第12図1の皿は、（10）の北西約80cmの所で出土している。これらの遺物は、本群の埋納穴と機的な関連を有するものと思われる。

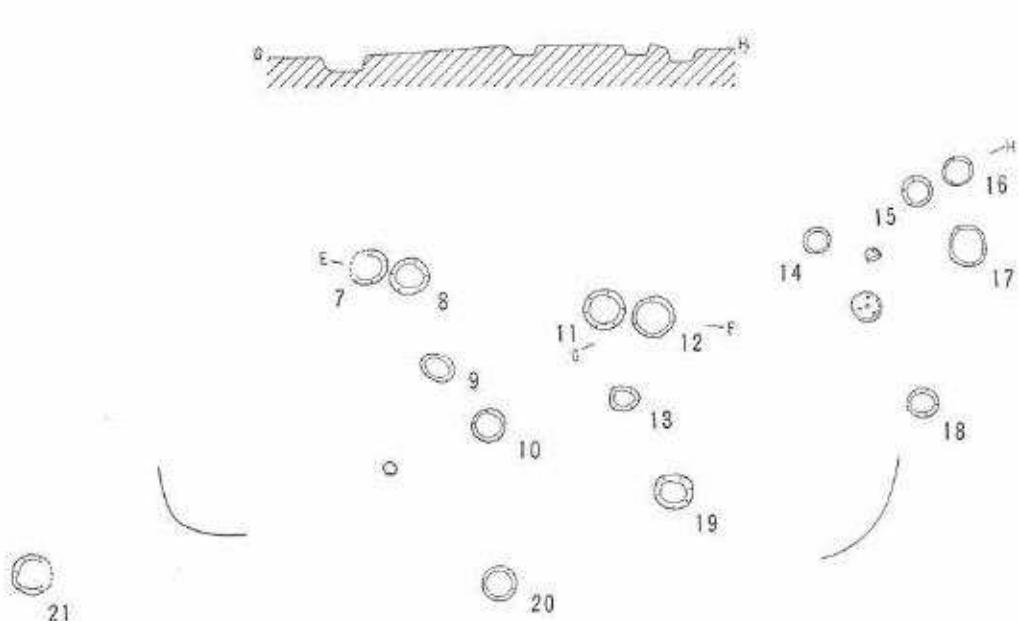
第三群埋納穴（第10図、図版第9図） 墳丘面下95.3cmから100.5cmで検出されたもので第V層の赤褐色砂より掘り込まれ、底面は赤褐色砂層下部に達している。分布範囲は第一群埋納穴、第二群埋納穴とは異なり、中央部にある程度の空間を作つては墳丘全域に広がり、南部から南西部にかけての埋納穴は、ほとんど現墳丘の外側に位置している。形態は円形・梢円形のものが主で、第一群、第二群埋納穴と共に通性を持ち、その掘り込み、底面の状態にも共通性が見られる。埋納穴内部からは人骨片に混じて炭化物片、焼土塊が数点認められたにすぎない。

第一群から第三群の埋納穴内部からの火葬人骨の埋納状態について見てみると、少なくとも三種のやり方がある。大きな火葬骨片を埋納穴の内壁にはりつけるように円形に並べ、中央部に細かい火葬骨片を充満させるように入れ、頭蓋骨を火葬骨上部に置いたものと底部に置いたものとがある。また火葬骨片を埋納穴内部に充満するように雜然とまとめて入れたものがある。火葬人骨の埋納には曲物、布袋などが用いられたかとも推定されるが、その断片類すら検出できなかった。（戸根与八郎）

註 1 埋納穴とは、縄文時代、弥生時代、歴史時代の土壤とは規模を異にし、直径30~35cm内外、深度10~15cmを測る小形ピットで内部に火葬人骨を埋納し、他に何の施設も持たないものをいう。



第8圖 第一羣埋納穴



第9圖 第二羣埋納穴

1:60

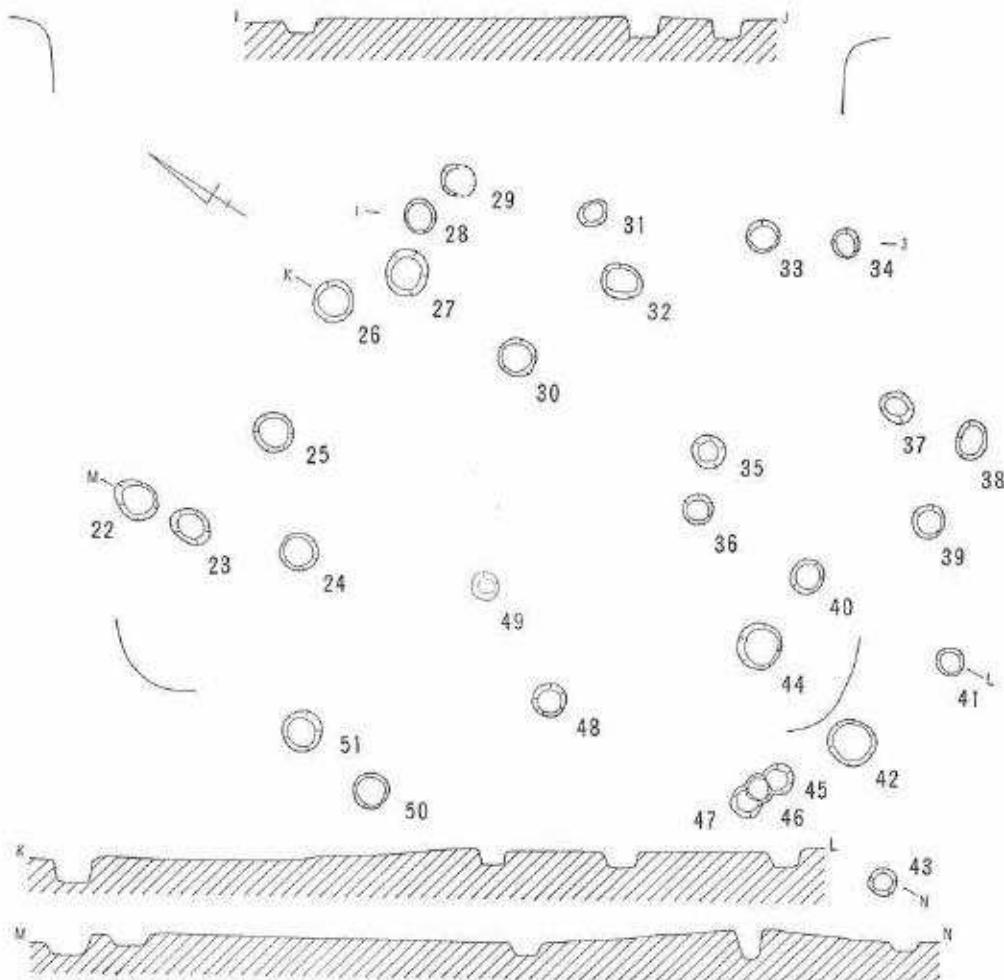
## V 出 土 遺 物

本墳墓より出土した遺物は、骨蔵器を含めた陶磁器片 280 点、鉄製品 4、石製品 4 と火葬人骨である。火葬人骨に関しては VI・人骨に関する所見を参照されたい。

陶磁器類は日用雑器類であり、種類別に見ると鉄釉・灰釉等を施した陶磁器、染付、無釉のものに分けられる。更にこれを器形別に見ると甕・壺・鉢・皿・瓶・蓋・香炉等がある。いまこれらを泥器・陶器・磁器に分け、順次挿図を中心記述を行ない、細部は写真図版を活用するものとする。

### 1 泥 器

1号骨蔵器（第14図20、図版第17図9、図版第21図上） 口径20cm、高さ24cm、底径22.5cmを測り、逆台形の脚が三本付されている骨蔵器である。口唇は鋭く内曲し、鋭く削り取られている。口辺部は水



1: 60

第10図 第三群埋納穴

平となっている。胴下半部にはロクロ痕がかすかに認められる。器体の厚さは2.5cm～3cmを測り、色調は赤褐色をしている。底部中央には直径3.4cmを測る不整円形の穴が焼成後外側より穿たれている。全体的に器面は滑らかで胎土、焼成共に良好である。形態より火消甕であるが、骨蔵器に再利用されたものである。

## 2 陶 器

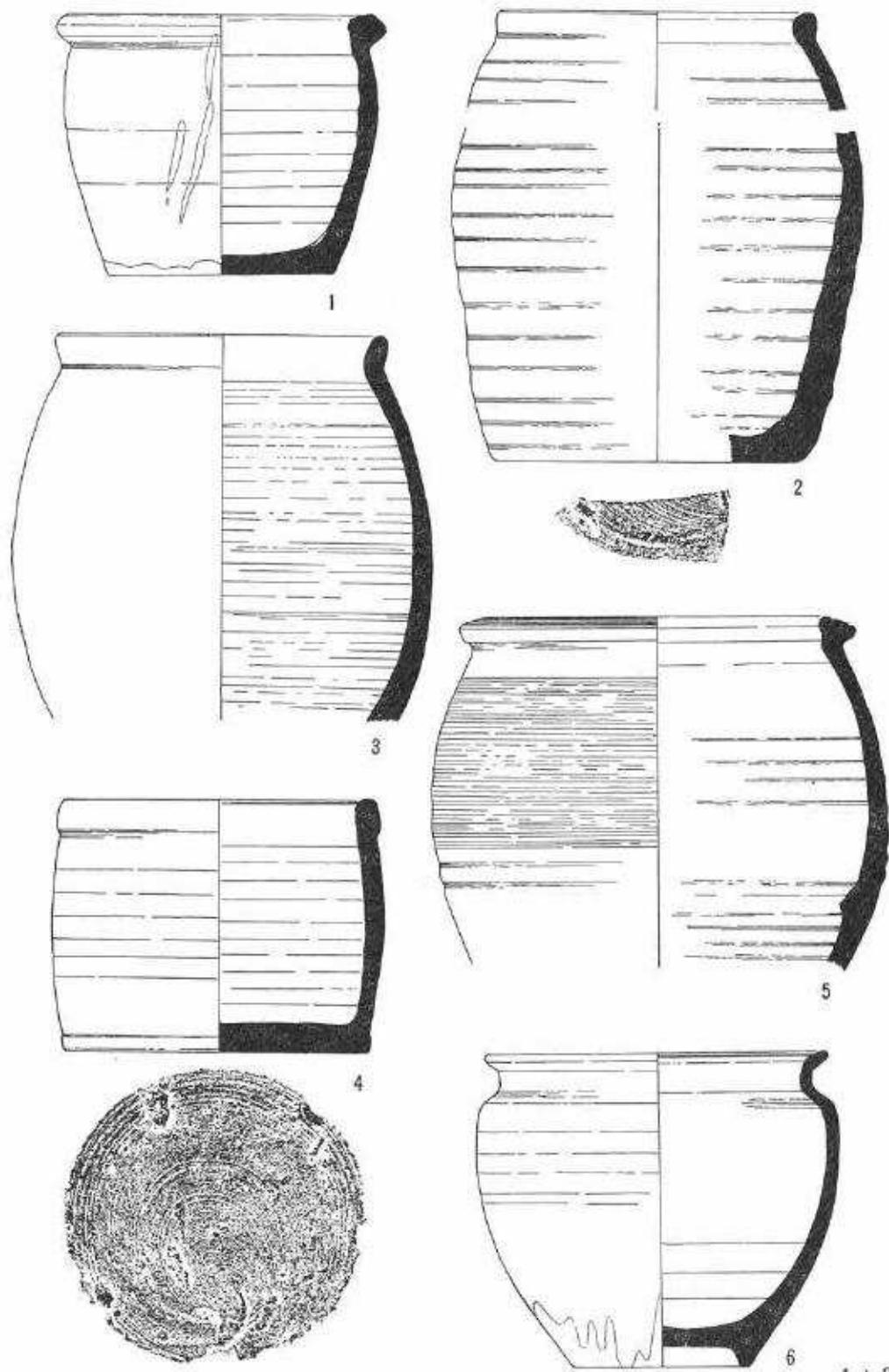
2号骨蔵器(第13図17、図版第16図10) 口径23.5cm、高さ27.3cm、底径16cmを測る。頸部は外反しながら立ちあがり、口唇部を嘴状に内側へ折りまげて丸味を持たせている。頸部から胴部上半にかけては「く」の字状に開き、そして緩やかに彎曲しながら底部に至る。底部は、若干揚げ底風を呈するが、焼成の際のゆがみから来たものであろう。肩部には幅2～3mmの平行沈線が、棒状工具で5条浅く施されている。内面には7本の輪積痕が認められ、頸部より底部に至るまで格子の叩き目が押捺されているが釉薬のために埋まり叩き目は浅くなっている。素地は赤茶色である。色調は淡青紫色をしているが濃淡に差があり、ぶい光沢をはなっている。

この骨蔵器には鉢(第11図4、図版第16図3)が骨蔵器に転用され、入子状になっていた(図版第18図)。  
(註1)  
口径14.2cm、高さ11.5cm、底径13.7cmを測り、口径と底径の差がさほどないたら造りの土器である。底部よりの立ち上りはわずかに内彎しながら直立し、胴部で最大幅をとる。口縁部の下には、ゆるやかな段を有し、厚手に作られて横なでが施されている。器面及び内面にはロクロ痕が顕著に認められる。内面底部には、高台部の陶土・釉薬が垂れ、附着している。素地は赤褐色をし、胎土に荒い砂、小砂利等が混入され、光沢はあるが、自然釉であろう。底部は平底で回転糸切痕がある。

3号骨蔵器(第11図1、図版第15図1) 口径14cm、高さ11.8cm、底径11.2cmをはかり、口径と底径の差があんまりない小形壺である。口縁部は外反し、口唇は丸くまとめ玉様状を呈し、厚さは1.3cmをはかる。内面にはロクロ痕が顕著に認められる。素地は明褐色で胎土には荒い砂が混入されている。口縁部から底部近くまで赤褐色の釉が施されにぶい光沢をはなち、その上に黒色の釉が2本縱に認められる。

4号骨蔵器(第13図18、図版第16図9) 口径20.5cm、高さ28.4cm、底径17.3cmを測る。口縁部は短かく頸部より直立し、口唇部に至る。口唇は厚くつくられ嘴状を呈し、一部平縁となる所がある。底部からの立ち上りは比較的急であるが、ゆるやかに肩部に至っているためか、安定感のある土器である。内面には輪積痕が3段認められ、格子目の型木で内面を叩き整形した事が拓本からもうかがえる。素地は赤黒色土で、その上に口辺より底部まで茶褐色の釉が施され、更に黄灰色の釉が頸部より腰部まで懸垂状にたれている。底部は揚底風を呈して陶土の付着が認められる。

本器は播鉢を蓋に転用している(第14図23、図版第17図8)。口径37.5cm、高さ14cm、底径13.7cmを測り、底部の中央より片側に寄った所に直径6.5cmの不整円形の穴が内側に向って穿たれている(図版第21図下)。立ち上りは底部よりわずかに丸味をおびて緩やかに上り、口唇部に至って外側に折り曲げられ段が付いた様になっている。口辺内面には段を有し横なでが、器面にはロクロによる回転痕が認められる。高台は付高台でわずかに内側に向き、面取りされている。おろし目は12条1単位で、



第11図 骨 蔵 器

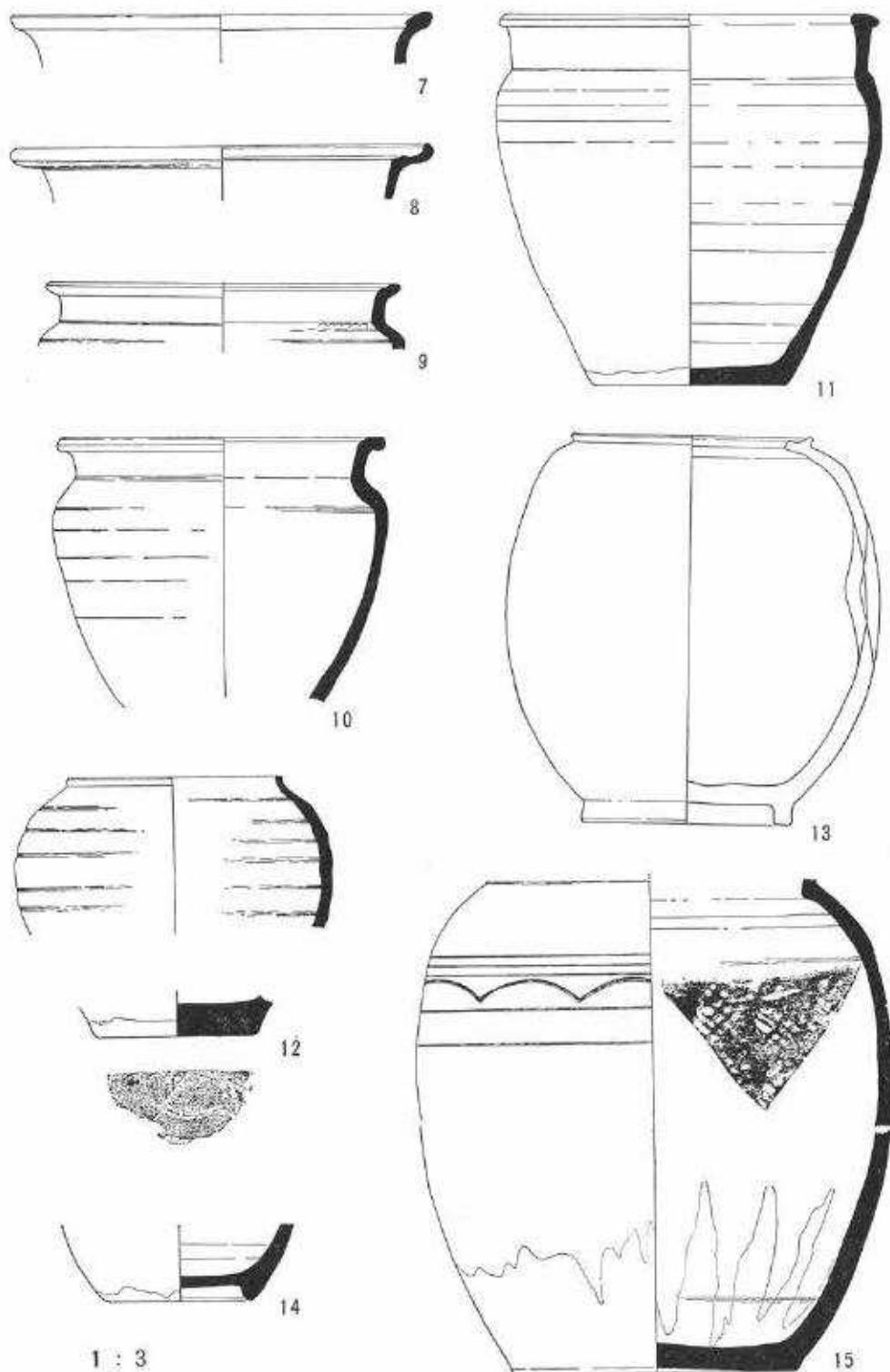
4.1cm幅を有し、底部より上部へ反時計廻りで鋭い櫛状工具で搔き上げられている。素地は赤褐色で、胎土に小砂利を含み、灰褐色をしている。光沢はない。

次に眞石を伴う骨蔵器並びにその周辺部より破片となって散乱した状態で出土した骨蔵器についてみて行きたい。

1号眞石中出土の骨蔵器（第11図6、第12図10・11・13、第13図19、図版第16図11） 6は口径15.5cm、高さ14.4cm、底径8cmを測り、口縁部は外反している。頸部は直立し、最大幅が胴部にあり、底部から緩やかに登る立ち上がりで、全体的にまとまった感じのする甕である。底部は削り出したものである。内面の観察から巻き上げ手法によるものである。器面は円滑に磨かれており、わずかにロクロ回転痕が認められる。明るい赤褐色で、その上に黒茶色の釉薬が底部近くまでかかる。10は第11図6、第12図9と同じ様な感じで口縁部が聞く土器で、口径15cm、現存器高12.5cmを測る。胎土は黒灰色で粒子の状態も細かい。表裏共に黒茶色の釉薬が施され、光沢を持っている（図版第16図1）。11は口径17cm、高さ16.7cm、底径8.7cmを測る變形土器である。頸部から口辺部にかけてはわずかに外反しながら口唇部に至り、肥厚して下方に折り曲げられ玉縁状を呈している。胴部の張りは少なく最大幅は肩部にある。胴上部及び内面にはロクロ痕が横走している。素地はうすい赤褐色をし、黒茶色の釉薬が底部近くまでくまなく施されている。また内面の口縁部にも黒茶色の釉薬が施されている（図版第15図5）。13は口径11cm、高さ17.5cm、底径9.6cmをはかり、底脇から肩部にかけてはまるやかな丸味を持ち、胴部には指で押した凹が5個所認められる。底部は付高台で直立するように付され、器面整形は円滑に行なわれている。肩部には白土で波形を描き、11単位文様で一周している。また胴部から腰部にかけては、白土で施された刷毛目状文様が横走している。内外面共に貫入が顕著に見られ、黄灰色の灰釉が施されて光沢がある。おそらく、蓋のつく甕であったであろう（図版第15図6）。19は口径20cm、高さ26cm、底径14.5cmを測る。口縁部の立ち上り、口唇部の造り、形態は第13図18に近似している。胴部の張りは緩やかで丸味をおびている。頸部から肩部にかけては、横なで痕がある。口唇部には太い線状に赤紫の釉が付されている。素地は暗い赤褐色で、黒茶色の釉が付され、更に黒灰色・黄灰色の釉が肩部より腰部にかけて垂れている。内面にも黒茶色の釉がかかり、格子の叩き目文様がある。器面には光沢があるが、釉薬が剥離し素地の出ている所もある（図版第15図8）。

2号眞石中出土の骨蔵器（第12図15、図版第17図2） 頸部上半及び胴部の一部は欠失しているが、現存器高22.5cm、頸部径15.3cm、底径13cmを測る。胴部上半には幅2mmの平行沈線文、弧状連続沈線文が施されている。弧状連続沈線文の弧線の幅は4.7cmを測る。胴部以下には、横走する横なで痕が認められる。内面には、格子の叩き目文様が肩部より腰部にかけて見られ、内面の底部にも見られる。素地は赤茶色をし、黒味をおびた茶色の釉薬が肩から腰にかけて施されている。

1号眞石上及び梢周辺出土の骨蔵器（第11図2・3・5、第13図16、図版第16図11） 2は胴部の一部を欠き、口径14.4cm、推定器高約20cmを測る。口径と底径の計測値にはほとんど大差なく、わずかに胴部の張る土器である。口縁は短かく直立し、口唇部が丸くまるめられ肥厚している。底部は平底で糸切底である。内外面共にロクロ痕が顕著に認められ、その幅は平均1.5cmを測る。素地は赤



第12圖 骨 磁 器

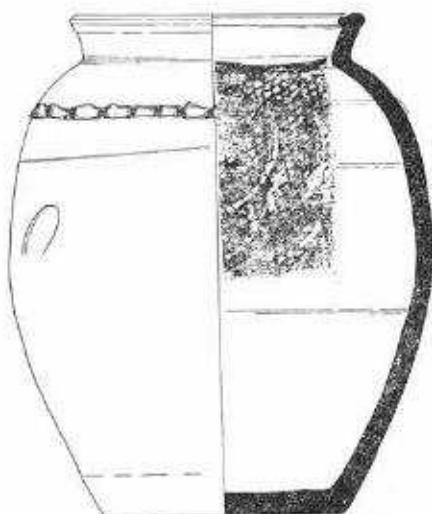
褐色で、胎土に小砂利を含み赤茶色をしている。3は底部を欠いているが、現存器高17.3cm、口径14.7cmを測る。頸部より口縁部にかけての立ち上りは一定ではない。器面は横なで整形が行なわれている。内面にはロクロ痕が残存している。素地は赤褐色で、胎土には小砂利が混入されている。器面は暗赤茶色をしている(図版第15図2)。5は椿周辺部より出土したもので、口径18cm、現存器高16cmを測る。頸部から口唇部までは短かく、外反ぎみに立ち上り、口唇部は厚く作られている。口唇部には幅1mmの平行沈線が3本引かれ、一周している。胴部は櫛状工具で描かれたと思われる平行沈線が細かく施されている。内面には輪積痕及びロクロ回転痕が見られる。素地は黒褐色で、荒い胎土である。器面には明茶色の釉薬が全面に施され、光沢を有している。16は1号葺石周辺より出土したものであり、口径15.5cm、高さ27.3cm、底径13cmを測る。口縁部は短かく、外反ぎみに開き、口唇部は内側に折り曲げて、その端部に丸味をもたせている。肩部より胴部にかけては緩やかにふくらみ、底部に接合している。肩部には貼付文が見られる。一単位の長さ1.5cm~2cm、幅7~8mmを測り、指で押して凹凸をつけている。胴部には直径約4.4cmを測る穴が内面に向って穿たれている。内外面共に、格子の叩き目文様を有し、底部内面にも第12図15、第13図16・17と同じような叩き目がある。内面にはまた輪積痕が見られ、4段跳ぎをし口縁部を接合したものであることがわかる。素地は赤褐色で、その上に黒茶色の釉が施され、更にその上に黄灰色の釉薬が頸部より胴部・腰部にかけて垂れるように施されている(図版第16図7)。

図版第15図11は、一部が1号葺石上に散乱していたもので、他の破片の大部分は、墳丘全域のほぼ同一レベルから出土したものである。口径40cm、高さ64.3cm、底径21.5cmを測り、口縁の作り、形態共に第12図11に近似している。底部は平底で、底部内面には第12図15、第13図16・17と同種の格子状叩き目文様が押捺されている。胴上半部には、幅2~3mmの6条の浅い平行沈線文と弧状連続沈線文が11単位で一周している。頸線幅は11cmを測る。平行沈線文は、所によって分断されている所もある。器壁の厚さは、胴部で1.3~1.5cm、底部で3cmの厚さを有している。胴上半部には直径約18cmの穿穴の一部が見られ、全体を把握することは出来ない。口唇部を除いて器面全体に渋い茶色の釉薬が施され、更にこの上に薄く黒色の釉が施され、口縁部から腰部まで懸垂状にたれて光沢を有している。

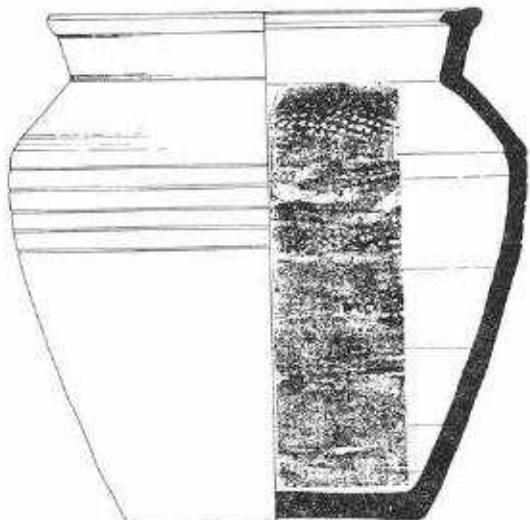
第12図7~9、図版第19図1・2は壺形土器の口縁部破片で全体の器形は覗えなく、骨蔵器か否かは不明である。

口縁内側に段を持ち、大きく外反するものと、直立しながら外反するものとがある。9は第11図6・第12図10と同じ形態を有するものであろう。いずれも横なで整形痕を残し内外面共に黒茶色をし、胎土は堅くしまっている。なお、8は肩部より外側に広がるもので、口縁部は厚ぼったく内彫している。内外面共に明茶褐色の釉薬が施され、光沢を有している。図版第19図1・2は赤褐色をし、胎土に小砂利を含んでいる。1は口縁部破片で口唇部が厚く作られ、口唇部以外にはロクロ回転痕が顕著に認められる。2は第11図5と同じ器形のもので施文方法も近似している。1・2共に、釉薬は施されず、にぶい光沢を有している。

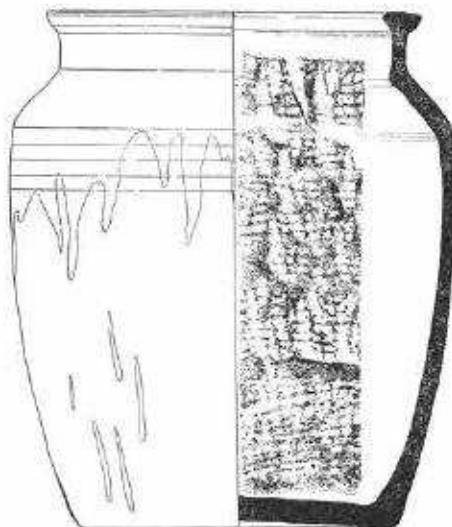
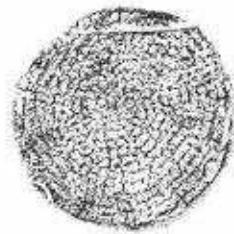
第12図12、図版第19図5は、胴部下半を欠失し全体の器形は覗えないが口径9.8cm、現存器高7.2



16

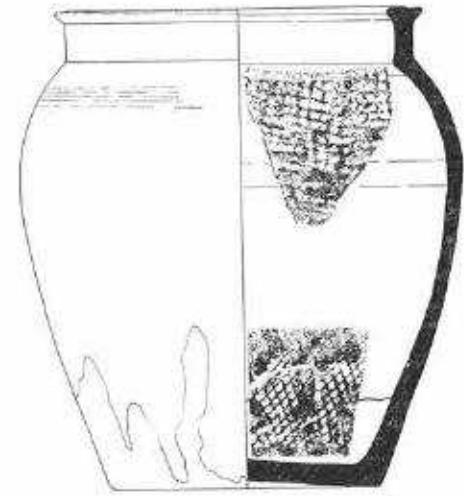


17



1 : 4

18



19

第13図 骨 蔵 器 (16, 17は底部内面の拓影)

cm、底径7.5cmを測る。最大幅は胴部にあり、まろやかに丸まりながら口縁部にいたる。口縁部は短かく内鷺ぎみに内反している。内外面共に横走するロクロ痕が頗著に認められ、底部は平底で回転糸切痕を有している。内外面に光沢のある黒色の釉薬が施されている。一種の小形菓子壺であろうか。素地は灰黒色をし、胎土に砂を含んでいる。図版第19図4も同類の釉薬が施されたもので甕形土器口辺部の破片である。素地は赤褐色で、胎土は良く精選され、焼も堅い。黒田領治氏より「瀬戸系天目で、鉄釉を施したものである。」とご教示を賜わった。

図版第18図2は、甕形土器胴部破片である。器面には薄いこげ茶色の釉が施され、更にその上に白土をかけ、櫛様工具で波形文様が描かれている。文様は、横走する幅5~7mmの2本の線の中に櫛描き波形文がある。内面にはロクロ回転痕が認められる。素地は黒褐色であり、胎土は精選され、焼も堅い。図版第17図3の捏鉢の文様モチーフに極めて近似している。

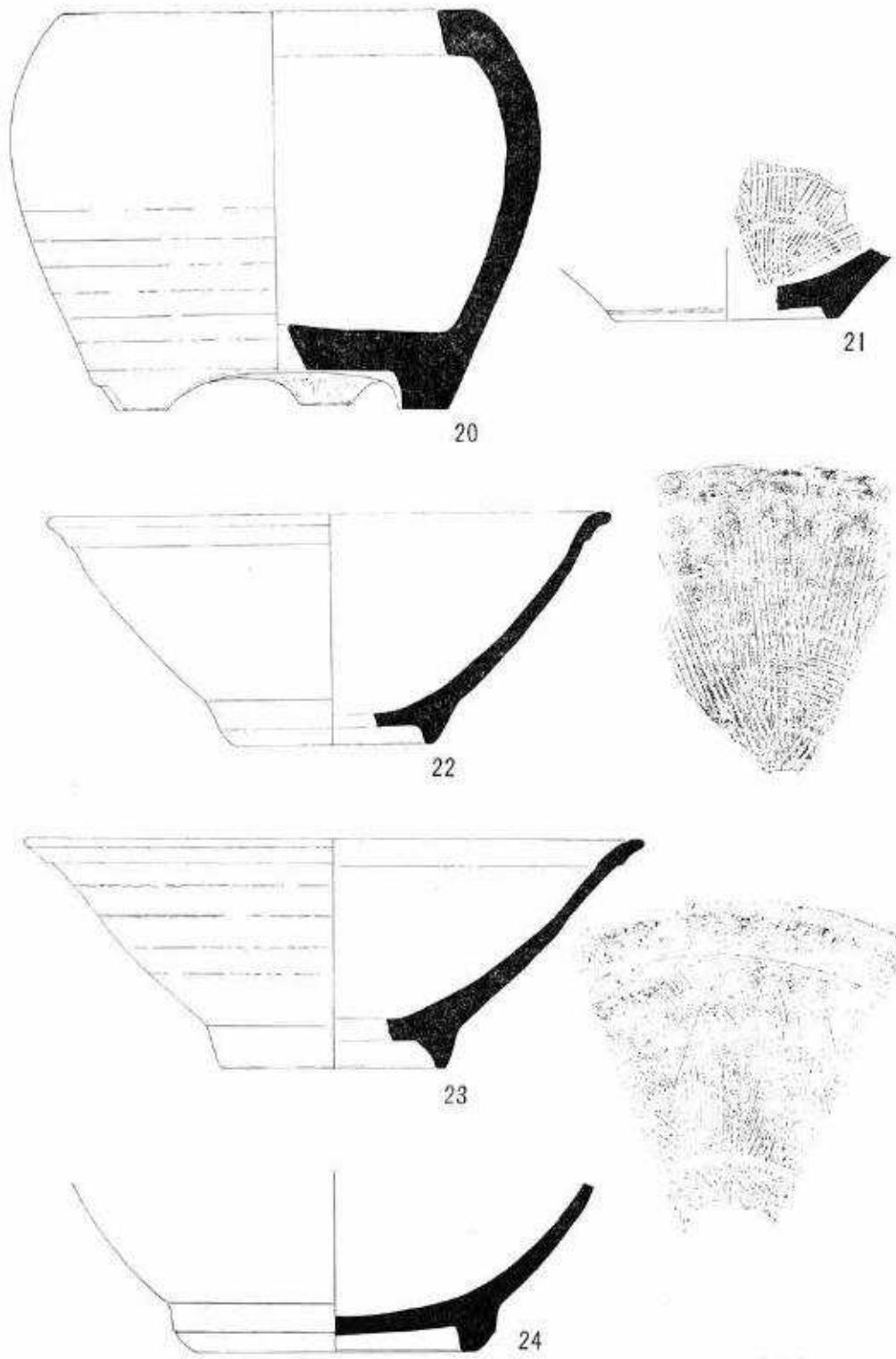
第12図14、第15図1・2は、壺もしくは甕形土器の底部と思われる。14は第11図6の底部形態に近似している。巻き上げで本器を造ったもので、内面にその巻き上げ痕が残っている。底部は削り出したもので、整形痕が内側にきれいに残っている。素地は赤褐色で、内外面共に暗茶赤色の釉薬が施され、特に内面にはたっぷりと厚く施されている。第15図1は、内面のみに暗褐色の釉が施され、中央部に釉だまりが見られる。器面にはロクロ回転痕が認められ、底部は糸切底である。素地は明褐色で、胎土は極めて細かい。第15図2は無釉のもので暗褐色をしているが、その色には濃淡差がある。器面は研磨されている。内面には細かい水びき整形痕が横走している。底部は丸糸切痕を残す平底である。

皿形土器（第15図6） 底部は左回りで削り取ったものである。内外面共に光沢のある茶褐色の釉薬が施されている。釉薬の施し方を内外面から観察すると、同じ所まで付され、頂度上より皿を見ると、皿中央部に方形もしくは五角形の釉薬が施されない所が出来る。潰掛けで釉薬が施されたものであろう。内面は研磨されているが、器面は比較的荒く仕上っている。素地は、黄灰色で、胎土は精選されている。

甕形土器（第15図7） 内外面共に釉薬は施されておらず暗黄褐色をしている。器面は比較的荒く、砂粒が認められる。内面は研磨され円滑となっている。底部はやや内鷺ぎみに作り出され、籠で整形されている。全体的に粗雑な土器である。

瓶形土器（第15図13、図版第18図1） 口縁部及び胴部の一部を欠き全体の器形を窺うことは出来ないが、最大幅19cm、底径7.7cmを測る。肩部はなで肩でゆるくまるまりながら底部に至る。頸部は比較的大目で直立するものであろう。胴部下半には幅1mmの平行沈線が3本めぐっている。高台部は削りだしたもので第15図7と同じような形態をしている。内面にはロクロ痕が認められるが、特に頸部に頗著に認められる。素地は黄灰色である。器面には暗黄色の釉が施され、貫入が見られる。大形徳利であろうか。

香炉形土器（第15図8・9、図版第19図3・6） 8は、口縁部下1cmの所からラッパ状に外反し、口唇部が内側に曲げられ段を作っている。口唇部より胴部にかけては黒茶色の鉄釉が施されている。素地は暗黄褐色をして、胎土は精選されている。内面には横なで痕が見られる。9はラッパ状に開く器



第14図 骨蔵器・鉢類

形をもつものと考えられ、口縁部は外反し、口唇部は厚く作られている。口唇部内面には、白色の線が幅2mmで、9.5mm程度の間隔をつくって2条めぐっている。素地は赤褐色で、内外面共に淡緑色の釉薬が施されている。

鉢形土器（第14図21～24） 21は、削り出し高台の攝鉢で、高台断面は台形を呈し、外面は面取りされている。9～10条のおろし目が一単位となり、上部より底部に向ってなで下したものである。条の幅は1.5～2mmを測り、浅いものである。内面には自然釉か否か不明であるが、緑色釉が附着している。胎土は細砂が混入され褐色をし、焼成は堅くしっかりとしている。22は、口径34.2cm、高さ13.9cm、底径11.8cmを測る攝鉢で、底部に直径6cmの穴が内側に向って穿たれている。底部よりの立ち上りは、わずかに丸味をおびて口唇部に至る。口唇部は外反し舌状をなしている。高台は付高台で、外側は面取りされ円滑に仕上げられている。おろし目は12～14条が一単位となり、底部より上部になで上げている。おろし目の幅は1～2mmを測り、深くするどい。素地は赤褐色をし、黒茶色の釉薬が高台の面取り部上半まで施されている。24は底径17cmで、現存器高10.5cmを測る捏鉢である。内面には、赤褐色の素地に白土を掛け、櫛目様工具で波形文様が描かれている。文様は、横走する2本の線によって二分され、その間に櫛書き波形文が描かれている。上部より淡紫青色の釉が2本垂れ下っている。高台は削り取り高台で、断面は台形をし、外側は面取りされている。素地は赤褐色土で、釉薬は施されていない（図版第19図3）。この手法と同じものが、佐賀県の弓野山窯・小田志山窯・庭木山窯などより出土している。<sup>(註2)</sup>

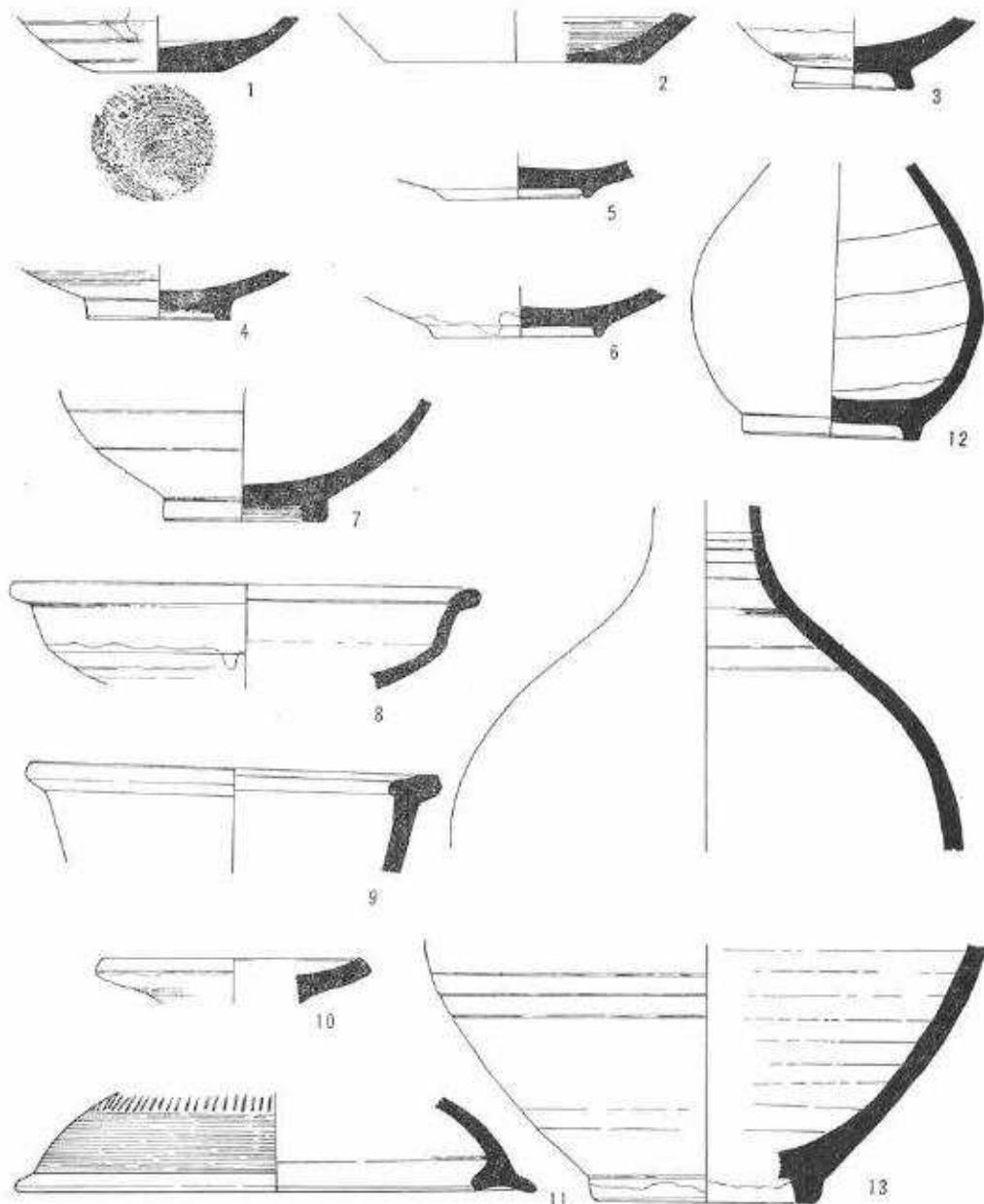
蓋形土器（第15図11、図版第19図7） 肩部はゆるやかに内擣して、口縁部に至る。口縁部は逆T字形をし、一度内側に折り曲げて外側に引き出したものであろう。口唇部内側は、若干丸味をおびて凹んでいる。肩部上半には、籠様工具による刻み目が見られ、その下に刷毛目痕が横走している。素地は黄灰色で、刷毛目上に明茶色の釉薬が施されている。内面には濃緑色の釉薬がたっぷりとかけられ、口唇部の反りの所に釉だまりが見られる。

受台形土器（第15図10） 直径9cm、厚さ6mmを測る厚手の土器である。口唇部は削り取られている。口唇部及び内面には、釉薬が認められるが自然釉か否か不明である。素地は暗赤褐色で、胎土に砂粒を含んでいる。形態的に近似したものが、広島県姫谷焼の中にある。<sup>(註3)</sup>

### 3 磁 器（図版第19図8～16）

碗形土器—染付—（8～10、13） 8は削り高台を有する破片で兜巾が低く残存し、推定高台径2.6cm、高台の高さ4mm、厚さ疊付部で2.8mm、器壁の厚さは底部で7mm、腰部で3mmを測る。内面には網目文様が描かれている。高台脇には釉薬が継状になっている。高台疊付部には陶土が薄く付着している。高台内には、貫入が見られる。素地は白灰色をし、胎土は精選されている。9は腰部より高台脇にかけての破片で、厚さは腰部で4.2mm、高台脇で6.7mmを測る。器面には網目文様が、内面には草花もしくは柳文様と思われるものが描かれている。内外面共に細かい貫入が見られる。素地は白灰色をしている。8・9共に初期伊万里の典型的な茶碗文様である。10は口径7cm、現存器高4.7cmを測る初期伊万里の猪口破片である。腰部からの立ち上りは、胴部でわずか内側に凹む程度で直立して口

縁部に至る。口縁部は平縁で、内面がわずかに丸味をもっている。内面の口縁部から胴上部にかけては、幅2mm～2.5mmの2本の横走する線の区画内に、四本一単位の斜格子文が描かれている。器面には淡緑色の釉薬が口縁部より高台脇まで施され、その釉薬には気泡が認められる。釉薬の厚さ0.8mm。13は腹部から高台脇にかけての破片で、厚さは腹部で3.2mm、高台脇で6.5mmを測る。器面には幅1mmの横走する線と、腹部より一条の濃緑色の釉薬が垂れているにすぎない。素地は灰白色をしている。



第15図 向 磁 器

1:2.5

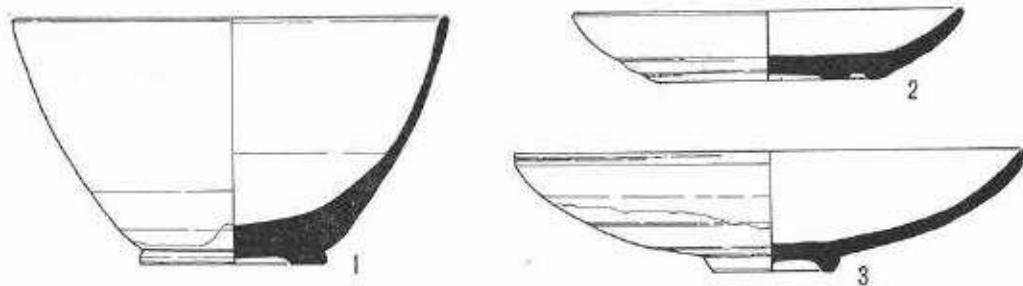
内外面共に黄灰色の釉薬が施されているが、薄灰色の斑点が残っている。

皿形土器（図版第18図11・12・14～16） 内面に絵文様と蛇の目を有するものに分けられ、器面は全て無文である。

絵文様を有する11, 12, 14, 15は、草花絵文様（14）、水玉もしくは水滴様文様（11）、絵文様不明（12, 15）のものに分けられる。14は高台径8.4cm、高台高さ9.5mm、高台の底の厚さ4.8mmをはかる厚手のものである。草花絵文様は薄い藍色で、大胆率直に絵画的に描かれている。胎土は灰白色であるが、中に気泡が見られる。鉢になるかも知れない。11は同心円的文様の中に、薄い黒緑色で、水滴もしくは水玉様文様をつけたもので、文様自体には、規則性はなさそうである。15は高台径5.6cm、高台の高さ4.2mm、高台の底の厚さ3.2mm、器壁厚さ高台内で6.8mm、高台脇で6.1mmを測る。藍色で曲線が描かれ、胎土は灰色をしている。釉薬は全体的にくすみ灰黄色をしている。16は削り出し高台で、見込みに蛇の目を有し、高台径4.8cm、高台の高さ7mm、高台の底の厚さ3.5mmを測る。中央の円軸、蛇の目外周の釉は、綠白色をしている。内側には、輪形の削り取り痕が顕著に見られる。高台の作りは良好で、角がつきピッシュときまっている（第15図4）。高台の底には綠白色の釉が附着しており、素地は灰褐色である。高台脇部には薄い綠白色の釉が施されている。高台中央での底の厚さは約9mmを測る。他に、蛇の目高台を有する皿破片は、3点出土している。一つは、16と同釉・同形態のものである。もう一つは、作りはほぼ同じであるが、中央の円軸・蛇の目外周の釉が異なり、濃青茶色をしている。もう一つは第15図3のように、厚手となり高台の作りも粗雑で、素地が黄褐色をしている。円軸及び蛇の目外周の釉は、黃色をし貫入が認められる。蛇の目部には黄色釉がかすかに残り、15とは異なっている。ふき取ったものであろうか。

鉢形土器（図版第17図7） 口径18cm、高さ5.5cm、高台径10.4cmを測る。内面に草花文様が描かれている。楓・菊が抽象的に緑色・紺色で内面中央より片寄った所に描かれている。口唇は平縁となり、水色の釉が施されている。高台脇には幅2mmの紺色の横線が三本めぐっており、粗雑に描かれている。厚さは、口縁部で7mm、高台脇で5mm、底部中央で7mmを測る。高台内側には、透明の上薬が施され、素地は白灰色を呈している。

瓶形土器（第15図12、図版第17図6） 高台径6cm、現存器高9.5cm、最大幅10cmを測る初期伊万里徳

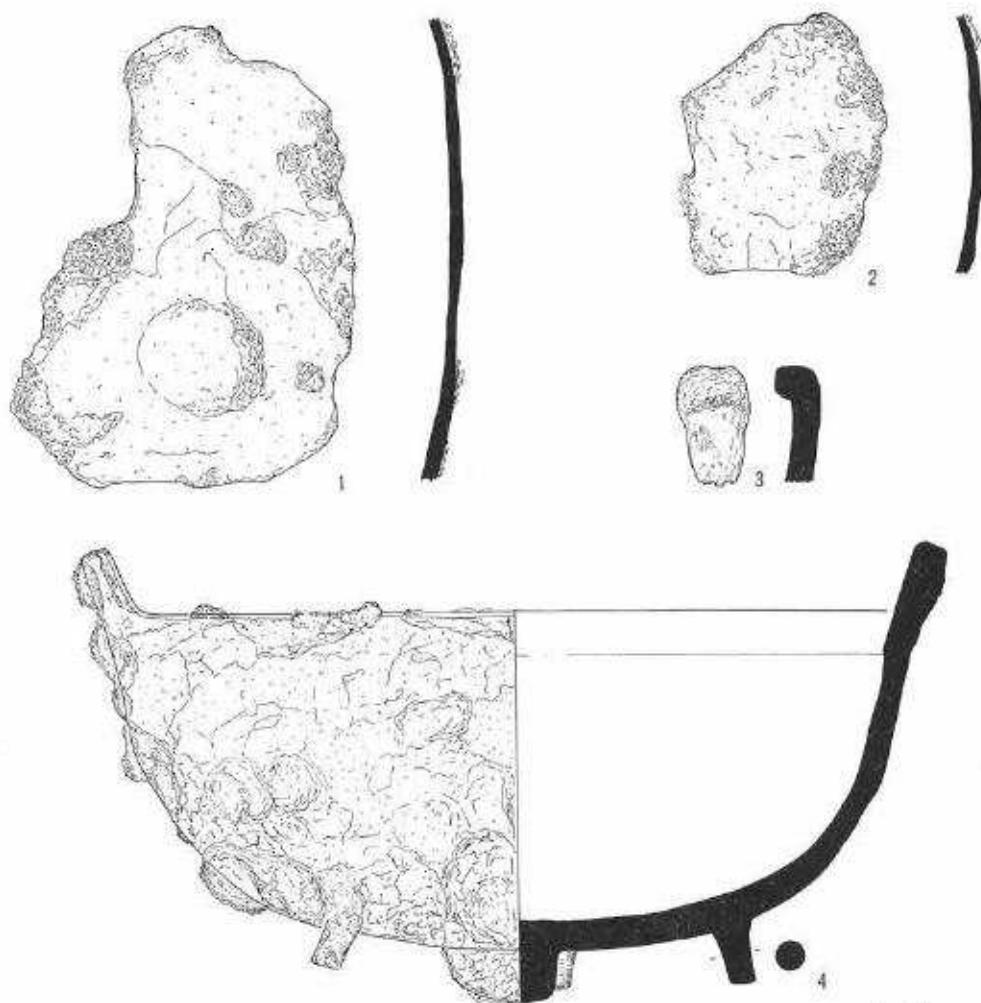


1:2

第16図 第二群埋納穴件出の陶器

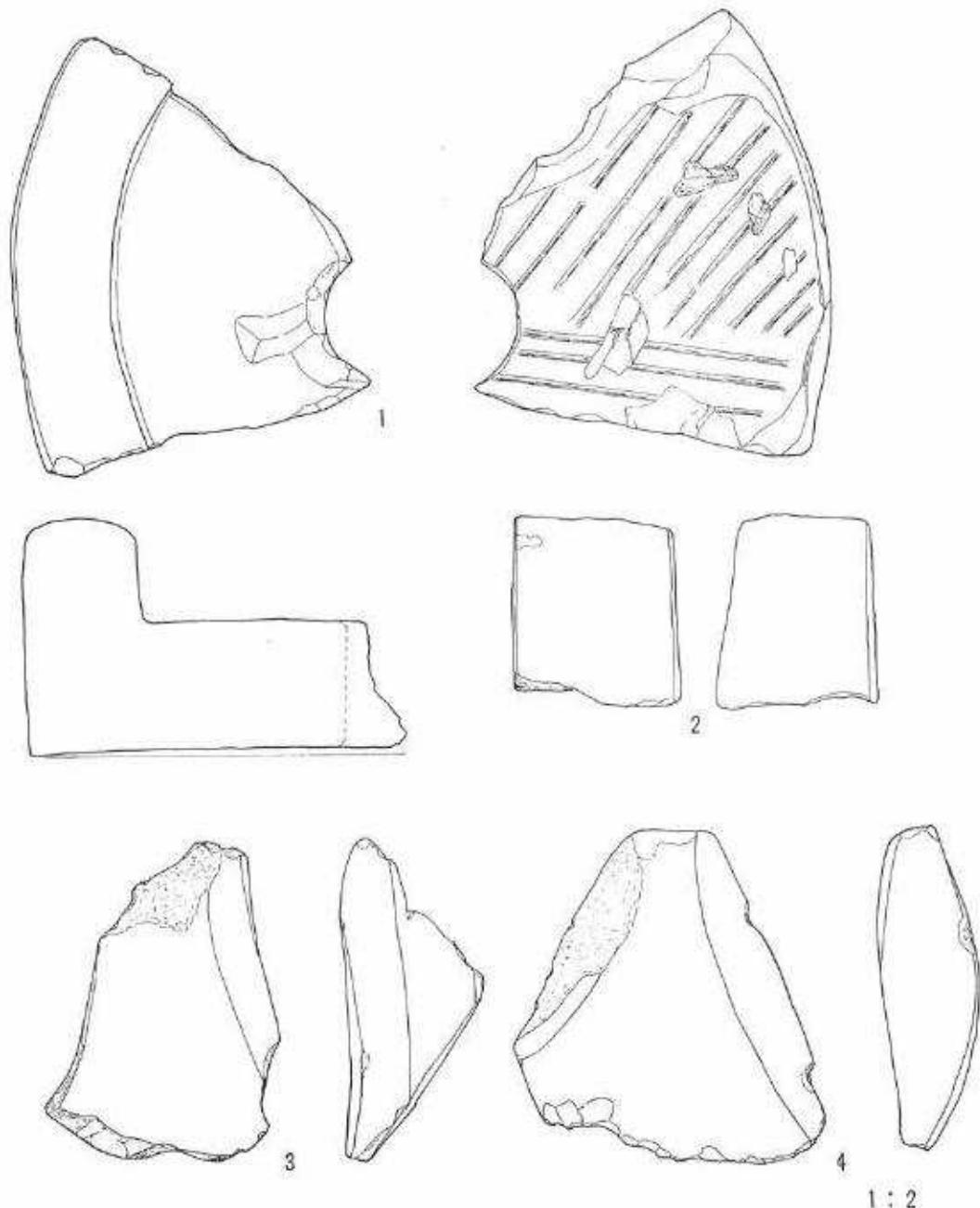
利である。器面には、薄い藍色で草花文様が一周描かれ、鶴頭がつくものであろう。素地は白灰色をし、上葉は安定している。内面には、巻き上げ痕が頭著に残っている。

第二群埋納穴伴出の陶器（第16図・図版第17図3～5） 1は口径11.5cm、高さ6.5cm、底径4.9cmを測る灰釉茶碗である。高台・高台脇から高台際にかけては籠様工具で面取りされ、高台内には兜巾が頭著に認められる。底部よりの立ち上りは緩かに上方へ内彎し、口縁部が厚くなるのが特徴的である。器面には高台際まで暗黄褐色の釉薬が施されている。内面にも同色の釉薬が用いられ、三ヶ月形の薬はずれがある。素地は淡橙色をしている（図版第17図5）。2は口径10.4cm、高さ2.8cm、底径6cmを測る削り高台の黄瀬戸皿である。器形は全体的に歪んでおり、底部よりの立ち上りは腰部で僅かにくびれ、緩かに内彎しながら口唇部に至る。いわゆる角腰の皿である。内面中央部には直径5cmの釉薬がかからない所がある。また、高台内には陶土が付着している。黄緑色の釉薬が施され、内面側縁には釉溜りが見られる。光沢を有し、内外面に貫入が認められる。素地は暗赤褐色をしている（図版



第17図 鉄 製 品

第17図3)。3は口径13.6cm、高さ3.2cm、高台径3.2cmをはかる唐津系の皿である。高台部からの立ち上りは緩やかに外へ広がり、口辺部で段をなす様にして直立している。高台は籠様工具で削り出されたもので、内側に反る様に作られ高台の底の幅は一定していない。いわゆる三ヶ月高台である。高台内側には兜巾が認められる。器面の口唇から側縁上部には白色の釉薬が施されている。内面の中央部では白色の釉薬がかかれている。又口唇部、側縁半ばには釉薬がとぎれた所があり、削り取ったもの



第18図 石 製 品

であろうか。素地は荒く赤褐色をし、一見生焼風をしている。光沢はない(図版第16図4)。

#### 4 鉄 製 品(第17図、図版第17図10、図版第20図1~3)

釘(第17図3、図版第20図3) 現存長3.7cm、幅2cm、厚さ0.8cmを測り、断面は長方形を呈している。鈎がひどく厚手をなしているが、頭部の曲りなどより折頭形の釘と考えられる。

鍋(第17図4、図版第17図10) 墳丘下89.5cm、C区で出土したもので、口径26.5cm、高さ14.7cm、耳高2.3cmをはかり、脚が3本付されている。腐蝕が著しく、外面には特に鈎が塊となって付着している。底部中央部には、幅3.8cm、高さ2cmの湯口がついている。

不明鉄製品(第17図1~2、図版第20図1~2) 共に鉄片で1号墓石上より出土したものである。腐蝕が著しく、破片であるため、その形態は明らかではない。1は現長15cm、2は現長8cm、共に厚さは3~4mmをはかる。

#### 5 石 製 品(第18図・図版第20図4~7)

石臼(第18図1) 上下二つに分れた石臼の上部の一部と考えられ、現存しているのは5分の1弱である。推定直径25cm、厚さ3.6cmで縁部寄りの所に推定直径3.6cmの穴が穿たれている。周囲には幅3.2cm、高さ2.7cmの縁どりがある。上面は中央に行くに従い高くなる反面、下面は緩やかに凹んでゆく。下面には幅3~4mm、長さ7.5cm、深さ3mm余りの溝が数本ずつ内より外に向って刻み込まれている。

砥石(第18図2~4) 2は断面が四角形を呈する角棒状砥石で四面に使用痕が残っている。3・4は不整三角形の砥石であり、四面に磨面を持っているが、使用面は砥石の機能上最底二面であろう。共に手持の仕上げ砥石で、石質は凝灰岩質のものである。

(戸根与八郎)

註 1 柴元静雄 「遺物」『有田町猿川古窯跡第一部発掘調査概報』昭和44年

2 出光美術館で実見。

中里太郎右衛門 「唐津」南磁大系13 昭和47年

3 加茂町教育委員会 「姫谷」一姫谷燒窯跡発掘調査報告一

# V 考 察

## 1 新潟県における火葬墳墓

新潟県における墳墓調査例は、中条町韋駄天山、笛神村華報寺、小千谷市岡林、十日町市小黒沢、  
柿崎町金谷、上越市善光寺浜、栗島浦村観音堂、真野町真輪寺などがある。このこれらの調査は、最初から目的を持って調査されたものはほとんどなく、偶然に発見されて調査されたものがほとんどである。この事は、地表に何らの標識も具備せず、地表観察からはその位置を求めるることは不可能な場合が多く、中世墳墓の特徴を如実に示している。

分布は県内全域に見られ、そのいくつかは古寺社の近くに位置している。立地は寺域内にある華報寺、善光寺浜、観音堂、真輪寺、台地先端部もしくは丘頂にある韋駄天山、金谷、平地で墓を周辺よりわずかに高い所に構築している岡林、小黒沢に分けられる。骨蔵器は、珠洲系の陶質土器で華報寺、金谷、小黒沢、観音堂などより出土している。古瀬戸の瓶を骨蔵器に転用したものが華報寺、善光寺浜より、石槽のものは華報寺伝高阿廟址より出土し、この中に徳治3年(1308年)の銘を有する青銅製骨蔵器が納められている。岡林のものは中に嘉暦3年(1328年)の銘を有する銅製宝鏡印塔型骨蔵器が納められている。また小黒沢のものには、正平8年(1351年)の銘を有する墓標を伴っている。中川成夫氏らは、館と石塔の関係を把握するために塩沢町周辺、新井市周辺の宗教関係遺品の調査を、細矢菊治氏、小野田十九氏らは、県内各地の石碑及び石塔・石仏類を集成されつつある。石塔類は外部施設としての墳墓標識であることはいうまでもないが、その内部構造については追求されていないのが、墳墓研究の現状である。一基のみ単独で発見されることもあるが、4~5基ないしは数10基も群集して存在することも多い。外部形態は、そのほとんどがイウンドを持っていたものと考えられるが、墳丘の盛土が流失して、その所在地不明のものがかなりあるようである。内部構造に礫を用いているものは、華報寺、金谷、韋駄天山などの墳墓のみならず、柏崎市軽井川経塚、長岡市猿塚などの経塚にも見られる。華報寺の伝高阿廟址のものは、周囲に石を築き、周囲と区画してその中央部に土盛をし、板石で石棺状の遺構を築き、その中に骨蔵器を納め、周辺部・上部に覆石が見られる。金谷、軽井川経塚などでは、外容器の底部の周囲に大形の礫が用いられ、堅固な石組をそなえて骨蔵器を固定している。そして、墳頂には所によって濃淡の差はあるが、小さな礫石が中央部に厚さ10cm内外を有して葺かれている。火葬骨埋納穴の類例は県内では見られず、新潟県の火葬の埋葬形式として把握されるか否かは、今後の調査資料の増加をまちたい。葺石を伴う墳墓は、県内の中世墳墓の一般的なあり方であると考えられる。

## 2 出土遺物の年代

本墳墓で出土した陶器類は日用雑器であり、その年代は、蛇の目を有する皿類、古伊万里の碗・鉢利などから大略導き出せるにすぎない。

埋納穴伴出の碗・皿は桃山時代より江戸時代初期のもので、唐津的な焼物である。また黄瀬戸皿

(註15)

(註16) もこれらとはほぼ同じ時代のものである。上層より出土した遺物は、初期伊万里・武雄系唐津の民窯  
(註17) 製品を含んでいる。伊万里磁器に関しては、最近窯跡そのものが調査され猿川古窯跡では創業期の開  
(註18) 窯として位置づけられているが、その使用期間は明らかにされてはいない。天狗谷古窯では5基の重  
複した階段状連房式登窯が検出された。築窯の年代を残留磁気による年代測定で求められ、A窯の上  
限は1603年、下限は1627年となり、C窯の上限は1775年、下限を1855年とする考えが示された。これ  
によって、天狗谷窯跡は、17世紀のはじめに起きた、その後18世紀後半に再興し、19世紀半まで続  
いた事が明らかになった。武雄系唐津の民窯製品の壺・捏鉢には、刷毛目・描書きの化粧掛けの手法  
(註19) が見られ、弓野山窯・庭木山窯・小田志山窯等にも同一手法のものがある。これ等の窯の盛況は元禄  
(註20) 億であり、明治10年には廃されている。また、姫の目高台を有する皿については、奥田直栄氏は「夷  
日本でも北海道でも中世遺跡から出土している。また東南アジア出土品中にも時々みかけるようである  
……。私はひそかに南支那を以てその産地に擬しているのであるが云々……。中世後半に輸入され、  
(註21) 一部階層で使用された雑器であろう。」と述べられ、「新潟県内では、上越市御館、春日山城より  
出土している。」と御教示を賜わった。この他に、出土遺物の所で、高台の作りも粗雑で厚手になる  
(註22) 蛇の目高台のものがあると前述した。これらに類似したものは、鹿児島県の豊野系諸窯、龍門司系諸  
窯、西飼田系諸窯製品に見られる。

この様に見ると、葺石周辺及び上層より出土した遺物は、伝世時間を抜きにして考えれば江戸  
時代中期頃のものであろう。骨蔵器に関しては、その窯元などは不明のものが多くあえて取り上げな  
かった。県内の近世窯は、その多くが明治時代に開窯されている。江戸時代のものとしては、文化年  
間～天保期にかけての佐和田町小沢窯、寛政年間の新穂村金太郎窯それに新発田藩の御用窯として  
(註23) 豊浦村小池窯・山崎窯等があるにすぎない。発掘調査例が乏しいために近世窯の全体を把握する事は  
不可能であるのが近世窯研究の現状である。県内の窯の製品がこれらの遺物の中にあるかも知れない  
が、その多くは、県外より海上輸送などで運び込まれたものであろう。

碗・皿・鉢・瓶の類は、副葬品とは考えられず、一種の供膳的なものであろう。鍋については、長  
(註24) 野県の丸山などで出土している。その性格は、民俗学的見地より追求されなければならない。県内の  
民俗例では、墓に鍋を埋めるという風習は認められず、ただ忌的考え方より別火という風習がある。  
(註25) 葬送儀礼で使ったものは、墓地やごみ捨場に捨てる傾向があるといわれ、碗・皿等の類にもこの様な  
ものが含まれているのではなかろうか。

この他に、磁石・石臼・釘・不明鉄製品が出土している。磁石は、当時の生活基盤である農業に使  
われたとも考えられ、石臼は、角田・弥彦山山麓の越前浜の紛り歌にも唱われている様に、塔婆的  
(註26) なものであったのかも知れない。また不明鉄製品に関しては県内の民俗例では、マウンドの上に竹を  
(註27) さすもの、刀物を下げるもの、傘をかけるものがあるが、葬送儀礼に用いたものか否かは不明である。

### 3 埋葬形態について

本墳墓では、火葬を基本とし、埋葬形態については、Ⅳ内部構造で述べたように、三つの形態がある。  
①葺石を伴う骨蔵器 ②単独出土の骨蔵器 ③小形火葬骨埋納穴群の三つに大別できる。

火葬骨埋納穴群は7×7mの範囲内に51個所発見された。これは県内ではじめての例である。第三

群埋納穴群は、ある程度の空間を中央部に作りその周辺部に多く分布している。第一群・第二群埋納穴群は、その空間部を埋める様に分布し、その数も少なくなってくる。埋納穴群の形態・規模・構築方法にも共通性が見られ、その平面プランは円形・橢円形・方形に近い橢円形があり、掘り込みも垂直なものと70~80度の角度を測るものがある。構築方法はただ単に小形のピットを掘り、火葬骨を埋納したにすぎない。副葬品は、全くなく、炭化物及び焼土塊が火葬骨に混じってわずか数点検出されたにすぎない。明らかに火葬場と墳墓は離れていたものと考えられる事ができる。また、これらの火葬骨埋納穴は重複しておらず、おそらく、小形の土壠頭、もしくは板塔婆的なものが建てられ、空間部の所在を示したものと考えられる。また、平面プラン、小形ピットの掘り方は、人間が掘る以上、深いもの、浅いもの、形が異なるものがあるのは当然の事である。この数的量・層位などから言って、短期間もしくは同時に埋葬されたものであろう。

(註32) (註33) (註34) (註35)  
土壙を持つ墳墓地の類例を県外に求めると、長野県の大塚、杉の木平、安源寺、加沢善福寺、北垣  
(註36) (註37) (註38) (註39) (註40) (註41)  
外、川畑、石川県の普正寺、小坂一号墳、広島県の新開第3号、奈良県の元興寺極楽坊等があげられ、火葬墓の構築方法は、比較的はっきりする小形ピットを設け、①石を並べる ②石を積み上げる  
③石を詰める ④大石で覆い小石郭をつくる ⑤骨壺をもつ ⑥曲物を用いる ⑦小形ピットのみの  
ものがある。本墳墓の埋納穴は⑦の分類の中には入り、川畑・安源寺などとは構築規模などに多少の  
相違は認められるが形態的に近似し、これらの火葬墓と同時期のものと見る事ができよう。即ち、戦  
国時代末期から江戸時代初期の墳墓地と推定される。

骨蔵器の埋納方法は、第4号骨蔵器に見られる様に、單なる土壙を掘り、何の施設も持たないものと蓋石を伴うものがある。蓋石を伴うものを県内に類例を求めれば、草駄天山・金谷等の墳墓地のみならず、柏崎市軽井川経塚、見附市小糸山経塚等にも見られる所でもある。池谷和三氏は静岡県の中世墳墓19例を取り上げ、「その多くが顯著な墳丘を持たないのが通例で、若干の墳丘が認められるものの墳丘は、土砂よりむしろ円礫を積み重ねることに中心をおいており、土砂は礫間に少量混入されている他、地表の礫をかくす程度にうすくかぶせている様に思われる。」と述べ、更に「内部施設は構造的に礫を用いて蔵骨器を囲むものが多く、時代の新しいものはほど多量の礫を用いる傾向があるらしい。」と考えられている。また、川崎利夫氏は、時代が新しくなるにつれて礫の利用は少なくなり、墳頂部や蔵骨器上部、周囲などに痕跡的に礫石を置くようになると述べられている。県内で礫を利用した墳墓地は、華報寺・金谷・草駄天山・善光寺浜・真輪寺のみならず、軽井川の経塚、長岡市櫛塚などの経塚にも認められる。時代が新しくなるにつれ礫の利用は少なくなり、骨蔵器の埋納にも簡略化の傾向が認められ、これを地域差として把握すべきものかもしれない。

本墳墓内出土の骨蔵器自体にも5つのタイプが見られる。①蓋石を有するもの ②蓋を伴うもの ③蓋を伴わないもの ④底部もしくは側面に穿穴のあるもの ⑤入子になっているものがある。蓋石を有するもの、播鉢を蓋に転用するものは、中世火葬墓の特徴といわれている。又これ等を石村喜英  
(註47) 氏は、骨蔵器埋納上の特殊慣習として把握されている。骨蔵器の底部穿穴については、斎藤時男氏、  
(註48) 佐藤次男氏、石田茂作氏、桐原健氏、金谷克巳氏等によって種々論じられている。それによると信仰的意趣論と実用的防湿論の2つの考え方がある。しかし、本墳墓内出土の骨蔵器は前述したように近世のものであり、中世以来からの一つの葬制が、長く伝統的に残っているのが一般的なあり方であ

ったのであろう。さて単独出土の骨蔵器と、葺石を伴う骨蔵器の関連性であるが、時代的にはほぼ同じ頃のものと考えられる。前者・後者共に人骨量はほぼ一体分ずつであるが、中には4号骨蔵器の様に成人期骨（老年期男性）の上部に未成人期骨（少年期）が一個体分あるものと、2号骨蔵器の様に成人期骨（老年期女性）の上部に未成人期骨（幼年期？）が収納されたものがあり、複雑的性格を持つものであろう。また、両墓制の疑いがあるが、その民俗学的調査が行われていない現在、その性格はいちがいに論ぜられない。多分に両墓的性格の中で、「埋め墓」としての性格を持つものであろうか。

火葬は仏教の影響下に形成された葬法である事はいまさら言うまでもない。本火葬墓の葬法の変化、即ち、小形埋納穴から骨蔵器への変化はどこに基くものであろうか。埋葬に伴う儀礼には、宗教的な規制よりも土俗的・慣習的な規制が著しく強いとされているが、本例がその中に於て一般的様相であったか否かは不明である。今日火葬は一般化しているが、火葬の風習を強く示す地域は、一般的に浄土真宗の布教されている地域であると言われている。木場地内には真宗東本願寺派の満行寺が本墳墓より約700m程離れた所に所在している。『西蒲原郡寺院仏閣誌』によると、永祿4年（1561年）<sup>(註53)</sup>に信濃より当地へ移転して来たといわれている。竹田藤洲氏によると、寺院の開創檀越を、大名・領主級武士、地侍・藩臣級武士、単独の庶民、庶民同信集団、惣村、史上の在俗名士の6類に分けられ、墓で弔われる相手は、族縁・寺の開創者・殊縁・仮託の名士・衆庶・非命横死の衆庶・開山僧がある。本墓地が宗教集団及び社会的様相のもとに形成されたものであることは言うまでもなく中世においては、在地有力者の本拠地に近く、また古戦場の近くに存在するのも決して偶然ではなさそうである。文献・民俗学的調査によって、この墓地の歴史的背景が明らかにされるであろう。

（戸根与八郎）

#### 4 人骨に関する所見

##### はじめに

この人骨は昭和47年8月27日～9月2日同地内から出土した焼骨である。新潟県教育庁文化行政課長本間嘉晴氏により人骨の調査研究の機会を与えられたので、概略を報告する。

人骨の分布の状態をみると、骨蔵器内、埋納穴内人骨および散乱人骨群に分けられ、それらの各人骨個体数を重複する部位や年齢および性別に伴う特徴から検討した。なお、人骨はいずれも変形し、細片化しているために詳細にわたる特徴が不明である。また、遺跡を北域（A区）、西域（B区）、南域（C区）および東域（D区）にわけ、人骨の出土状態をみた。

##### 1 骨蔵器内人骨

骨蔵器は15個あるがその中で、明らかに人骨を伴うものは、10個を数える。C区に多くA区にみられない。また、地表下約25～50cmに多い。

人骨は未成人期骨6個体（幼年期または少年期）、成人期骨4個体（老年期または老年期の男性3個体、老年期の女性1個体）および破片のため性別と年齢不明な人骨1個体で合計少なくとも11個体分と思われる。

骨蔵器には1個体分の焼骨を収納する場合が多いようであるが、4号骨蔵器（第13図18）の中には

成人期骨（老年期男性）1個体とその人骨の上部に未成人期骨（少年期？）1個体みられる。また、2号骨蔵器（第13図17）の中には成人期骨（老年期女性）1個体とその人骨の上部に未成人期骨（幼年期？）1個体を収納した匣鉢（第11図4、図版16図3）がみられる。大きな骨蔵器の中に小さな骨蔵器を入れたものについては、両者が近親者である可能性もある。

これらのことから、大墓遺跡人は骨蔵器中に2個体を収納する場合、未成人期骨はその骨蔵器内の上部に置いたと思われる。なお、骨蔵器内の人骨を上層、中層、下層に分けて精査してみたが、焼骨の収納には例えば頭蓋を先にするとか、下肢骨を先にするとかの決った順序がみられないようである。

### 2 埋納穴内人骨

人骨を伴う埋納穴は51個あり、C区に多くAD区に少ない。また、地表下約92~116cmに多い。人骨は未成人期骨7個体（幼年期または少年期）、成人期骨35個体（壮年期～老年期の男性13個体、女性14個体および性別不明人骨8個体）の合計42個体みとめられる。

埋納穴内には1個体の焼骨を収納する場合が多いようであるが、第三群埋納穴46番には成人期骨2個体（そのうち、1個体は老年期男性）みられる。また、人骨の出土状態をみると、未成人期骨は遺跡の周辺部の比較的下層にみられるようである。

### 3 散乱人骨群

遺跡の全域に散乱している。また、地表下約15.2~109.0cmにみられ、地表下約50~70cmに多いようである。

人骨は未成人期骨1個体（少年期？）、成人期骨10個体（老年期の男性1個体、壮年期または老年期の女性2個体および性別不明な人骨7個体）の合計少なくとも11個体みとめられる。

### ま　と　め

1. 大墓遺跡人骨はすべて焼骨である。人骨は変形し、細片となっているため、人骨の詳細な特徴など不明なものが多い。
2. 骨蔵器内人骨11個体、埋納穴の数はさらに多いが埋納穴内人骨42個体、散乱人骨群11個体で合計少なくとも64個体分認められる、そのうち、未成人期骨は14個体分ある。
3. 層位別にみると、骨蔵器内人骨は上層から、埋納穴人骨群は下層にみられ、その間に散乱人骨群が多くみられる。
4. 未成人期骨は遺跡の周辺部下層に多くみられるようである。
5. 骨蔵器内または埋納穴内に2個体収納する場合、未成人期骨はそれらの上部に置いたと思われる。
6. 副葬品は認められない。
7. 骨折治癒などのこん跡はみられない。
8. 距骨には蹠蹠面のあるものが多い。

なおこの概報は小片保教授の校閲を得ている。

（森沢佐蔵・加藤克知）

- 註 1 斎藤正治 「韋馳天山」瀬原 昭和46年
- 2 中川成夫・岡本勇 「越後・華報寺中世墓址群の調査」立教大学文学部史学科調査報告4 昭和34年
- 3 文化財保護委員会編 「宝鏡印塔形骨蔵器」『埋蔵文化財要覧』3 昭和38年
- 4 中川成夫 「十日町市小黒沢発見の正平在銘碑について」越佐研究第20集 昭和38年
- 5 室岡博・寺村光晴 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古7 昭和37年
- 6 平野團三 「中世墳墓の一様式」上越考古第2号 昭和39年
- 7 本間嘉晴、計良勝範 「粟島の考古」『粟島』新潟県文化財調査年報第11 昭和47年
- 8 新潟県教育委員会 「新潟県考古遺跡要覧」I 佐渡篇 昭和34年
- 9 塩沢町教育委員会『塩沢町における考古学・民俗学の調査』塩沢町文化財調査報告2 昭和46年
- 10 岡本勇・加藤晋平編 「新潟県新井市における考古学的調査」立教大学博物館学研究室調査報告6 昭和42年
- 11 細矢菊治 「先史時代から中世まで南魚沼郡の歴史」 昭和47年
- 12 小野田十九 「越後石仏雜記」I～IV 昭和43年～昭和45年
- 13 金子拓男 「新潟県柏崎市上野井川の縄塚」越佐研究第22集 昭和40年
- 14 中村孝三郎 「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館考古研究室調査報告書 昭和41年
- 15 小山富士夫・奥田直栄・黒田領治の各氏御教示
- 16 註15に同じ
- 17 木下文治 「有田町猿川古窯跡第一部発掘調査概報」 昭和45年
- 18 三上次男編 「有田天狗谷古窯」 昭和47年
- 19 岡村吉右衛門 「日本の民窯」陶磁大系27 昭和47年
- 20 註19に同じ
- 21 奥田直栄 「城跡出土の遺物」『大谷口』一松戸市大谷口小金城発掘調査報告一 昭和45年
- 22 新潟県教育委員会 「御館跡緊急調査経過報告」 昭和41年
- 23 出光美術館所蔵。岡田喜一 「薩摩」陶磁大系16 昭和47年
- 24 佐和田町教育委員会 「小沢窯跡」 昭和45年
- 25 昭和47年8月に発掘調査
- 26 石川秀雄 「水原郷のやきもの」『水原郷』新潟県文化財調査年報第10 昭和46年
- 27 両角守一 「諏訪郡丸山発見鍋を被る一葬風」信濃考古学会誌 第2年第3輯 昭和5年
- 28 森谷周野 「別火・墓制」『新潟県の民俗』新潟県文化財年報第5集 昭和40年
- 29 県教育庁文化行政課文化財主事駒形足氏御教示
- 30 青木重孝 「弥彦周辺民俗誌」『弥彦角田山周辺総合調査報告』新潟県文化財年報1 昭和31年  
「イススひきひき、死んだらどうしょうば、イスス塔バに立ててくれ。」とある。
- 31 註28に同じ
- 32 長野県下伊那考古学会 「大塚」 昭和44年
- 33 長野県教育委員会 「杉の木平遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 下伊那郡阿智村斜坑広場その1』 昭和47年
- 34 中野市教育委員会 「安源寺」 昭和43年
- 35 長野県教育委員会 「加沢善福寺遺跡」『信越本線滋野・大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 昭和45年
- 36 長野県教育委員会 「北垣外遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 昭和46年
- 37 長野県教育委員会 「川畠遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 昭和46年
- 38 石川考古学研究会 「普正寺」 昭和45年
- 39 吉岡康鶴 「金沢市小坂第1号墳の調査」石川考古学研究会誌第13号 昭和45年
- 40 川越哲志 「新開第3号五輪塔」『土師』土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 昭和45年
- 41 五来重輔 「元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究」 昭和39年

- 42 金子拓男 「新潟県柏崎市上野井川の墳塚」越佐研究第22集 昭和40年
- 43 昭和35年小出義治氏調査
- 44 池谷和三 「静岡県遠江地方に於ける中世藏骨器の研究」 昭和43年
- 45 川崎利夫 「辺境地における古墳の終末と火葬墓の展開」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念論文集 昭和42年
- 46 斎藤時男 「川越市笠幡及び狭山市広瀬出土の中世藏骨器について」若木考古第48号 昭和32年
- 47 石村啓英 「古代火葬墓の研究と二・三の問題点」『日本歴史考古学論叢』2 昭和43年
- 48 斎藤時男 「藏骨器の底部穿孔について」若木考古第43号 昭和31年
- 49 佐藤次男 「骨藏器三題」銅鏡13号 昭和32年
- 50 石田茂作 「天平地宝」昭和12年
- 51 桐原 健 「松本市神田出土火葬骨壺に就いて」貝塚42号 昭和27年
- 52 金谷克己 「大和国西松本古墳出土の須恵器に就いて」上代文化19講 昭和25年
- 53 桜井徳太郎 「在来信仰と佛教信仰の接触変容」『日本歴史考究』 昭和39年
- 54 竹田聰洲 「民俗佛教と祖先信仰」 昭和46年

表1 埋納穴計測値一覧表

(単位cm)

埋納穴番号	長径	短径	深度	形態	備考	埋納穴番号	長径	短径	深度	形態	備考
1	29.0	25.0	7.0	楕円形		27	36.0	34.0	8.0	楕円形	炭化物・頭骨・底
2	23.0	22.0	13.0	円形		28	24.0	23.0	8.0	円形	炭化物・頭骨・底
3	24.0	24.0	8.5	円形		29	24.0	20.0	5.0	円形	一部欠・炭化物
4	30.0	24.0	9.5	楕円形	炭化物	30	31.0	30.0	7.5	円形	
5	27.0	26.0	17.5	円形	頭骨・底	31	23.0	17.0	6.0	楕円形	炭化物
6	25.0	22.0	7.2	円形		32	33.0	24.0	8.0	楕円形	
7	30.0	26.0	9.0	楕円形	一部欠	33	27.0	25.0	13.5	円形	
8	35.0	33.0	9.0	楕円形		34	25.0	22.0	13.0	円形	炭化物
9	26.0	20.0	4.5	楕円形		35	28.0	26.0	9.0	円形	
10	31.0	24.0	14.0	楕円形		36	24.0	24.0	11.5	円形	
11	33.0	32.0	12.5	円形	炭化物・焼土塊	37	30.0	24.0	6.5	楕円形	
12	36.0	30.0	9.5	楕円形	頭骨・底 炭化物・焼土塊	38	31.0	25.0	5.0	楕円形	
13	24.0	19.0	11.0	楕円形		39	25.0	20.0	7.5	楕円形	
14	20.0	19.0	6.0	円形	炭化物	40	29.0	27.0	10.5	円形	
15	24.0	22.0	6.0	円形	炭化物	41	24.0	22.0	11.0	円形	
16	28.0	27.0	8.5	円形	頭骨・底	42	37.0	36.0	8.5	円形	
17	36.0	32.0	9.0	楕円形	炭化物	43	25.0	24.0	7.5	円形	
18	22.0	22.0	5.5	円形		44	36.0	34.0	10.5	円形	頭骨・底
19	30.0	25.0	7.7	楕円形		45	27.0	22.0	18.2	楕円形	
20	28.0	27.0	9.5	円形	炭化物・頭骨・底	46	26.0	18.0	23.5	楕円形	
21	29.0	27.0	13.0	円形	一部欠	47	29.0	29.0	11.5	円形	炭化物・焼土塊
22	36.0	30.0	7.0	楕円形	炭化物	48	27.0	25.0	13.5	円形	頭骨・底
23	30.0	25.0	8.0	楕円形	炭化物	49	23.0	22.0	7.5	円形	
24	30.0	30.0	7.5	円形	炭化物	50	27.0	27.0	10.0	円形	
25	30.0	30.0	9.5	円形	炭化物	51	24.0	23.0	11.5	円形	
26	34.0	34.0	16.0	円形	炭化物						

頭骨底………頭蓋骨が埋納穴底部に置かれたものの略である。

# 西蒲原郡黒崎町釈迦堂遺跡調査報告

# I 序 説

## 1 遺跡発見の経緯

西蒲原郡黒崎町の板井部落西方で遺物が発見されたのは古く、江戸時代にまでさかのぼる。即ち、<sup>(註1)</sup>「北越雑記」によると飯淵（板井部落の西）から、大同元年（806年）の銘を有する五重の石塔が掘り出され、宝永4年（1707年）の大洪水で埋没してしまったことが記され、板井部落の西方耕地（釈迦堂遺跡の付近）で石塔の発見を伝えている。この五重の石塔が五輪塔または宝篋印塔であるとすれば、両塔の出現する平安中期より遙かに古く、大同元年という年号は信ずることができない。実物が失われた現在では議論の余地がない。

文政元年（1818年）、鎧潟・田潟・大潟の悪水排除を目的として、新川開削及び金蔵坂の砂丘壠割<sup>(註2)</sup>の大事業が着工された。これを契機に新田開発が活発に進められた天保の頃、金銅製の釈迦誕生仏<sup>(註3)</sup>（現長12.3cm、板井の広瀬喜左衛門氏蔵）が地中から発見され、この誕生仏を祭るため仏像出土土地に天保3年（1832年）石堂が建立された。この堂を釈迦堂と称し、付近一帯の地名通称ともなった。その後、石堂の位置が堤外地であったため、天保8年（1837年）に現在地に移し木造の御堂を建てた。図版第23図の御堂は明治39年、焼失後に再建されたものである。

明治年間には釈迦堂北西の羅尾地区から、須恵器及び古錢類が出土し、一部は現在でも保存なされている。<sup>(註4)</sup>

戦後の耕地整理、農業用水堀造成工事などで須恵器や陶質土器の破片が点々と発見されたが、まとまつた記録としては残されていない。昭和37年、遺跡台帳作成の調査で黒崎・味方地区を担当された青木宏氏によって、本遺跡の学術的な踏査がなされ、詳細な調査報告カードが提出された。この調査結果をもとに、釈迦堂遺跡が新潟県遺跡目録に記載され、全国遺跡地図（新潟県）No.481の遺跡として登録されるに至った。しかし、水田下という悪条件のため、遺物の分布範囲、包含状況及び遺跡の中心などが、明確に把握されないままになっていた。

昭和46年、北陸高速自動車道の法線が御堂の北600mのところを通過することに決定し、遺物の分布範囲が問題となった。県教育委員会は上原甲子郎・青木宏氏の協力を得て現地踏査を実施し、その結果、釈迦堂遺跡の主体部ではないが、遺跡北端が法線にかかるものと断定し、緊急発掘調査を実施することに決定した。<sup>(註5)</sup>

（関 雅之）

註 1 長沼寛之輔編19巻、文政年間に書れたもので、史料的には問題がある。

2 西蒲原郡教育会編『西蒲原郡志』明治40年

3 佐々木市治郎『板井風土記』昭和42年

4 註3と同じ

5 県教育委員会編『新潟県遺跡目録』新潟県文化財年報第6 昭和40年

6 文化財保護委員会編『全国遺跡地図（新潟県）』昭和43年

## 2 発掘調査の経過

北陸高速自動車道の法線決定により、釈迦堂遺跡（新潟県埋蔵文化財包蔵地登録番号481）の一部が、道路下に埋没破壊されることが明らかとなった。新潟県教育委員会は日本道路公団と協議を重ね、昭和47年6月新潟県が発掘調査の受託者となり、釈迦堂遺跡の法線にかかる部分について、記録保存の措置をとるための調査依託契約が成立した。

昭和47年4月から、発掘調査を主管する県教育庁文化行政課の埋蔵文化財担当職員によって、出土遺物の検討、地点の再確認、法線と遺物分布範囲の関係などについて、数度にわたり現地踏査を実施した。また、古地図及び明治年間の地籍図を活用して、遺跡付近の旧地形を検討し、発掘地点と範囲の決定作業を行なった。発掘調査は用地買収の遅れと水田地帯の耕作権がからみ、調査実施が稲刈り後に延期されることになり、全体計画を大幅に変更せざるを得なくなつた。刈取の完了した昭和47年10月2日、釈迦堂遺跡の発掘調査に着手した。

本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長 白井哲夫）が発掘調査主体となり、県文化行政課埋蔵文化財担当の職員を中心に、県内の考古学研究者を調査員に依頼し、地元の木場・板井両部落から作業員として部落有志の協力を受けて調査を開始した。このような経過をもって昭和47年10月2日、本遺跡の発掘調査が開始されたのである。

10月2日は発掘用具と器材の輸送、プレハブ作業小屋の建設をする。翌3日から5日まで発掘予定地及び付近の測量作業をし、グリッド設定の基本杭を打つ作業を行なった。グリッドを設定した調査予定地は全長420m、最大幅70mである。10月6日発掘の諸準備が完了し、調査団の結団式を簡単に行ない、実質的な発掘作業に着手した。発掘は70グリッドを境にして、調査員と作業員を2班に編成して作業を進める。本遺跡は標高1m以下の潟湖地帯であり、湧水と秋霖に悩まされ、粘性の強い水田土壌のためスコップや移植ゴテでは役に立たず、ホソを使って薄く土をはぐ発掘方法をとった。10月27日までにはほぼ全域の試掘グリッドによる状況把握が完了し、後半における調査方法・対象地域の検討がなされた。これまでの段階では70~80グリットに遺物が集中しており、舶載磁器（青磁鉢片）陶質土器（擂鉢・甕）・土師質の燈明皿などが検出されている。

法線内における遺跡の中心と推定される70~80グリットの南半部分を全面発掘に切りかえる。そのため、全面発掘対象地の土はベルトコンベアー6台で、地域外に移動させながら発掘を続ける。この頃から天候の悪化と機械の故障などで作業のペースがおちる。しかし、地元作業員の献身的な協力によって、調査作業を終了することができた。

11月22日をもって予定した発掘調査作業が終了したが、粘土層の堆積と生活面の関係、泥炭層から出る植物種子、当時の自然環境の復元など種々の問題がこの調査をとおして提起された。12月4~6日の3日間、県立教育センターを中心とする専門職員によって、地質・珪藻・花粉分析・植物化石などの面から遺跡の調査を実施してもらった。

その後、発掘グリットが雨と湧水で池のような状態になり、事故の危険をはらんでいるため、協議の結果、全グリットの埋めもどし作業を約1週間実施した。

本遺跡は当初より不明確な点が多く、結果的には遺物量が少なかったが、中世における多くの問題を提起し得るものと考える。

(関 雅之)

积迦堂遺跡の発掘調査は下記の人員構成で実施されたものである。

調査担当	関 雅之	(県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
調査員	本間信昭	(県教育庁文化行政課主事)
	家田順一郎	(県教育庁文化行政課審議官)
	戸根与八郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	駒形敏朗	(県教育庁文化行政課嘱託)
	上原甲子郎	(県文化財臨時調査審議委員・日本考古学協会員)
	青木 宏	(黒崎町役場住民課長)
	金子拓男	(県立長岡大手高等学校教諭・日本考古学協会員)
	中島栄一	(新潟市立工業高等学校教諭・日本考古学協会員)
地質担当 調査員	林 等	(県立教育センター・地学担当)
	稻葉 明	(県立教育センター・地学担当)
	新田義信	(県立教育センター・地学担当)
	草野英二	(新井・頬南地区理科教育センター)
	西海士寿郎	(県立西川竹園高等学校教諭)
	木村 広	(県立教育センター長期研修員)
調査補助員	鶴尾年秀	(猪立八幡宮神官)
	布川忠一	(猪立遺跡保存会会員)
作業員	板井部落、木場部落の有志	
協力員	黒崎町役場	
	黒崎町教育委員会	
	広瀬喜左衛門	(黒崎町文化財調査審議委員)
	久保田五助	(板井区長)
事務局	柴野達男	(県教育庁文化行政課管理班係長)
	小野栄一	(県教育庁文化行政課管理班主事)
	刈部啓子	(県教育庁文化行政課嘱託)

## II 遺 跡

### 1 遺跡の立地

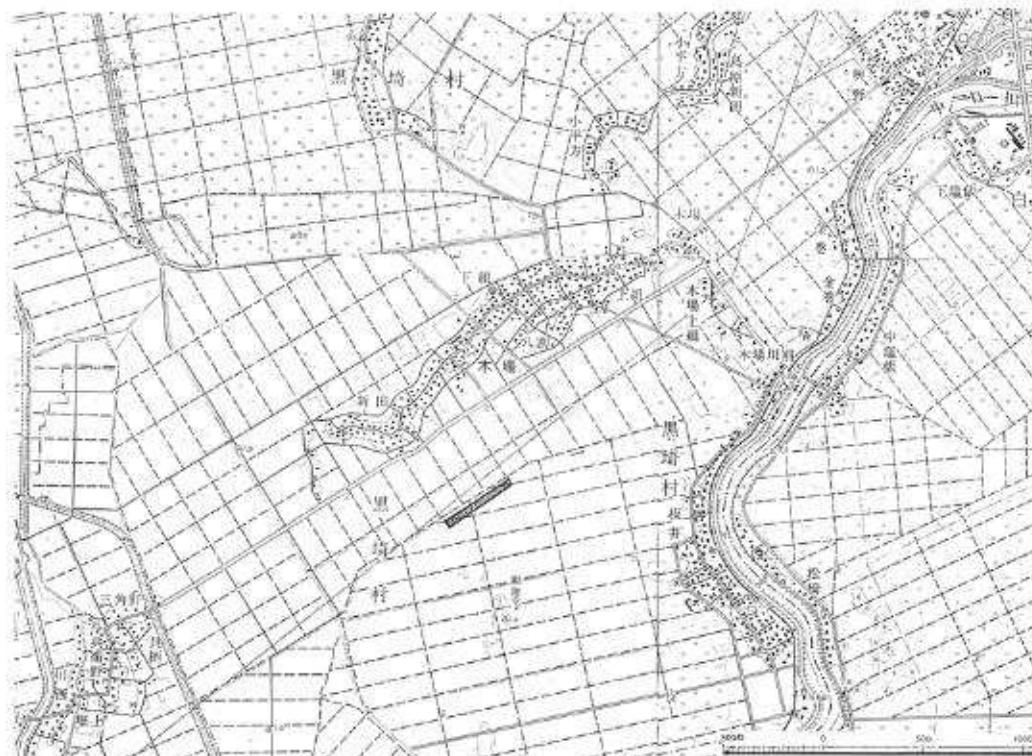
积迦堂遺跡は新潟県西蒲原郡黒崎町大字板井字本田、通称积迦堂と称する地域に所在し、中ノ口川の左岸、板井部落と木場部落のほぼ中間に位置している。

第1図に示した如く、発掘地点は標高60cm前後の平坦な水田地帯で、南へ約600mの位置に积迦誕生仏を祭った御堂（积迦堂）があり、この地点は標高1.4mの微高地状を呈している。過去において、この御堂付近及び御堂の西側にかけて点々と遺物が採集されているが、遺跡の範囲は漠然として把握しがたいのが現状である。また、旧潟湖はほとんど干拓され、微高地は削平されて旧地形をとどめていない。常識的には遺跡が立地する地理的条件を満していないともいえる。

遺跡の立地について、現在の地表面からのみ判断することは多くの危険を伴うため、地質・植物・珪藻・花粉分析などの地質学的調査も含めて実施し、当時の環境復元に努力した。（関 雅之）<sup>(註1)</sup>

### 2 遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境 すでに大墓遺跡の項で、付近の地理的環境について述べてきたが、特に积迦堂遺跡を考える上で重要と思われる諸点を指摘しておきたい。



第1図 积迦堂遺跡付近の地形図  
(国土地理院発行「卷」「内野」「新潟南部」「白板」1:25,000原図)

本遺跡の立地する地域は起伏の乏しい平坦な水田地帯で、部落のほとんどは微高地に位置している。<sup>(註3)</sup> この新潟平野北端は、信濃川が分流して形成した砂丘背後の大後背湿地で、三角州性氾濫原低地であるとされている。西蒲原郡内の字名及び俗称に潟の名を付す地名が多いことも、潟湖低地の特色をよく示しているといえる。

木場・板井部落は江戸時代に周囲を潟湖によって囲まれ、板井部落の西には手杵潟・丸潟・蓮潟が北から並び、部落の西一帯は湖水面となっていた。木場部落の北側には徳人潟・浦潟・海老手潟・大潟が東から並び、部落の南側には堤潟・雁潟・熊潟・大沼・平柳潟が東から連なって、木場部落は潟湖群に囲まれて島状を呈していたものと思われる。宝曆3年(1753年)の「越後国蒲原郡木場潟反別改帳」によれば、潟水域面積27町余に及んでいる。第1図及び図版第1図に示される板井・木場・小平方・黒島の各部落は、細い帶状または弧状の形態を呈し、河川によって形成された自然堤防であることを物語っている。これら潟湖の旧状を現在の地形図ではたどれない。この裏に當々と続いた蒲原農民の水との戦い、新田開発の苦闘の歴史が刻まれているものと考える。

积迦堂三角点の所在する微高地(標高1.4m)を境に西に熊潟、東に丸潟・蓮潟が位置し、この微高地は北にのびているが、発掘地点にまで至るものか断定はできない。

近年、新潟県においても潟湖地帯の考古学的調査が進み、従来予想しなかった低地に奈良・平安期の遺跡が存在することが証明され、河川流路の変化及び河口の状態変化による内陸水面の上下が問題視されはじめた。すなわち、時代による潟湖周辺の乾陸化と水没のくりかえしが行なわれ、人間の居住の歴史もこのくりかえしと規を一にして営まれたものと考えられる。

歴史的環境 黒崎町を中心とする遺跡の分布は、すでに4~5ページ 大墓遺跡のところで述べてきたが、考古資料以外に古代・中世を語り得る文献史料は現存していない。

积迦堂付近から採集された遺物の中に、内面青海波の印目文をもつ須恵器があり、平安時代に属するものであろう。木場・板井地区で発見された最も古い時期のもので、本地域の歴史的な上限を示すものと考えられる。

木場が文献にあらわれるのが天正年間、16世紀後半の時期である。上杉景勝の最前戦基地として木場城がおかれて、兵船をくり出して新発田重家と戦っている。木場は潟湖を経て西川・信濃川につらなり、蒲原津(新潟湊)を経て日本海航路に通じる。江戸時代、西川は蒲原船道として、物資流通の重要な水路であった。

(関 雅之)

註 1 遺跡の地質学的な調査の結果は、本報告書のⅢ章にまとめられている。

2 「新潟地区の地盤」(『都市地盤調査報告書』第16巻)建設省計画局・新潟県 昭和42年

3 青木宏 『越後木場城』黒崎町教育委員会 昭和39年

4 註3と同じ

5 新潟平野における地盤沈下問題も無視することができない。

6 佐々木市治郎氏の採集資料。佐々木・広瀬氏はこの資料を県に寄託された。

7 井上鏡夫 『新潟県の歴史』山川出版社 昭和45年

### 3 グリットの設定

前述の如く、釧路堂遺跡の範囲は漠然として、発掘地点の選定が非常に困難であった。法線内のボーリング調査によても、確実な包含層は把握されず、聞き込み調査及び採集資料と古地図などから、第3図(図版第22図)に示した地点を選定した。グリットは $3 \times 3 m$ を基本区画として、ほぼ法線の全域に設定する。グリットは $420 m \times 70 m$ の範囲に設定し、南西端から北東に向って順に番号を付し、南東から北西にアルファベットの記号をつけ、番号と記号の組み合せをもってグリットの名称とした。

(関 雅之)

### 4 遺物の出土状況

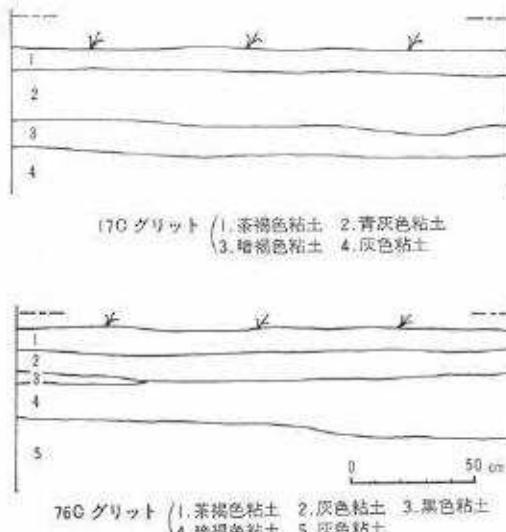
図版第25~27図は遺物の出土状況を示したものである。調査地点における遺物の平面的な分布は、70から80グリットのA~H間に集中しているが、P・Kでも若干量の出土が認められる。70~80グリット以外で遺物を出土したグリットは4Q・14D・12M・22D・26R・32J・32P・40R・46D・60C・64C・84C・94I・102F・104Pなどであり、遺物の平面的分布は $300 m$ にも及んでいる。70~80グリットの間で、約9割の遺物を出土しているが、遺物の出土状況に安定性がなく、同一個体の土器がまとまって出土する例はほとんどまれである。即ち、個々の破片が単独の形で包含された状態で出土している。

遺物整理の際、同一個体として接合し得た土器片の分散状況を調べると、第8図7の壺形土器底部は $21 m$ 、第12図7の壺形土器片は $7 m$ 、第11図5の插鉢底部は約 $50 m$ も離れて出土している。このことは、釧路堂遺跡の本発掘地点が、正常な遺物の包含状況を呈していないものと考えられる。この異状な包含層がある時点で形成されたものか、正常な包含層がある時点で異状な状態を呈したものか、いづれかであろう。遺物の分布密度の差異も合せ考える必要がある。

遺物の出土と層序の関連を観察すると、1~69グリットまでは第1層の耕作土及び第2層の青灰色粘土中から遺物が検出され、22Dの第5層暗灰色粘土中から出土したものが唯一の例外である。第2層の青灰色粘土の厚さは地点によって異なり、4Qグリットでは約 $70 cm$ の厚さを有し、遺物も地表下 $60 cm$ から出土している。70~80グリットでは第2層青灰色粘土、第3層褐色粘土(乾燥した泥炭層)の両層から遺物の9割以上が出土し、第3層以下から出土したものは10例以下である。また、第2層と第3層の出土量比率は大略1:2である。

図版第29図は立木の根が出土した状態を示したもので、自然木や樹枝が顕著に検出された範囲は1~66・98~135グリットで、遺物の平面的な分布の濃密度と正反対である。

(関 雅之)



第2図 土層断面図



第3図 京迎堂遺跡のグリッド配置図

## III 地 質 調 査

### 1 地質調査について

积迦堂遺跡についての地質調査を昭和47年12月4日から12月6日までの間に実施した。この期間は、考古学的調査の後、数週間を経過していたのでグリットの壁はやや弱化していた。地下水位がきわめて高く、また、当時降雨が多かったため、各グリットは一杯に水をたたえていた。短い期間内に地質調査を行なわなければならなかったので、遺跡全体から13箇のグリットを選び、ポンプによって順次排水しながら調査をすすめた。調査は、最も多量の遺物を出土したところから始めて周辺へとすすめ、調査地域全体の地質の状況をとらえようと努めた。排水されたグリットの壁は酸化して変色していたので、調査に際してその部分を取り除いた。排水してくわしい調査を行なうことのできなかつた多くのグリットについては、そこからすでに掘り出されていた耕土について概観し、大型植物化石を探集した。

排水、調査した各グリットの断面について地質柱状図を作成し、試料を採取した。また、最も代表的な断面から採取した試料について珪藻および花粉の分析を行ない、大型植物化石を同定・記載した。

本調査には林等（新潟県立教育センター）、稲葉明（同）、新田義信（同）、草野英二（新井・頬南地区理科教育センター）、西海士寿郎（新潟県立西川竹園高等学校）、および木村広（新潟県立教育センター長期研修員）の6名が当たった。

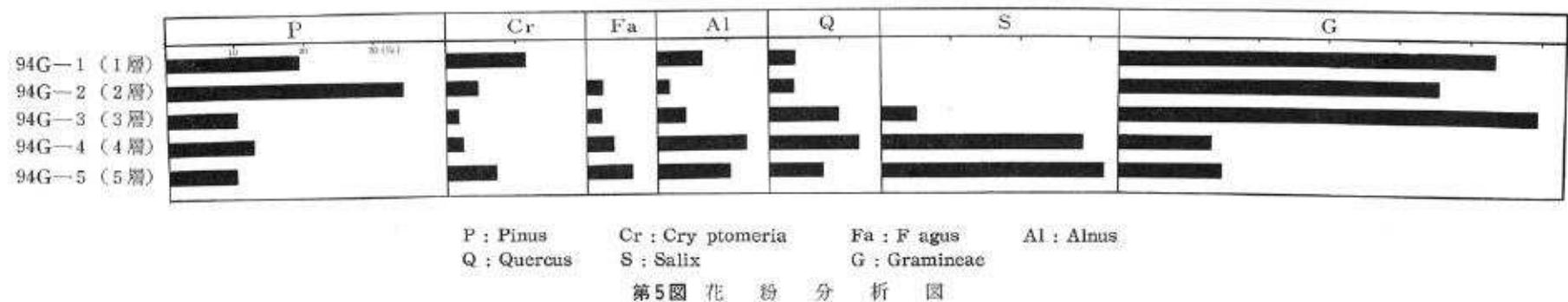
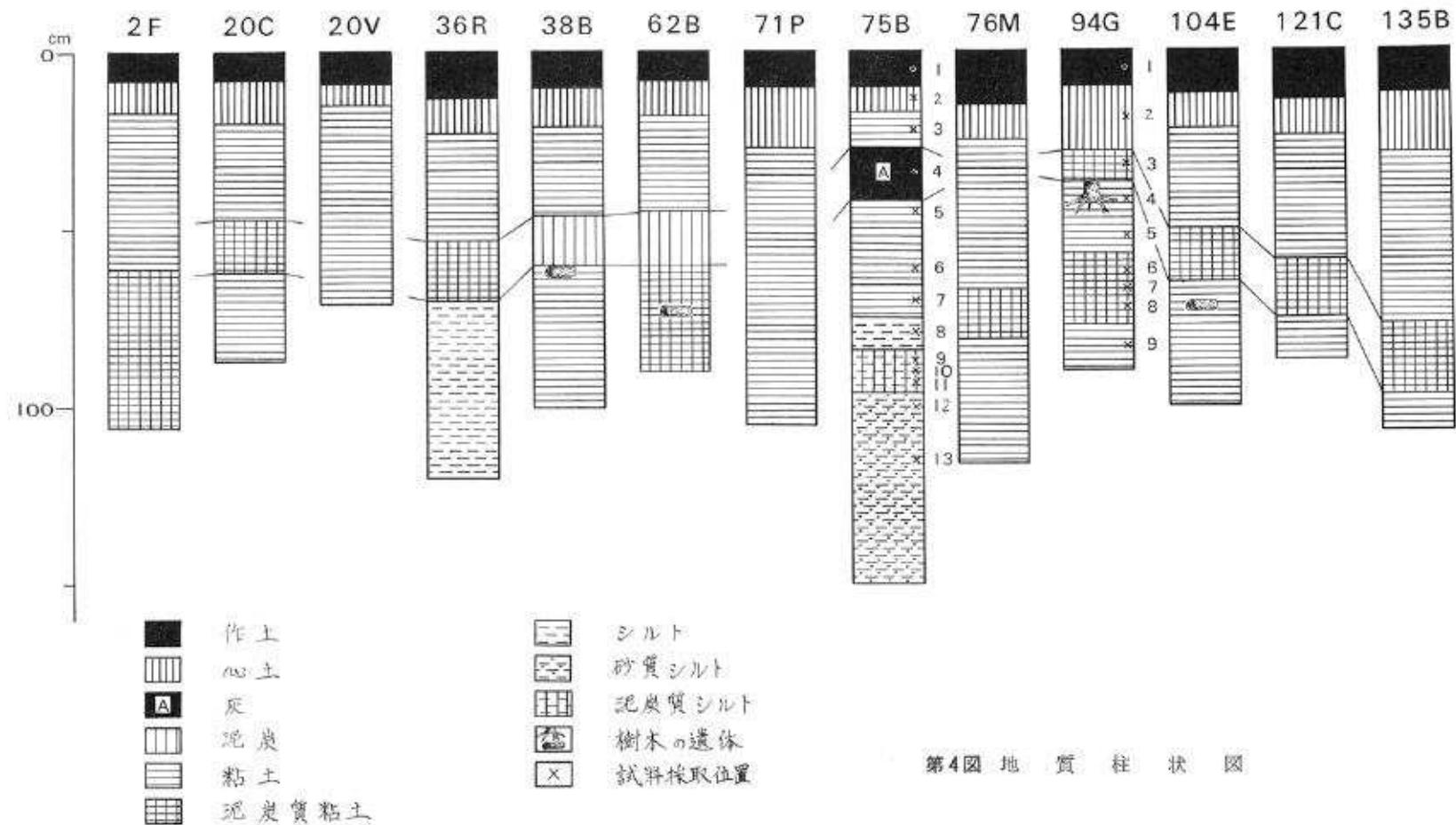
（稲葉 明）

### 2 地 質 の 概 観

ここで報告するのは本遺跡の地表から約1mの深さまでの地質である。全域が水田であり、かつ、湿田である。表層部20cm～30cmは耕作によってつくられた、作土層とその下に発達する心土層である。多くの断面で、その下方には、薄い灰色粘土層をへだてて層厚10cm～15cmの泥炭層がみとめられる。その下方は主として暗灰色～暗青灰色の、しばしば直立したマコモやアンを含有した粘土層である。

しかし、本遺跡の南端部や北西縁などではグリット断面に泥炭層の発達がみとめられないことがしばしばある。本遺跡の中央部では、遺物を最も多量に出土しているが、上記の泥炭層が欠けている。ここでは、数10cmの深さに、人の生活に起因すると考えられる凹凸に富む面が追跡されるが、この面の上に発達する層は塊状構造をもち、灰や炭化物を含有するほか、栽培植物の種子を産出している。この層はまた、比較的多くの遺物を包含している。しかし、遺物は約1mまでの深さのどの層準からも発見されている。遺跡中北東部一帯には樹木の根幹が埋没しているが、それらは現地性である。その層準は泥炭層や上記の特徴的な遺物包含層の直下である。

（稲葉 明）



### 3 地質断面

13個のグリットの地質断面について述べる(第4図)。

#### 1) 人の生活に関係して形成された層と面

グリット71Pでは地表から27cmの深さに灰をもととする薄い粘土層がある。それは、下面に不規則な凹凸をもち、くぼみに落ち込んで堆積したように考えられる。その下位は、マコモの茎などを含む70cm以上の厚さの青灰色粘土層である。

75Bでは42cmの深さに、人の手によるのではないかと考えられる凹凸をもった面(H面とする)が発達し、その上に人の生活に関係して形成された、塊状構造の発達した厚さ15cmの層(H層とする)を伴っている。ここでは、その構成は、灰をもととすると考えられる炭化物を含んだ灰色粘土である。その下方は粘土層とシルト層からなり、泥炭層を欠いている。94Gでは表面から約30cmの深さに泥炭質粘土層があるが、これは塊状の構造をもち、モモなどの栽培植物の種子を含んでいる。このような特徴から、この層はH層の連続と考えられる。この層の下位に接して大きな樹木の根が埋没している(図版第29図)。樹木は直立し、根は広く追跡されるので、明らかに立木である。樹木はH層によっておおわれているもようである。H層の下方には50cm以上の厚さの暗灰色～灰色粘土層がある。

#### 2) 泥炭層をはさむ断面

10～15cmの厚さの1層の泥炭層または泥炭質粘土層をはさむ断面が最も一般的な断面である。泥炭層は20Cでは地表から47cmの深さに、36Rでは53cm、38Bでは46cm、62Bでは45cm、104Eでは50cm、121Cでは60cm、そして135Bでは80cmの深さにある。これらの泥炭層は同一層準に属している。泥炭層は水平であるが、ときに傾斜していることがある。泥炭層の深さは地表から50cm前後であるが、遺跡北東端では80cmにまで低下している。耕土層と泥炭層の間には灰色の粘土層がある。また、泥炭層の下方は、主として、暗灰色～暗青灰色の粘土層であるが、そのなかには直立したマコモやアシの遺体が含まれていることが多い。泥炭層直下の粘土層には樹木の幹や根が横たわっていることがしばしばある。これらは94Gの立木と同時代のものであろう。

泥炭層とH層との関係については次のように考えられる。遺跡中北東部では浅い位置にH層が発達するが泥炭層はみとめられない。泥炭層はその周辺に出現し、南北へ深度を増す傾向がある。遺跡中北東部は比較的高く、人の生活の影響を受けてH面やH層が形成されたが、同じ頃に、その周囲の低い沼沢地には泥炭層が堆積したものと考えられる。

#### 3) 泥炭層、H層とも欠けた断面

2F、20Vおよび76Mでは泥炭層もH層もみとめられないで、耕土層の下は、ほとんど灰色～青灰色の粘土層のみからなっている。このなかには直立した状態のマコモを含んでいることがある。このような断面は少ないが、遺跡の南西端部や北縁部等にみとめられる。これらの地点では、泥炭層が形成されないで、粘土を堆積していたものと考えられる。

(種菜 明、林 等、西海士寿郎)

#### 4 珪藻遺骸群集

##### 1) 試 料

検鏡した試料は、75B グリットから採取した13個と94G グリットから採取した9個である。

##### 2) 試 料 の 処 理

試料3枚をとり、15%過酸化水素水を加え、加熱泥化させるとともに、有機物の分解と漂白を行った。つぎに、蒸留水を加えて、試料を懸濁、拡散させ、放置して底に沈んだ粗粒物質を除いた。のちに、分散剤として亜硫酸ナトリウム溶液(0.01N)を加えて粘土分などの微量鉱物質を除いた。

##### 3) スライドの作製と個体数の算定

処理を終った珪藻殻を含む残留物に蒸留水を加え、全量で200mlとし、これをメスビペットで0.5mlとり、18mm×18mmのカバーガラス上に一様に塗布し、鉄板上でじょじょに加熱乾燥させ、スライドガラスにブルーラックスで封じ、各試料について10枚のスライドを用意した。殻の算定はメカニカルステージを用いて、カバーガラス上を任意に選んだ線に沿って走査し、200個の珪藻殻がえられるまで行った。なお殻片が4以上破損しているものは算定から除いた。200個体を数えたのは、これで群集内の組成が安定する傾向がみられたからである。

##### 4) 珪藻群集組成

今までに同定した種は23属60種で、これらは、*Rhopalodia gibberula* を除いて、すべて淡水生種である。相対出現頻度、生態区分は表1に示した。表1の生態的分類については Hustedt (1930, 196-7)  
(1927~1966), Foged (1954, 1959) の見解を参考にした。

珪藻殻は非常によく保存されているが、含有率は全体に低い。各試料にみられる種組成の特徴はつぎのとおりである。

75B：試料1, 2, 3, 7, 11, 13からは珪藻殻は検出されなかった。試料4では、優占種は *Gomphonema parvulum* で *Pinnularia gibba*, *Eunotia pectinalis*, *Synedra rumpens* が随伴する。試料5では、*Navicula cryptocephala* が優占し、*Pinnularia gibba*, *Hantzschia amphioxys*, *Gomphonema parvulum* が伴う。試料6, 8, 9, 10, 12からはわずかにしか検出されなかった。試料4と試料5の群集組成にはほとんど差異が認められないが、試料4では alkaliphilous (好アルカリ性種) 型、 alkalibiotic (真アルカリ性種) 型が36%, acidphilous (好酸性種) 型が25%と混交し、試料5では alkaliphilous, alkalibiotic 型が49%, acidphilous 型が20%と混交し、アルカリ性種がやや多い。また、それぞれ *Gomphonema parvulum*, *Surirella ovata*, *Synedra rumpens* などの好塩水性種が27%, 19%認められる。しかし、湖沼性の *Melosira granulata* や *M. italica* はまったく検出されない。これらのことから試料4, 5はごく浅い池沼での堆積物と推定される。試料6以下は珪藻殻の含有数が非常に少ない。これは珪藻の繁殖に適さない不安定な水域だったためと考えられる。

94G：試料2, 8からは珪藻殻は検出されなかった。試料1では *Rhopalodia gibberula* が優占し、*Neidium affine*, *Nitzschia palea*, *Surirella ovata* が伴う。試料3の優占種は *Eunotia praerupta* である。試料4では *Eunotia praerupta* が優占し、*E. monodon*, *Gomphonema parvulum*, *Cymbella*

表1 秋迦堂遺跡珪藻遺骸群集リスト

Species name	Ecology			7 5 B						9 4 G								
	halobion rate	pH	current rate	4	5	6	8	9	10	12	1	3	4	5	6	7	9	
1 <i>Achnanthes inflata</i> (KÜTZ.) GRUNOW	?	alkphil	alkphil										2		1			
2 <i>Amphora ovalis</i> KUTZING	indif	alkphil	indif	6	12									7				
3 <i>Caloneis permagna</i> (BAILEY) CLEVE	indif	alkphil	indif											1				
4 <i>Ceratoneis vaucheriana</i> H. KOBAYASHI	indif	indif	r·phil	2	14			3	2	1	2		8	4				
5 <i>Cocconeis placentula</i> EHRENBURG	indif	alkphil	indif	5	2		1						2	17	1			
6 <i>Cymbella cymbiformis</i> (KÜTZ.) V. HEURCK	indif	alkphil	limbio											8	1	1		
7 <i>C. helvetica</i> KUTZING	indif	alkphil	limbio										4					
8 <i>C. naviculiformis</i> AUERSWALD	indif	indif	indif										2			1		
9 <i>C. sinuata</i> GREGORY	indif	indif	indif				1					2	6	6				
10 <i>C. tumida</i> (BRÉB.) V. HEURCK	indif	alkbio	indif	2									2	2				
11 <i>C. tumidula</i> GRUNOW	indif	alkphil	indif	4	1	1	3	1	2				16	13	2			
12 <i>C. turgida</i> (GREGORY) CLEVE	indif	indif	r·phil										2					
13 <i>C. ventricosa</i> KUTZING	indif	indif	indif	9	2	1	2						10	8				
14 <i>Diploneis ovalis</i> (HILSE) CLEVE	indif	alkphil	?											1				
15 <i>Epithemia zebra</i> (EHR.) KÜTZING	indif	alkphil	limphil	2										1				
16 <i>Eunotia arcus</i> EHRENBURG	halphob	acphil	indif											8	2			
17 <i>E. bidentula</i> W. SMITH	halphob	acphil	indif										1					
18 <i>E. lunaris</i> (EHR.) GRUNOW	halphob	acphil	indif										5	3	2			
19 <i>E. monodon</i> EHRENBURG	halphob	acphil	limphil										2	19	11			
20 <i>E. pectinalis</i> (KÜTZ.) RABENHORST	halphob	acphil	indif	18	8	1							4	7	10			
21 <i>E. praerupta</i> EHRENBURG	halphob	acphil	indif	4									32	27	26			
22 <i>Frustulia rhomboidea</i> (EHR.) DE. TONI	indif	acphil	indif												1			
23 <i>F. vulgaris</i> THWAITES	indif	alkphil	indif										17					
24 <i>Gomphonema acuminatum</i> EHRENBURG	indif	alkphil	limphil		2									2	1	1		
25 <i>G. constrictum</i> EHRENBURG	indif	alkphil	indif											3				
26 <i>G. gracile</i> EHRENBURG	indif	indif	limbio	7									2	3		1		
27 <i>G. longiceps</i> EHRENBURG	indif	alkphil	?	3	8	1							1	12	4			
28 <i>G. olivaceum</i> (LYNGBYE) KÜTZING	indif	alkbio	indif											2				
29 <i>G. parvulum</i> KÜTZING	indif	indif	r·phil	32	22	1	1						7	1	19	10		
30 <i>G. sumatrense</i> FRICKE	?	?	?										9					
31 <i>G. subtile</i> EHRENBURG	?	?	?	6										2	1			
32 <i>Gyrosigma acuminatum</i> (KÜTZ.) RABENHORST	indif	alkbio	r·phil												3			
33 <i>G. scalpoides</i> (RABH.) CLEVE	?	alkphil	r·phil	2											1			
34 <i>Hantzschia amphioxys</i> (EHR.) GRUNOW	indif	alkphil	indif	10	24		3	2	3		1	9	2		3	1		
35 <i>Meridion circulare</i> AGARDH	indif	alkphil	r·bio										3		8			
36 <i>Navicula bacillum</i> EHRENBURG	indif	alkphil	indif				1							1				
37 <i>N. cari</i> EHRENBURG	indif	alkphil	indif											3	2			
38 <i>N. cryptocephala</i> KÜTZING	indif	alkphil	indif	9	38		1						2	2	2			
39 <i>N. cuspidata</i> KÜTZING	indif	alkphil	indif										6	1				
40 <i>N. lanceolata</i> (AGARDH) KÜTZING	indif	alkphil	?											1				
41 <i>N. mutica</i> KÜTZING	indif	indif	indif	7	14	2							2	2	9	1	1	
42 <i>N. pupula</i> KÜTZING	indif	indif	indif											2				
43 <i>Neidium affine</i> (EHR.) CLEVE	halphob	acphil	indif										20					
44 <i>N. iridis</i> (EHR.) CLEVE	halphob	indif	limbio										13			1		
45 <i>Nitzschia dissipata</i> (KÜTZ.) GRUNOW	indif	alkbio	r·phil		2									4				
46 <i>N. ignorata</i> KRASSKE	halphil	alkphil	indif	3									17					
47 <i>N. palea</i> (KÜTZ.) W. SMITH	indif	indif	indif	9	3								18		2			
48 <i>Pinnularia borealis</i> EHRENBURG	indif	indif	indif	2	7		1	1	1				1	1	1	1	1	
49 <i>P. dactylus</i> EHRENBURG	indif	?	?										2	4	3	1		
50 <i>P. gibba</i> EHRENBURG	indif	acphil	indif	21	31	2		1					9	1	14	1	1	
51 <i>P. maior</i> KÜTZING	indif	acphil	limbio										2					
52 <i>P. nodosa</i> EHRENBURG	indif	acphil	indif										2					
53 <i>P. viridis</i> (NITZSCH) EHRENBURG	indif	indif	indif	2									11		2			
54 <i>Rhopalodia gibba</i> (EHR.) O. MULLER	indif	alkphil	indif										4	1		2		
55 <i>R. gibberula</i> (EHR.) O. MULLER	halphil	alkphil	?	2				1					31	3		2		
56 <i>Stauroneis anceps</i> EHRENBURG	?	indif	?		2								7	2	2	1		
57 <i>Surirella ovata</i> KÜTZING	indif	alkphil	r·phil	5	2								18		1	1	2	
58 <i>Synedra rumpens</i> KÜTZING	indif	alkphil	r·phil	15										1		8		
59 <i>S. ulna</i> (NITZSCH) EHRENBURG	indif	alkphil	indif	7	5		1						3	8	18			
60 <i>Tabellaria fenestrata</i> (LYNGB) KÜTZING	halphob	acphil	limbio	6										9	2	3	1	
Total									200	200	6	7	15	7	7	200	68	200
									200	200	6	7	15	7	7	200	68	200
									19	19	11	4						

halphob:嫌鹼性

halphil:好鹼性

alkphil:好アルカリ性

alkbio:真アルカリ性

acphil:好酸性

limphil:好止水性

limbio:真正水性

indif:不定性

*tumidula* が随伴する。試料 5 では優占種は *Eunotia praerupta* で、隨伴種は *Synedra ulna*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella tumidula* である。試料 6, 7, 9 からは珪藻殻はわずかしか検出されなかつた。

試料 1 の優占種である *Rhopalodia gibberula* は本来、汽水～海水性種であるが、この種は *Rhopalodia gibba*とともに、カルシウム分の多い淡水域にも多く見出される。水田の施肥と関係があるのかかもしれない。試料 3 では弱酸性の湿原に多い *Eunotia* 属が特徴的である。acidphilous 型が 72%, alkaliphilous 型が 20% と好酸性種が非常に多いのも特徴である。試料 4, 5 でも *Eunotia* 属が多いが、*Gomphonema parvulum*, *Ceratoneis vaucheriae*, *Meridion circulare* などの好流水性種も伴い、種組成にややちがいが認められる。試料 4 では acidphilous 型が 44%, alkaliphilous 型が 25%, 試料 5 では acidphilous 型が 27%, alkaliphilous 型が 48% である。すなわち試料 3～試料 5 の間で下部は好アルカリ性種が多く、上部にいくにしたがって好酸性種が増加する傾向が認められる。以上のことから試料 3～5 において、弱アルカリ性水域の池沼から弱酸性水域の湿原へと堆積環境の遷移があったと推定される。試料 6, 7, 9 では珪藻殻の含有数がきわめて少なく、75B の下部と同じように、不安定な水域であったと考えられる。

(木村 広)

## 5 花 粉 分 析

### 1) 試 料

花粉分析をおこなった試料は、グリット番号 94G の地点から採取した。採取した試料の数は、試料番号 94G-1 (第1層) から試料番号 94G-9 (第6層) までの 9 個である (第4図)。

### 2) 試 料 の 処 理

花粉分析のための処理は次のようにしておこなった。室内で風乾させた約 500g の試料を縮分器を用いてそれぞれ約 10g になるまで縮分した。

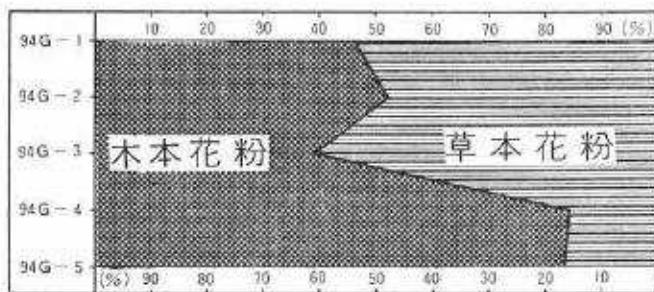
縮分した試料の化学処理はアセトリンス法にしたがつたが、その概要は次のとおりである。① HF 処理 (1昼夜)。② 遠心分離による水洗 3 回。③ 10% KOH を加え湯せん 20 分。④ 遠心分離による水洗 3 回。⑤ 水酢酸を加え遠心分離。⑥ 無水酢酸、濃硫酸 (9 : 1) を加え、30 分湯せんした後、遠心分離。⑦ 水酢酸を加え遠心分離により 3 回水洗。⑧ 封入。

### 3) 檢 鏡

検鏡は倍率 600 倍でおこなった。花粉のカウント数はそれぞれ 200 個をめどとした。試料番号 94G-1～94G-3 ではイネ科の花粉の出現比率が大きいので、大きさを測定した。

### 4) 花粉分析の結果と考察

花粉分析の結果は、表 2 に示した



第 6 図 木本花粉と草本花粉の割合

ようになった。試料番号94G—6, 7, 8, 9は花粉の出現数がきわめて少なく、統計的な結果を得るまでにいたらなかった。試料番号94G—1~94G—5の分析結果のうち、出現比率の大きいおもな花粉は、棒状グラフであらわすと第5図のようになる。

花粉の出現傾向は、表2、第6図および第7図から第1層～第3層および第4層と、出現数のきわめて少なかつた第5層～第6層の3つに分けることができる。出現する花粉の優占種を各層でとりあげると、第1層(表土)では Gramineae(イネ科)—*Pinus*(マツ属)—*Cryptomeria*, (スギ属) 第2層では Gramineae—*Pinus*, 第3層では Gramineae—*Pinus*—*Quercus*, (コナラ属) 第4層では *Salix*(ヤナギ属)—Gramineae—*Pinus*—*Alnus*(ハシノキ属)—*Quercus* である。第1層～第3層では Gramineae, 第4層では *Salix* がそれぞれ非常に高い出現比率となっていることが特徴となっている。

Gramineae については、検鏡の際に花粉の大きさを測定した。その結果は第7図に示したとおりである。この結果から、第1層、第2層の最頻値は  $42.5\mu \sim 45.0\mu$ , 第3層では  $32.5\mu$  である。Gramineae の大きさが  $42.5\mu \sim 45.5\mu$  であることは、現生のイネ (*Oryza sativa*) の花粉の大きさとよく一致し、また第1層、第2層が水田土壤の作土および心土であることと矛盾しない。第3層の Gramineae は  $32.5\mu$  であるが、この大きさは矢野・渡辺の(註3)いう野生型であることは明らかである。幾種類が調べたイネ科植物の花粉の大きさと比較すると、マコモ (*Zizania latifolia*) の花粉の大きさと一致している。グリット番号62Bおよび38Bの土壤断面でよく観察される泥炭層は、大部分がマコモの茎の堆積によって形成された泥炭層である。この泥炭層と試料採取地点(グリット番号94G)の第3層が、同一の標準にあるところから、前述の第3層の Gramineae はマコモと推定することがもっとも妥当である。

第4層は図からわかるように、樹木花粉が 80% をこえる。なかでも湿地性の *Salix*, *Alnus* が高い出現比率を示していることや、地層が腐植層であることなどから、堆積時の立地は乾性であったとは考えられない。湿性であるにしても *Salix*, *Alnus* などの花粉の出現比率から考えると、たびたび冠水を受けるような、また、ある程度の停滞水によってうるおっていた環境であったと推定される。

第3層形成時の立地は、マコモの遺体や花粉分析の結果から、マコモを主体とした草本からなる湿原であったと言えよう。第4層よりはやや乾性に向っていたとはいえ、いぜんとして湿性の環境の継続であったと考えられる。

(新田義信)

## 6 大型植物遺体

### 1) 試料の採取方法と産状

各グリットに接して、掘りあげた土が積みあげてあるが、これらの土が、いずれのグリットから排出されたかはきわめて明瞭である。大型植物遺体の試料はこのような土の中から採取した。大型植物遺体はグリット断面の各層準に含有されているが、とくに泥炭層のなかに豊富である。各グリットの堆土中の泥炭層について試料を採取し、グリット断面におけるその層準をできるだけ確認した。その結果、植物遺体を豊富に含む発達のよい泥炭層は、各グリットを通じて同一層準のものである。

つぎに、遺跡全体についての、岩相と大型植物化石の产出について述べる。

表2 花 粉 種 組

花粉	試料番号	94G-1	94G-2	94G-3	94G-4	94G-5
	換算数	206	239	212	228	228
<i>Pinus</i>		% 19.4	% 34.3	% 10.3	% 12.7	% 10.0
<i>Abies</i>			0.4			
<i>Tsuga</i>		0.4	0.4			0.8
<i>Cryptomeria</i>		11.6	4.6	1.8	2.6	7.4
<i>Pagus</i>			2.5	2.3	3.9	6.5
<i>Alnus</i>		6.7	2.0	4.2	12.7	10.5
<i>Quercus</i>		3.8	3.7	9.9	12.7	7.8
<i>Betula</i>			0.8	0.4	3.0	0.4
<i>Carpinus</i>					0.4	0.4
<i>Salix</i>			0.4	5.1	28.9	31.4
<i>Fraxinus</i>		3.8	0.8	0.4	4.3	7.4
<i>Zelkova</i>		0.4	0.8	0.4	0.4	0.8
<i>Juglandaceae</i>			1.2	3.2	2.6	
<i>Gramineae</i>		52.9	46.0	60.3	13.5	14.9
<i>Persicaria</i>		0.4	1.2	0.9	1.7	1.3
<i>Cichorioidae</i>			0.4			

表3 植物遺体リヌ卜

調査地域の南端付近(12M, 12R付近)では地質は砂質で疊を混えることがある。また、泥炭層の発達はしばしばみとめられない。地層には葉理が発達し、*Phragmites communis*(アシ), *Zizania latifolia*(マコモ)の茎や根茎、木片などが、これと平行して堆積している。

調査地域の北東端付近(ほぼ105以北)では地質は粘土を主とし、数10cmの深さに一層の泥炭層が連続している。

これらの中間の部分では、主として粘土によって構成される地質断面のなかに、10cm~15cmの厚さの一層の泥炭層をはさむ、この調査地域の最もふつうの断面と、人の生活に関係して形成されたと考えられる凹凸に富む面とその上の灰や炭化物を含む層とをはさむ断面とがみとめられる。泥炭層ばかりでなく、人の生活によって形成されたと考えられる炭化物を含む層からも特徴のある植物遺体を採取した。

94G, 98B, 104Eその他多くのグリットで樹木が埋没しているが、その中には、地層に対して垂直に位置し、広く根をひろげているものがある。このことから、これらの樹木は現地性のものであると考えられる。これらの樹木の種について、遺体から直接に判定してはいないが、64M, 131Bにおいて採取した木片に *Salix* sp. (ヤナギ属) の虫こぶがあることから、おもに *Salix* sp. (ヤナギ属) ではないかと考えられる。これらのうちの最大のものは、地表付近において樹幹の直径が数10cmにたっしている。

## 2) 植物遺体

採取し、同定した植物遺体は14科15属16種である。これらのうち池沼性植物遺体11種を現生種の生態と比較すると、浮葉性植物3種、挺水性植物8種である(表3)。

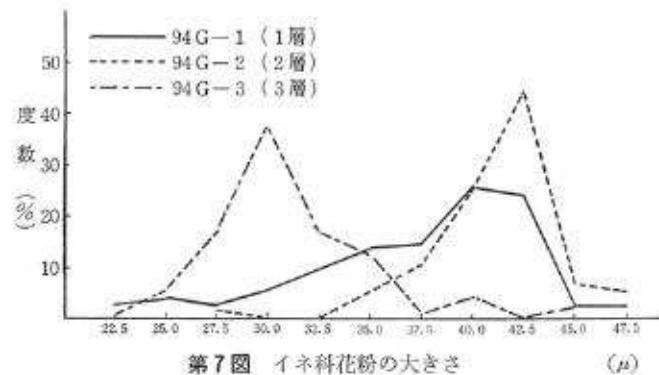
## 3) 考察

産出植物遺体の65%が池沼性植物であることから、この遺跡の周辺部は池沼であったと推定される。

グリット4Bでは、*Fagus Crenata*(ブナ)の殻斗や*Juglans mandshurica* MAXIM. Var. *Sieboldiana*(ナニグルミ)が産出しているが、葉理が発達することと、植物遺体が磨滅した木片であり、葉理に沿ってたりすることを考えあわせると、かなりの流水があり、遺体が運搬されてきて堆積したものと推定される。

一方、低地の湖沼の浮葉性植物群落の構成種である *Brasenia Schreberi*(ジュンサイ)や、*Trapa*(ヒシ属)があることから、一般的には、水深1m~3mの湖沼であると考えられる。

また、沼澤(挺水)植物群落のうち湿地から陸化への橋わたしてある *Phragmites communis*(アシ)が産



第7図 イネ科花粉の大きさ

(μ)

することは、沼沢地から陸地への遷移の過程を示すものと推定される。

44R, 75B, 94Gのグリットは、上位の、人の生活に関係した炭化物層から *Oryza sativa* (イネ) の種子(もみ)や *Diospyros kaki* (カキ) のへたなどが産出している。ここでは、下位に粘土層や *Phragmites communis* (アシ), *Zizania latifolia* (マコモ)などを含んだ泥炭質の粘土層が堆積しており、湿地からだいに陸化が進行したと考えられる。

したがって、本遺跡の景観は、北部と南部に池沼ないし湿地がひらがったが、中心部の 44R, 75B, 94G付近では、より陸化が進んでいたと推定される。

当時、主食の *Oryza sativa* (イネ) や果樹類の *Prunus mume* (ウメ), *P. persica* (モモ), *Diospyros kaki* (カキ) などの栽培がなされていたと考えられる。

(草野英二)

## 7 遺跡の環境について

本遺跡の表層約1mの地質と、そのなかから産出した珪藻、花粉、および大型植物遺体から推定される環境の推移について述べる。

グリット94Gにおいて、下部の灰色粘土層と暗灰色泥炭質粘土層は珪藻や花粉をきわめてわずかしか含有していない。珪藻が生育し、その環境を特徴づける群集を形成するには、さほど長い時日を要するわけではないから、その欠陥は、この地層が不安定な水域で堆積したことを見せるものであろう。この層の形成についての一つの考えは、この地層がほんらんによって生じた湛水から、急速に沈積したのではないかということである。この層のなかに、マコモやアシが直立したまま含有されている事実は、上の考えに有利である。94G断面の中層は上述の地層の上に重なる灰色粘土層と泥炭質粘土層である。灰色粘土層の含有する珪藻は池沼の環境を示している。樹木は、この層から下へ根をおろしている。この付近のグリットからは樹木の根・幹を多産しているが、そのすべてが94Gのそれのように、その場に生育した状態を保っているかどうかは明らかでない。しかし、その状況から、それらは、この場所で樹林を形成していたのではないかと考えられる。これらの樹木が遺物包含層(H層)と、広く発達している一層の連続する泥炭層(または泥炭質粘土層)によっておおわれている断面がしばしばとめられる。したがって、樹林は大よそのところ、それらの層よりも古いのではないかと考えられる。しかし、この点については、まだ検討の余地は残っている。この樹林は安定した陸上の樹林とは考えられない。その理由の一つは、樹種がおもにヤナギ属ではないかと考えられることである。もう一つは、森林土壤層がみとめられないことである。樹種については、樹木の組織について、直接同定を行なっていないので、検討の余地は残っている。しかし、別種の樹木の下に堆積していることが期待される種子等が、まったく発見されなかったという事実が重視される。また、陸上の樹林では、特徴のある層の分化と構造を示す森林土壤が形成されるが、94Gの樹木の根を含む灰色粘土層には、そのような土壤形成の作用を受けた痕跡はみとめられない。この樹林は水底の粘土層に根をおろしていたように考えられるのである。そのような環境で成長する樹種としてヤナギ属は最も代表的である。また、このように考えると、この樹林の発生と、人間の生活との間の結びつきは深いであろう。

94G断面中部の泥炭質粘土層は、その中央部に、モモやブドウなどの栽培植物の種子を産することから、遺物包含層の連続と考えられる。また、その層準は、遺物包含層を欠いたグリットに広く分布

る一層の泥炭層（または泥炭質粘土層）にほぼ相当する。すなわち、遺物包含層と泥炭層とは、ほぼ平行して形成されたと考えられる。泥炭層の珪藻遺骸その他の植物遺体についての分析結果は湿原の環境を示している。全体として、湿原の状態のなかに、やや高く水の達しにくい部分に遺物包含層が発達したのである。泥炭を生成するマコモやアシの繁茂する湿原がこれをとりまき、その表面は遺跡（調査範囲）の中北部から南方へ、また、とくに北方へむかってわずかに低下していた。これは各断面における泥炭層の深さの変化に表現されている。

遺跡の南西端部や北縁部には遺物包含層と泥炭層のいずれもみとめられない断面があるが、これは湿原のなかにおいて、水をたたえていて、ついに泥炭を堆積しなかったところである。また、遺跡南端付近では、グリッヂから排出された物質に砂が多く、また葉理の発達が著しく、ついに水流の影響を受けながら堆積をしたと考えられる。

以上のように94Gの試料についての分析と、各グリット断面の観察をあわせると、遺跡の地域環境は、池沼から沼沢を経て湿原にむかう、陸化の方向をたどった。

花粉についてみると、泥炭層の下の灰色粘土層からはヤナギ属、ハシノキ属とコナラ属の花粉を産するが、前二者の量が圧倒的である。また、その上の泥炭層（または泥炭質粘土層）からは、マコモを中心とする草本花粉が多産する。以上のように大型植物、珪藻および花粉のいずれもがよく対応する結果を示している。

75B付近において、遺物包含層は、下面に異常な凹凸をもつほか、焼けたもみ、カボチャの種子などの栽培植物をふくみ、さらに多量の灰を含有している。また、塊状の構造がよく発達している。これらの性質から、この層は人の生活に密接に関係して形成されたことは疑いない。塊状構造の発達は、この層が陸上において、大気にさらされていたことによって生じた土壤構造ではないかと考えられる。しかし、75Bの断面において採取した遺物包含層の試料は、それが灰をもととすると考えられる灰黒色粘土であるにもかかわらずかなりの量の珪藻遺骸を含んでいる。その群集の組成が示す環境は、浅いが安定した水域（池沼）である。この結果は遺物包含層についての上記の推定と著しく矛盾しているので、その解釈について1、2の考え方述べる。その一つは、遺物包含層の形成の間にしばしば水没したのではないかということである。また、一つは、遺物包含層下面の凹凸が示すことから考えられるように、下層から掘りあげた灰色粘土層が、遺物包含層に混入したのではないかということである。

遺物包含層と泥炭層の形成後、遺跡の中央部はあまり水の影響を受けていないが、周辺部では水の浸入することがあって、泥炭層の上に、うすい灰色粘土層を堆積している。

94Gの断面の上部は耕作によって形成された作土層と、それに伴って粘土等が下降して生じた心土層である。これらのなかには多量のイネの花粉が混入している。（編集明・林等・新田義信・木村広）

- 註 1 徳永薰元 (1972). 花粉分析法入門, 38p. ラティス刊。  
2 中村 純 (1967). 花粉分析, 93p. 古今書院。  
3 同上60p  
4 球瀬マサ (1956). 日本植物の花粉, p41, 広川書店刊。  
5 宮脇 昭 (1967). 原色現代科学大事典, 3—植物. 学研刊。  
6 Hustedt, F (1930) Bacillariophyta, in Pashers Süsswasser-Flora Mitteleuropas 10. Jene.  
7 Hustedt, F (1927—1966) Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz,  
in Rabenhorst's Kryptogamen-Flora. 7. Leipzig.  
8 Foged, N (1954) On the Diatom flora of Some Funen Lakes. Copenhagen.  
9 Foged, N (1959) Diatoms from Afghanistan. Copenhagen.

## IV 遺物

釈迦堂遺跡から出土した遺物は須恵器・陶質土器・土師質土器・青磁・青白磁・染付などの土器及び陶磁器類、土鉢・釘・鎌・錢貨・砥石などが主要な遺物である。遺物量の約9割が70~80グリットの間で検出されたものである。

### 1 土器及び陶磁器

**須恵器**（第8図1~3、図版第33図1・2） 第8図に示した土器は明らかに中世以前の須恵器であり、本遺跡出土遺物の上限を示す資料と考えられる。1は大形の壺形土器口辺部で、口縁が緩やかに外反し、口唇部は外側に強く突出する。胴部を欠失しているが、頸部から強く開いて胴部に至る土器であろう。2は青灰色を呈する蓋形土器のつまみの部分で、径3.5cmの比較的大形のものである。つまみの中央部は約5mmの深さで凹み、凹みの中央部が円錐状に小さく突出している。3は浅い鉢形の土器で、口縁は外方に突出する受部と短い立上りが特徴である。

本遺跡出土の須恵器は5片しかなく、その様相を推することはできないが、蓋形土器つまみの特徴<sup>(註1)</sup>は後述する南蒲原郡半ノ木遺跡のものに近似している。<sup>(註2)</sup>県内では佐渡小泊のカメ畠跡、長岡市問野<sup>(註3)</sup>窯跡などに類例がある。釈迦堂付近から内面青海波の印目文を有する壺形土器も出土しており、大略、平安時代頃に位置すべきものであろう。

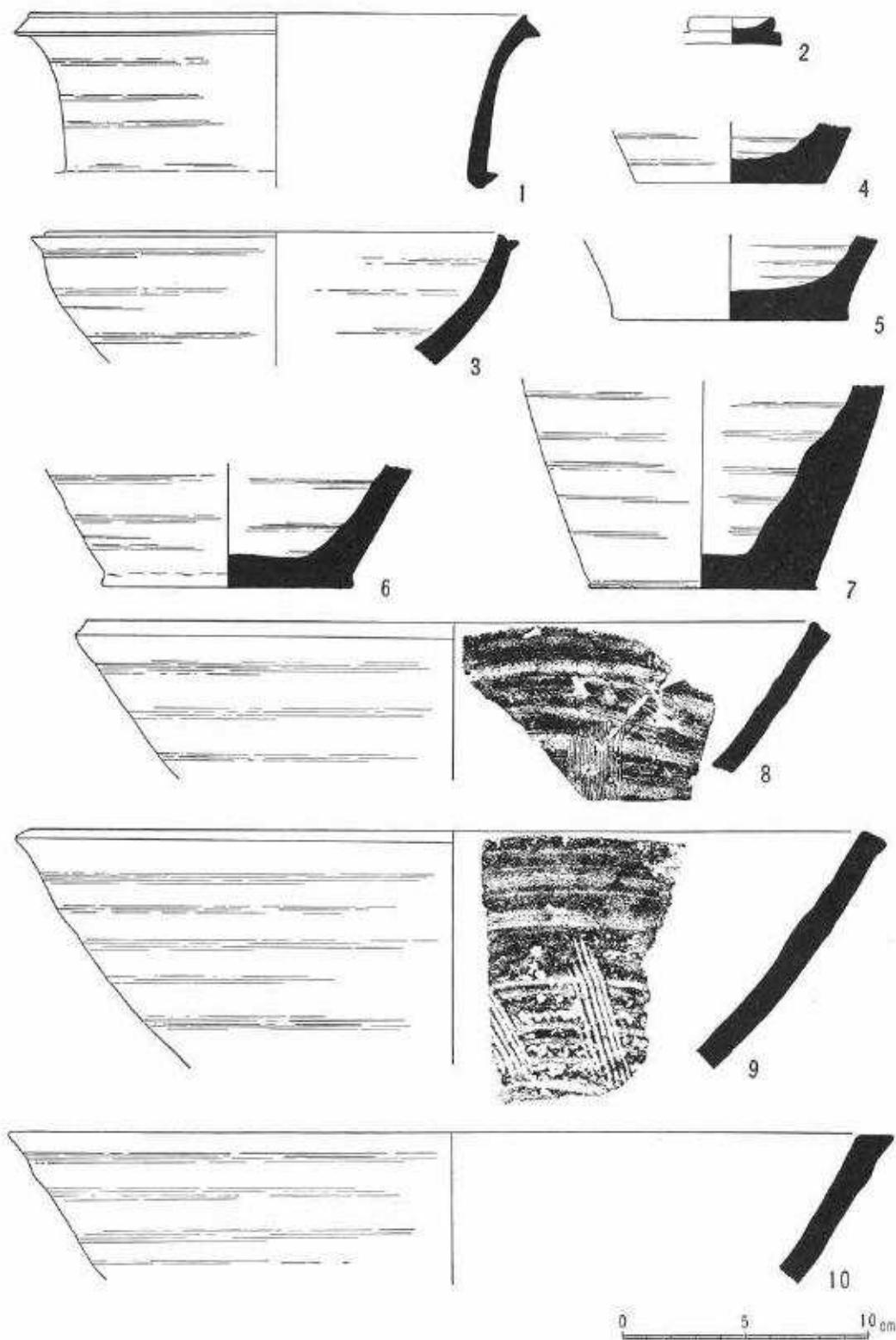
### 陶質土器

ここでとりあつかう陶質土器とは、青灰色または黒灰色（黝灰色）の色調を有する須恵器系の陶器で、統須恵器と称される中世陶器の一群である。石川県の珠洲綱の特徴と酷似する胎土・焼成をもっている。

**壺形土器**（第8図4~7、図版第33図3） 第8図4~7は壺形土器の胴下半部から底部に至る部分で、口縁部と考えられる破片は検出されていない。第8図7は壺形土器の代表例で、青灰色を呈し焼成は良好で堅い。器面内外にはロクロ目を残し、底部から胴下半に至る立上りの角度は110度前後で、底部直径9.6cmである。内部は粘土の巻上痕を明瞭に残し、器内も厚く、底部には静止糸切の痕を有する。<sup>(註4)</sup>4~6も同一の手法・形態をとるものと思われる。これらの壺形土器と近似するものに、岩船郡粟島浦村出土の中世骨蔵器群がある。

**擂鉢形土器**（第8図8~10・第9図・第10図、図版第33図4~18） 本遺跡出土の陶質土器中、最も量的に多いのは壺形土器と擂鉢である。この擂鉢形土器は口縁の特徴から大略2種に大別される。即ち、口縁が外そぎ状を呈するものを擂鉢A類とし、内そぎまたは平縁のものを擂鉢形B類に分類して説明することとする。

**擂鉢A類**（第8図8・9） 8は口縁が外そぎの擂鉢で、黝灰色を呈して焼成は堅緻である。器体外面の擂目の単位は幅2.1cmで20条、擂目は細かく浅く施されている。9は灰黒色を呈し、擂目幅1.6cmに6条の擂目を有し、かなり鋭いタッチで深く施されている。両者は近似した口縁形態を有するが、



第8図 須恵器・陶質土器(縫・縦縫)

擗目及びその施文手法の特徴に大きな相違がある。

擗鉢B類（第8図10・第9図1～4） B類は内そぎまたは平縁の一群で、第9図1・3・4の如く、平らな口唇部の中央がやや凹みぎみになるものもある。1は青灰色で焼成は堅敏、擗目は非常に粗く深く施され、擗目幅2.6cm、9本の擗目を単位としている。この一単位の中で細目4本と太い擗目5本が一組となっている。これと近似するものに4がある。この擗目は間隔をあけずに施してあり、擗目が重っているが、擗目原体は1と同一のものである。第8図10及び第9図2・3は擗鉢の口縁で、擗目がやや下方に施されているものである。

擗鉢A・B類の口縁断面をみると、口縁とのなす角度は大略50～60度の範中に属し、内外共にロクロ整形されている。

擗鉢底部（第9図5・6・第10図1～5、図版第33図14～18） 擗鉢の底部直径は10～12cmで、ほぼ平均した数値を示している。第10図1～5は底部に板目状の圧痕が施されたものである。第10図4は明らかに静止糸切の痕で、底面周端部の糸切痕を意識的に消し、箇で数条の線を施している。5もこれに近似したものである。第10図1～3の底部圧痕は静止糸切というより、敷物によるものではないかと考える。特に3の場合は板目状を呈し、浅い線状の凹みは約2mm幅である。しかし、1～5に共通する点は、底面にある圧痕を周端部のみで消していることである。これは擗鉢成作の技術的な面から生じたものか、時期的な特徴として把握すべきものか定かでない。

底部内面における擗目を観察すると、細い櫛目状の擗目を有するものに第9図5と第10図1がある。5は擗目幅1.8cmで約15条あり、1は1.4cm幅で約10条を一単位としている。この細い櫛目状の擗目を有する土器は単位擗目の間隔がかなり開いている特徴がある。また、本土器の口縁形態は、第8図8に代表される擗鉢A類の形をとるものであろう。

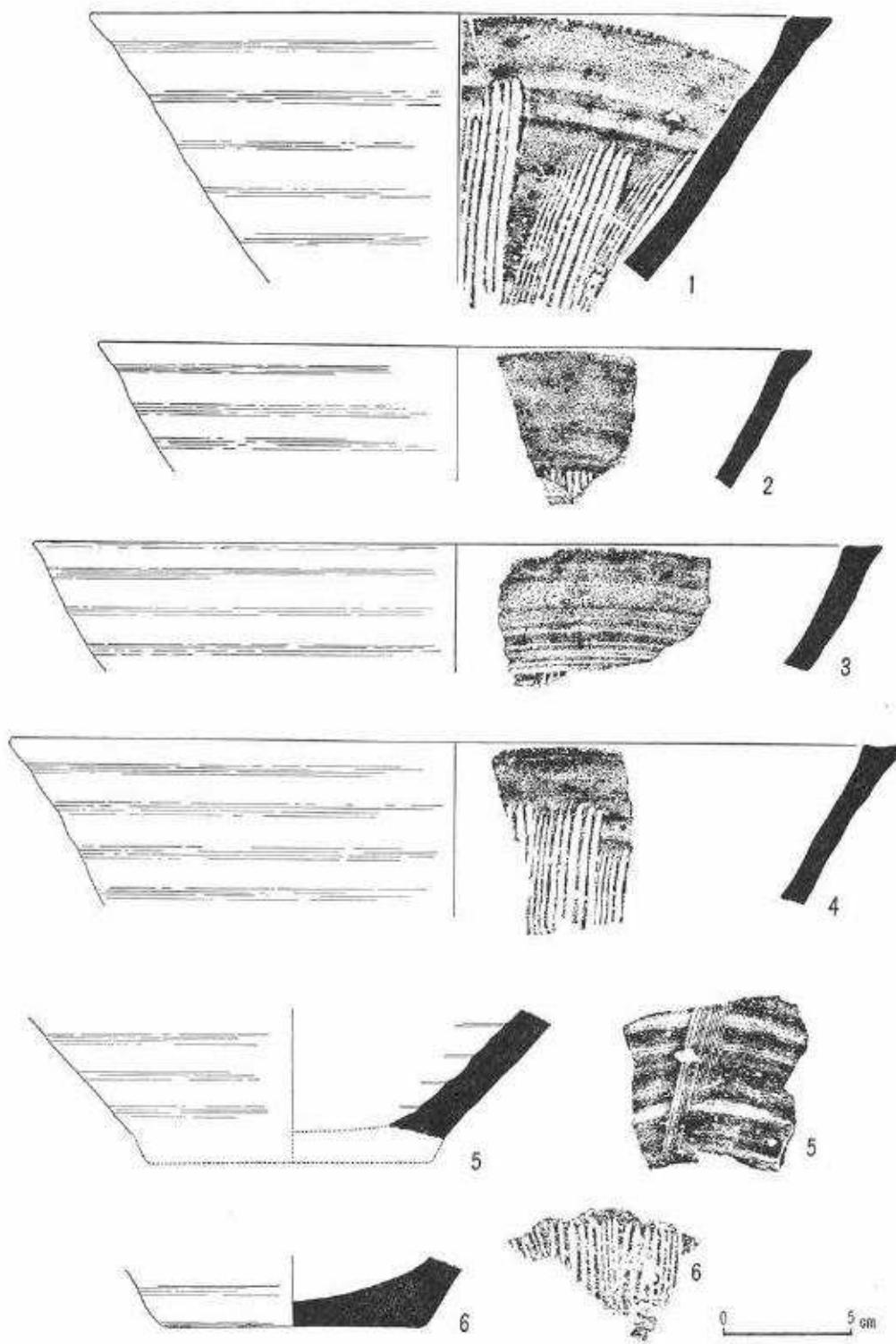
第9図2・3はやや太目の擗目を有するが単位擗目の間隔はあいている。2は擗目幅2cm 9条、3は1.2cm 5条である。

第9図6及び第10図4・5は底部内面中央で、擗目が相互に交差し合った状態で、擗目は粗く大きい。擗目の特徴は第9図1・4の口縁と規を一にするものである。底部中央で擗目が交差しているが、底部から体部に至る部分では、単位擗目に若干の間隔を生じている。即ち、口縁下端部から、すきまなしに擗目を施していると考えられる擗鉢は出土していない。

第11図1～7は擗鉢体部における擗目を示したもので、擗目単位は間隔をもって施されている。7は内面がやや褐色を呈し、幅2.3cmで7条の擗目をもち、胎土・焼成・色調・擗目のタッチを異にしている。

變形土器（第11図9～23・第12図1～11、図版第34図1～28） 本遺跡出土の變形土器はすべて破片で、完形土器はない。また、口縁部が少ないので、全体の器形を推知することができず、叩目の方向・拓本断面の傾斜などについても、疑問の余地があることを明記しておく。變形土器はすべて条線状叩目を有する一群で、器内面に指頭状の調整痕をとどめるものもある。条線状叩目の形状により3種に大別することができる。

右斜方向の条線状叩目（第11図9～12・14） これらの土器は114をのぞき、いずれも器肉が厚く1.5cm



第9図 土質土器(擂鉢)

以上もあり、かなり大形の土器であると思われる。右斜方向の条線状叩目は粗く深い、各条線の間隔は密でない。また、焼成は他の土器に比してやや軟質である。富山県中新川郡日石寺裏山経塚・石川県金沢市小坂1号墳・新潟県柏崎市上越井川の経塚などの甕形土器に施された、右斜方向の条線状叩目とは本質的に異っている。

平行の条線状叩目（第11図15～23・第12図1・2・5・9・10） 条線状叩目が横位に施される一群で、叩目縫合部で稜を生じ、やや羽状気味になる土器である。しかし、平行の条線状叩目は、器面の位置によって羽状と組み合わされる場合もある。例えば、第12図2・5は頸部に近接する位置に平行の叩目を施し、体部は羽状の叩目となる。

平行の条線状叩目にも、1cm幅に4条程度の細い叩目を有する第11図16・22、1cm幅に2条の太い叩目をもつ第11図23がある。一般的には、1cm幅に3条の条線状叩目を有する土器が量的に多い。第11図20は肩部に「大」の字をヘラ書したものである。第12図10は甕形土器の口縁部で、口径の割に器高の高い土器となろう。口縁が外反し口唇部は外そぎとなり、肩部の張った形態で頸部下半から平行叩目を施している。第12図9は大形広口の甕と考えられるもので、短い頸部で口縁は直角に外方に折れる。頸部下半は条線状叩目である。

羽状の条線状叩目（第11図13・第12図3・4・6～8） 条線状叩目が右斜方向と左斜方向に交互に施され、叩目の縫合部が羽状となり稜をもつ土器である。第12図8は器面が面取り風となり、条線の長さは約4cmである。条線状叩目は1cmに3条付され、平行の叩目と近似している。羽状の叩目では、器内面に指頭状の調整痕を有する場合が多い。

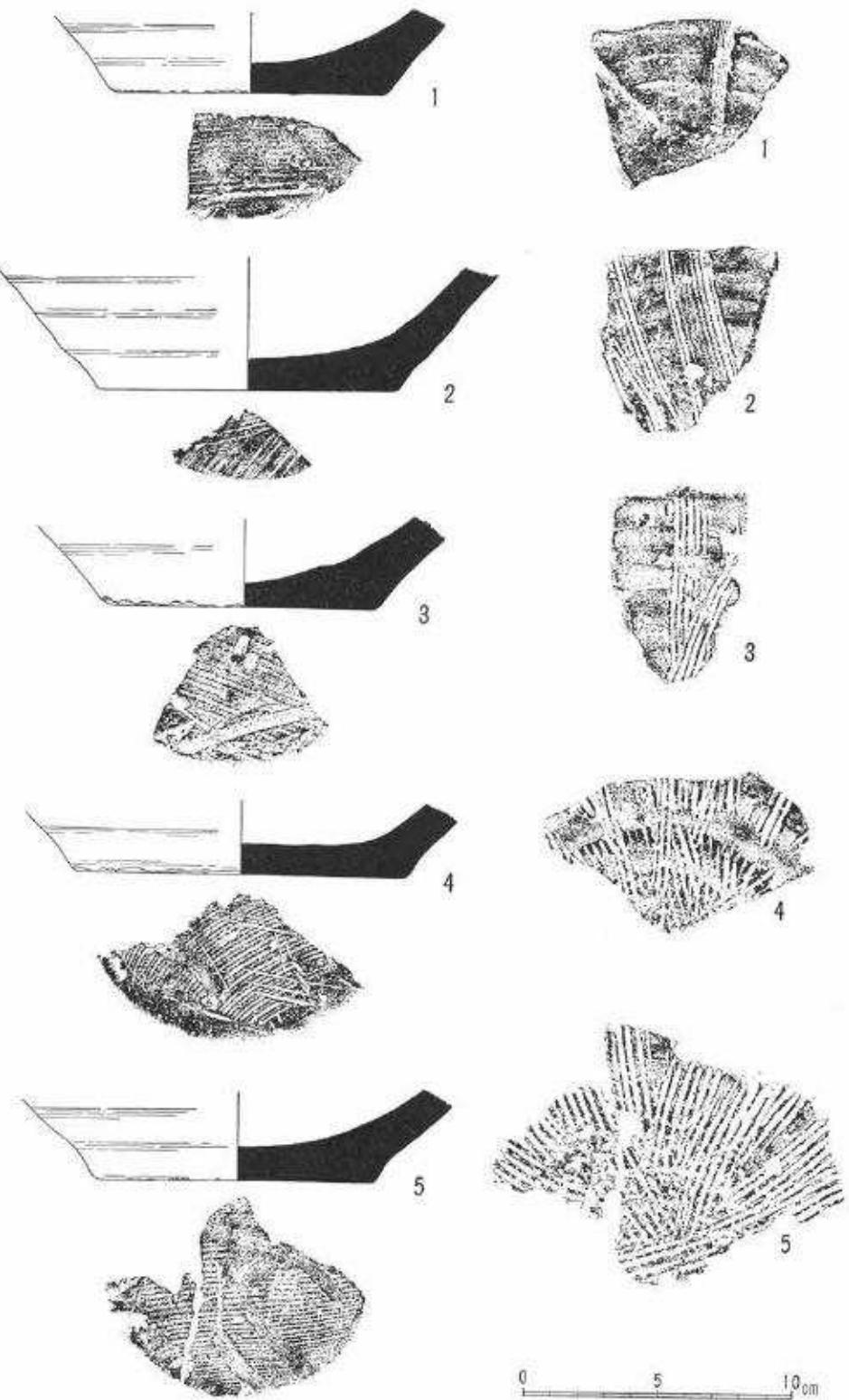
第12図11（図版第34図28）の甕形土器は前者の灰色または黝灰色の土器と異なり、茶褐色を呈し、胎土は淡褐色で白色の砂粒を含んでいる。口縁の縁帶部がN字状を呈し、肩の張る甕形土器と考えられる。この縁帶部がN字状となる中世陶器は、常滑・越前・加賀古陶などにもみられるもので、県内でも北蒲原郡笛神村権兵衛沢の窯址から近似した資料が出土している。今後、県内で出土した常滑と称する一群の土器について、在地中世窯跡との関係で再検討する必要があろう。（関 雅之）

- 註 1 昭和47年発掘調査、調査結果は本報告書に掲載  
2 本間嘉晴・椎名仙卓「佐渡小木半島周辺の考古学的調査」（『南佐渡』新潟県教育委員会）昭和33年  
3 中川成夫・小出義治・甘楠健「古志郡山本村間野窯址発掘調査報告」越佐研究第13集 昭和33年  
4 稲崎彰一『北陸の古陶』五島美術館  
5 本間嘉晴・計良勝範「粟島の考古」（『粟島』新潟県教育委員会）昭和48年  
6 石田茂作「越中日石寺裏山経塚」考古学雑誌第42巻4号 昭和32年  
7 吉岡康暢「金沢市小坂第1号古墳の調査」石川考古学研究会誌第13号 昭和45年  
8 金子拓男「新潟県柏崎市上越井川の経塚」越佐研究第22集 昭和40年  
9 「南加賀の陶質土器『加賀古陶』」北陸大谷高校紀要5 昭和45年  
10 中川成夫他「笛神村権兵衛沢窯址の調査」（『水原郷』新潟県教育委員会）昭和46年

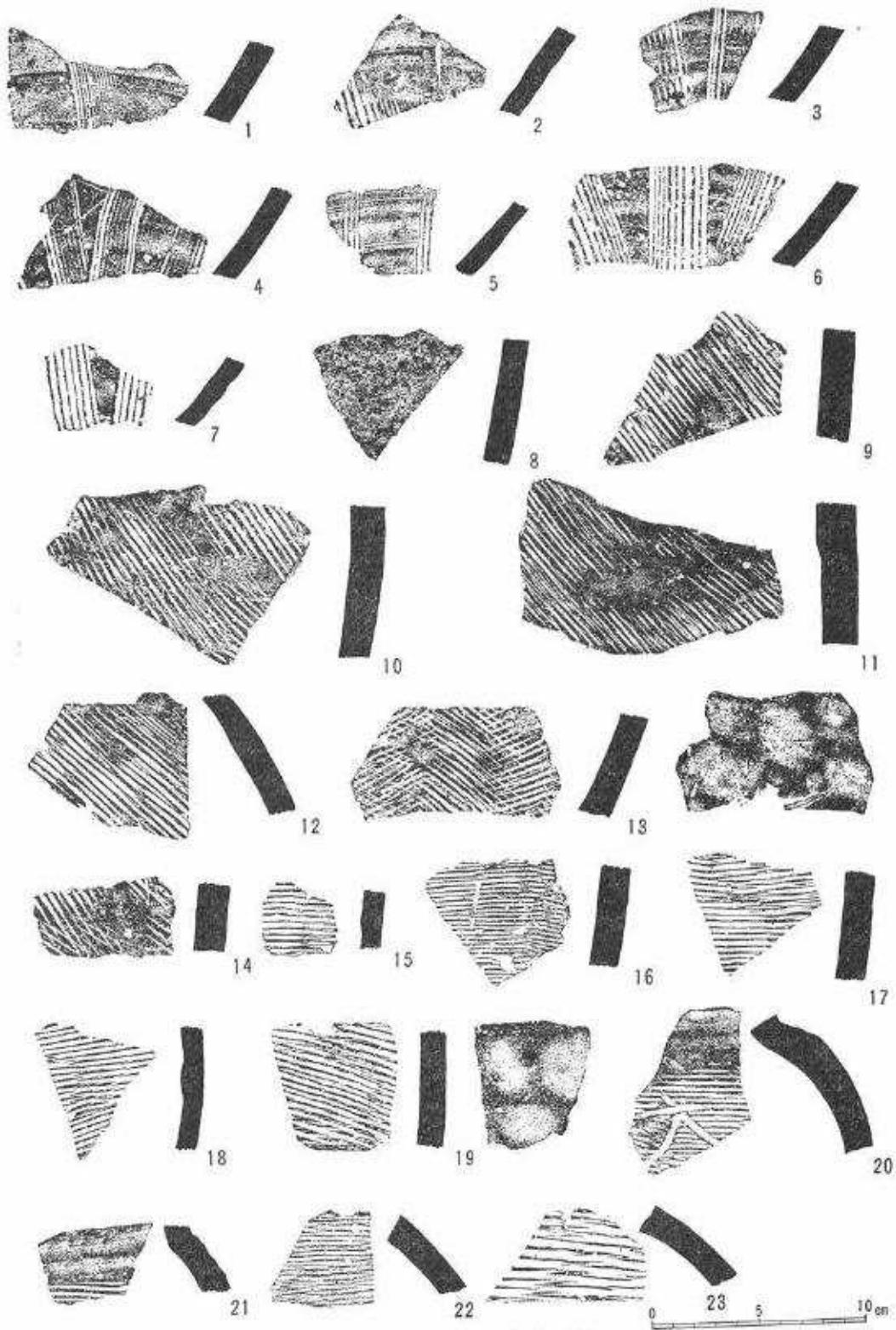
#### 土師質土器（第13図1～9・15～17、図版第35図1～4）

本遺跡出土の土師質土器は総数78片、大部分が皿または杯形を呈するもので、全体の器形を推知し得るものは12個体分である。この土器は器形の特色から4種に大別することができる。

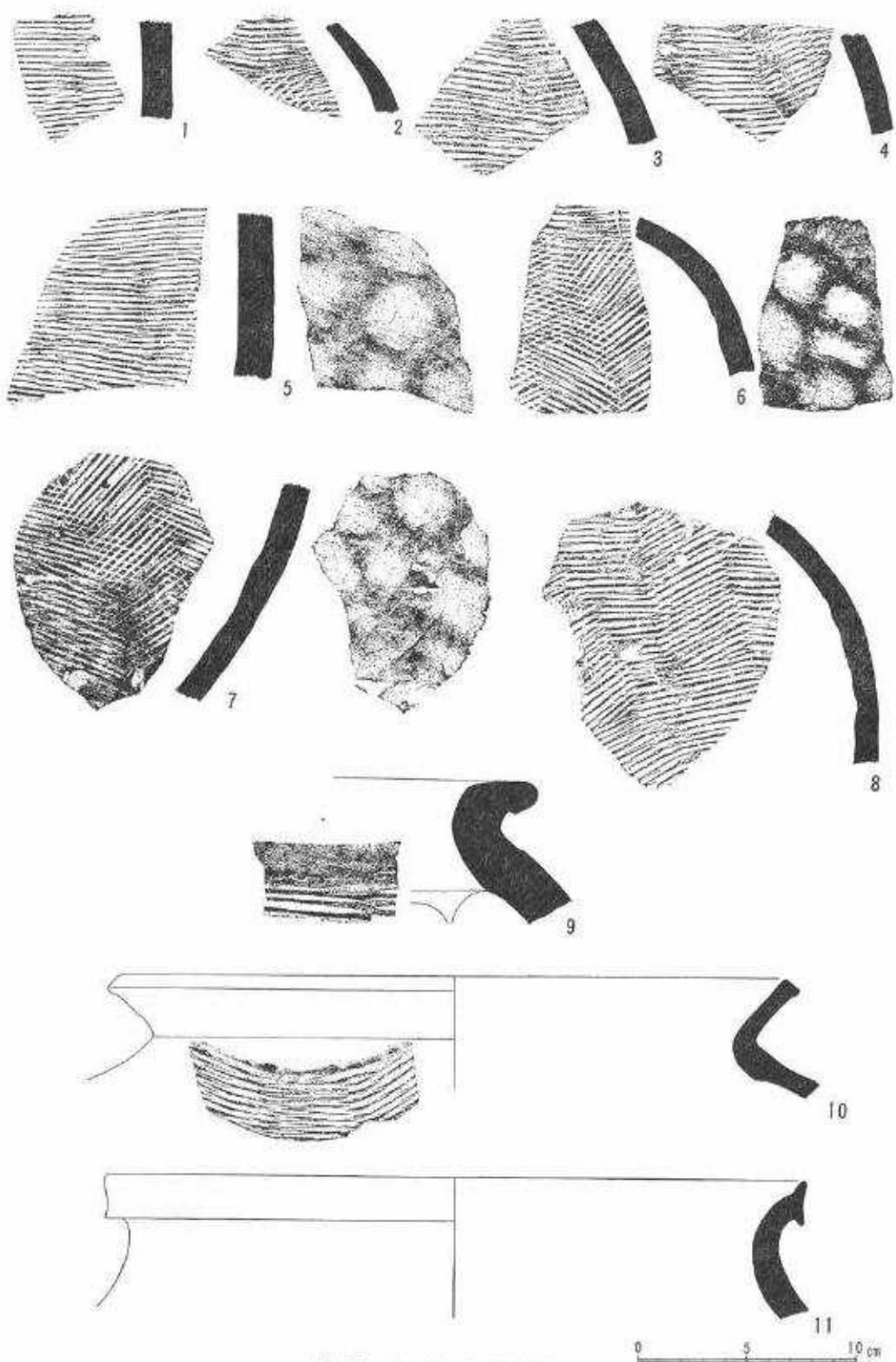
第1類（第13図1～3） 口径は平均11cm、器高2cmの浅い皿で、口縁部が短く直立状に立上る特色をもち、底部は緩やかな曲線を呈する。成形はやや粗雑な手捏手法で、内面にスス状の付着物が認め



第10図 陶質土器(擦鉢)



第11圖 陶質土器(擂鉢・甕)



第12圖 陶質土器(甕)

られる。

第2類(第13図4~6) 口径は第1類土器と同じく11cm前後、器高は2.5cmでやや高い。本類の特色は口縁部が強く外方に開き、底部は緩やかな丸底状を呈し、口辺部と体部の接合境に段状の棱を有するものである。この頸部の棱は器体の下半部、すなわち、器高の下半分の部分に稜線が位置している。第1類土器に比べてやや丁寧な製作手法をとり、手捏成形後に器面を刷毛状工具で横なで仕上げをしている。

第3類(第13図7~8) 本類土器は小形壺(盤形)とでも称すべきもので、口径は前者に比してやや大きく平均12cm、器高3.5~4cmである。口辺部が漏斗状に開き、口唇部が短く直立状に立上って、第1類土器に近似した口唇形態をもつ。第13図8は粗雑な成形で、手捏のままの器面凹凸を残し、丸底になるものと考えられる。

第4類(第13図9) 形態的には第3類と近似しているが口縁部の立上りを異にし、器面が刷毛目によって成形され、胎土も精選されている。

第13図15~17は壺または碗形土器の底部で、糸切痕を有する平底である。第1類~第3類土器は丸底状底部の形態をとる一群で、この平底と接合し得るものは第4類以外にはない。しかし、第1類~第4類がすべての器形を代表し得るものではない以上、一応資料のみを提示しておきたい。

#### 舶載磁器(第13図10~14・18、巻首カラー図版)

本遺跡出土の舶載磁器は青磁と青白磁で9点あるが、完形品はない。これらはすべて中国産のもので、青磁は浙江省竜泉窯の製品とみられる。

青磁(第13図10~14・18) 出土した青磁は8点、その中で器形を推知できるものが6点、すべて碗または小形鉢である。磁胎は淡灰色を呈し、微細な気泡を含んでいる。青磁釉の色調は第13図13・18が暗オリーブ色で、他は翠青色を呈する。11は器外面、12は器面内外に貫入が認められ、10~14は素弁蓮花文を施したもので、蓮花文の中線は鏽につくられている。18は青磁鉢の底部で、高台の径4.6cm、高台の高さ9.7mmを計る。内側の見込みは平らで、立上りの境には浅い沈線を付し、内面には暗オリーブ色の青磁釉がかけられている。高台の部分には青磁釉がなく、ねずみ色の磁胎のままである。高台の内部は竈によるロクロ成形で、中央部に円錐状の成形突起ができている。

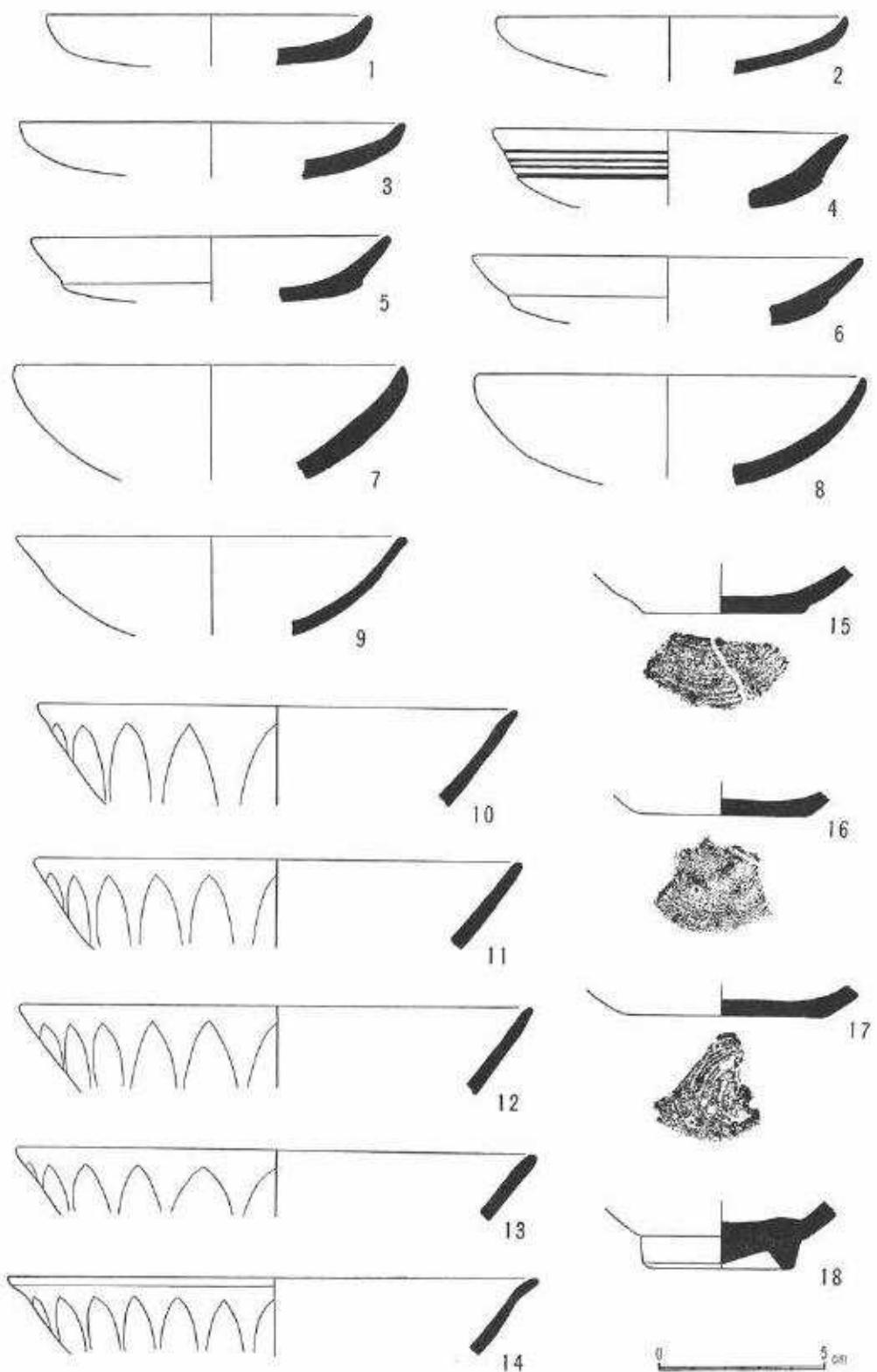
青白磁 本遺跡出土で明確なものは1点しかない。磁胎は淡灰色で、微細な気泡を含む点では青磁と共通している。釉色は乳白色にやや青味を帯び、釉面はくすんでいるがつやがある。俗に下手影青と称するものであろう。

#### その他の磁器(図版第35図6・7)

染付の皿及び碗の破片が約12点出土しているが、いずれも九州産の近世磁器片であろう。(関 雅之)

## 2 土 製 品

土鍤(第15図1~3、図版第35図8~10) 本遺跡から3個の土鍤が検出されているが、いずれも破片である。土鍤の形態は不整円筒形を呈し、長軸線にそって孔が貫通した管状のものである。成形は粗雑で、表面には手捏の凹凸を残し、土師質で焼成は堅い。第15図1は全長7.5cm、最大幅4cm、孔径は1.2cmを計る。2・3も形態及び大きさの近似した土鍤であると思われる。 (関 雅之)



第13図 土師質土器・青磁

### 3 鉄 製 品

釘（第15図4～6、図版第35図11～13） 鉄製釘は3点出土し、第15図4は現長4.7cm、最大幅1.2cm、厚さ3mmで、一端を折りまげて頭部を作出し、頭部の形は半円状を呈している。5は頭部及び先端部を欠失しているが、現長6.7cm、最大幅1.4cm、厚さ3.5mmで、頭部を折りまげている。6は先端部のみ欠失しているが、最も良く釘の形態を示すものである。現長7.1cm、最大幅1.2cm、厚さ4.2mmで、頭部は一端をそのまま折りまげ、頭部上面は13.3mm×5.8mmの長方形を呈している。これらはいづれも<sup>(註1)</sup>折頭形の鉄釘であるが、古墳時代及び奈良時代の角釘とは断面形を異にしている。

笠形鉄製品（第15図7、図版第35図14） 第15図7に示した鉄製品は笠形を呈する扁平な鉄板で中央山形の頂上部に一孔を穿っている。長さ5.6cm、下辺から山形頂上まで2cm、厚さ2mm、孔径は3mmである。<sup>(註2)</sup> 栃木県日光二荒山頂より出土した火打鎌と近似した形態を有するが、本資料の用途は定かでない。

鐵鎌（第15図8、図版第35図15） 第15図8に示したものは鐵鎌の残欠で、中茎から刃部にかける一部しか現存していない。中茎と刃部のなす角は120度で、中茎は現長1.6cm、最大幅2cm、厚さ3.6mmである。刃部の幅は現長2.7cm厚さ3.5mmであるが、刃部の大部分を欠失している。この鎌は中茎鎌の形態をもつものである。

（関 雅之）

### 4 錢 貨

本調査において出土した錢貨は第14図に示した皇宋通宝（北宋仁宗 宝元2年、1039年）1枚のみである。遺跡の付近からかつて採集された錢貨として、開元通宝・天聖元宝・聖寧元宝・聖宋元宝などがあり、宋錢が主体をしめている。県内では錢貨が大量に出土した例が多く、見附市中ノ島の場合では14,642枚中、皇宋通宝1,636枚、聖寧元宝1,246枚をかぞえ、この種の宋錢は出土量も多く<sup>(註3)</sup> 全国的な傾向と規を一にしている。（関 雅之）



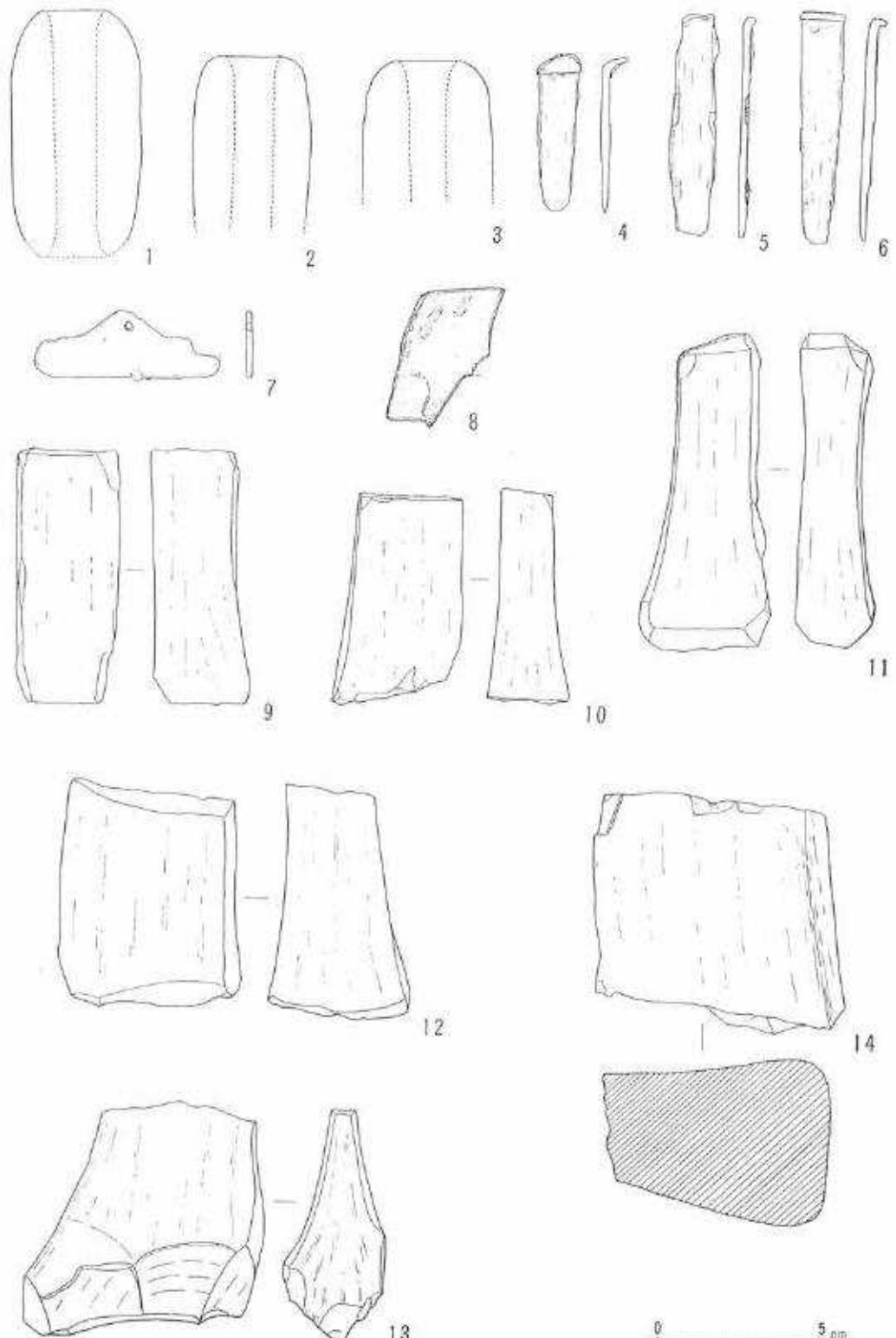
第14図 皇宋通宝(1/1)

### 5 石 製 品

砥石（第15図9～14、図版第35図16～20） 第15図9～12は長方形で、四面の研磨面をもつ角砥石である。これらは小形の凝灰岩質の仕上砥であろう。13は不定形で中央部の磨耗がはげしく、薄くなっている部分で折れている。砥石面の粒子は細かく、仕上砥に属するものであろう。14は安山岩質で表裏二面に研磨面が見られ、荒砥とすべきものであろう。

（関 雅之）

- 註 1 立川昭二 「古代釘の正体」（『鉄』学生社） 昭和41年  
2 福岡達男 「鉄釘接合木棺の復原と鉄釘について」（『大津北郊における古墳群の調査』滋賀県教育委員会）昭和44年  
3 竹島卓一 「國宝法隆寺五重塔修理工事報告」（『法隆寺國宝保存工事報告書』第13冊）昭和30年  
4 『日光男体山一山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店 昭和38年  
5 矢島恭介 「日本出土錢貨一覽」（『日本考古学辞典』東京堂） 昭和37年



第15圖 土 簡・鐵製品・砾 石

0 5 cm

# V 考 察

## 1 陶質土器の年代

釈迦堂遺跡出土の陶質土器は壺・甕・擂鉢の3種を基本形態とし、それに土師質土器・舶載磁器などを加えて日常生活容器群が形成されている。

本遺跡出土の陶質土器は通称駄灰色を呈し、成形は巻上げ手法をとっている。甕形土器は印きしめの技法による条線状叩目を施しているが、内面には青海波文がない。謂所、石川県珠洲古窯の一群と酷似する中世陶器である。

壺形土器は口縁部を欠失しているため、資料の対比が困難であるが、底部径は10cm前後で、この種の壺形土器としては規格品と思われる。小形壺は名立沖合のタラバ、金谷墳墓群などで発見されているが、粟島浦村觀音堂遺跡の無文小形壺と酷似している。<sup>(註1)</sup><sup>(註2)</sup><sup>(註3)</sup>

擂鉢形土器は口縁の形態によりA類とB類に大別したが、珠洲第Ⅲ期にみられる口唇に波状文を施すものは出土していない。擂鉢の擂目を観察すると、A類とB類に擂目施文上の相違点はなく、両者を時間的な差として把握することはできない。名立町沖合のタラバから揚陸された陶質土器群の擂鉢は擂目が米字形に施され、本遺跡のものとは異っている。本遺跡の擂鉢に近似するものとして水原町堀越館跡出土の土器があるが、粟島浦村觀音堂遺跡の擂鉢が最も酷似している。また、擂目の状態は石川県珠洲市正院町出土のものと規を一にしている。<sup>(註4)</sup><sup>(註5)</sup><sup>(註6)</sup>

甕形土器については平行及び羽状の条線状叩目が主体をしめ、叩目縫合部が棱をなして面取り風となる。また、右斜方向の叩目は珠洲の第Ⅰ期にみられるが、本遺跡出土のものは粗く施されて、本質的に異なるものと考えられる。水原町堀越館跡にはこの種の土器が出土している。

さて、釈迦堂遺跡における陶質土器の年代を考える方法として、県内出土の該土器で年代を限定し得る資料を抽出してみよう。柏崎市軽井川出土の錐筒外容器は右斜方向の条線状叩目をもつ甕形土器で、建久8年(1197年)の銘を有する経筒を内蔵していた。やや共存が不明確であるが、卷町金仙寺經塚で出土した寛永2年(1170年)の経筒がある。いずれも12世紀後半(平安末~鎌倉初期)の陶質土器である。平行の条線状叩目を有する甕形土器と共存したものに、 笹神村華報寺の正安元年(1299年)<sup>(註7)</sup>銘の経筒がある。13世紀末頃(鎌倉後半)には平行叩目の甕形土器が多くなっている。十日町市小黒沢で発見された正平8年(1353年)の銘を有する碑の下から出土した骨蔵器が、羽状叩目を面取り風に施した陶質土器で、南北朝期に属するものであろう。

釈迦堂出土遺物に近似している粟島浦村觀音堂遺跡では、五輪塔が接近して出土し、骨蔵器と共に存する可能性が大きい。小野田一九氏はこの五輪塔を南北朝より降るものと考えておられる。水原町堀越館跡については中条文書に応永30年(1423年)の記事がみえ、戦国期まで存続していた館跡である。<sup>(註8)</sup>

これらの諸点から釈迦堂遺跡出土の陶質土器の年代を考えると、甕形土器においては羽状叩目が主体をしめ、底部付近では叩目が線状に引摺いたような施し方をしているものもあり、叩目文が乱雑である。この一群は堀越館跡出土のものに近い。甕形土器には胴上半に波状文を施したものではなく、粟

島浦村観音堂の無文壺に近く、時代が降るものと考えられる。擂鉢は擂目が粗く深目に施されており、施文の特徴から珠洲焼後半（珠洲第IV期）の時期と対比される。即ち、本遺跡の陶質土器は南北朝頃かそれよりやや降り、室町時代の中頃（15世紀頃）に属するものと推考される。（関 雅之）

- 註 1 室岡 博 「領域地方の海と海底・海浜遺跡」上越市立総合博物館教養選書第1篇 昭和47年  
2 室岡博・寺村光晴 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古 7 昭和37年  
3 木間嘉晴・計良勝範 「栗島の考古」（『栗島』新潟県教育委員会）昭和47年  
4 浜岡賢太郎他 「窯業一北陸」日本の考古学・歴史時代上 昭和42年  
5 中川成夫他 「水原郷の遺跡・遺物」（『水原郷』新潟県教育委員会）昭和46年  
6 五島美術館 「北陸の古陶」図86  
7 金子拓男 「新潟県柏崎市上輕井川の経塚」越佐研究第22集 昭和40年  
8 川上貞雄 「正安元年在銘経筒の出土」水原郷土誌料第5集 昭和48年  
9 中川成夫 「十日町市小黒沢発見の正平在銘碑について」越佐研究第20集 昭和38年  
10 小野田一九 「栗島の石造遺物」（『栗島』新潟県教育委員会）昭和47年

## 2 新潟県における珠洲焼

石川県の珠洲市南部に成立した珠洲古窯址群は、須恵器の伝統的な巻上げ・叩きしめ手法をとり、還元焰焼成によって無釉の雑器を生産していた。この珠洲焼については柏崎彰一・浜岡賢太郎・吉岡康暢の諸氏によって研究が進められ、編年の大要も明らかにされている。

近年、新潟県においても珠洲焼に対する関心が高まっているが、珠洲古窯址の詳細な調査報告が少ないため、足踏状態を呈している。

ここでは珠洲焼と限定せず、須恵器の伝統的な焼成・成形技法を有する中世陶器を、珠洲系陶質土器という名称で呼ぶこととする。この珠洲系陶質土器が珠洲焼そのものである場合もあり、また、県内地窯の発見によって2分されることもあり得ると考えている。

さて、県内における珠洲系陶質土器の発見例を整理すると、その内容から (1)壺と擂鉢または片口の組み合された状態で出土する骨蔵器、(2)前者と同じ組み合せで出土する経筒外容器、(3)城館・屋敷跡などの生活址から出土する例、(4)窓中から発見されるものの4種に大別される。この大別は比較的発見頻度の高いもので分けたが、その他として錢甕及び伝世品として現在でも使用されているものなどの例もある。

(註1) (註2) (註3)  
(1)の例としては柿崎町金谷・上越市善光寺浜・栗島浦村観音堂の中世墓址群が代表的である。(2)としては柏崎市軽井川・見附市小栗山・巻町金仙寺・笛神村華報寺・神林村里本庄など類例が多い。(3)は上越市御館・下田村五十嵐館・水原町掘越館などから出土している。(4)は特殊な例で名立町沖合タラバ・能生町徳合崎沖・寺泊沖合タラバ・岩船沖合などがある。これらは珠洲系陶質土器発見の一端であり、集成すればかなりの数になるものと考えている。特に(1)・(2)・(4)で指摘した遺跡の陶質土器は、石川県の珠洲焼そのものと考えて誤りないものが多い。

県内における珠洲系陶質土器の分布をみると、北は岩船地方の栗島にまで至り、山間部では塩沢町大御堂経塚（註8）から石川県長瀧経塚の四耳壺と酷似する経筒外容器が出土し、ほぼ全県にわたって分布す

るものと考えられる。

山形県でも中世墳墓から条線状印目を有する須恵器系骨蔵器が出土し、中には珠洲焼と考えられるものもある。また、青森県の前田野目窯跡における、古代～中世土器群のあり方なども問題となろう。

珠洲焼の分布について吉岡康暢氏は「越前・越後などの遠隔地で出土する珠洲焼に酷似した陶質土器の全て珠洲古窯の製品と考えることは、その生産規模に照らした場合早計である」とされ、また反面、出土地が「能登半島につらなる中世の海港付近であることも看過できない」と指摘しておられる。今後、新潟県においても、在地中世古窯の調査研究を進める必要性を痛感している。（関 雅之）

- 註 1 室岡博・寺村光晴 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古7 昭和37年  
2 室岡 博 「頸城地方の海と海底・海底遺跡」上越市立総合博物館教養講書第1篇 昭和47年  
3 本間嘉信・計良勝範 「栗島の考古」（『栗島』新潟県教育委員会） 昭和47年  
4 『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会 昭和41年  
5 金子拓男 「五十嵐小文治館発掘調査報告書」下田村教育委員会 昭和48年  
6 註2と同じ  
7 寺村光晴・久我勇 「寺泊町のおいたち」  
8 細矢菊治 「先史時代から中世まで—南魚沼郡の歴史」 昭和47年  
9 酒井忠一 「鶴岡市三瀬地内積石塚二例」庄内考古学第11号 昭和47年  
10 板野秀一 「津軽・前田野目窯跡」 昭和44年  
11 吉岡康暢 「珠洲古窯について」（『北陸の古陶』五島美術館）

### 3 中世における土師質土器

土師器の概念規定については種々の議論がなされてきたが、土師部の作った土器と言う伝統的な名称は捨てられ、古墳時代の素燒土器という考え方がある。しかし、土器自体の胎土焼成・成形技法などから見れば、古墳時代以後の土師質土器と器形及びその構成をのぞけば、質的な差違はない。本遺跡出土の土師質土器は中世の遺物群に伴出したものであるが、土師器と性質上の相違はない。

県内でも中世土師質土器が話題となりはじめたのは、上越市御館遺跡の発掘調査からである。しかし、該土器が具体的な形で取上げられたことはなく、下田村五十嵐館跡の調査報告において、実測図をのせ證明皿であることを指摘された。県内では中世墓址・経塚・館跡の発掘調査が進められているが、陶磁器・陶質土器などに在地生産品はわずかしかない。この中にあって、土師質土器は手捏粗製の日常雑器として、時代及び地域的な特徴を如何なる形で示しているか考えてみたい。

本遺跡出土の土師質土器を、その器形の特徴から第1類～第4類に大別した。第1類～第3類は共に丸底または丸底風の底部になるもので、第1類は口縁部が短く直立状に立上る浅い皿で、スヌの付着などから證明皿と考えられる。これに酷似する土器は石川県金沢市小坂第1号墳の中世墳墓遺構から出土して、室町前期（14世紀前半頃）の珠洲焼骨蔵器に伴している。第2類は口縁が強く外方に開き、口辺と体部の接合部に段状の稜を有する。該土器と同様、体部に稜を有する皿形土器は石川県金沢市普正寺遺跡・金沢市大場遺跡からも検出され、いずれも口径10cm内外、器高2cm位で本土器と近似している。県内でも第1類に近いものとして下田村五十嵐館跡でも注目され、用途は證明皿であろう。第3類土器はやや深めの土器であるが、口縁立上り部の特徴は第1類と規を一にするものであ

り、時間的にも同一のものであろう。

中世の燈明皿については松戸市大谷口小金城跡でも出土し、<sup>(註6)</sup> 広島県草戸千軒町遺跡では第2類のものと近似する土器が出土している。<sup>(註7)</sup>

以上の如く、本遺跡出土の土師質土器は、陶質土器・陶磁器類と共に存して出土し、時代的には中世後半の室町時代と考えられるが、更に細部にわたる時代判定はできない。また器形面では新潟県のみならず、他地域と共通性を有しているが、資料不足である。今後の資料増加を待って検討したい。

(関 雅之)

- 注 1 「弥生式土器と土師器の境界線(1)」青年考古学協議会連絡紙第2 昭和30年  
小出義治 「佐渡に於ける後期弥生式文化の限界」国学院雑誌第56巻第2号 昭和30年  
2 「御道跡緊急調査経過報告」新潟県教育委員会 昭和41年  
3 金子拓男 「五十嵐小文治館発掘調査報告書」下田村教育委員会 昭和48年  
4 吉岡康鶴 「金沢市小坂第1号墳の調査」石川考古学研究会誌第13号 昭和45年  
5 「普正寺」石川考古学研究会 昭和45年  
6 「松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告」松戸市教育委員会 昭和45年  
7 「草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報」広島県教育委員会 昭和47年

#### 4 狹迦堂遺跡の性格

本遺跡から出土した遺物をみると、日常什器としての陶磁器、燈明皿としての土師質土器、砥石、鎌、土鍤などの生活用具が主体をしめている。即ち、本遺跡は墳墓などの特殊な遺跡ではなく、中世後半(15世紀頃)における生活址であると考えられる。しかし、生活址にも種々の内容・形態があり、如何なる生活形態を本遺跡が有したものか連断はできないが、良質の舶載青磁を出土している点から一般庶民の生活址ではなかろう。ここで県内における舶載青磁の出土例をあげると、上越市春日山・御館、下田村五十嵐館、黒崎町木場城、黒崎町諸立城、木原町堀越館、中条町江上館、佐和田町河原田城など、中世城館跡からの出土が圧倒的に多い。また、巻町下和納庵寺の如く、寺院跡からも舶載青磁が出土している。狹迦堂遺跡が城館または寺院に關係あるものか、明確な証拠を把握するまでには至っていない。しかし、まったく両者を否定する根拠もない。例へば本遺跡付近で、天保年間に狹迦誕生仏が出土しているが、庵寺跡から誕生仏が出土した報告例もある。また、黒崎町においては諸立城・的場館の如く自然堤防上に館跡が所在する場合が多く、すでに煙滅しているが付近に館が存在したことも推測される。

天正年間(16世紀後半)に入ると、当地に木場城(位置については諸説あり)が築かれ、新発田氏に対抗する上杉氏の重要な拠点となり、両者は軍船をくり出して、新潟港をめぐって抗争を繰返している。即ち、遺跡をとりまく本地域一帯は、すでに木場城が置れる歴史的な要地があったものと考えて誤りないであろう。

本地域は潟湖を経て西川・信濃川につらなり日本海航路と結ぶ地理的位置にある。また、後背の内陸部と結ぶ中間地帯にあり、本遺跡が港湾的な集落としての性格を有したものかもしれない。

(関 雅之)

南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告

## I 序 説

半ノ木遺跡は昭和46年北陸高速自動車道の建設計画に伴う埋蔵文化財の予備調査を玉木哲、金子拓男、中島栄一の諸氏が行った際、南蒲原郡栄村大字岡野新田に新しく発見された遺跡で、昭和47年北陸高速自動車道（長岡～黒崎間）の法線発表により同年県文化行政課職員が数回にわたり現地踏査を行った。その際、現地での遺物の採集はできなかったが、昭和3年の耕地整理、昭和23年の排水路工事、耕作などでそうとう量の土師器、須恵器類が出土していることがわかり、川野正夫氏所蔵の遺物を見ることができた。

発掘調査は土地買収の遅れや、農作物の収穫の時期などにより、第一次、第二次発掘調査と分けざるを得なくなった。発掘調査は日本道路公団より新潟県が委託され、新潟県教育委員会が実施した。

第一次発掘調査は昭和47年8月2日～8月13日まで実施した。調査地区の中央部に位置する畑地約420m<sup>2</sup>で、地主による土取りの計画があったために期日を早め第一次調査として実施した。調査は畑地全面に3×3mのグリットを組み、発掘調査を開始した。耕作のため一部攪乱している部分もあったが、第3層以下は攪乱も少なく遺物の出土状態も良く、土師器塊、長胴甕、須恵器杯、甕などが発見された。8月6日0～5グリットで幅約20cm、深さ約10～15cmの溝が発見され、8月7日にはM～6グリットで幅約20cm、深さ5～10cmの溝が発見された。調査はこれらの溝の追跡を中心に行い、ほぼ東西に走ることが確認された。第1号溝附近にはピットが数個発見され、このうち第10号ピットでは壺が落ち込んだ状態で一個発見された。このように第一次調査は溝状遺構とピット、土師器、須恵器などの発見で8月13日をもって終了した。

第二次発掘調査は畑地と水田の約10,000m<sup>2</sup>で、稲、野菜の収穫後である昭和47年11月6日～12月20日まで実施した。冬期間に入ったために雨が多く、水田は約20cm位の水をかぶり、40cm位掘ると水が湧きだした。南側部分の一段高い水田は攪乱もなく、11月12日F-3、D-4、D-8、D-10グリットで落ち込みが発見された。D-10グリットの落ち込みは東側の水田を造成した際埋めたものとわかったが、D-4、D-8グリットの落ち込みは12月11日井戸址であることが判明した。井戸址は素掘りのものと刳り貫き舟を井戸枠としたものとが確認された。素掘りの井戸からは椀、井戸枠を使用してあるものからは土師器、須恵器等が発見された。12月13日素掘りの井戸の断面をとるために掘り下げたところ、もう1基の井戸と、土壤状のピットが発見された。F-3グリットの落ち込みは方形プランを呈し住居址と判断し調査を進めた。西側部分に遺物の集中がみられ、縁釉陶器が発見された。遺物は井戸址、住居址を含む周辺に集中していた。北側の低い水田部分は11月15日から発掘にかかった。開田の際に第3層上部まで削られていたが、以下は攪乱もなく、各グリットから土師器、須恵器が発見された。11月26日に北西に走る幅約1m、深さ約20～30cmの溝が発見された。北側に位置する大きな畑は調査の結果開田の際に土盛りをして畑地としたことがわかり、全面に坪掘りをして放棄した。このように住居址、井戸址、溝状遺構、ピット状遺構、ピット等の遺構、膨大な量の土師器、須恵器などの他、彩釉土器などが発見され多大な成果をあげ調査を終了することができた。

（本間信昭）

この発掘調査の人員構成は次の通りである。

調査担当者	本間嘉晴	(県教育庁文化行政課課長・日本考古学協会員)
調査員	関雅之	(県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
	本間信昭	(県教育庁文化行政課主事)
	家田順一郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	戸根与八郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	駒形敏朗	(県教育庁文化行政課嘱託)
	小松徳一	(栄村公民館嘱託)
	上原甲子郎	(県文化財臨時調査審議委員・日本考古学協会員)
	金子拓男	(県立長岡大手高等学校教諭・日本考古学協会員)
	松井寛	(越後古代研究会会員)
調査補助員	波多野志郎	(立正大学学生)
作業員	半ノ木部落、貝喰新田部落の有志	
協力者	栄村役場	
	栄村教育委員会	
	坂井仁作	(半ノ木区長)
	上林正嗣	(貝喰新田区長)
	坂井幸一	(地主)
	川野喜代治	(地主)
	横山辰司	(地主)
	川野良平	(地主)
	大沢進一郎	(地主)
	川野正夫	(地主)
	川野半治	(地主)
	相川宏	(村立福島中学校校長)
	夏目正一	(村立大面中学校校長)
	中野正剛	(村立福島中学校教諭)
	今井正利	(栄村郷土資料調査会会員)
事務局	柴野達男	(県教育庁文化行政課管理班係長)
	小野栄一	(県教育庁文化行政課管理班主事)
	苅部啓子	(県教育庁文化行政課嘱託)

## II 遺跡の地理的、歴史的環境

### 1 地理的環境（第1図、国版第36図、国版第37図）

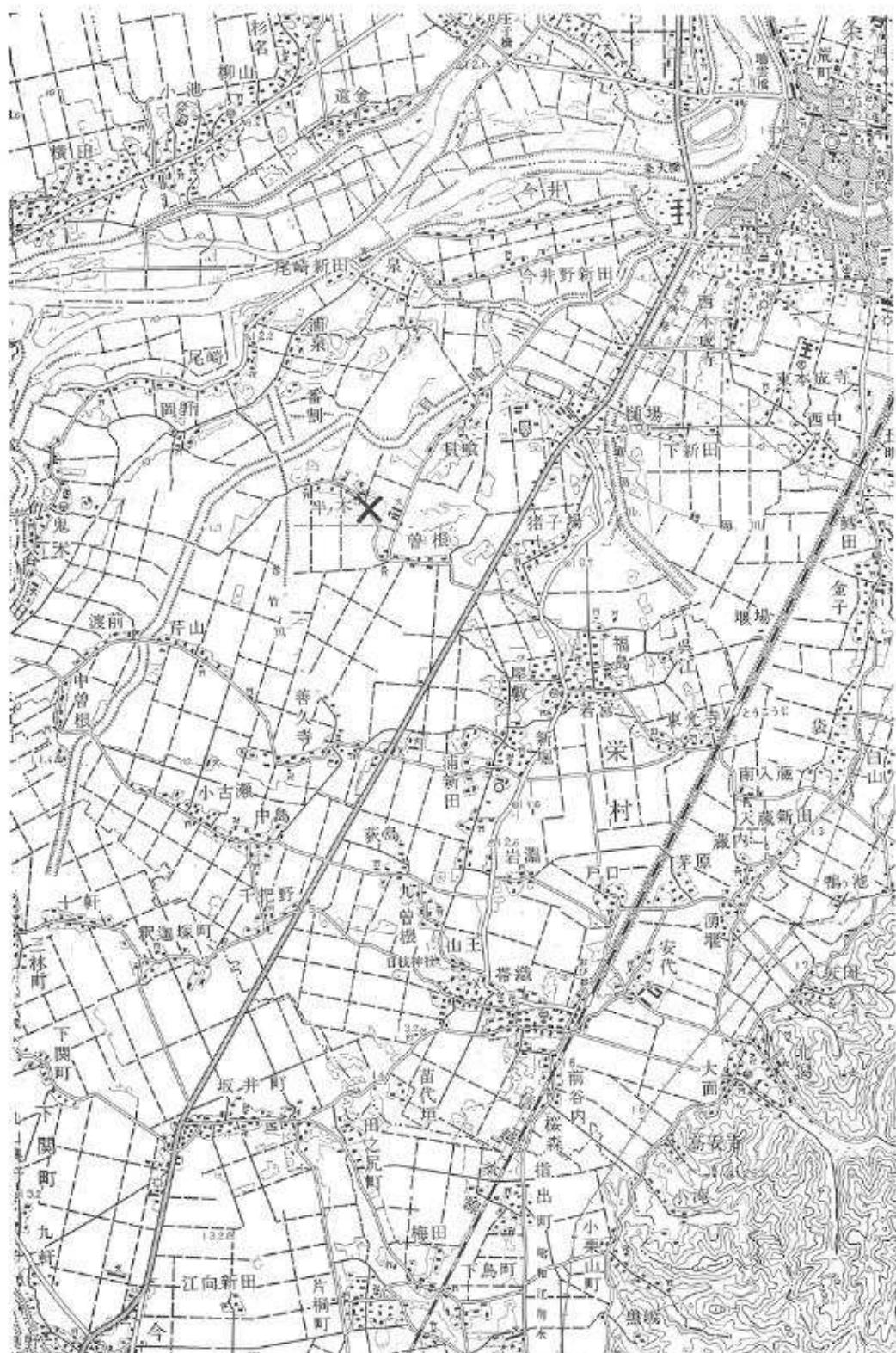
南蒲原郡栄村は蒲原平野の西南、三条市と見附市の間に位置する。信濃川と中ノ口川の分流点より南方2kmの地点に半ノ木部落がある。部落の西方には貝戻川、刈谷田川、信濃川など大小の河川が走り、東方には国道8号線、信越本線が通り、関東地方と新潟県を結ぶ動脈となっている。さらに東方には東部山岳地帯がひかれている。栄村周辺は河川と山にはさまれ、平野部がせまくなり帶状になって長岡方面に続いている。半ノ木部落周辺は大小河川が網の目のように入り、旧河川の自然堤防上に部落が形成されている。半ノ木部落も旧河川の堤防上に形成されており、部落は東西に帶状に続いている。標高は10mと低く、低湿地になっている。そのために雨の多い時期になると周囲の水田が一面湖のようになり、部落が孤立しているようになる。以前は水害も多く、水害用の舟を天井にあげてある家もある。現在は排水路が完備してきているので水の引きも早くなっている。土質は第4紀沖積層に属し、現在では米の高収穫地帯となっている。

### 2 歴史的環境

半ノ木部落南東約5kmの所に吉野屋部落があり、部落北方、越後平野と山地の接觸地縁の小突した台地上に吉野屋遺跡がある。この遺跡は縄文時代中期初頭から縄文時代後期におよぶ土器、石器が発見されている。<sup>(註1)</sup> その他に遺跡の発見はないが、今後の調査によって各時代の遺跡が発見されるものと思う。中世については、大日本地名辞書に「大槻は庄名にして、大面庄と相雜りて、諸村を分統したり、大略三条近傍を大槻庄とし、其東并に南は皆大面庄と云へり」とあるが、日本地理志料九に「國を按するに三条、裏館……帶織、福島……十数邑に亘り大槻莊と称す」と記されているから、福島に含まれる半ノ木は大槻莊に属していたと思われる。隣接地大面莊の地名は「延暦三年(784)十月記」や、いわゆる康平3年(1060)及び寛治3年(1089)の古地図、東鑑に記載があるが大槻莊については東鑑文治2年(1186)条に「越後國大槻莊は院の御領」と記されているのが最初の文献である。院とは後白河院をさす。その後大槻莊は、城氏の支配を経て池大納言頼盛が建久3年(1192)頼朝から賜ったと山吉氏系図にある。のち徳治2年(1307)山吉定明に引継がれ、南北朝時代に入ると南北両派攻防の場となつたが、結果的に北朝方の勝利となり山吉氏の支配が確立した。興国4年(1343)上杉憲頼の領有となつたあと長尾氏、上杉氏の支配を受けた。江戸時代に入り堀氏、松平氏等の統治をへて新発田藩の支配下になり、精農増産政策によって荒廃地の復活、新田の開拓、治水対策などを行った。栄村は新発田藩によって大面組と中ノ島組に分けられたが、半ノ木は当時中ノ島組に入っていた。この頃から栄村は農業村として急速な発展をとげていく。現在の栄村は大面村と福島村が昭和31年合併して成立したものである。

(玉木哲・本間信昭)

註 1 『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告第7集』新潟県 昭和12年



第1図 半ノ木跡遺跡附近の地形図  
(国土地理院「三条」1:50,000原図 昭和46年発行)

(1/5万)

### III グリットの設定と層位

#### 1 グリットの設定（第2図、図版第38図）

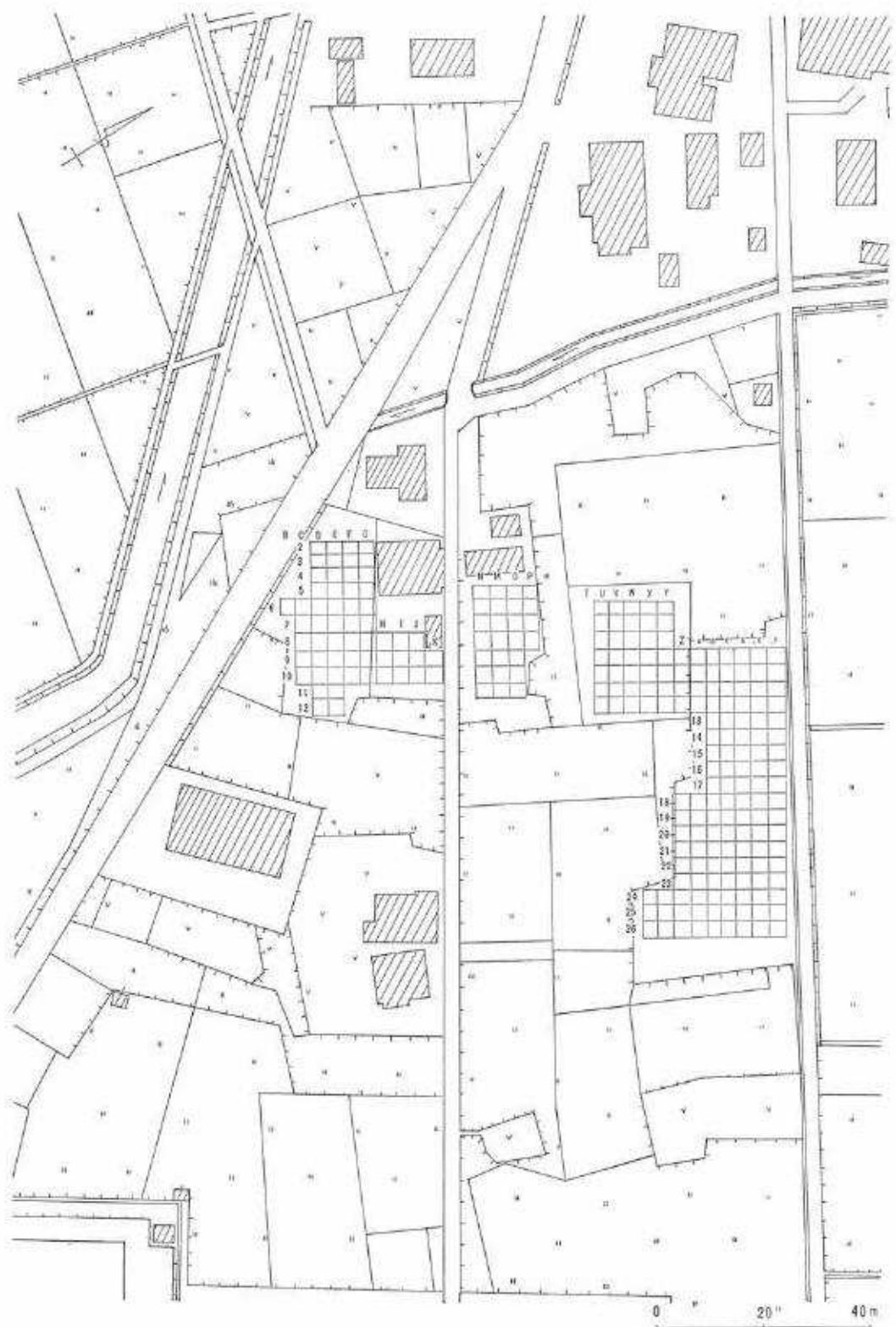
この遺跡は南蒲原郡栄村大字岡野新田に昭和46年に新しく発見された遺跡である。以前耕地整理、用水工事、耕作等の際膨大な量の遺物が発見されている。特に昭和23年発掘地点西側にある用水の工事の際膨大な量の土師器、須恵器が発見されたという。また福島中学校附近の畑地からも土師器、須恵器が発見されたというが、これらのほとんどが廃棄されてしまっていたが、その一部の遺物が川野正夫氏宅に保管されており、調査の折実見することができた。遺物は須恵器の甕と横瓶で、同じようなものが調査地区にもでているとの話によって遺物の出土地点をおさえることができた。発掘地域周辺はすべて耕地整理が終っていたが、さいわいにも調査地域は取り残されていた。したがって耕地の区画、高低もまちまちで、排水もあまり良くないが、一段高い水田と畑地が残っているので、この部分を中心に発掘調査をすることにした。発掘調査予定地区は第2図の如く定めた。

県道と中央を通る農道にはさまれた部分は水田と畑地になっており、この水田と畑は周囲の水田面より約1m余高く、保存状態もよいものと推定された。農道の北側にある畑地も状態の良いものと推定されていたが、土取りの計画があったためにこの部分は第一次発掘調査として8月に行うこととした。この畑地と次の農道の間には二枚の水田と一枚の畑地があり、一枚の水田は低く、水も多いので調査からはずすこととした。次の水田はこの水田より約20cm高く、この水田と農道ぎわの畑地を選んだ。この地域の水田は畑地を削り水田としたもので、附近には部分的に飛び地のように畑地が残っている。発掘調査対象道路法線内にかかるのは以上の水田、畑地でこれらの全面を3×3mのグリットに分け、南西から北東に至るラインをアルファベットにし、北西から南東に至るラインを数字にてグリット名とし、調査該当グリットを第2図の如く決定した。このうちM～Pは土取り計画のために8月2日～13日まで第一次発掘調査として実施し、他の部分は土地買取の流れや、農作物の取り入れの関係で、11月6日～12月20日まで第二次発掘調査として実施した。調査は農作物の収穫時期を待つために水田部分から始め、畑地に移った。どの地点も水が多く、調査は難行が予想された。調査区中一番広い面積をもっていた農道側の畑は結果的に盛土による畑で、数回におよぶ天地がえしが行われていることがわかり、第2図にグリットの混乱をさけるためにアルファベット文字を小さくした。調査地区決定に際し地主の方々、部落の方々にたびたびご参集いただき、案内、地図記入などをさせていただいた。また地元との交渉のいっさいについて、栄村公民館の小松徳一氏のご協力を得た。

#### 2 層 位（第3図、第9図）

発掘調査地区の層位は第3図の如くなり、B～Kラインのグリットでは次のとおりであった。層位についてはB～Kラインの土層を基準とし、井戸址断面の土層を加えた。

第1層 耕作土層で、畑地では茶褐色を呈し、水田では灰褐色を呈する。層の厚さは10～20cmを計る。



第2図 遺跡全測図

第Ⅱ層 黄褐色を呈する土層で、やや土に粘りがある。少量の土師器、須恵器を含む。層の厚さは約10cm前後を計る。

第Ⅲ層 黒褐色を呈す土層で、ややパサパサした感じの土で、土師器、須恵器を含み、遺物包含層となっている。遺物は層の下部に多く発見される。層の厚さは10cm前後を計る。

第Ⅳ層 黄褐色を呈する土層で、上部がやわらかく、下部はよくしまっている。土には粘りがあり、上部に土師器、須恵器を含む。層の厚さは40~50cmを計る。

第5層 黄褐色を呈する粘土層で、細い砂を含んでいる。層の厚さは10~30cmを計る(第9図)。

第6層 橙灰色を呈する粘土層で鉄分を含んでいたために灰色粘土が変色している。層の厚さは10~20cmを計る(第9図)。

第7層 茶褐色を呈する砂層で、鉄分を多く含んでいる。上部と下部では鉄分の含み方が異なり、下部に多く鉄分の浸透がみられる。層の厚さは20~30cmを計る(第9図)。

第8層 橙褐色を呈する粘土層で、砂層は鉄分の浸透で変色している。層の厚さは10cm前後を計る(第9図)。

第9層 灰褐色を呈する粘土層で、第8層と同じく鉄分の浸透によって変色している。層の厚さは15~35cmを計る(第9図)。

第10層 青灰色を呈する粘土層で、粘りが強く、きめが細かい(第9図)。

M~Pラインの畠はB~Kラインとほぼ同様の土層であるが、畠であったことから攪乱部分があった。E-8グリットとO-8グリットとの表土面のレベル差は約15cmであるが、第4層の差は70cmある。第4層は南側から北側に向って強い傾斜を持っているため土層そのものが北側に厚くなっている。

T~Zラインは一段低い水田で、表土面がE-8グリットより60~70cm程低くなっている。

第1層 耕作土で、灰褐色を呈する。層の厚さは約10cmを計る。

第Ⅲ層 黒褐色を呈する土層で、土師器、須恵器を包蔵し、B~Kラインの第Ⅲ層にあたる。5cm前後を計る。

第Ⅳ層 黄褐色を呈する土で、B~Kラインの第Ⅳ層に当る。E-8グリットとのレベル差は80~85cmである。

農道ぎわの畠地は他の地域とは全く層を異にした。

第a層 耕作土で、褐色を呈し、層の厚さは15cm前後を計る。

第b層 暗褐色を呈する土層で、パサパサしている。層の厚さは15~20cmを計る。

第c層 明褐色を呈する土層で、パサパサしている。層の厚さは20~50cmを計る。

第d層 黄褐色を呈する土層で、層の厚さは10cm前後を計る。

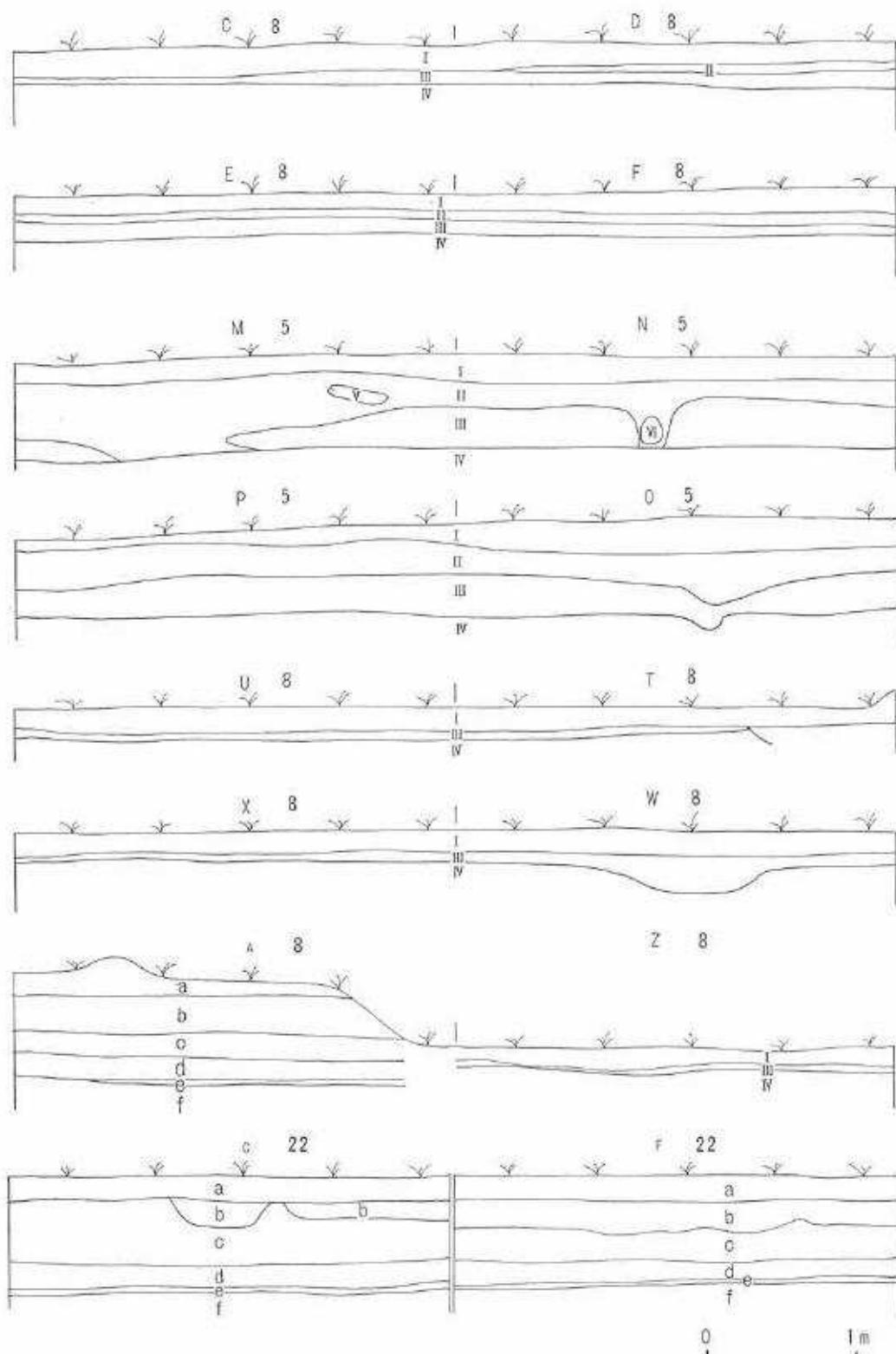
第e層 黒褐色を呈する土層で、層の厚さは5cm前後を計る。

第f層 黄褐色を呈する土層で、層は第Ⅳ層に当る。

この畠は、調査中の聞き込みと坪掘りの結果盛土をしていることが判明した。

以上のごとく土層について述べたが、第Ⅲ層、第Ⅳ層の上部が遺物包含層となっている。

(本間信昭)



第3図 グリット土層断面図

## IV 遺構と遺物

### 1 住居址(第4図)

この遺構は南北5.4m、東西約6.4mの長方形プランと推定され、第Ⅳ層の黄褐色土を15~20cm掘り込んでいる。中には第Ⅲ層と同じ黒褐色土が入り、固く良くしまっている。この遺構の部分は湧水の出が激しいのと雨に降られたことによって中がどろどろになり、検出が難しく、不明な点が多かった。壁は三方はなんとかとらえることができたが、西側はついにとらえることができなかつた。床面も同様で一部についてはそれらしきものをとらえることができたが、全面にわたってはとらえられなかつた。柱穴、内部の施設についてもついにとらえることができなかつた。このような状態でこの遺構が住居址であるとは速断できない点もあったが、一応住居址として記述をした。この遺構の中からかなりの量の土師器、須恵器が発見され、特に西側半分に集中していた。その土器群の中央に近い部分で縁釉陶器の大形碗(第5図20)が発見された。遺物は破片が多く、土師器、須恵器の混在率は5:5位で、やや土師器の方が多い。以上住居址について述べてきたが、湧水と雨にたたられて遺構が十分に検出できなかつたために住居址であるか否かで論議があつたことを記しておく。

### 出土遺物

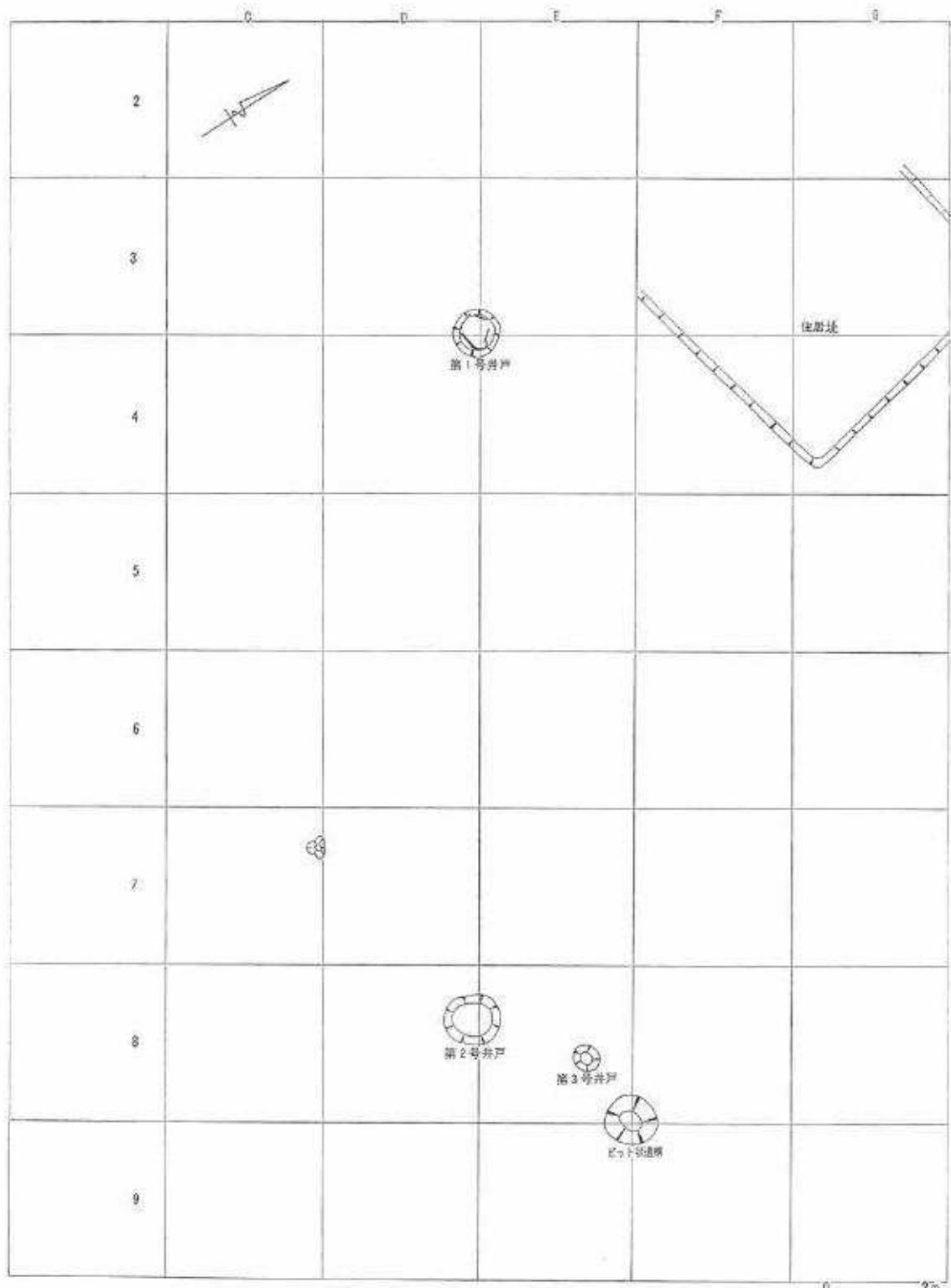
#### 土師器(第5図、第6図)

この遺構からは土師器がそつとう量発見されているが、細片になつてゐるために形状の明らかでないものが多い。胎土は水漉し粘土を使い、器種によって砂、小石を混入している。

碗(第5図1~20) 碗はすべて平底で、杯形を呈するものと深いものがある。底部は糸切り底で、底径は不揃いであるが6cm位のものが多い。口径は13cm位のもの、16cm位のもの、20cm位のものと3種に大別できる。胎土は水漉し粘土を使い粘土塊からのロクロ引き出しも考えられる。

第1類(第5図1~3) この一群は浅く杯形を呈するもので、1は口径10cm、器高2.5cm、底径5cmを計り、赤褐色を呈し、水漉しの粘土を用いている。底部は糸切り底で、中央部がわずかに上り口縁部は丸みをもつて立ちあがる。2もほぼ同じ器形を呈するものであろう。3は口径8.5cm、器高3.5cm、底径6.5cmを計り、赤褐色を呈し、水漉し粘土を用いている。これらはいずれも胎土に細砂を含み、焼成は不良で、やわらかく、吸水性がある。

第2類(第5図4~9) この一群は深い碗で、口径で3種にわけられる。14cm前後のもの4、5 16cm前後のもの6~8、20cmのもの9で底部が欠損している。4、6は口縁が直斜状に開き、口径13cm、16cmを計る。4は赤褐色を呈し、胎土に砂を含む。6は内黒の土器で、褐色を呈し、胎土に細砂を少量混入させている。いずれも焼成は悪くやわらかく、吸水性がある。5は口径14cmで口縁部が内側に立ち上る。内黒の土器で、内面は横方向の鎌磨きで、外側も口縁部約1cmの幅で鎌磨をしている。口縁部は1cm位の幅で黒くなっている。焼成は良く、堅い。7~9は丸みをもつて立ち上った口縁部が口唇部で外反するもので、7は口径16cmを計る内黒の土器で、茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。焼成は悪く、やわらかく、吸水性がある。8は口径20cmを計る内黒の土器で、内外面をきれ



第4図 住居址・井戸・ピット状遺構全測図

いに磨いている。灰褐色を呈し、焼成は悪く、やわらかい。9は口径17cmを計る内黒の土器で、内外面をていねいに磨いている。褐色を呈し、焼成は比較的良い。これらはいずれも水漉し粘土を使用し、細砂、砂を混入させて用いている。

10~19は底部で、10~12は平底になっている。13~17はやや上げ底になり、14は中心部が薄く、15は中心部が厚く、上っている。17~19は底部にわずかな段のつくもので、17は段が高い。これら底部はすべて糸切り底で、磨滅して見えなくなっているものもある。14は内黒の土器である。

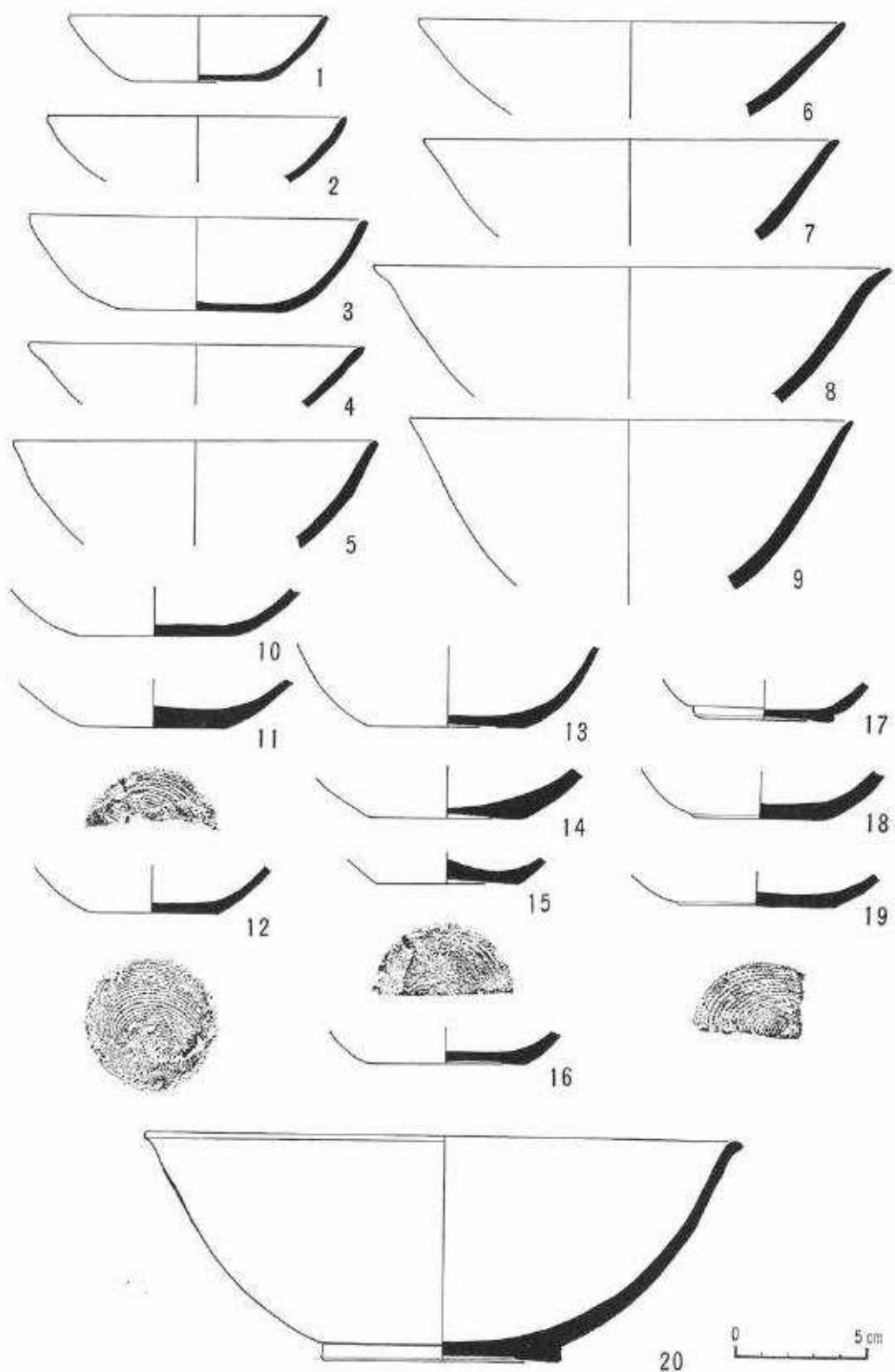
#### 緑釉陶器（第5図20、巻頭カラー図版、図版第46図、図版第49図9）

本遺跡で1点出土した緑釉陶器で、口径22.8cm、器高8.5cm、底径10.2cmを計る大形碗である。器面内外面とも淡黄緑色を呈し、釉が一様に薄くむらなくかけられている。底部は削り加工によるもので、外周を巾広くとり、かるく内側に傾斜をつけ、わずかな段をつけて中心部を削り、やわらかな感じの高台となっている。底部からの立ち上りは、内彎きみに丸みを持って上り、口唇部が外展する。胎土は水漉しの粘土を用い、白色に近い淡褐色を呈している。焼成はやわらかく吸水性がある。釉は低火度の鉛釉を薄く一様にかけ、胎土の白と融合して淡黄緑色を呈している。一部に釉の剥脱があるがみごとな仕上がりとなっている。

緑釉陶器は県内では二例目の発見である。一例は三条市東大崎で以前に発見されている。彩釉陶器も各地で発見され、現在では200例を超えていたと言われている。<sup>(註2)</sup> この遺跡出土のものは愛知県猿投窯跡群の鳴海地区のものである。<sup>(註3)</sup> 鳴海地区には緑釉陶器窯が4基発見されている。<sup>(註4)</sup> したがってこのうちどれかかが、この緑釉陶器を焼いていることになる。本遺跡には他に猿投窯跡群の黒笛地区のものとされる灰釉須恵器が数点発見されているところから、これらのものといっしょに搬入されたのであろう。現在発見されている彩釉陶器は畿内、中部地方に集中されていることから畿内、中部地方に需要が多かったことをものがたる。類似する器形のものをひろってみると、長野県平出遺跡、荒井遺跡、<sup>(註5)</sup><sup>(註6)</sup> 生仁遺跡、里宮遺跡、甲斐国分寺周辺集落址、石川県三浦遺跡、愛知県猿投窯跡、岐阜県虎渓2号窯、<sup>(註7)</sup><sup>(註8)</sup> 京都府平安第2須恵窯址その他に見られる。高台は特徴のあるもので中国浙江省紹興を中心とする越州窯の伝統をひくものである。これら彩釉陶器は地域的な特徴と、遺跡の性格的特徴をそなえている。出土遺跡の多くは寺院址、寺院周辺の集落に集中していることから考えて、彩釉陶器を使用できうる階層は一般人とは異なる階層の人か、集團であったと思われる。時代が進んで入手しやすくなつたとしても一般人までは使用できるものではなかつたはずである。日常什器としては土師器、須恵器、木器などがあり、これらがすべてを支配している。緑釉陶器は、これら日常什器とは別の用途のために入手されたものであろう。

甕（第6図1~9） 甕は細片になっているために全体の器形はわからない。口径15cm未満のもの5・6、20cm未満のもの1・2・4、22cm未満のもの3と口径は3種に分けられる。いずれも水漉しの粘土を使い細砂、砂を多く混入している。焼成はいずれも悪くやわらかい。

第1類（第6図1、2） 口縁部が外反する一群で、1は口径が19.5cmで、頸部は「く」の字に曲がり、口縁部が大きく外反する。胴部はわずかにふくらみをもって底部におりると思われる。器面は褐色を呈し、胎土には砂を含む。2は口径19.5cmで頸部は丸みをもって「く」の字に曲り、口縁部



第5図 住居址出土の土器・縄袖陶器

0 5 cm

が外反する。器面は赤褐色を呈し、胎土に細砂を混入している。焼成はどちらも悪く、やわらかい。

第2類(第6図3, 4) 口縁部が外反し、口唇部が直立する一群で3は口径21.5cmで頸部はゆるやかに曲り、口縁部が外反しながら立ち上る。器面は黄褐色を呈し胎土に細砂を混入している。4は頸部が「く」の字に曲り、口縁部は外反しながら立ち上り、口唇部が内傾ぎみに立つ。頸部には二本の沈線が入っている。胴部はややふくらみをもつてゐる。器面は茶褐色を呈し、胎土には砂を含む。焼成はいずれも悪く、やわらかい。

第3類(第6図5, 6) 口縁部が内彎し、口唇部が丸く外反する一群で、5は口径13cmで頸部が丸みをもつて曲がり、口縁部が内彎し、口唇部が丸く外反する。胴部はやや張りぎみで巻き上げ痕が残る。器面は黒褐色を呈し、胎土に砂を混入している。6は口径15cmで頸部が「く」の字に曲り、口縁部が外反し、口辺部から口唇部にかけて直立する。胴はわずかなふくらみをもつてゐる。黒褐色を呈し、胎土に砂を含む。5は焼成が比較的良好、やや硬質に焼き上っているが6は焼成が悪く、やわらかい。底部は平底で8には糸切り痕がみられる。

場(第6図10~13) 場はこの遺跡では20個体位発見されているが、細片になつてゐるために、形状が不明である。口径は大きく、胎土は甕と同じく砂を混入している。焼成は悪く、やわらかい。

第1類(第6図10) 口径が42cmで頸部が丸みをもつてくびれ口縁部が直斜的に外反し、口唇部が短かく直立する。胴は丸みをもつて底部に至る。器面は黄褐色を呈し、胎土に細砂を混入し、焼成は悪くやわらかい。

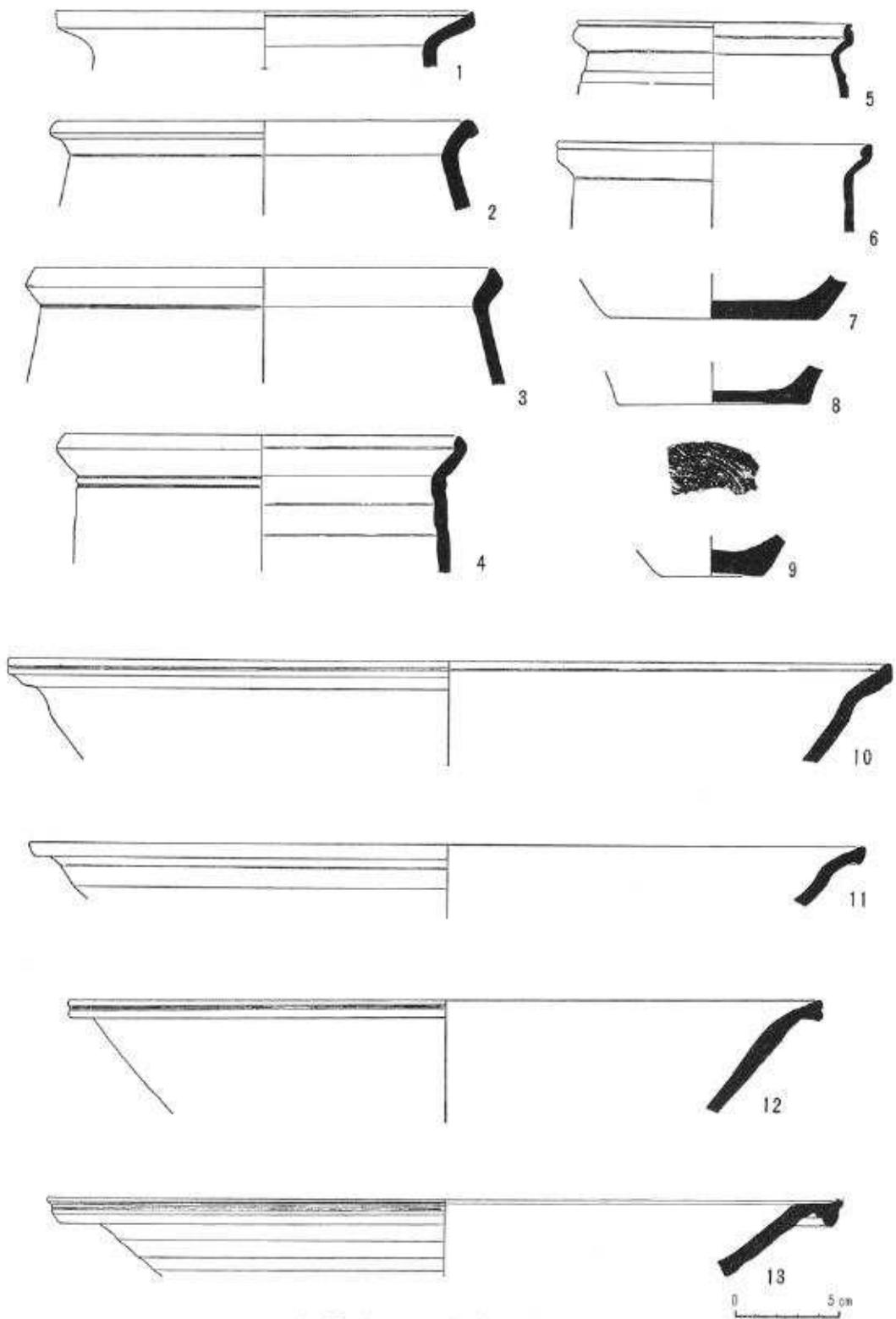
第2類(第6図11, 12) 口縁部が短かく、口辺部先端が上下につきだす一群で、11は口径39.5cmで頸部がわずかに曲り、口縁部は外反する。口辺端は上下につき出している。胴部は丸みをもつて底部に至る。外面は暗褐色を呈し、内面は淡褐色を呈する。胎土には大粒の砂を含む。12は口径35.5cmで口縁部が外反し、口辺部端が上下につき出している。口辺部に一条の横線が入っている。胴部は斜状になり底部に至る。器面は黄褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成はいずれも悪く、やわらかい。

第3類(第6図13) 口径38cmで、口縁部が水平に倒れ、口辺部が上下につき出している。口辺部が装飾的になつてゐる。胴部は斜状になり底部に至る。胴部は柳状のもので整形してゐる。胎土は細砂を含み、褐色を呈する。焼成は比較的良好、ややかたくなつてゐる。

須 惠 器(第7図、第8図) この遺構では壺、蓋、甕が出土した。量的には壺が圧倒的に多く、蓋、甕となっている。いずれも細片になつてゐるものが多く、全体の器形は明らかでない。

壺(第7図1~18、第8図1~9) 壺は平底のものと高台のつくものの2種が出土している。口径には統一性がみられるが底径は不揃いである。胎土は水漉し粘土を使い平底のものは砂の混入が少ないので、高台付きのものはいくらか多くなつてゐる。

第一類(第7図1~18) 平底を持つ壺の一群で、口径12.5cm未満のもの1~6, 11, 12, 13, 18、口径13.5cm未満のもの8, 9, 14, 15, 17、口径14cm未満のもの7, 10の三群に分けられる。胎土は水漉し粘土を使い、粘土組の巻き上げで器形を作り、水挽きで整形し、築起しの手法をとつてゐる。底部から口辺部にかけて内彎ぎみに立ちあがるもの1, 2, 5, 7, 9, 10, 17, 18で、1,



第6図 住居址出土の土器

2は口唇部が尖りぎみになっている。5, 9は口唇部のふくらみがみられる。17, 18は口唇部内側に一条の沈線がみられる。3, 4, 6, 8は底部から直線状にたちあがるもので3, 4は口唇部が厚い。11, 15は底部から直斜状に立ち上り、口縁部が外反するもので、15は底部の角をとっている。いずれも内外面に巻き上げ痕が残り、水挽きで整形、調整を行っている。底部はすべて鎧起しをとっている。器面は青灰色を呈し、焼成は良いが軟調である。

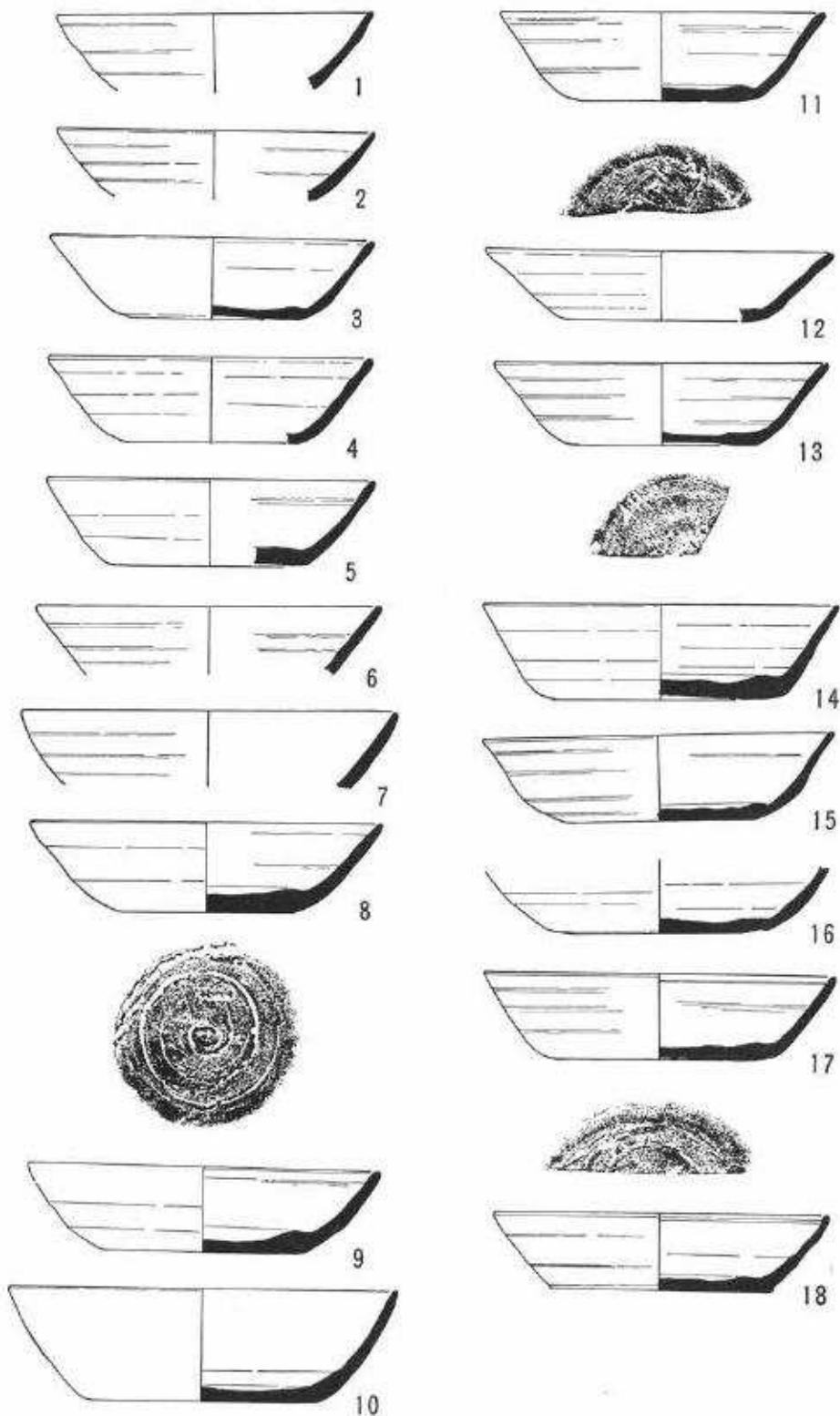
第2類(第8図1~9) 高台付きの壺の一群で、1は直斜状に上方に開くもので、口辺部であるものは1点しかない。底部は鎧起し後の付高台で、4は高台が角形を呈し、外傾する。2, 3, 5~7は高台が直立または内傾し、角形を呈する。5~7は底部を先端に凹線を有する。8, 9は高台が外傾し、角が丸くなっている。8は高台が内削ぎになっている。いずれも高台をつけた段階で底部をかんたんに調整している。これら高台付きの一群は胎土に砂を含み、器面は青灰色、黒灰色を呈し、焼成は良く、堅牢である。

蓋(第8図10~14) 蓋は破片でしかうかがえないが、10, 11は天井部が下がり、肩が張り、肩から口辺部にかけて直斜状に下る。口唇部は丸く内側にまきこんでいる。12は口唇部が丸く内側にまきこみ、口辺部から肩部にかけて弓状に上る。13は肩に丸みがあり、天井部が薄くなっている。つまみは中央部が凹んだもので、後付けになっている。14は大形のつまみで中央部が凹んでいる。いずれも焼成は良く、堅牢である。作りは粘土紐の巻き上げで、範等で整形している。

甕(第8図15~17) 甕は2種あり、頸部が短かくすぐ口縁部となるものと頸部が「く」の字に曲り立ち上るものがある。胎土には砂を含み、青灰色、灰黑色を呈する。焼成は良く、堅牢である。

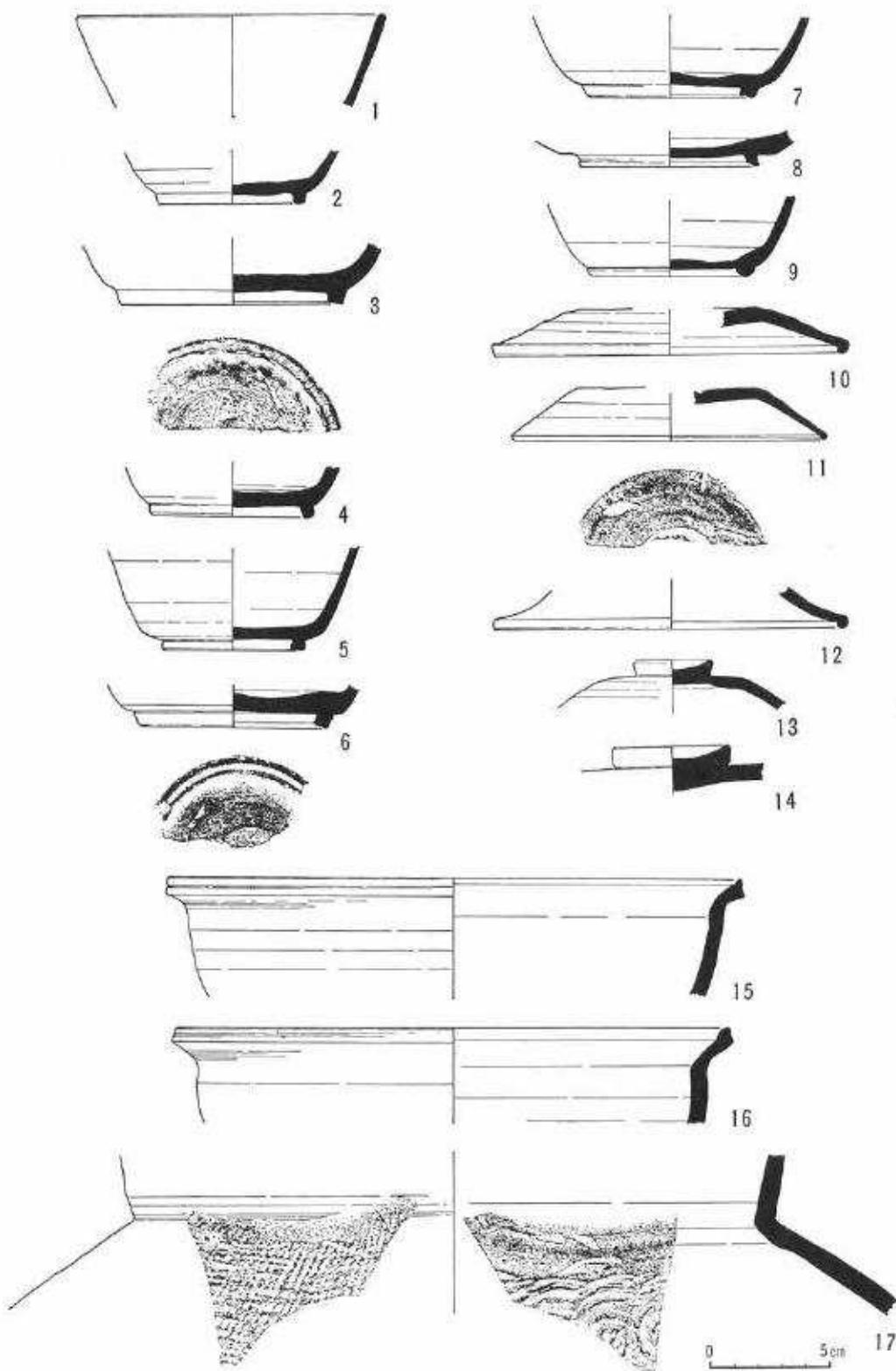
第一類(第8図15, 16) 頸部が「く」の字に曲り、すぐ口縁となるもので、15は頸部からすぐ短い口縁部となるもので、口唇部が直立してつき出す。胴部はわずかな丸みをもってふくらんでいる。16は頸部が丸みをもって曲り、直斜状に開く口縁部を持ち、口唇部が直立する。胴部は丸みをもって下がる。いずれも巻き上げ痕が残り、胴部最大径は口径より小さい。青灰色を呈し、焼成は良く堅牢である。

第2類(第8図17) 頸部が「く」の字に曲り、外反ぎみに直立するもので、胴部は丸く大きくふくらみ器肉はうすい。胴部には外面に格子目印文が施され、内面には条線のある青海波印文が施されている。灰黑色を呈し、焼成は良く、堅牢である。胎土には砂を含む。



第7図 住居址出土の須恵器

(1/2.5)



第8図 住居址出土の須恵器

- 註 1 「正倉院の陶器」日本経済新聞社 昭和46年  
上原甲子郎、榎崎彰一氏の御教示による。
- 2 「正倉院の陶器」には185例が記されている。榎崎彰一氏の御教示による。
- 3 榎崎彰一氏の御教示による。名古屋大学考古学資料室蔵の猿投窓跡群鳴海地区の綠釉陶器に類似する。
- 4 榎崎彰一『猿投窓』陶器全集31 平凡社 昭和45年
- 5 榎崎彰一氏の御教示による。胎土に黒いしまが入っており、灰白色に近く、中に黒い張母の粒がまじっている。
- 6 『平出』平出遺跡調査会、朝日新聞社 昭和30年
- 7 『国鉄復線化等関係地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』長野県教育委員会 昭和44年
- 8 註7と同じ
- 9 註7と同じ
- 10 註7と同じ
- 11 『甲斐国国分寺周辺聚落址の調査』山梨県教育委員会 昭和47年
- 12 『加賀三浦遺跡の研究』石川県考古学会 昭和42年
- 13 註4と同じ  
榎崎彰一『猿投山須恵器の編年』世界陶磁全集1 昭和36年
- 14 『平尾遺跡、虎渕山遺跡』多治見市教育委員会 昭和45年
- 15 坂東善平「高台による土器年代考定2」古代学研究30 昭和43年
- 16 奥田直栄、榎崎彰一氏の御教示による。鳴海窯出土の綠釉陶器に類似のものがある。名古屋大学蔵  
加藤唐九郎『日本陶器大辞典』淡光社 昭和48年  
「中国の陶磁」出光美術館

## 2 井 戸 (第4図, 第9図, 図版第39図~図版第43図)

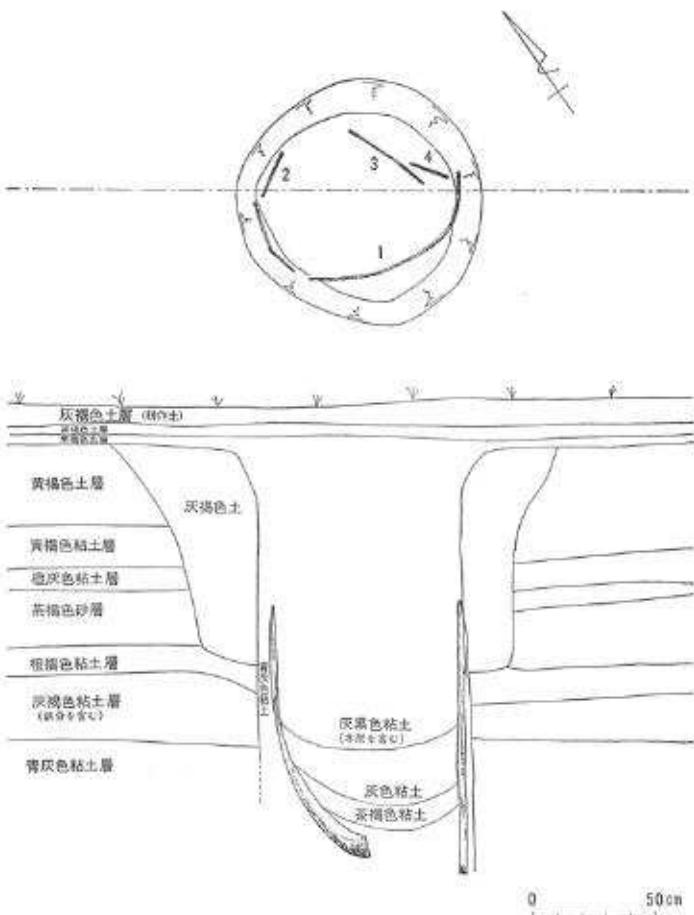
この遺跡から3基の井戸が発見された。1基は丸木舟を切断し井戸枠としたもので、2基は素掘りのものである。

### 第1号井戸 (第4図, 第9図, 第29図, 図版第39図~図版第41図)

第1号井戸は西側水田で発見されたもので、口径約1mの円形を呈し、第4層~第8層にかけて大きくラッパ状に約90cm掘り込み、その下をほぼ垂直に掘り込んでいる。その中に丸木舟を切断し、井戸枠として入れてある。(第29図) 舟胴部を南側におき、舳先の部分を下に向か、北側においてある。舳先部分は曲っているために青灰色粘土につきささり、内側の方にせり出している。枠に使用した舟の胴部分は舟底から舷までつながっていたが、舳先部分は数ヶ所で縦に割れていた。舳先先端は井戸枠に使用するために割り取っている。井戸枠と穴の間には青灰色粘土をつめ、枠を固定させている。上部のラッパ状に掘った部分は灰褐色土を入れ補修している。井戸枠内の土層の堆積は第9図の如くなり、上部は掘り取ってしまったためにわからぬが、上部に黒褐色土が入っていた。井戸枠内からかなりの遺物が発見されている。また井戸枠側に密着して遺物が発見されている。(図版第40図) 井戸枠の現存部分の測定値は次の通りである(第29図)。

- 1 長さ 113cm, 幅96cm, 外高39cm, 内高33cm
- 2 長さ 118cm, 幅33cm, 舳先までの高さ19cm
- 3 長さ 121cm, 幅46cm, 舳先までの高さ23cm
- 4 長さ 113cm, 幅19cm, 舳先までの高さ10cm

船は胴体部を鋸で切断されており、舷には数個の柄穴がある。使用当時はもっと長かったのであるが、上部が腐れてしまっているので、との長さはわからない。材質は杉である。この井戸も他の井戸も水の出が良く、1時間位で



第9図 第1号井戸

水が井戸いっぱいになる。地元の人によると水質は良いとの話である。図版第39図上の写真左側の木は、調査中土が崩れ出しきさえに使ったもので、井戸とは関係のないものである。

#### 第2号井戸（第4図、第10図、図版第42図）

第2号井戸は1号井戸の南側に発見されたもので、第3層から掘り込んでいる。第3層から第4層にかけてラッパ状に掘り込み、その下は青灰色粘土層までほぼ垂直に掘り込んでいる。口径は110cm、底径75cmの円形を呈する井戸で、井戸枠は使用されていない。底から木製椀が1個出土した。

#### 第3号井戸（第12図、図版第43図）

第3号井戸は、第2号井戸断面で記録するために掘り下げたとき発見されたもので、上部第5層までの状態は不明である。第6層では口径50cmで円形を呈し、青灰色粘土層までやや内傾して掘り下げている。底径は25cmで南側が少し高くなっている。中の堆積は上が灰褐色土で木炭、遺物を含んでいる。下が赤褐色土、底に灰色粘土

が入っていた。

#### 出土遺物（第12図）

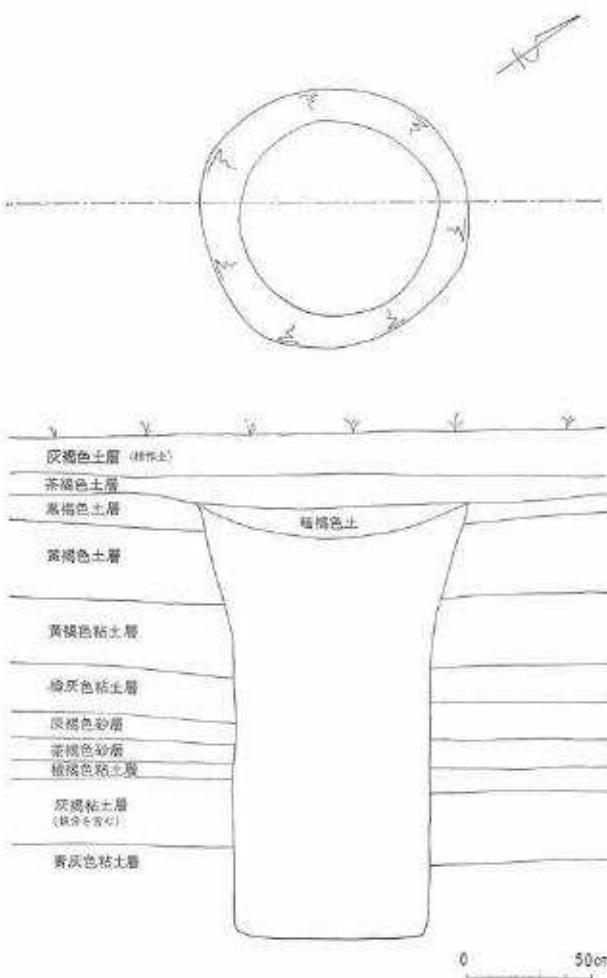
##### 第1号井戸（第12図1～18）

第1号井戸からは土師器、須恵器、灰釉須恵器、墨書き土器が出土している。

##### 土師器（第12図1～3）

椀（第12図1～3） 1、2は内黒の椀で、底径はほぼ同じで、口径もほぼ同じ位と推定される。1は口径13cm、底径5.5cm、器高5.4mmで、底部から口縁部にかけて、内彎きみにたちあがる。2は底径5.5cmで形態はほぼ同じである。胎土は水漉し粘土に細砂を混入している。外面は灰褐色を呈し、焼成はよく、堅い。内面は真黒色で光沢がある。器面は回転を使い硬いもので削られ、よく整形されているが器肉は厚い。3は淡褐色を呈し、焼成は悪くやわらかい。

須恵器（第12図4～18） 須恵器は壺・蓋・壺・灰釉皿が出土している。細片になっているため全体の形



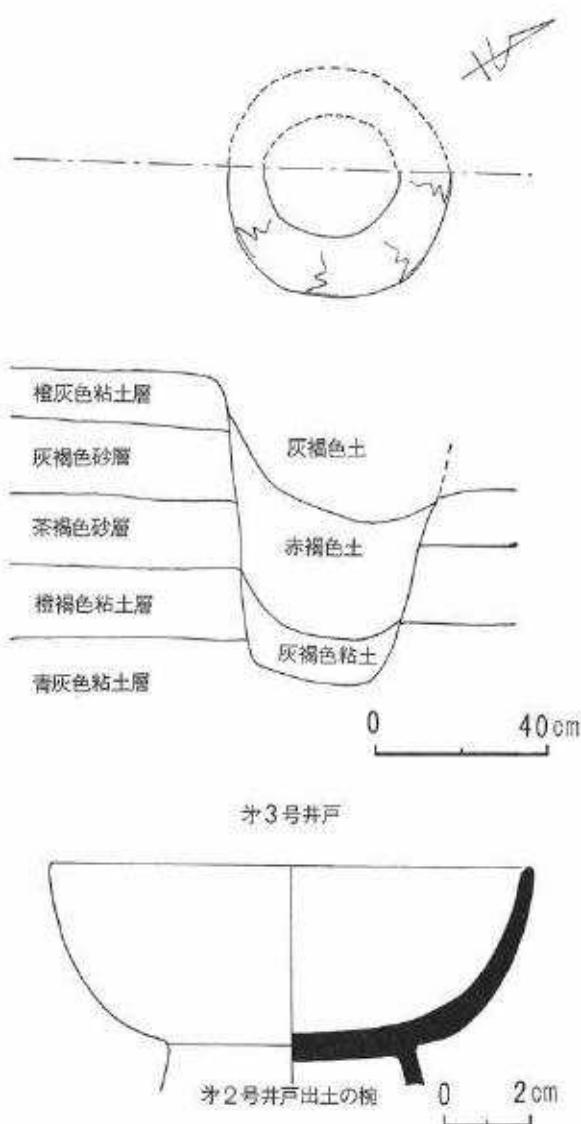
第10図 第2号井戸

状をとらえることはできない。

环（第12図4～11） 环は平底と高台付のものがある。

第1類（第12図4～9） 平底をもつ环で、口径12cmのもの4・5、12.5cmのもの6で、底径は不揃いである。いずれも底部から直斜状に立ち上り、4、6は口唇部が内傾する。胎土は水漉し粘土に細砂を少量混入している。青灰色を呈し、焼成はあまり良くない。器面には巻き上げ痕が残り、底部は窓起しである。7～9も窓起しの底部である。

第2類（第12図10～11） 高台の付く环で、10は口径15.5cmを計る。直斜状に外方に開き、巻き上げ痕を残す。灰黑色を呈し、焼成は良く、堅牢である。11は底径16cmで内傾した高台を持つ。青灰色を呈し、焼成は良く、堅牢である。



第11図 第3号井戸・第2号井戸出土の楕

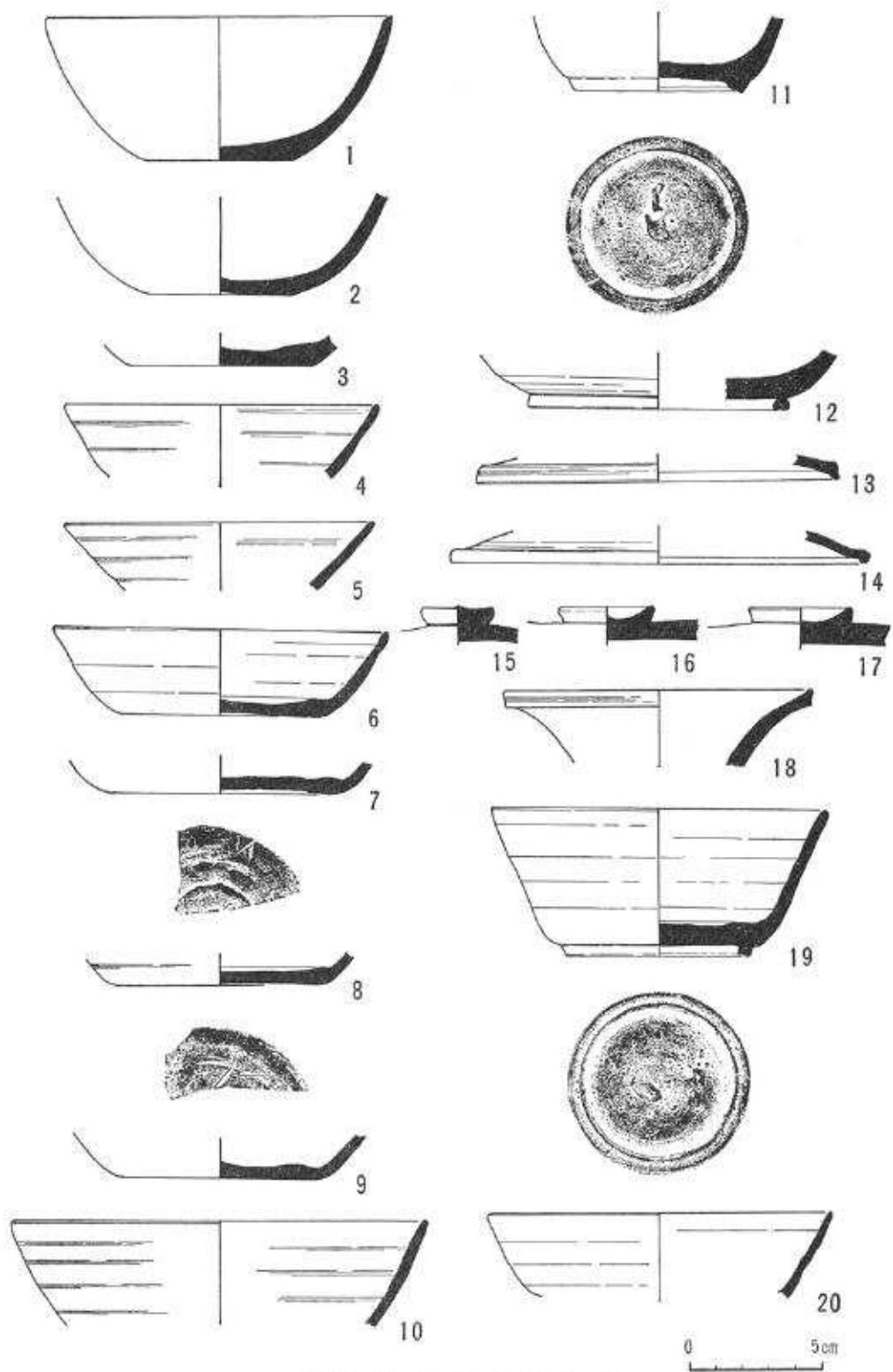
灰釉皿（第12図12、巻頭カラー図版、図版第49図10） 灰釉のかかった皿で、灰釉はきれいで透明な緑色を呈し、内面のみに施釉されているし、器面は、回転を使って削り整形し、低い断面ハート形の高台が付いている。胎土は灰白色を呈し砂を含んでいる。猿投窯黒鉢地区のもので焼成は良く、堅牢である。

蓋（第12図13～17） 蓋は破片でしか発見されず全体の器形はとらえられない。

第1類（第12図13） 口径13.5cmで口唇部が嘴状を呈し、胎土は水こし粘土に砂を混入させている。焼成は良く、堅牢である。

第2類（第12図14） 口径15.5cmで、口唇部が丸く内傾にまくもので、胎土には水漉し粘土に砂に混入させている。焼成は良く、堅牢である。

つまりは15のように扁平な宝珠形を呈すものと、16、17のように中央が凹むものがある。18は中心部が少しつきていている。いずれも焼成は良く、堅牢である。

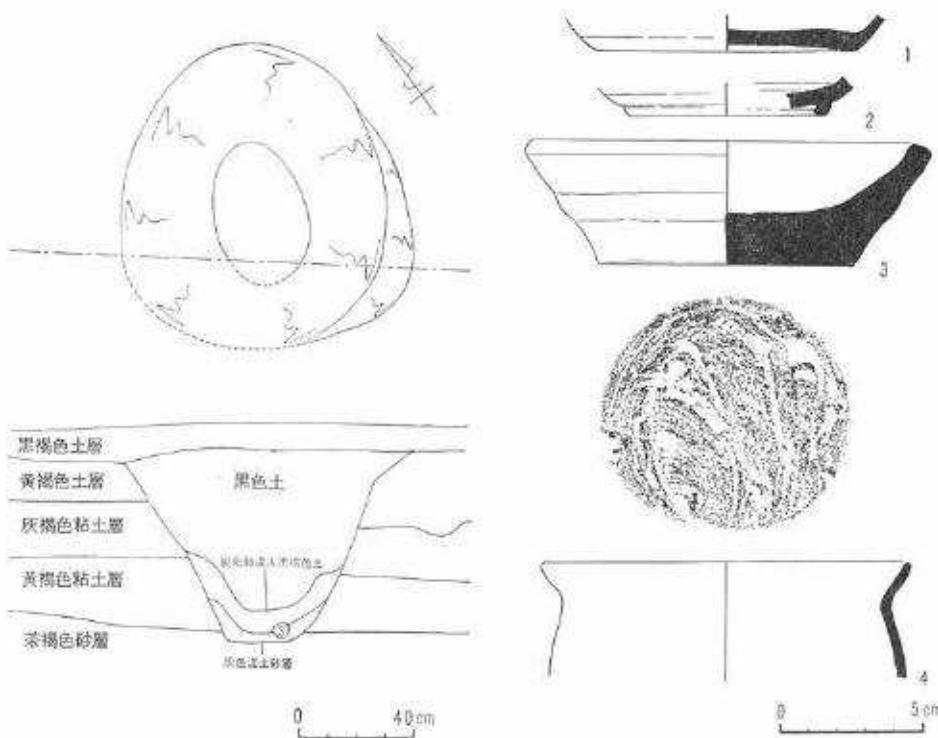


第12図 井戸出土の土器

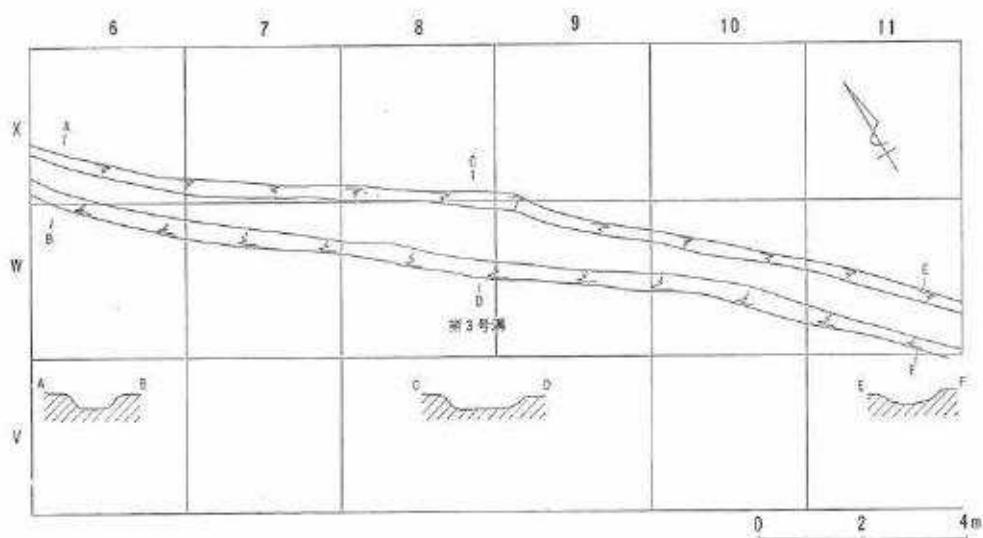
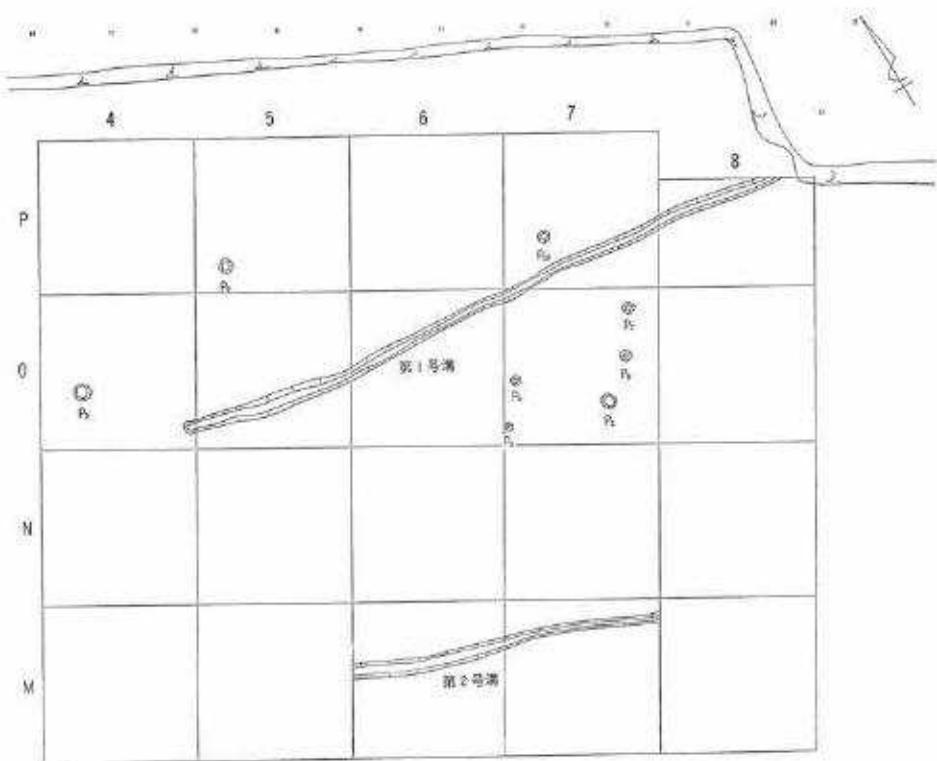
壺(第12図18) 口径11.5cmを計る壺の口縁部で、ラッパ状に外展し、口唇部が直立する。灰黒色を呈し、焼成は堅牢である。

第2号井戸木椀(第11図) 第2号井戸から木椀が1個出土した。口径11cm、椀内高3.8cm、口唇部器肉3mm、腰部器肉7mmを計る。器肉は全体に薄く、発達したロクロ技術がうかがえる。高台は先端が欠損しているが、そう高いものではなく、現残しているくらいであろう。木地はブナ材を使っている。漆は紅ガラを混入した朱漆で、下塗りはせず木地にじかに塗っている。これらから考えて江戸時代後半のもので、高級品とはいえないようである。

第3号井戸出土の須恵器(第12図19・20) 第3号井戸から須恵器壺が2個出土した。いずれも高台付きのもので、19は口径12.5cm、底径7cm、器高5.5cmを計る。厚い底部から直斜状に立ち上り、器面には巻き上げ痕が残る。高台は角形で内傾している。灰黒色を呈し、胎土には砂を含む。焼成は良く、堅牢である。20は口径13cmで、薄手である。器面には巻き上げ痕が残る。灰黒色を呈し、焼成も良く、堅牢である。



第13図 ピット状遺構・ピット状遺構出土の須恵器(1, 2)  
第10号ピット出土の土師器(3)・第2号溝状遺構出土の土師器(4)



第14図 第1号溝・第2号溝・ピット・第3号溝

### 3 ピット状遺構(第4図、第13図、図版第43図)

第3号井戸のそばに発見されたもので、口径約1m、変形の円形を呈するピットで、第4層から茶褐色砂層にかけて掘り込んでいる。ピット内は黒色土が入り、下層に灰色混土砂層が入っている。下層と中間層の間に小礫が1個あった。

出土遺物(第13図1、2) 平底と高台の付く杯の底部で、1は少し上げ底になっている。水漉しの粘土を使い、焼成はよく、堅牢である。2は高台のつくるもので、底部が傾斜している。高台は丸く内傾している。青灰色を呈し、堅牢である。

第10ピット(第14図、図版第43図) 第10ピットは第1号溝のそばで発見されたもので、口径22cm、深さ20cmの円形のピットで黒褐色土が入っており、中から土師器環が落ち込んだ状態で裏返しになつて出土した。

出土遺物(第13図3) 口径14cm、底径9cm、器高4.3cmを計る土師器で器肉が厚く、底部から口縁にかけて外面は直斜状に立上っているが、内面は内彎している。内面に油ススの付着がみられる。<sup>(註1)</sup>赤褐色を呈し、胎土に砂を含む。焼成は良く、堅い。これに類似するものは毛越寺にみることができる。

### 4 溝状遺構(第14図、図版第44図)

この遺跡では溝状遺構が3本発見された。

第1号溝(第14図、図版第44図) 第1号溝は東西に走る幅約20cm、深さ10~15cmで、第4層の黄褐色土層を掘り込んでいる。中には黒褐色土が入っていた。溝のそばに数個の小ピットがある。

第2号溝(第14図、図版第44図) 第2号溝は第1号溝の南側に発見されたもので、木の根で大部分がこわれていた。第1号溝とはほぼ同じ規模であるが深さは5~10cmを測る。この溝から土師器甕が出土した。

出土遺物(第13図4) 口径13cmを計る土師器甕で、頸部がゆるやかに「く」の字に曲り、口縁部が内彎ぎみに外反する。胴は丸みをもつてふくらみ、器肉は薄い。褐色を呈し、胎土には細砂を含み焼成は悪く、やわらかい。

第3号溝(第14図、図版第44図) 第3号溝は北側水田から発見された。北西~南東に走る幅1~1.7m、深さ30cmを計り、この調査で発見された最大の溝である。溝は法線外の水田部にも長く続き、第4層の黄褐色土を掘り込んでいる。中には黒褐色土が入っている。

(本間信昭)

註 1 『平泉』東京大学出版会 昭和36年

## V 遺物

### 1 土 師 器 (第15図～第17図)

本遺跡出土の土師器は全遺物出土量の約半分を占める。しかし、そのほとんどが細片になっているため形狀のはっきりしないものが多い。器種は塊、甕、壺などである。

塊 (第15図1～16) 塊は浅いものと深いものの2種あるが、ここでは細片になっているために深い塊しか形狀をとらえることができなかった。

第1類 (第5図1～3) 浅い碗を第1類としたが、住居址以外では細片になっていて形狀が明らかではなく住居址出土の一群を第1類とした。

第2類 (第15図1～16) 1は口径15cm、底径6.5cm、器高5.2cmで底部から内彎しながら立ちあがり、口辺部がゆるやかに外反する。器肉は薄く、淡褐色を呈する。胎土は水漉し粘土を使い砂、小石が混入している。焼成は悪く、やわらかい。2は直斜状に開き、口辺部が外反する。口径は15cmで、器肉は比較的薄い。褐色を呈し、焼成は悪く、やわらかい。内黒の土器である。

底部は作り方で3種に分けられる。上げ底になるもの3～11、平底になるもの12～15、底部に段のつくもの16である。底径では、5cm9、11、13、6cm前後6～8、10、14～16、8cm前後のもの4、5、12となる。底部の作りで角が厚く、中心部が薄いものが目につく。いずれも粘土塊からの引き出しども考えられる。淡褐色から赤褐色を呈する。胎土は水漉し粘土を使い、砂を混入させている。4、5、9、15は内黒の土器である。

甕 (第16図1～16) 甕はすべて長胴を呈すもので、胴部刷毛目状の整形擦痕を残し、胴下半に平行印目文を施したものもある。底部まで続くものはなく全体の器形は不明である。

第1類 (第16図6～9) 口縁部が外反する一群で頸部は「く」の字形に曲り、口縁部が外反する。胴部はわずかにふくらみをもって底部に至る。6、7は頸部の曲りも大きく、口唇部が上につきだしている。9はくびれも弱く、口縁部が直斜状に上る。8は頸部にわずかな曲りをもち、口縁部が直立に近く上り、口唇部が立つ。いずれも水漉しの粘土を用い、砂を混入している。褐色、黄褐色を呈し、焼成は悪く、やわらかい。7はやや焼成が良い。

第2類 (第16図1～5、10、11) 頸部が「く」の字形に曲り、口縁部が直斜状に開き、口唇部が上につき出している一群で、1、3、4は口径18cm前後で、2は22cm、5が19.5cmを計る。胴部は丸みをもって長胴となり、4のように胴部に細い櫛状のもので整形し、胴下半に平行印目文を施しているものもある。胴部には巻き上げ痕が残っている。水漉し粘土を用い砂を混入させている。焼成は悪く、やわらかい。黄褐色から黒褐色を呈する。10、11は口径13cm前後を計るもので、小形の甕である。頸部は「く」の字形に曲り口縁部が直斜状に開き、口唇部が直立してつき出す。胴はほぼ垂直に下る。胴部には巻き上げ痕を残し、黒褐色を呈し、胎土は水漉し粘土を使っている。焼成は悪く、やわらかい。

第3類土器（第6図5, 6） 第3類土器は住居址に出土している甕第3類のものをあてる。

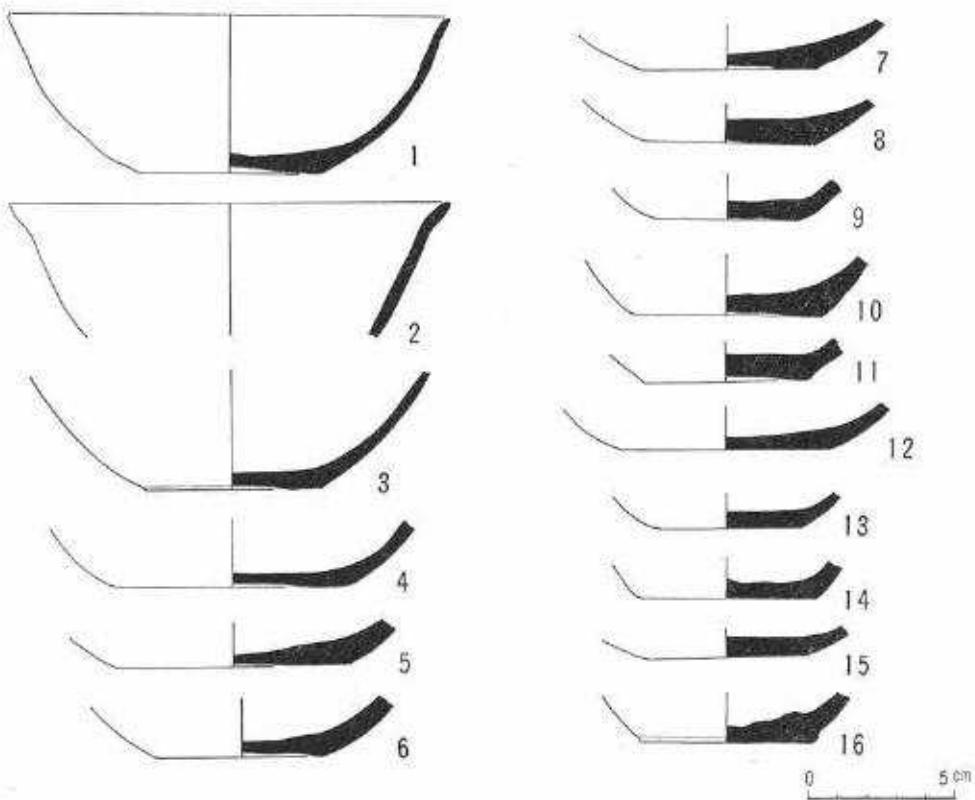
底部は平底のみしか発見できなかつたが、12, 13は大形で平底を呈する。14は中形で平底を呈する。15, 16は小形で肉厚になっている。16の底には糸切り痕が残り、拓本右側に糸痕を残している。これら平底が長胴のものにつくかはわからぬが、石川県で発見されているものは丸底をもつてゐる。

壺（第17図1～12） この遺跡では20個体余りの壺が発見されているが細片になつてゐるために形状の明らかでないものが多い。

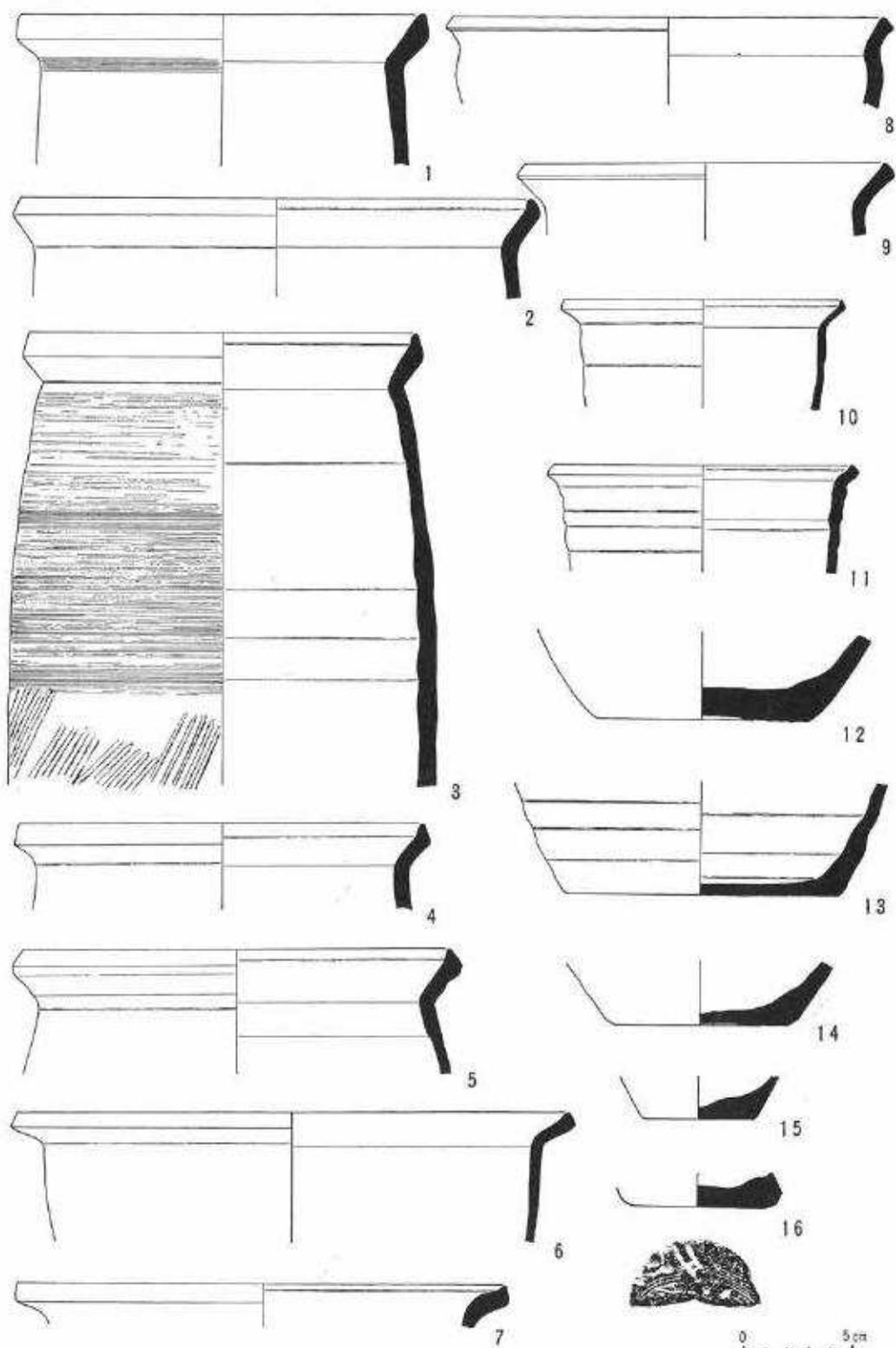
第1類（第17図1～6, 8, 10） 頸部がゆるやかに曲り、口縁部が外反している一群で、胴部の底部に至る角度は不揃いである。口径はどれも大きく、6が31cmで一番小さい。1, 6は口縁部先端が上方につき出している。黄褐色から黒褐色を呈し、胎土には砂を混入している。焼成は悪く、やわらかい。

第2類（第17図7） 口唇部が上下につきだすもので、頸部が大きく曲がり、短い口縁部がつく。胴は直斜状に下りている。黄褐色を呈し、胎土には砂を含む、焼成は悪く、やわらかい。この類は住居址の第2類の壺もこの中にに入る。

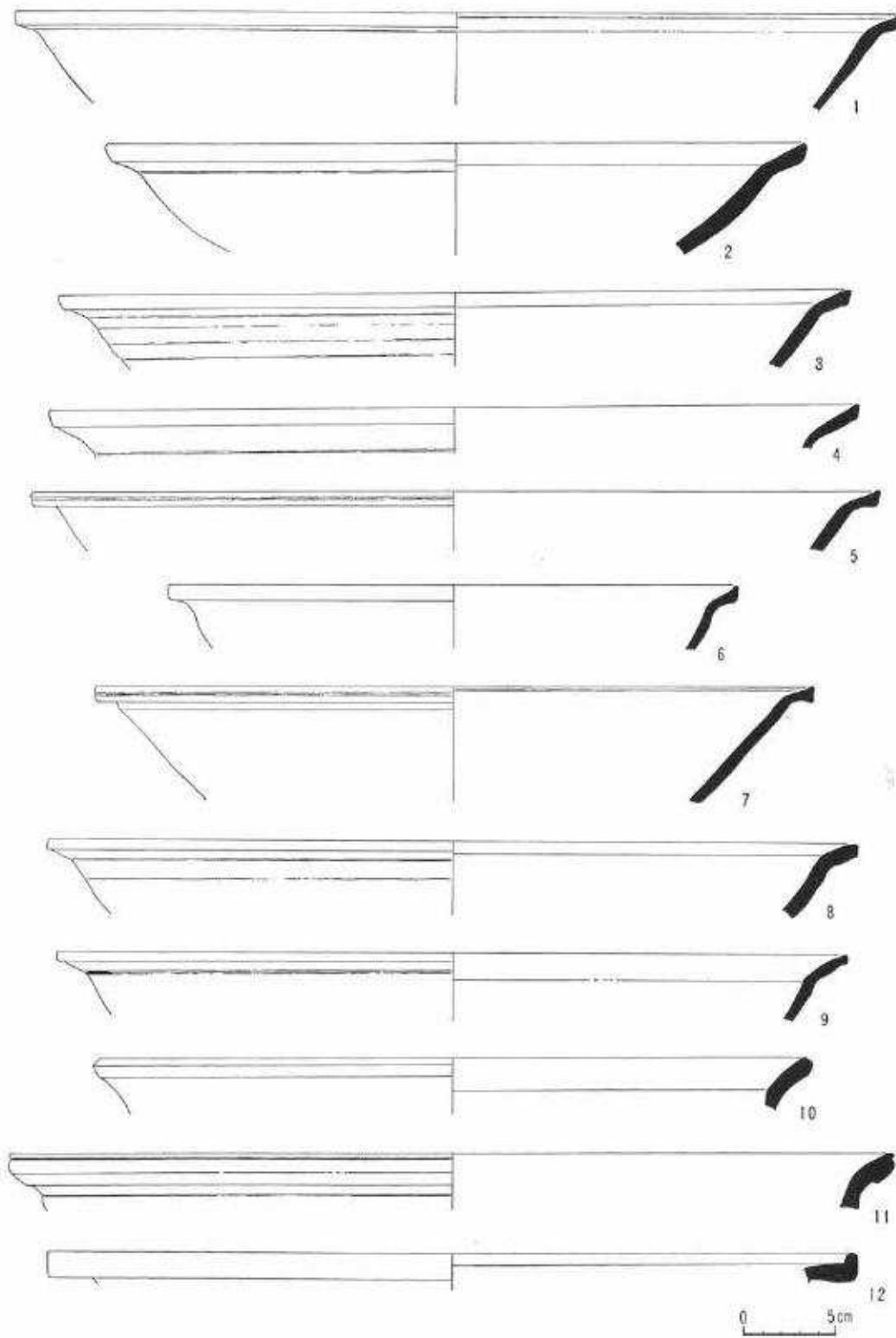
第3類（第17図11, 12） 口縁部が装飾的になつてきた一群のもので、11は口辺部が凸帯状になる。茶褐色を呈し、胎土には砂を含む。焼成は悪いが、やや軟くなつてゐる。12は口辺部が水平になり口



第15図 土 器 (碗)



第16圖 土 器 (甕)



第17圖 土 築 器(縫)

唇部が垂直に立ちあがっている。茶褐色を呈し、胎土には砂を含む。焼成は悪いが硬くなっている。器はいずれも甕と同じく粘土紐の巻き上げで作られている。

## 2 須 恵 器 (第18図～第25図)

本遺跡出土の須恵器は全遺物量の約半数を占めている。器種は杯、蓋、甕、壺、横瓶、耳皿などであるが、県内のものと県外のものとがある。

杯 (第18図、第19図、第20図、第21図1～14) 杯は平底をもつものと、高台をもつものがある。

第1類 (第18図、第19図) 平底をもつ一群で、口径によって分けると

11.5cm未満—第18図14、第19図3、8

12.5cm未満—第18図1、4、6、7、9、10、13、15、第19図4、5、7、9、12、14

13.5cm未満—第18図2、3、11、12、第19図1、2、6、7、10、11、13

というようになる。口径が12～13cm位のものが多く、規格性がみられる。底径、器高にも規格性が見られ、器高は3～3.5cm位である。第18図1～15、第19図1～4、9は口縁部が底部から直斜状に立ち上り、口唇部がやや外反ぎみになっている。器面は水挽き仕上げをしているが、巻き上げ痕が残っている。底部は平底か、やや上げ底になり、全部笠起しとなっている。第19図1、7は底部に乾した時の痕が残っている。笠起し痕の回転は第18図13の右回りと左回りのものがあるが、左回りのものが多い。第18図12の底には笠状のもので削った深い回転痕が残っている。胎土は水漬し粘土を使い、細砂、砂を少量混入している。器面は灰色または青灰色を呈し、焼成は良いが、軟調で、吸水性がある。第19図12～14は底部から口縁部にかけて内反ぎみに立ちあがる。青灰色を呈し、胎土は水漬し粘土を使い、細砂を混入している。焼成は良いが、軟調で吸水性がある。

第2類 (第20図4、第21図1～14) 高台をもつ一群で、高台はすべて付高台で杯部の浅いものと深いものがある。いずれも胎土、焼成には差はない。

A群 (第20図1～3、図版第1図14) 高台の付く浅い杯の一群で、1は口径11cm、底径7cm、器高3.9cmを計る。底部から口縁部にかけて外反ぎみに立ち上り、高台は角形で外傾している。灰黒色を呈し、胎土には砂を含む。3は口径12cm、底径7cm、器高3.5cmで、腰部が横に張り出し、底部から直斜状に立ち上る。灰黒色を呈し、胎土には細砂を含む。いずれも器肉は薄く、焼成は良く、堅牢である。

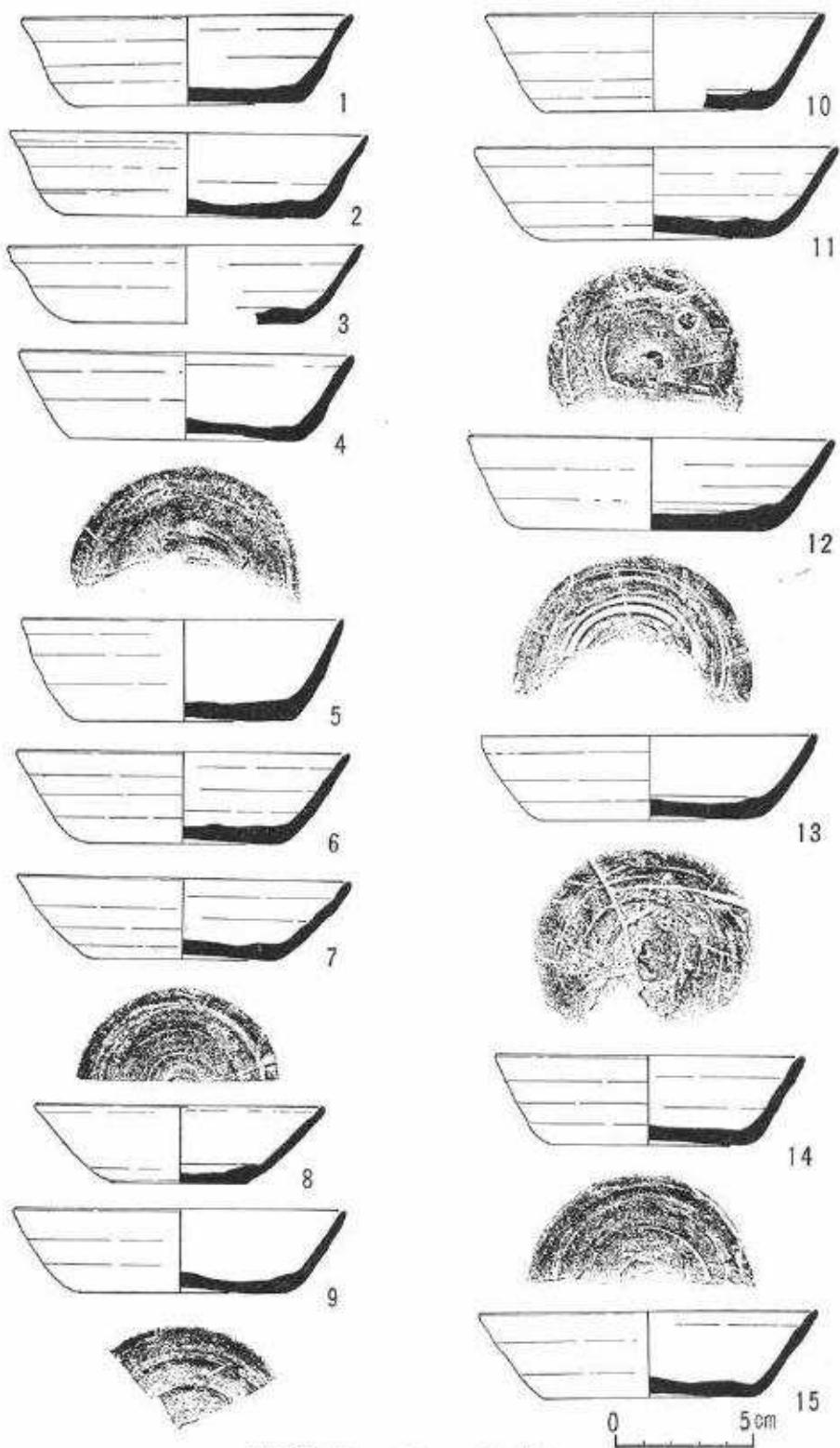
B群 (第20図4～13) 高台を持つ深い杯の一群で、口径では

13.5cm未満—第20図5、6、10、13

15.5cm未満—第20図4、7、8、9

17.5cm未満—第20図11、12

と分けられる。4は口径15cm、底径8cm、器高6.5cmを計り、底部の曲部に角がつき、直斜状に立ち上る。形は良くととのい、水挽きで仕上げをしているが、器面には巻き上げ痕が残る。底部は笠起しで角のとれた内傾の付け高台となっている。5～7、9、13は口縁部が直斜状に外方に開き、巻き上げ痕が残る。5、6は小形で器肉が厚く、7、9、10、13は器肉が薄い。灰色または灰黒色を呈し、胎土には砂を含む、焼成は良く、堅牢である。



第18圖 簋 壺 器(环)

底部（第20図14～19、第21図1～13） 底部は高台の形によって4類に分類した。いずれも胎土、焼成は類似している。

第1類（第20図15～17、第21図9～11） 四角形の高台で、15～17は内傾している。第21図9～11は直立または外傾している。第21図10は幅のひろい大きな高台で、底部も薄い。いずれも灰色または灰黒色を呈し、胎土には砂を含み、焼成は良く、堅牢である。

第2類（第20図18、19） 高台が丸みをもち、内削ぎ状になっているもので、台端に浅い凹線が入る。灰黒色を呈し、胎土には砂を含み、焼成は良い。

第3類（第21図1～8） 高台が内側に曲るもので、1～3は曲りが少なく、4～7は曲りが大きい。台端に凹線が入っている。灰色または灰黒色を呈し、胎土には砂を含む。焼成が良く、堅牢である。

第4類（第21図12、13） 高台がつらら状になるものと丸くなるもので、焼成は良く、堅牢である。

耳皿（第21図15、図版第49図11） 当遺跡で1点発見されたもので、内面に乳褐色の灰釉が施され、破片であるために全体の器形はうかがえない。底径8.7cm<sup>(註1)</sup>で、丸い高台がついている。焼成は良く、堅牢である。これは愛知県猿投窯黒笹地区のものである。

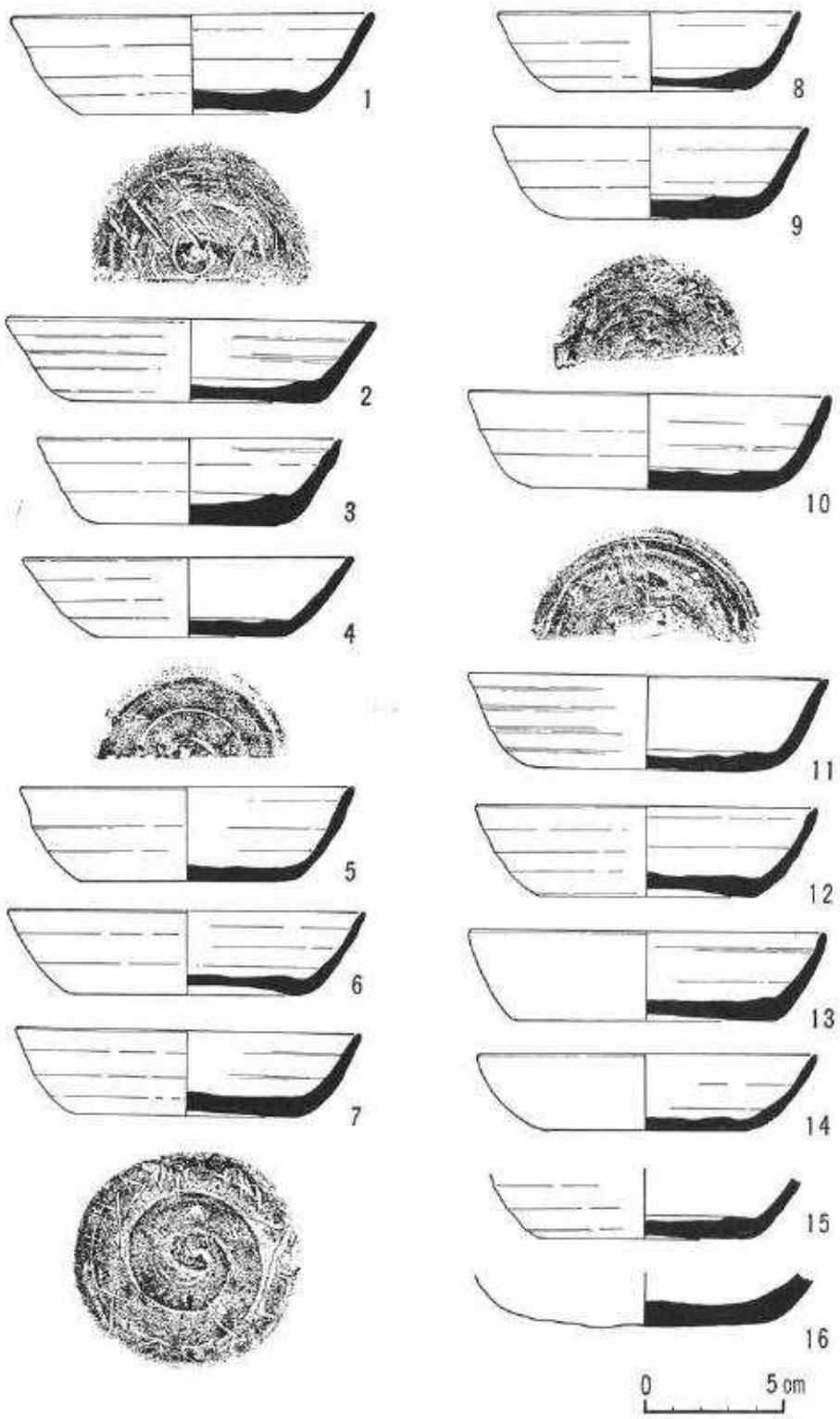
蓋（第21図16～33） 蓋は多く発見されているが、細片になっているので、全体の形としてとらえられるものは数が少ない。つまみも各種があり、形状で3種に分類した。

第1類（第21図21～27） 口縁部が嘴状を呈する一群で、口径は13.5cm未満—21、22 14.5cm未満—23 15.5cm未満—24、25 16.5cm未満—26と分けられる。

21は口径13.5cm、器高3cmでつまみ径2.9cmを計る。器肉は薄く、口縁に向って直斜状に下り、口辺部がやや外傾する。つまみは扁平な宝珠形を呈し、中心部がわずかにつき出る。器面には巻き上げ痕が残り、つまみはあとからつけていている。灰黒色を呈し胎土には砂を含む。23は肩が強くはり、直斜状に口縁に下る。22～27は天井部が厚く、直斜状に口縁に下る。口縁部に灰、炭素が付着し黒くなっているところから重ね焼きをしている。胎土は水漉し粘土を使い、細砂、砂を混入している。いずれも焼成は良く、堅牢である。

第2類（第21図28～33） 口唇部が内側に巻きこんでいる一群で、口径は14cm—28 15.5cm—29、32 17cm—30、31 19cm—33に分けられる。肩から口縁部にかけて直斜状に下がり、28、29は天井部が厚くなっている。器面には巻き上げ痕が残り、口縁部に灰、炭素がついているところから重ね焼きをしている。胎土は水漉し粘土を使い、砂を混入している。焼成は良く灰色、青灰色、灰黒色を呈する。

つまみは3種あり、第21図16は高く突出した宝珠形を呈し、大形で灰黒色を呈する。天井部は肉厚で、焼成も良い。第21図21は扁平な宝珠形を呈し、中心部が少し突出する。第21図17～20は中央部が凹み扁平なつまみで、17は中心部が突き出す。胎土は水漉し粘土を使い、砂を混入している。灰色、灰黒色を呈する。焼成は良く、堅牢である。つまみはいずれも後からつけられ、天井部がやや厚くなっている。



第19図 須恵器(环)

壺（第22図1～8、国版第49図12～14） 壺は長頸のつくものと、直立する短頸のものの2種類出土している。胎土には砂を混入し、焼成も良く、頸部等には灰、炭素の付着もみられる。

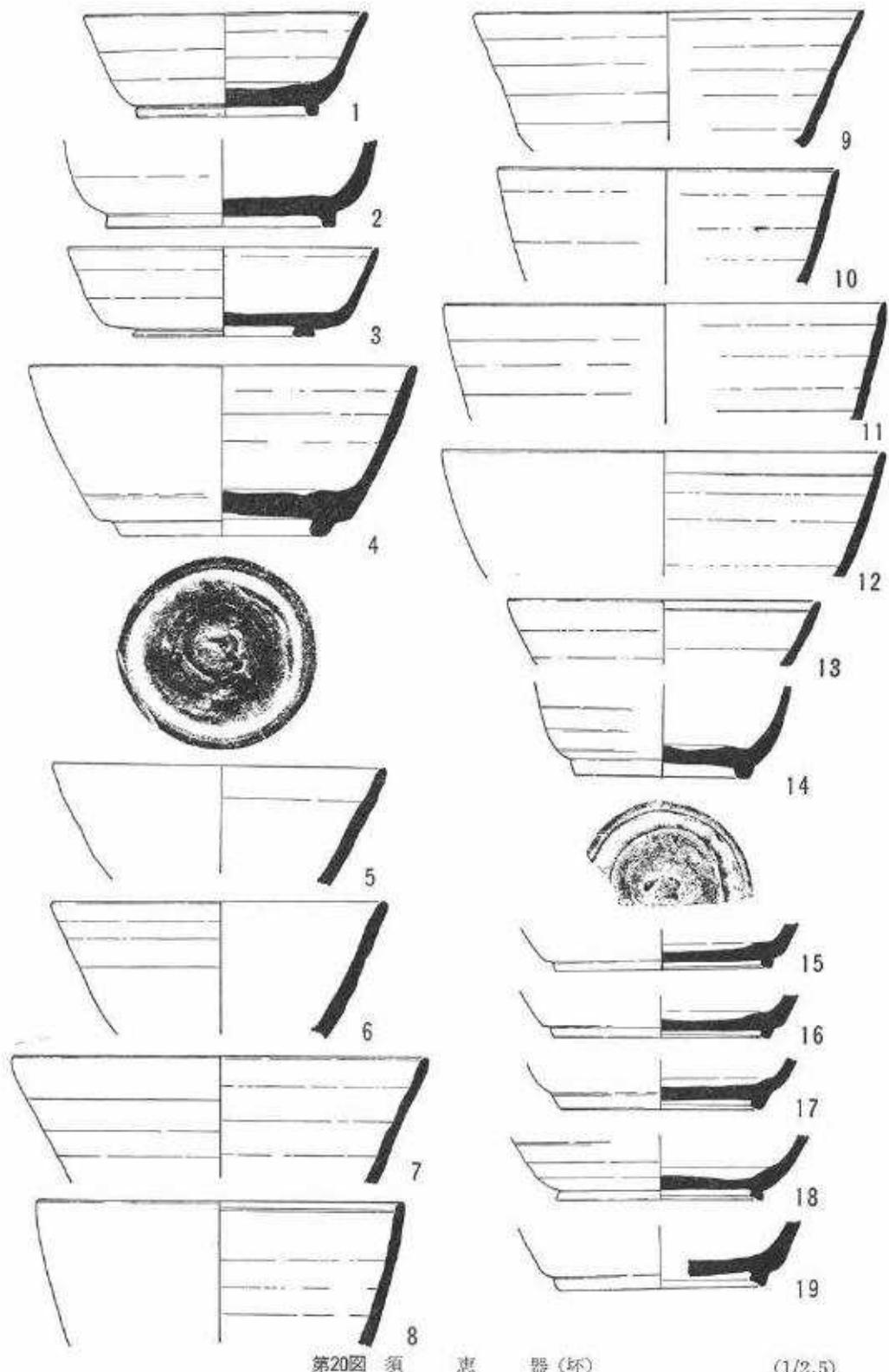
第1類（第22図1～7、国版第49図12～14） 長頸のつく壺で、1は口径9.7cmで、2は6.5cmで肩からロート状に開く口縁部をもち頸部から肩部にかけては直角に曲る。頸部はさし込みで胴部とつながっている。3は肩部が丸くふくらみ、底部には高い角形の高台がつく。器面には巻き上げ痕が残り、水挽きで整形している。4も同様の器形を呈する。灰黒色、青灰色を呈し、焼成は良く、堅牢である。胎土は水漉し粘土に砂を混入している。

第2類（第22図8） 直立する短い口縁のつく壺で、口径11cmを計る。胴は球形を呈し、器面には巻き上げ痕が残っている。胎土は水漉し粘土に砂を混入させている。焼成は良く堅牢である。

甕（第22図9～13、国版第49図3） 外反する口縁部をもつもので、9～12は口縁部端が上下につき出す。口径は9が17.5cm、10、11が22.5cm、12が24cm、13が29cmを計る。13は口縁端が内削ぎになる。頸部には巻き上げ痕が残っているが、きちんと整形している。12の胴部外面は格子印目文が施され、内面には青海波文が施されている。13には外面に格子印目文の上を横で整形し、内面には継整形後青海波印文を施している。灰黒色を呈し、胎土には砂を多く含む。焼成は良く、堅牢である。

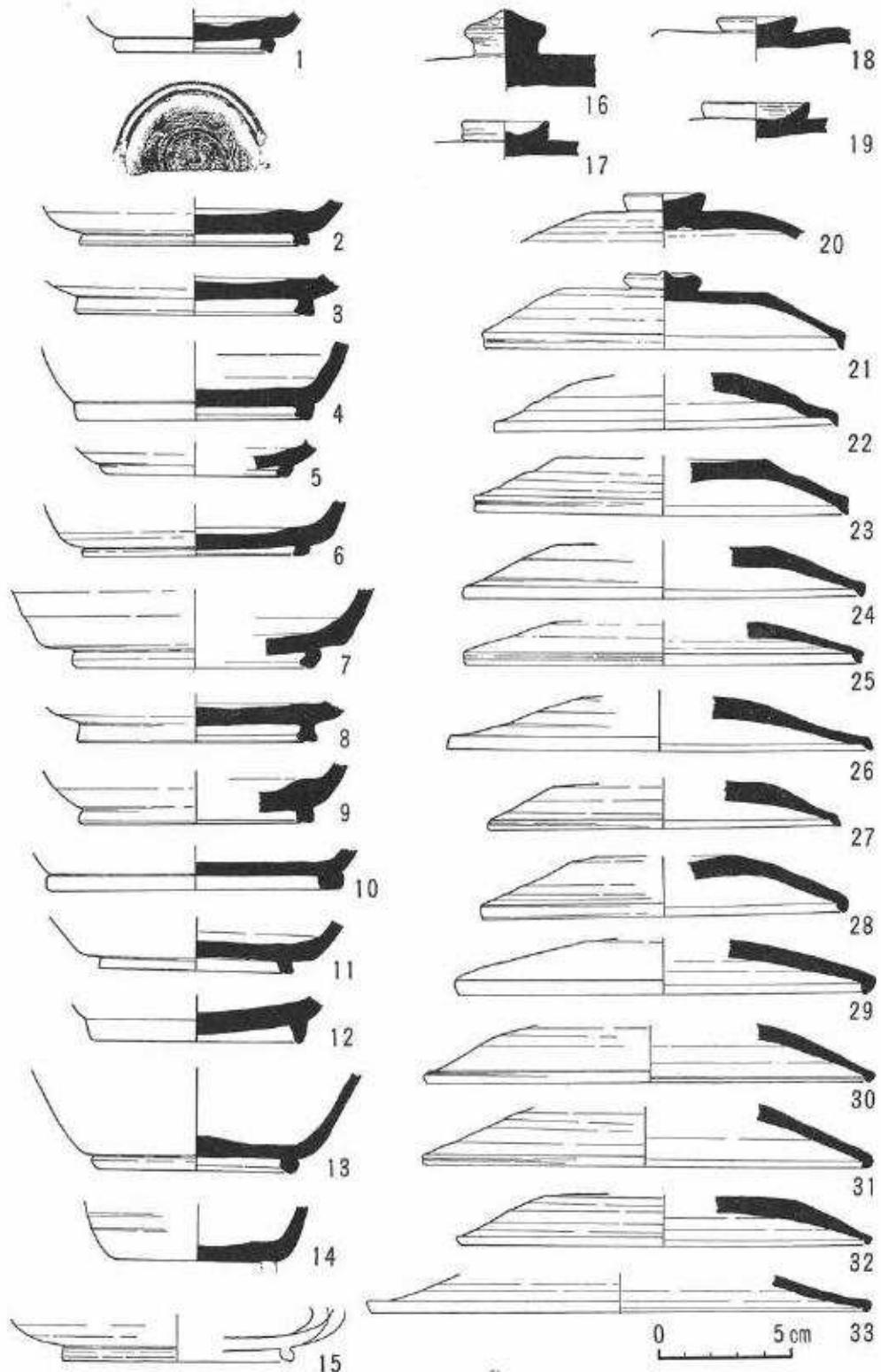
表1 須恵器印目文組合せ

番号	表 面	内 面	番号	表 面	内 面
第 2 3 図					
2	平行印目文	青海波文	8	格子印目文	青海波文+平行印目文
3	格子印目文	格子印目+青海波文	9	格子印目文	青海波文+格子印目文
4	格子印目文	平行印目文	10	格子印目文	平行印目文
5	無 文	クシ目文	11	格子印目文	平行印目文
6	平行印目文	青海波文	12	格子印目文	青海波文
第 2 5 図					
7	格子印目文	青海波文	1	斜行格子印目文	青海波文
8	格子印目文	青海波文	2	斜行格子印目文	青海波文
9	格子印目文	変形青海波文	3	クシ目文+斜行格子印目文	青海波文
10	平行印目文	変形青海波文	4	斜行格子印目文	青海波文
第 2 4 図					
1	格子印目文	青海波文	5	斜行格子印目文	平行印目文
2	格子印目文	青海波文	6	斜行格子印目文	方形平行印目文
3	クシ目文+格子印目文	青海波文	7	平行印目文	平行印目文
4	格子印目文	青海波文	8	平行印目文	青海波文
5	格子印目文	青海波文	9	平行印目文	青海波文
6	格子印目文	青海波文	10	平行印目文	青海波文
7	格子印目文	青海波文+平行印目文	11	平行印目文	青海波文
			12	平行印目文	平行印目文

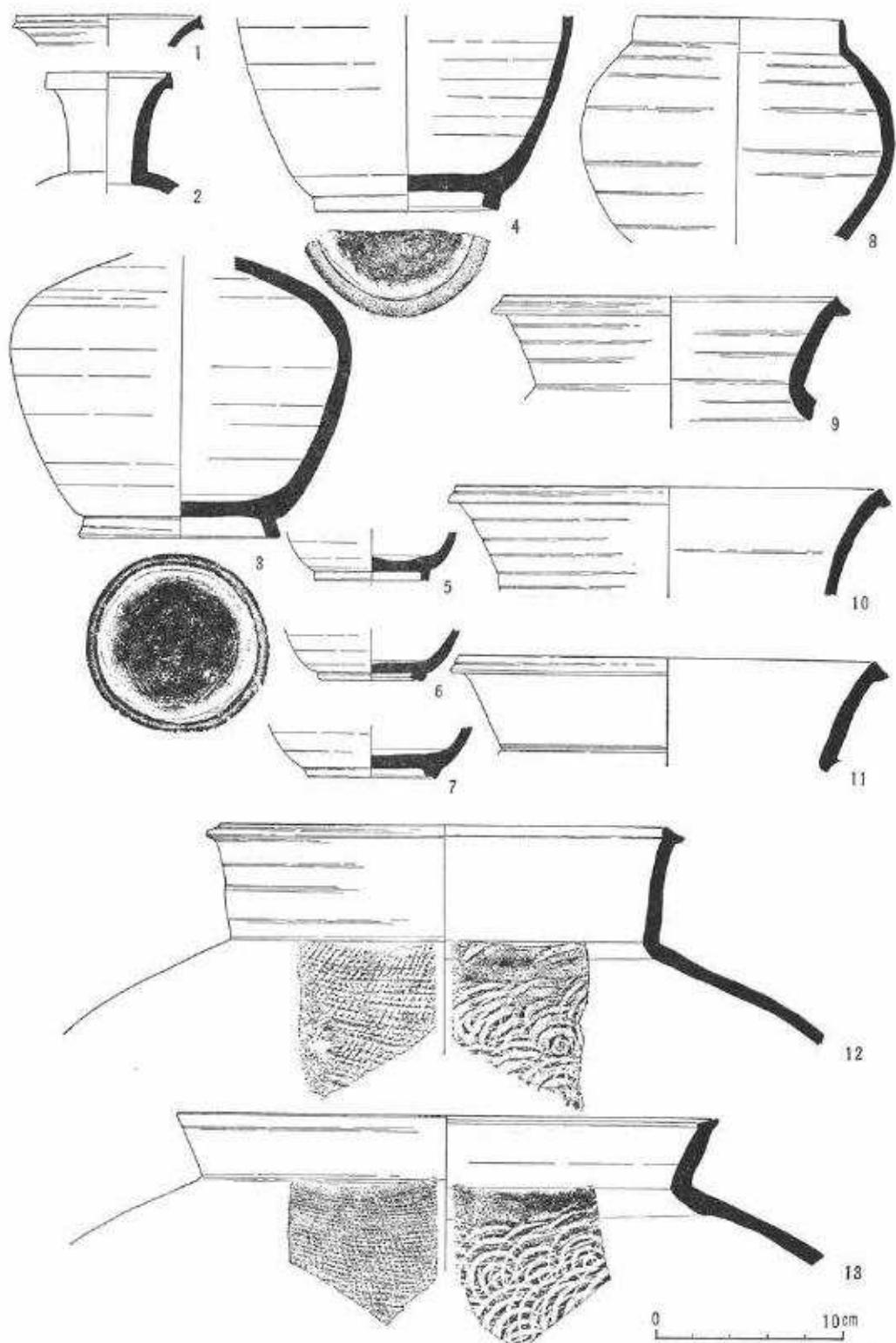


第20図 須 惠 器(环)

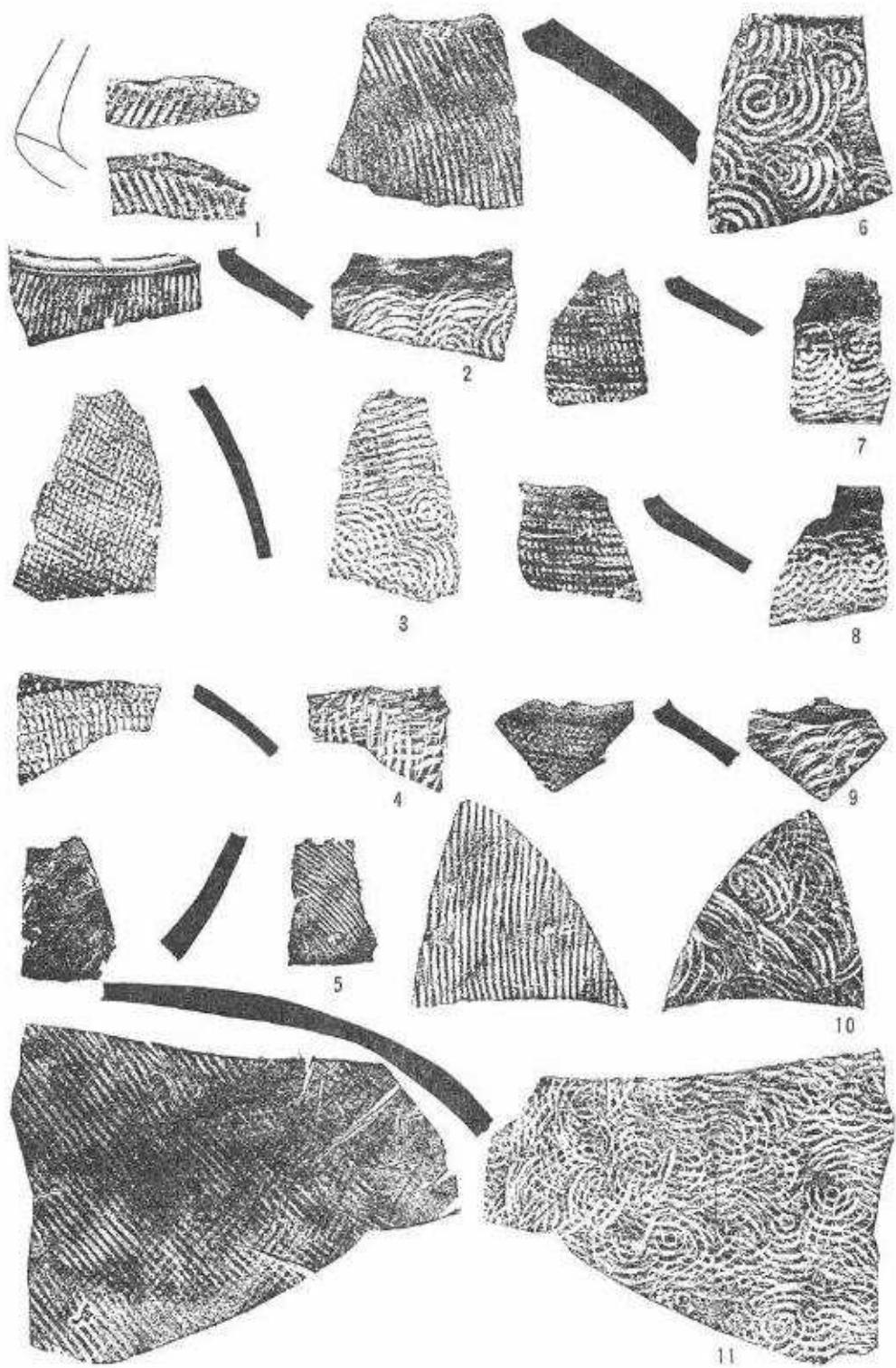
(1/2.5)



第21圖 須 惠 器(蓋・坏)



第22圖 須 惠 器(盞・甌)



第23図 須 恵 器(縦・横筋)



第24図 須恵器印目文の組み合せ



第25図 須恵器印文の組み合せ

第23図1は甕の頸部の接合部で、接合面に斜行のきざみを入れて接合させている。第23図2～10は甕の内外面の印目文の組合せで表の如くなる。IIは横瓶で、外面に平行印目文を施し、内面に青海波文を施してある。外面には自然灰釉がかかり光沢をもっている。胎土は灰白色で、黒い雲母の細粒がみられる。焼成は良く、堅牢である。県内横瓶出土例は次の通りである。

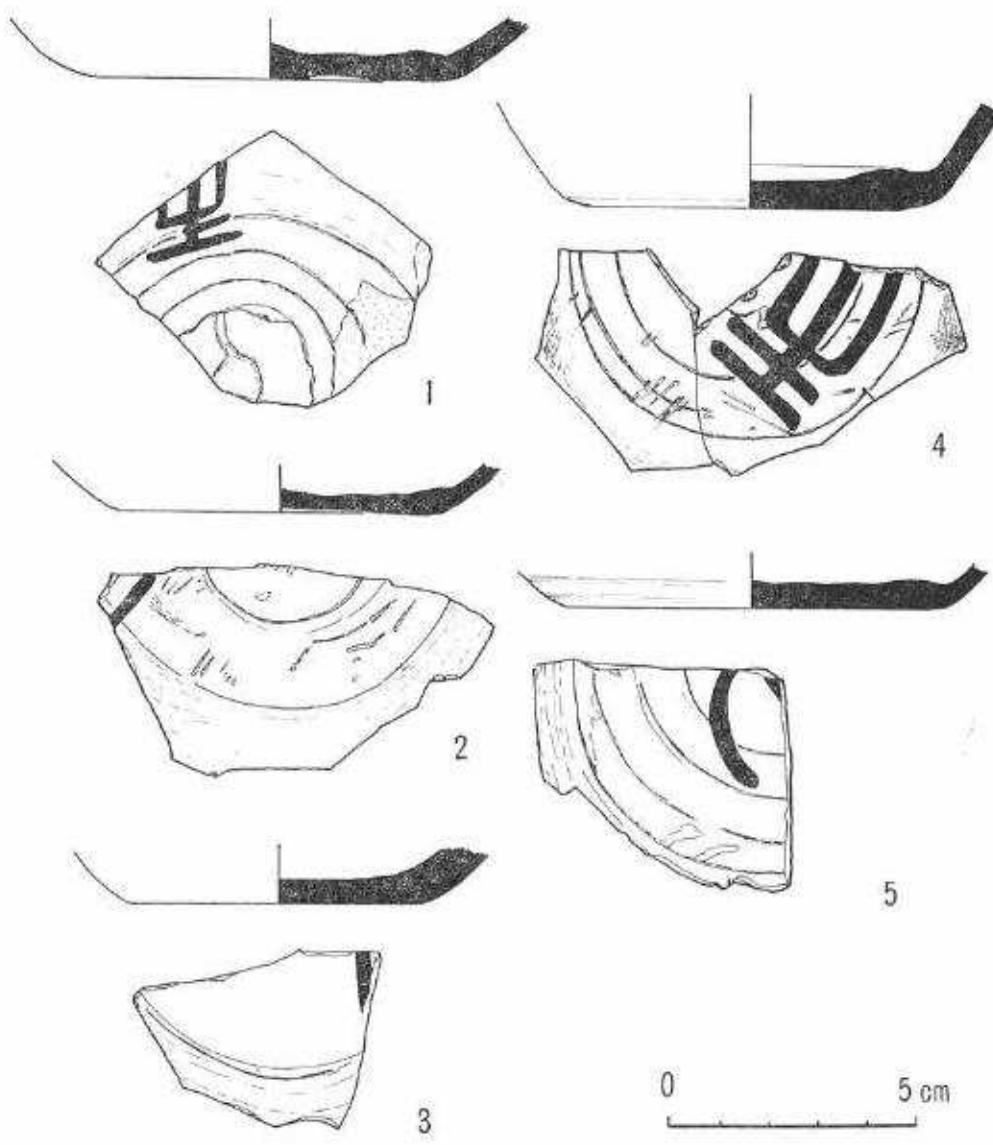
- 1 小泊窯跡 佐渡郡羽茂町小泊 <sup>(註1)</sup>
- 2 大木戸窯跡 佐渡郡真野町豊田 <sup>(註2)</sup>
- 3 両津市駒坂 <sup>(註3)</sup>
- 4 岡屋敷窯跡 北蒲原郡豊浦村岡屋敷 <sup>(註4)</sup>
- 5 三島郡寺泊町沖合タラ場 <sup>(註5)</sup>
- 6 西蒲原郡分水町砂子塚字高木境 <sup>(註6)</sup>
- 7 半ノ木遺跡 南蒲原郡岡野新田 <sup>(註7)</sup>
- 8 内町遺跡 見附市内町 <sup>(註8)</sup>
- 9 糸魚川市上刈同射場 <sup>(註9)</sup>

第24図、第25図は甕の胴部内外面印文の組合せで表の如くなり、平行印目文と青海波文の組合せが一番多い。

- 註 1 中川成夫、倉田芳郎 「新潟県北蒲原郡における二窯跡の調査」 豊浦村文化財報告1 昭和37年  
『南佐渡』 新潟県文化財年報第2 昭和33年  
佐渡博物館所蔵
- 2 佐渡博物館所蔵
- 3 豊浦村文化財報告1 昭和37年  
椎名仙卓 「横瓶の骨蔵器」 貝塚81 昭和33年  
佐渡博物館所蔵
- 4 豊浦村文化財報告1 昭和37年
- 5 寺村光晴 「寺泊沖合タラ場の横瓶」 若木考古 第47号 昭和32年  
寺村光晴 「寺泊のまいたち」  
和島村 広川朝顯氏蔵
- 6 新潟県西蒲原郡島上村公民館『島上村誌』 昭和29年  
西蒲原郡分水町 砂子塚 鈴木氏蔵
- 7 南蒲原郡栄村大字岡野新田 川野正夫氏蔵
- 8 県教育委員会蔵
- 9 糸魚川高校蔵

### 3 墨書土器(第26図1~5)

本遺跡からは墨書土器が5点発見された。1~4は須恵器底に書かれたもので、1, 4は同類の墨跡形を呈しているが、文字であるのか、記号であるのか判読することができない。2, 3は一部し



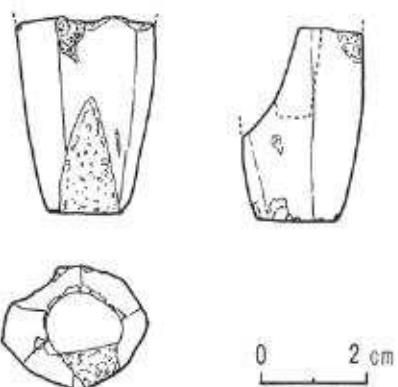
第26図 墓書土器

か出土していないので判読することはできない。

5は第1号井戸中から発見されたもので、須恵器  
壺の底に書かれている。

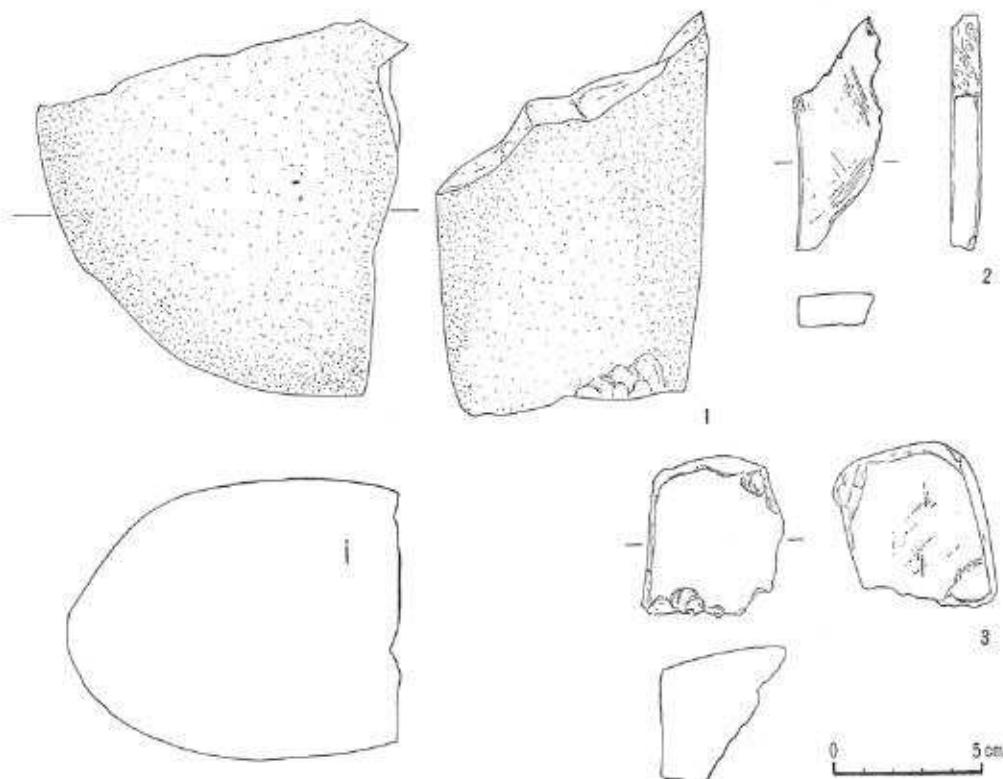
#### 4 土 製 品 (第27図)

何かの脚部と考えられる土製品が1点出土し  
た。側面はきれいに面取りされ、中央部に穴があ  
けられている。茶褐色を呈し、胎土は良く、焼成  
もよく堅牢である。



#### 5 石 製 品 (第28図1~3)

石製品は3個発見されている。1は安山岩質で、  
石面を磨っている。丸く角がとれしており、何に使ったものかわからない。2・3は砾石で、2は扁平  
で、きれいに磨ってある。石質はわからないが、硬度の高いものである。3は四角柱になっていたも  
のが割れている。面はきれいに磨ってある。石質はわからない。2、3はいずれもきめが細かく、3  
は中砥、2は仕上砥であろう。



第28図 石 製 品

## VII 考察

### 1 土器の年代について

半ノ木遺跡出土土器のうち土師器、須恵器の割り合いはほぼ半々になる。新潟県においてはこの時期の調査例がほとんどなく、対比資料も少ない。半ノ木遺跡で出土している土師器は壺、甕、壠の3器種に限定されている。壺に類似するものが下屋敷遺跡に見ることができる。また県外では平出遺跡<sup>(註1)</sup>第5様式とされている壺の一群とほぼ同一のものと考える。甕の第1類、第2類に類似すると考えられるものは、下屋敷遺跡、長所遺跡等に見られるが器形が異っている。しかし、近年この時期の資料が増加している石川県では、三浦遺跡中層、矢田新遺跡、洲衛第1号窯などに類似のものを見ることができる。また甕第3類は三浦遺跡上層のものに類似したものを見ることができる。壠の第1類、第2類は同一時期のものとしてとらえられる。県内の壠の報告例は中才遺跡のみで、下屋敷遺跡出土のものに壠らしきものがみられるくらいである。これらの壠に類似するものとして三浦遺跡中層、矢田新遺跡などに見ることができる。壠第3類は口辺部が装飾的になっていることからやや時期的に下るものであろう。

須恵器については県内数ヶ所の窯跡の調査が行われている。半ノ木遺跡出土須恵器は壺、蓋、壺、甕、横瓶、耳皿、灰釉皿等である。壺第1類である平底をもつ壺は、下屋敷遺跡でも出土しており、間野窯跡、七本松窯跡、清見寺窯跡、岡屋敷窯跡などにも見ることができる。深い高台のつく壺は、下屋敷遺跡、間野窯跡、七本松窯跡、清見寺窯跡、岡屋敷窯跡、カメ烟窯跡などに見ることができる。器形は特にカメ烟窯跡、七本松窯跡のものに類似している。しかし、これら窯跡から出土している高台は全部が角形か、丸みをもつ台端に浅い凹線のあるものであるが、半ノ木遺跡からは丸くなるもの、内側に曲るものなどが見られる。また蓋は口縁部が嘴状を呈する第1類のものは県内窯址に見られるが、第2類の内側に丸く折れ曲るものは清見寺窯跡、羽黒窯跡、七本松窯跡、下屋敷遺跡、城塚遺跡などに見ることができる。つまみの部分では上に大きく突きだす宝珠形を呈する第1類、扁平な宝珠形を呈する第2類のものは、同じものが間野窯跡に見られる。中央部が凹むものは県内各窯跡で見ることができる。壺の無頸のものは間野窯跡、七本松窯跡、清見寺窯跡、岡屋敷窯跡、蒲提窯跡などに出土しているがどれも器形が異なる。わずかに小木町宿根木出土須恵器がこれに類似する。また短い頸のつく長頸壺は県内窯跡報告中には見られず長頸のものがカメ烟窯跡に見られる。しかしこれら壺形は洲衛第1号窯に見られる。甕第1類である頸のないものは土師器甕と類似する器形をもつもので、間野窯跡、岡屋敷窯跡、七本松窯跡などに見られる。大形の甕は下屋敷遺跡、カメ烟窯跡、清見寺窯跡、間野窯跡、七本松窯跡などで見ることができる。

以上半ノ木遺跡出土遺物と類似する、遺跡・窯址をあげてみた。土師器については北陸地方に発見されているものに類似しており、特に煮沸形態である甕、壠に類似したものが多い。これらは三浦遺跡中層、矢田新遺跡とはほぼ同一時期としてとらえられる。奈良時代末～平安時代初めに位置づけられる。三浦遺跡中層には土師器が少なく、土師器のほとんどが甕であるのに反して半ノ木遺跡には壺の

量が多く、土師器も約半分の量を占めている。下屋敷遺跡においても同様に土師器の量が多い。須恵器のほとんどが県内で調査された窯跡出土の遺物と同類の形態を呈しているが、県内いずれの窯跡から運ばれてきたのかは今のところわからない。県内窯跡の築窯の年代は8～10世紀頃に比定されており、間野窯跡出土遺物は8世紀後半頃に位置している。石川県州衙第1号窯が9世紀前半に位置し、<sup>(註19)</sup>愛知県猿投黒竈78号窯が8世紀末～9世紀中頃に位置付けされている。また伴出している縁釉陶器は<sup>(註20)</sup>10世紀中頃とされ、灰釉皿・耳皿が9～10世紀、自然灰釉壺が9～10世紀としてとらえられている。また半ノ木遺跡出土長頸壺が猿投窯のものと同一形態をとっている。また横瓶は畿内においては奈良時代で消失するのに対して、北陸地方、東北地方においては平安時代の遺跡から発見されている。新潟県においてもV章で列挙したように数例発見されており、10世紀に入っても製作されていたと推定<sup>(註21)</sup>されている。また土師器の器種の減少が8世紀以後とされている。これらの点から考えて半ノ木遺跡の土器群は平安時代に属するものと推考されるが、年代的な位置付けは今後検討したい。  
（本問信昭）

- 註 1 中村孝三郎 「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館 昭和41年  
2 「平出」平出遺跡調査会 昭和30年  
3 山本仁 「長所遺跡の概要」燕郷土史学第2集 燕市教育委員会 昭和45年  
4 「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会 昭和42年  
5 「加賀矢田新遺跡の第1次調査」小松市立博物館 昭和46年  
6 「輪島市の考古学的調査」石川考古学研究会誌第10号 昭和43年  
7 註4と同じ  
8 「中才遺跡の概報」西川町教育委員会 昭和40年  
9 中川成夫・小出義治・甘櫛健 「古志郡山本村間野窯跡発掘調査報告」越佐研究13集 昭和33年  
10 中川成夫・倉田芳郎 「新津田家七木松須恵器窯跡発掘調査報告」越佐研究第11集 昭和31年  
11 中川成夫・倉田芳郎 「新潟県北蒲原郡における二窯址の調査」豊浦村文化財報告1 昭和37年  
12 註1と同じ  
13 「南佐渡」新潟県文化財年報第二 昭和33年  
14 註1と同じ  
15 戸根与八郎 「新潟県北部妙丘地域出土の須恵器、土師器について」歴史考古第18号 昭和45年  
16 註1と同じ  
17 註13と同じ  
18 註13と同じ  
19 楠崎彰一 「猿投窯」陶器全集31 昭和45年  
20 長谷部泰爾・木多静雄・楠崎彰一 「猿投出土陶・三彩と縁釉陶」  
21 阿部義平 「ヨクロ技術の復元」考古学研究第18卷2号 昭和46年

## 2 土師器・須恵器の製作について

当遺跡出土土師器、須恵器についてその製作のしかたについて考えてみる。

### 土 師 器

当遺跡出土の土師器は、出土遺物量の約半数を占めている。器種は塊が圧倒的に多く、甕、壺となっている。

### 胎土について

粘土の焼成後の色調は黄褐色、褐色、暗褐色、黒褐色、灰褐色、赤褐色などを呈している。粘土は

水漉しされきめの細かい良質のものとなっている。内黒の塊のうち第12図1、2はそのままの粘土か、細砂を少量混入しているが、第15図2は細砂が多く混入され器面がざらざらしている。また第15図1には砂の他に石英の粒が入っている。甕、壺は水漉し粘土に砂を多く混入させている。したがって器種に応じて砂の混入量を変化させ、塊には比較的細かな砂を混入させ、甕、壺には大粒の砂を混入させている。

### 製作技法

塊における製作技法は、粘土塊からロクロ挽き出しと考えられ、薄手に仕上っている。底部は回転糸切りとなっている。器面が荒れていて詳細についてはわからないが、内黒の塊2点(第12図1、2)に関して見ると、粘土塊からのロクロ挽き出しで、底部は糸で切ったものであろう。生乾きにして、再びロクロ台にのせ、硬いもので底部、器面を削っている。ロクロの回転はそうとう早いようである。削りはとてもよく、現在陶芸家が金属片で削ったようにきれいに仕上っている。内面も削ってきてきれいにしている。内黒土器の甕でみがく手法は指摘されているが、それとは異なる手法をとっている。甕、壺の製作のしかたはほぼ同じで砂を混入した粘土紐を巻き上げ、指で押して接着させ、口縁部は布様のもので横なで整形をしている。胴部は第16図3のように刷毛様のもので整形し、胴下半を叩いて整形をしている。この遺跡で確認されたのは1点であるが、中才遺跡の壺、三浦遺跡、金沢市専光寺町出土甕などにも見ることができる。第16図10、11等は粘土紐巻き上げ後布様のもので全面を横なでしているのみである。刷毛、櫛、叩目文は大型製品のものに限られる。

### 焼成について

土師器の焼成はきわめて悪く、表面がとけてしまっている。しかし内黒の土器数点は焼成も良く、堅牢に焼き上っている。これらは他の土師器とは異った窯で焼いたものであろう。

### 須恵器

須恵器は杯、甕、壺、横瓶、蓋等が出土している。

### 胎土について

粘土の焼成後の色は灰白色、灰色、灰褐色、青灰色であるが、灰褐色のものは生焼のものである。粘土は水漉しされ、平底の杯には細砂を少量混入させ、高台付きのものには多く混入させている。壺は高台付きの杯とほぼ同量の砂を混入させている。大型甕は大粒の砂、小石等を混入させている。したがって器種、大きさによって砂の混入量を変えている。これは器の強度を考えたもので、砂の混入量を上げれば器は丈夫になり、割れも少なくなる。焼成後の強度も異なる。

### 製作技法

杯における製作技法を考えてみると、当遺跡出土杯はすべて粘土紐巻き上げ法で作られている。粘土紐を底部中心から口縁部まで巻き上げる。巻き上げには右回りと左回りがあるがここでは右まわりが多い。器形を作り上げるとロクロにかけ、平底の杯は手で高台付のものは鐵錐の硬いもので水挽きをして整形をしている。底部は全部ヘラ起して、ロクロの回転は整形痕、窓起し痕からみて、左回転である。高台は粘土紐の付高台で簡単につけあとで整形している。壺、甕も同じようにして作られ

ているが大形甕は巻き上げをし、内外面を印目文で整形している。甕の頸部と胴部の接合は二段成形で作られている。同じ手法は猿投窓でも見られる。甕の口縁部の接合は、第23図1にみられるように接合部にきざみを入れ、接合している。蓋は甕と同一の作り方をし、つまみ部分をあとからつけている。

### 焼成について

杯蓋は重ね焼きをしている。甕のうち平底のものは焼成が悪く、歎質になっている。これは場所もあろうし、胎土のせいもある。他のものは焼成も良く、堅牢に焼き上っている。

以上半ノ木遺跡出土土器の製作についての概観を述べてみたが、土師器の小形品の製作については田中琢氏が畿内の奈良時代前後の土師器製作技術について詳論している。要旨は粘土紐を巻き上げて成形し、それには3種の手法があり、第1が木葉手法。第2が左手の上に右手にもった粘土紐を左まわりに巻き上げる。第3に型の中で底部を作り、その上に巻きあげていく「瀧の手法」であるとしている。<sup>(註6)</sup>また阿部義平は「ロクロ技術の復元」の中で東北地方表杉ノ入式の土器の中にロクロ水挽き後糸切りで土師器を製作していることを指摘している。<sup>(註7)</sup>また富山県じょうべの木遺跡出土杯がロクロ水挽き手法をとっていることを明らかにしている。<sup>(註8)</sup>また出雲国府出土土師器杯、九州地方の土師器杯等において粘土紐巻き上げ技法によるものと水挽き手法によるものがあることが指摘されているが、須恵器との関係があきらかにされていない。<sup>(註9)</sup>

当遺跡出土土師器においてはごく薄手に仕上っている点、巻き上げ手法特有の横割れが見られない点、器面の凸凹が残らない点、底部に糸切りを使用している点等から当遺跡出土土師器碗がロクロ水挽き手法をとっていると考えられる。したがってこの手法は須恵器杯の製作技法とは異なる手法をとるものである。しかし甕においては粘土紐の巻き上げ手法から整形まで、ほぼ同一の工程をとっていると考えられる。

(本問答略)

註 1 田中琢 「古代中世における手工業の発達」日本の考古学Ⅶ 昭和42年

2 『中才遺跡の模擬』西川町教育委員会 昭和40年

3 『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会 昭和42年

4 註3と同じ

5 註1と同じ

6 稲崎一 「猿投窓」陶器全集31 昭和45年

7 註1と同じ

8 阿部義平 「ロクロ技術の復元」考古学研究第18卷第2号 昭和46年

9 『富山県史(考古編)』富山県 昭和47年

10 註8と同じ

11 削りによる整形をした場合、器面の凸凹は消えるが、器面に胎土の粗密ができる。

### 3 井戸枠について

県内での井戸発見例は

1 佐渡郡佐和田町辰巳

2 島井戸 佐渡郡新穂村長畠2807

- 3 御館 上越市八幡字御館
- 4 江上館 北蒲原郡中条町江上
- 5 下梅木 新津市小合村下梅木

などその他数例ある。中でも辰巳の井戸は第1次調査で4基、第2次調査で10数基発見されている。  
（註1）  
第1次調査のものは山本博氏が「隅柱・縦板・横棧方形筒」としているものである。井戸については山本博氏、日色四郎氏が集成しており、型式、年代について論考している。

（註2）  
半ノ木遺跡で発見された3基の井戸址についての概要は前項で述べた通りであるが、このうち第1号井戸は削り舟を切断して再利用した井戸枠であり、削り貫きの井戸枠は弥生時代以降各地で発見されている。唐古、樅原井辺遺跡等はその代表的例である。円形を呈する井筒の構造をもつものは、削（註3）  
貫式井筒、桶皮式井筒、曲物式井筒に形式分類されているが半ノ木遺跡第1号井戸址のものは削貫式井筒の中に入る。しかし、このように削り舟を使っている例は全国でも類例がないと思われる。

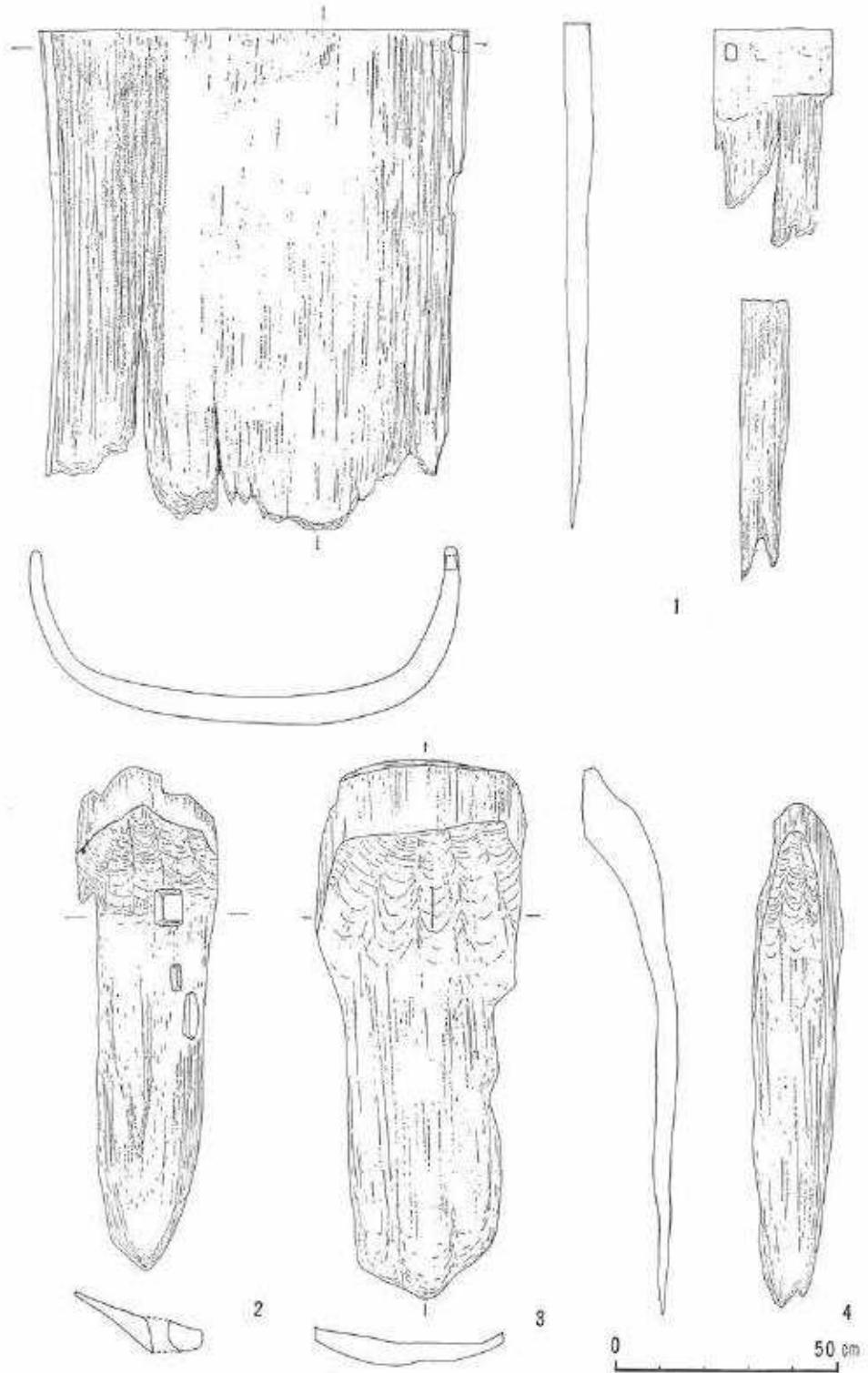
削り貫き舟について考えてみると、井戸枠に使用された舟の規模は切断されているためわからないが、幅96cm、舷から舟底まで33cm舟底の外側まで39cmである。新潟県では聖籠村、金井町千種遺跡等で舟が発見されているが、北方博物館所蔵になる聖籠村の舟は全長8.8m、幅83cm、舟底から舷までの高さ38cm、木の厚さ5.5cmを計る。これらから推定すると本遺跡出土の舟がやや大きいかと思われる（註4）。大形の舟では大阪府今福鶴江川で出土した長さ13.46m、幅1.89mのものがある。一般的に幅1m位、舟の長さは10m前後と推定される。舟は井戸枠にしたために原形の一部が破損せられているが、舳先の部分は舷より高くつきだしていたと推定され、井戸枠とするときに割り取ったものと考えられる。舷側にはいくつかの円形または方形のはぞ穴が対になってあけられ、北方博物館所蔵のものと一致している。用材は杉を使っている。現存している部分は長さ100~120cmが2個あり、舟は鋸で切断され、切り口に鋸目が残っている。井戸の深さは約180cmであるから当時はもっと長く上まであったものかと思われる。井戸上半分が大きく大きく掘ってあり、井戸枠を組んでからこの部分に土をいれているので、舟は井戸とほぼ同じ長さか、それよりも長く切ってあったと考えられる。このようにもしても4~5m位しかいらざりの部分はどのように処理したのかはわからない。削り貫き舟はおそらく4つに切断し、その2個を円形に組みあわせて井戸枠としたものである。削り舟の再利用は井戸枠製作上、労力の節約ともなったと考えられる。これは水郷地帯における生活の知恵であろうか。

（本間信昭）

- 註 1 山本博『井戸の研究』昭和45年  
2 山本博『井戸の研究』昭和45年  
日色月郎『日本上代井の研究』昭和42年  
3 日色四郎『日本上代井の研究』昭和42年  
4 須藤利一『船』法政大学出版局 昭和44年

#### 4 半ノ木遺跡の意義

見附市より三条に至る刈谷田川右岸の平野は、河川の蛇行と自然堤防上の集落を特徴とし、水害の多発地帯である。本遺跡は刈谷田川右岸の微高地状を呈する自然堤防上に立地している。刈谷田川は時代によって種々の流路をとり、その旧河道については昭和40年雑誌「地理」の誌上で籠瀬良明氏



第29図 第1号井戸出土の丸木格戸枠

が論じておられ、半ノ木遺跡の東側を流れていた時代もあり、現在の地形面のみから古環境を推定することは困難である。本遺跡は刈谷田川の自然堤防上に立地する平安時代の代表的な遺跡であると考えられる。また、古代における右岸平野の開発拠点としての役割をもっていた遺跡であろう。平安時代前半における意欲的な墾田開発の歴史的背景をもつものと考えられる。

本遺跡の性格を考えると、出土遺物全体が日常仕器を主体としており、住居址・井戸址・溝状造構など生活に密着する遺構群が検出されている。いわば、平安時代前半に位置付けられる集落址であることに誤りはない。しかし、遺物群の大半が土師器及び在地の窯で生産された須恵器であると考えられるが、特に縄釉陶器及び灰釉は愛知県猿投窯のものが搬入されていることに注目したい。県内でも縄釉陶器1片が、三条市大崎地内で出土しているが詳細は定かでない。この縄釉陶器の全国的な出土例を集めた橋嶋一氏によると、その遺跡内容は寺院址・集落址・官庁・宮殿・祭祀遺跡・墳墓など特殊な遺跡から出土する例が多く、地域的に見ると東国の出土はきわめて少ない。本遺跡出土の縄釉陶器はその中でも屈指のものと考えられる。本遺跡の調査をとおして寺院・官衙・祭祀などを証明する資料は得られていない。この集落が特殊な性格を有するものか、発掘した地点が集落の中で特殊な部分をしめているかは、調査が法線内に限定されているため明らかにできなかった。

本遺跡の位置する柴村をとりまく歴史的な景観を考えると、吾妻鏡の文治2年(1186年)の条に、後鳥羽天皇が私領年貢の未納を催促している中に、越後の荘園名が25記載されている。本地域と関連を有する荘園として「大槻荘(後白川上皇領)」「大面荘(鳥羽十一面堂領)」の名が初見している。両荘園の位置については定かでないが、大面荘に関してはしばしば文献に登場し、荘内の地名から吉ノヤ・新堀・帶織・見附・を含む地域と推定され、大槻荘は大面荘の北側に位置するものと考えられる。半ノ木遺跡は大槻荘の南西部にあたると思われる。この大槻荘を寄進した者、すなわち、開発領主とは誰れであったか文献上からはたどれない。天平15年(743年)墾田永代私有法が出され、土地公有の原則を基とする班田制が崩壊し、寺社・郡司・里長などの地方有力者による開墾と大土地所有制に拍車をかけ、律令制度は急速に崩壊していった。このような開発領主の例として、統日本紀の延暦3年(784年)の記事がある。越後国蒲原郡の人三宅連笠雄麻呂が穀10万束を貯え、貧窮民に衣食を与え、道橋を修造した功によって從八位上を授けられている。この記事は8世紀後半における在地豪族の墾田を背景とした経済的成长を物語っている史料である。開発領主層は次第に低地帯に進出して、開発の根拠地を形成していくと考えられる。

本遺跡が大槻荘に所属するか、大面荘であるかは別として、両荘園のいずれかが低地に進出し、半ノ木周辺の墾田開発に従事し、その領主層を中心とする集落の一部であったのではないかと推考される。

(関 雅之)

図版第1図



大墓・釈迦堂遺跡付近の航空写真

図版第2図

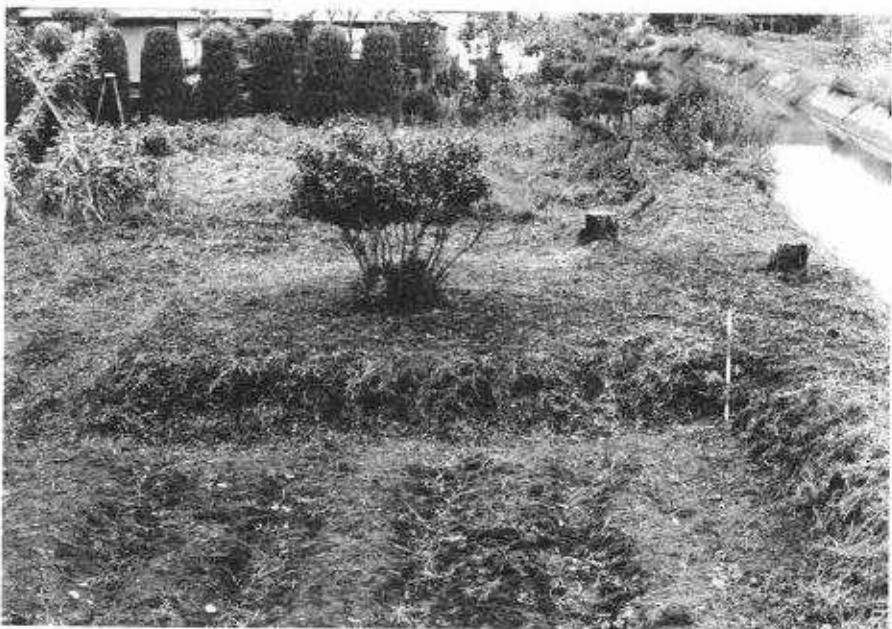


大墓遺跡付近の航空写真

図版第3図



墳墓全景（南西より）



墳墓全景（南東より）

圖版第4圖



I号葺石（南西より）



I号葺石（北西より）

図版第5図



2号葺石〔南より〕



1号葺石〔骨蔵器出土状態〕

図版第6図



I号骨蔵器の出土状態（南西より）

図版第7図



3号骨蔵器の出土状態（南西より）



2号骨蔵器の出土状態（南東より）

図版第8図

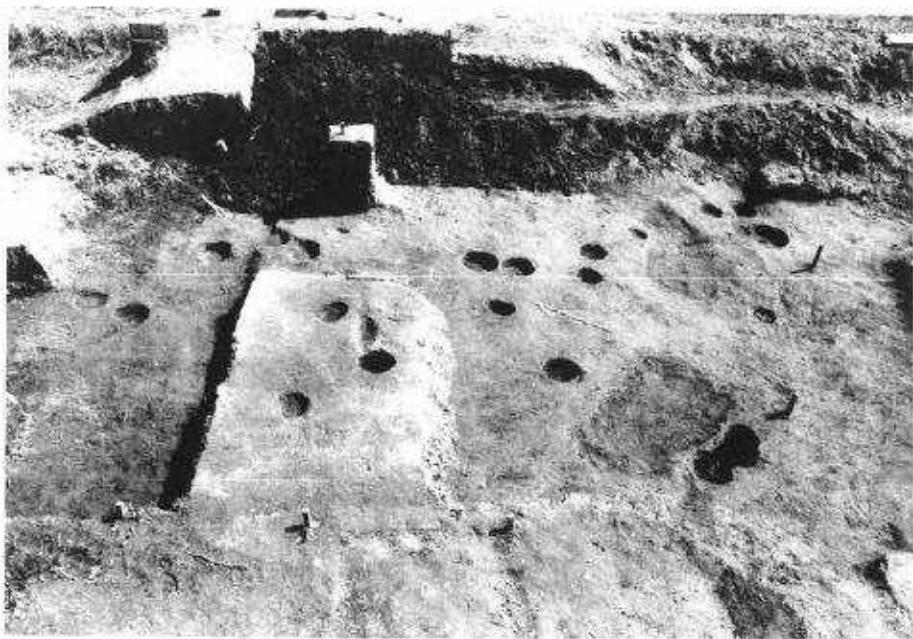


4号骨蔵器の出土状態（東より）



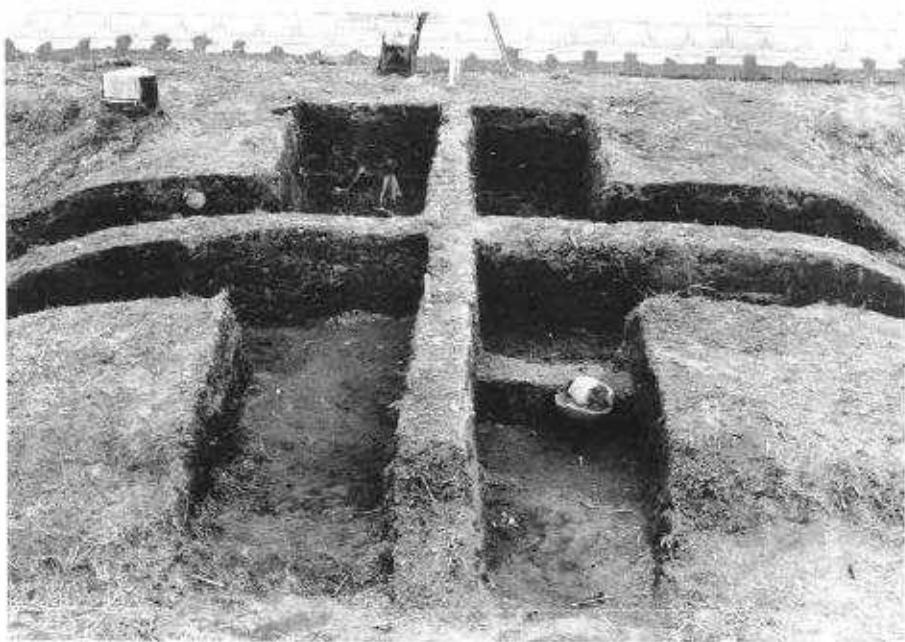
4号骨蔵器出土状態（北西より）

図版第9図



-埋納穴群

図版第10図

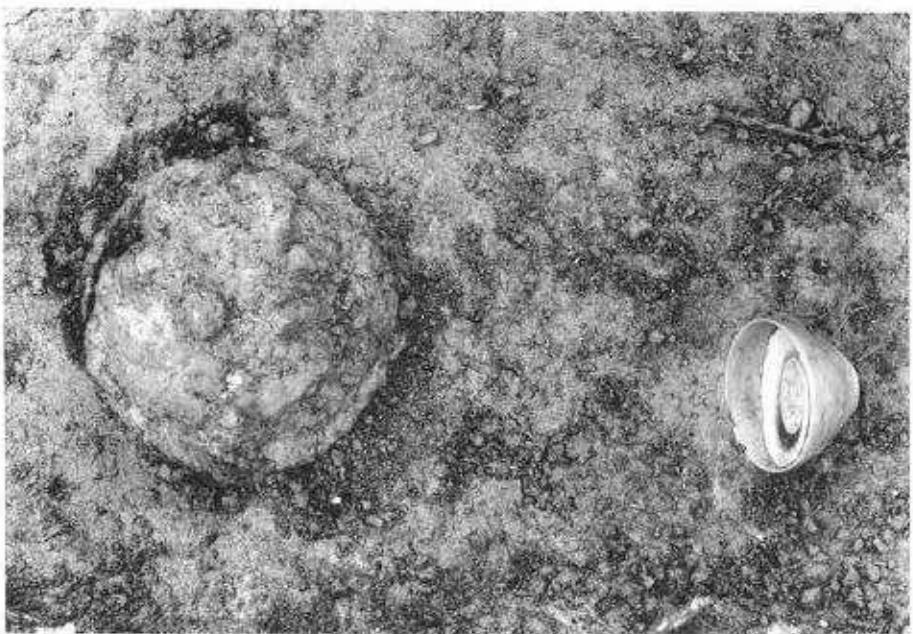


グリット

図版第11図



埋葬施設



鍋・茶碗の出土状態

図版第12図

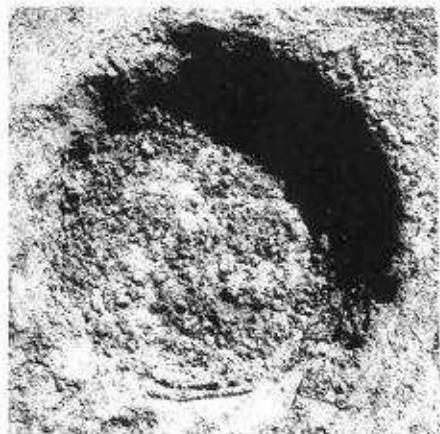
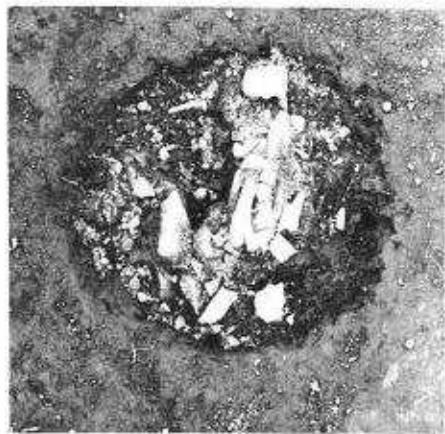


第二群埋納穴伴出の皿



第二群埋納穴伴出の茶碗・皿

図版第13図



埋納穴各種

圖版第14圖



埋納穴各種

圖版第15圖



1



2



3



4



5



6

出土遺物（骨藏器）



7



8



9



10

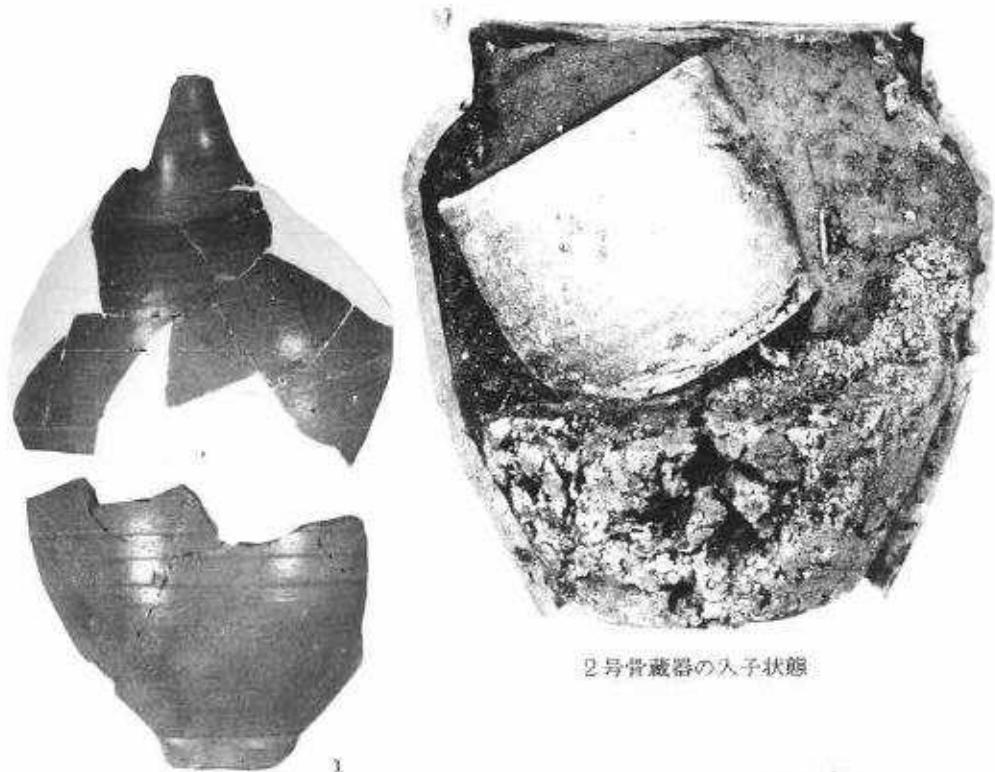


11

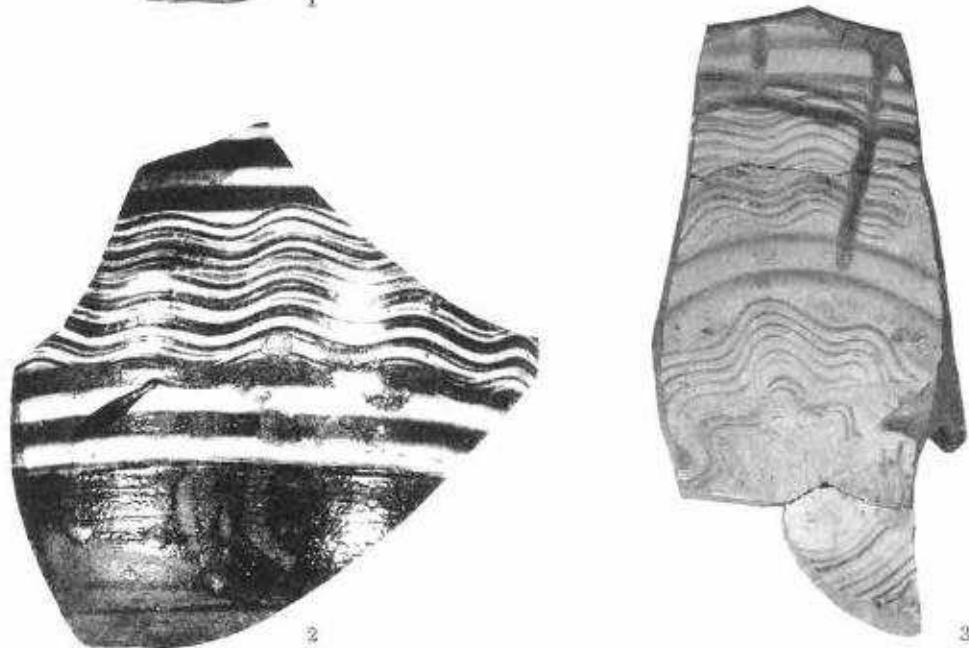
出土遗物（骨藏器）



出土遺物（陶磁器・骨藏器・鍋）

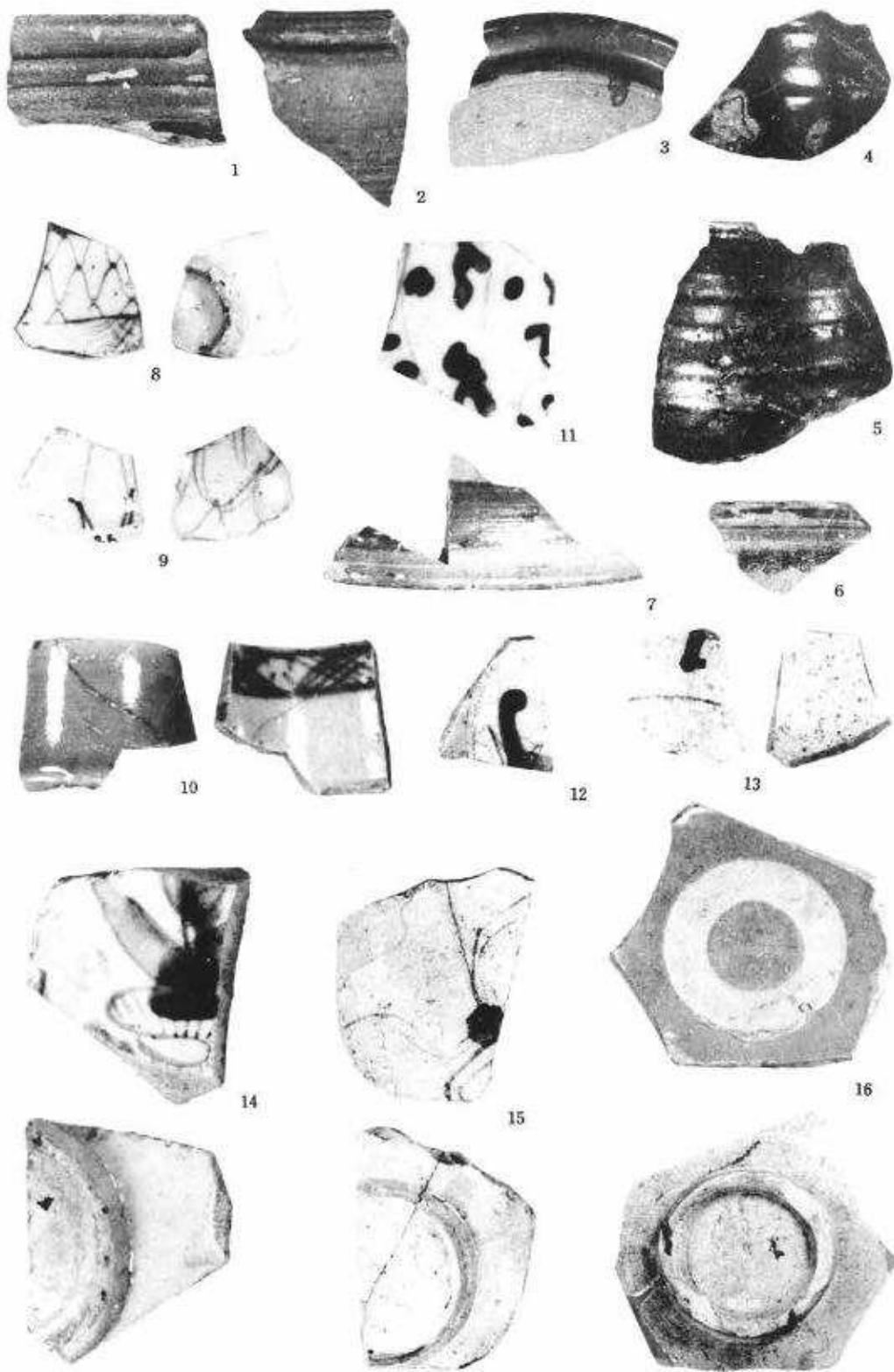


2号骨藏器の入子状態



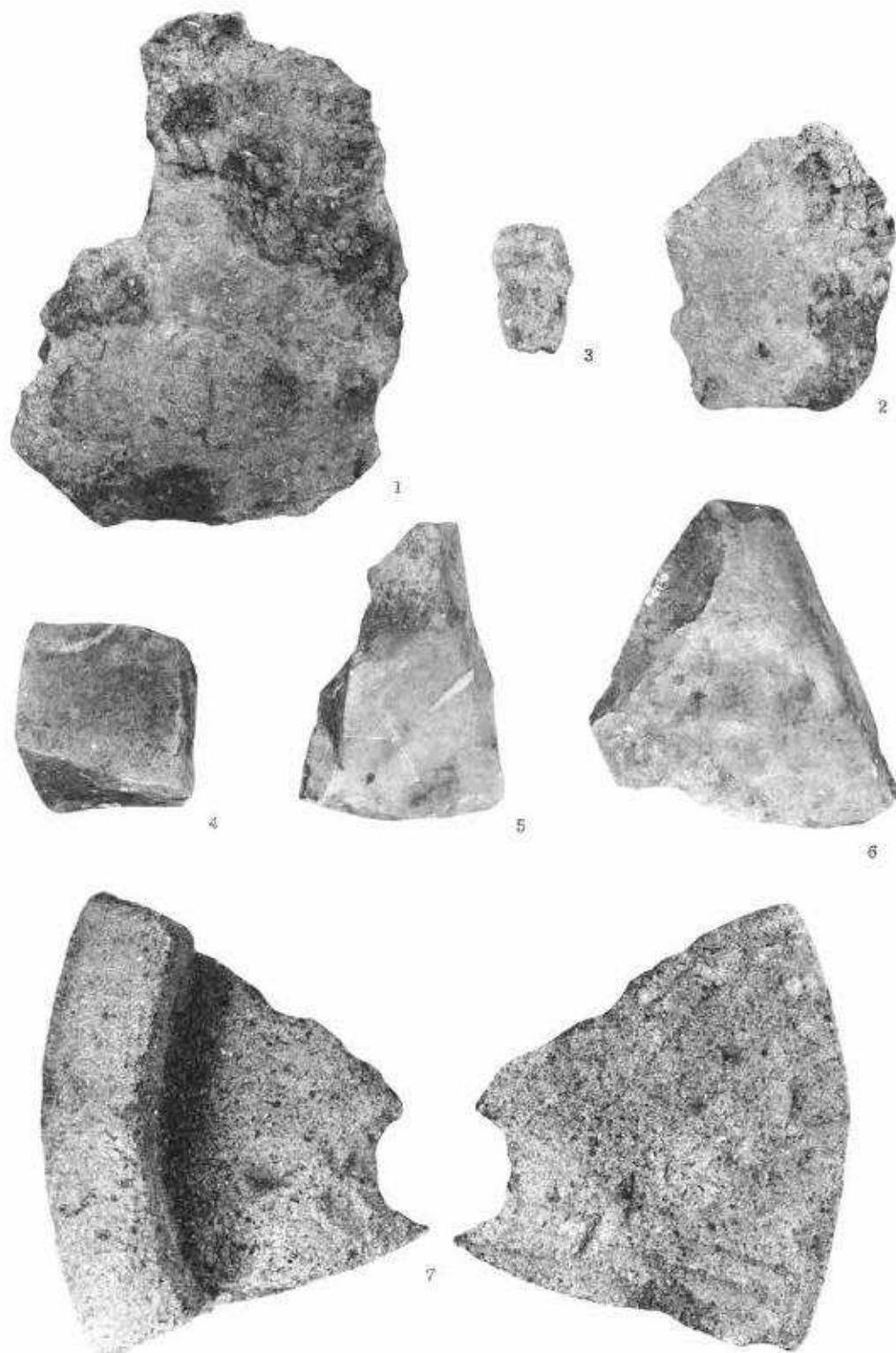
出土遺物（陶器片）

図版第19図



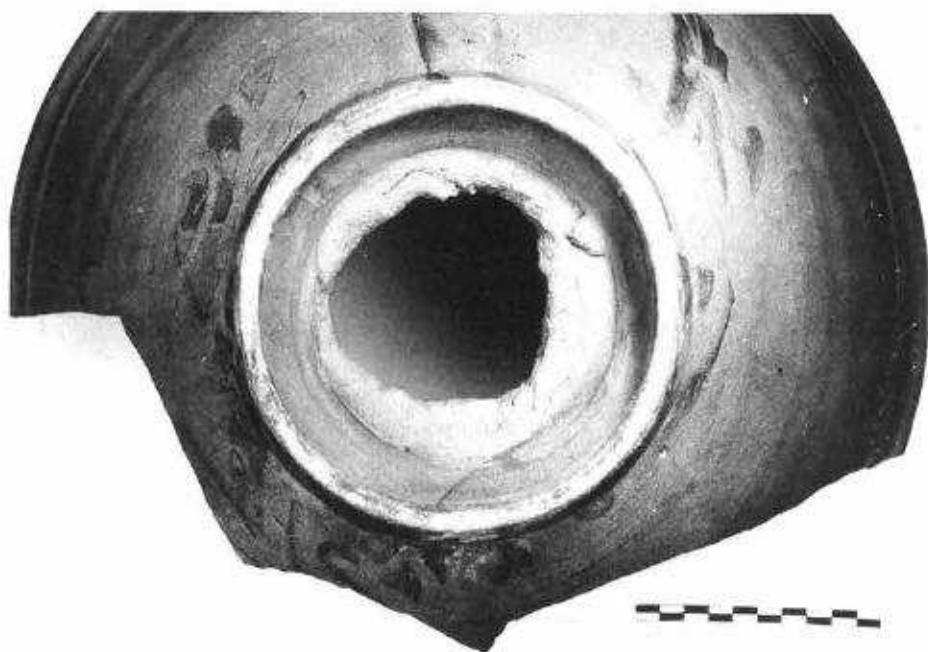
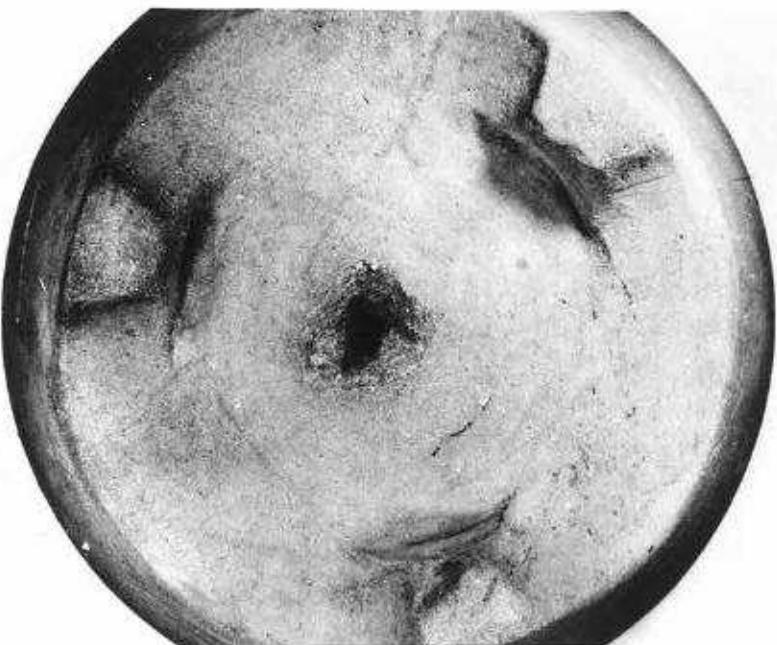
出土遺物（陶磁器片）

図版第20図



出土遺物（鉄製品・石製品）

図版第21図



藏骨器・擂鉢穿穴状態

図版第22図



积迦堂遺跡付近の航空写真



駅迎堂

1



遺跡より弥彦山・角田山をのぞむ

2



発掘グリッド

3

図版第24図



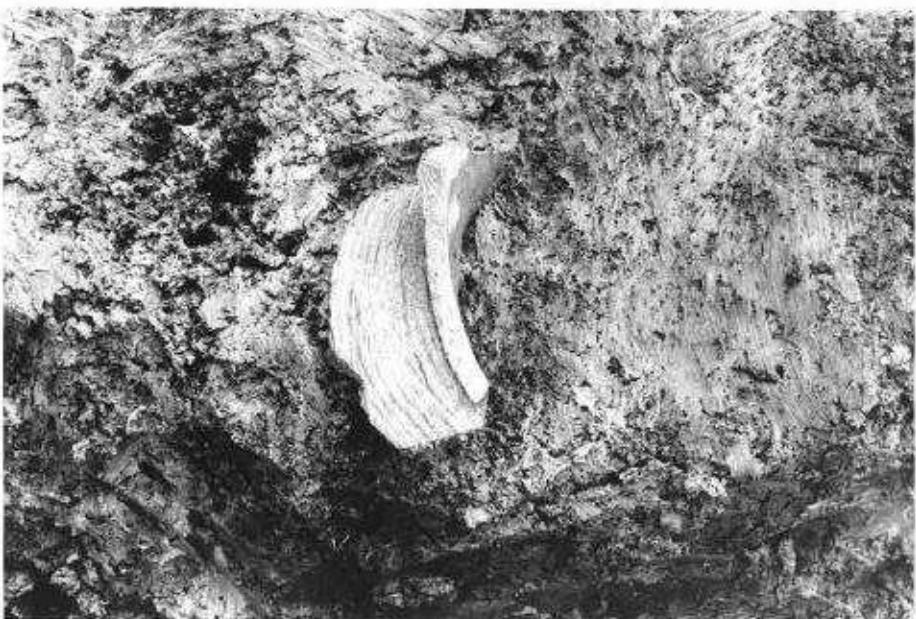
発掘スナップ



全面発掘をしたグリッド



遺物の出土状態（変形土器）



遺物の出土状態（変形土器）

図版第26図



遺物の出土状態（磨鉢形土器）



遺物の出土状態（磨鉢形土器底部）



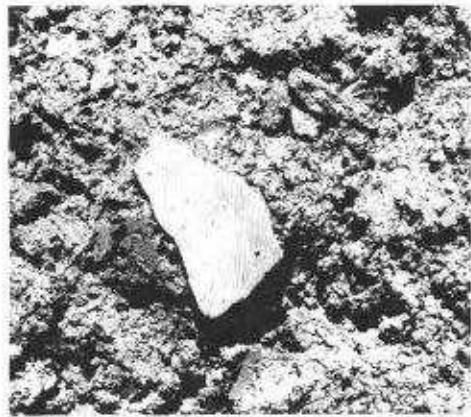
1



2



3



4



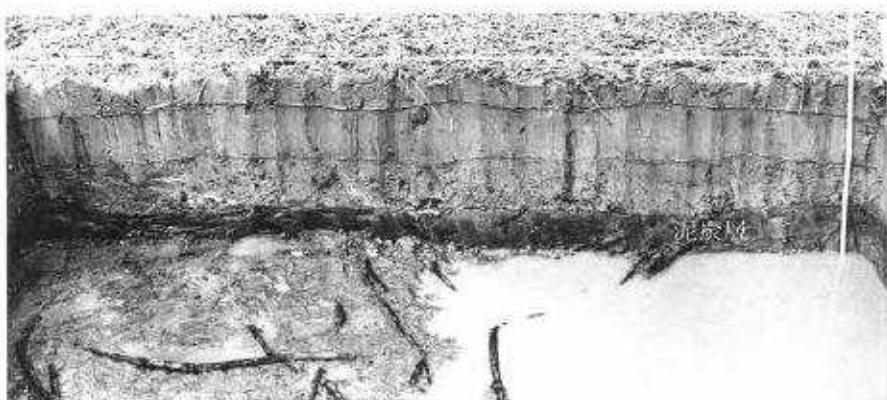
5

遺物の出土状態 (1・3-4 瓢 2 橋鉢 5 土師甕土器)

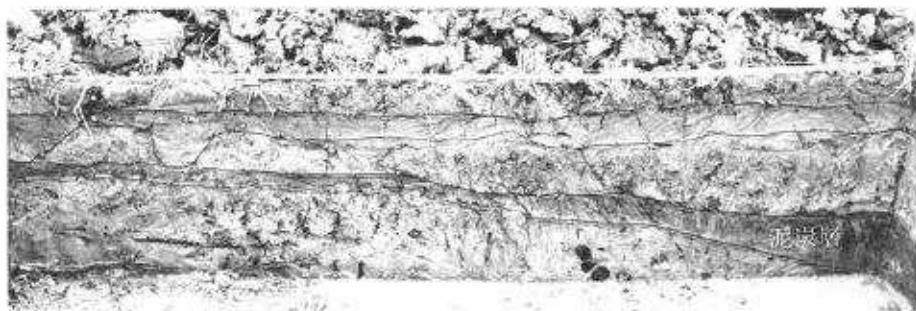
図版第28図



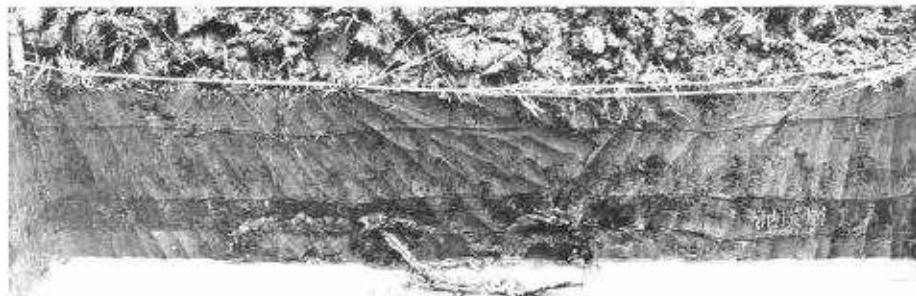
20C グリット断面



38B グリット断面



62B グリット断面



100C グリット断面

図版第29図



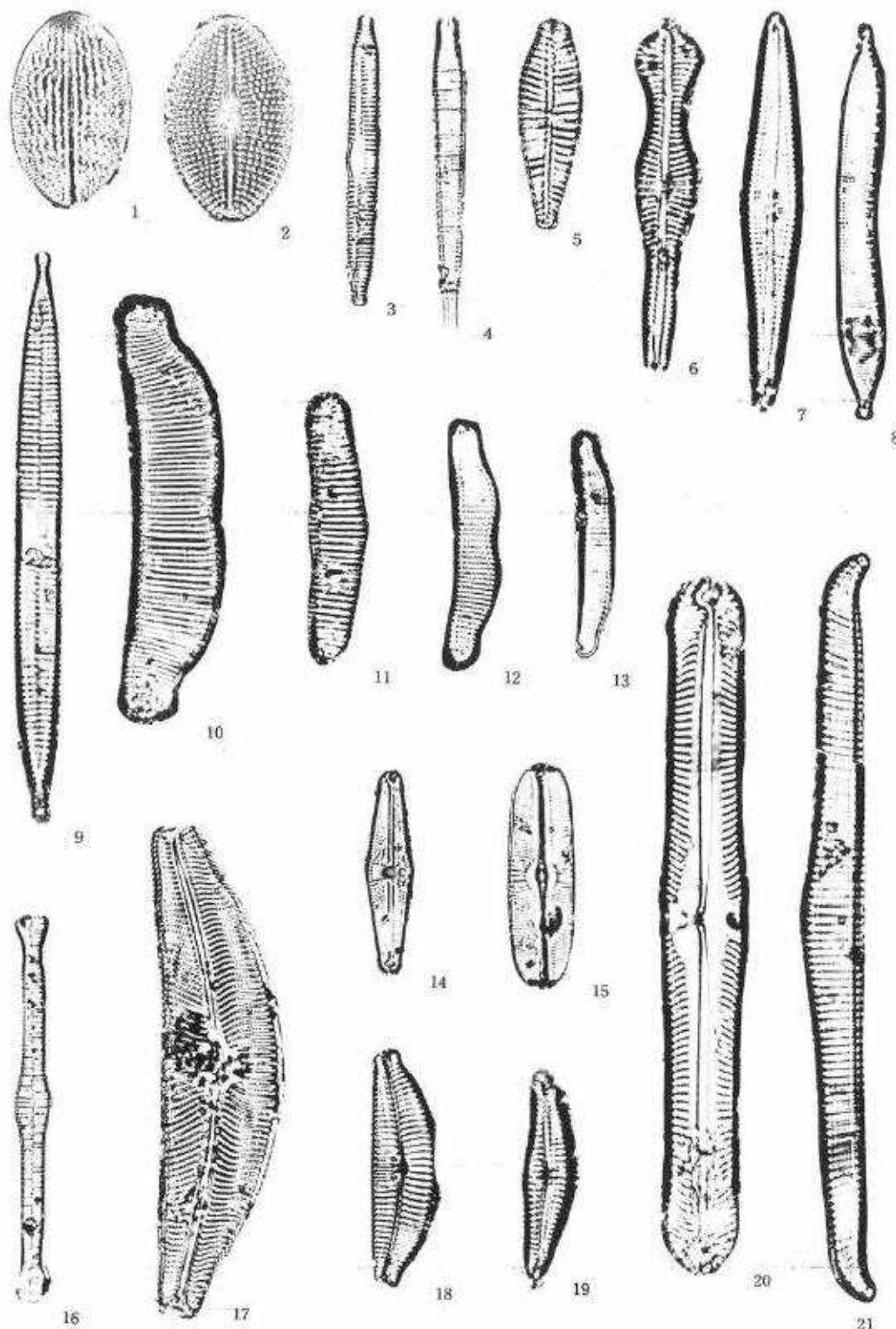
94Gグリット出土の自然木



60Cグリット出土の自然木

図版第30図の説明(×1000)

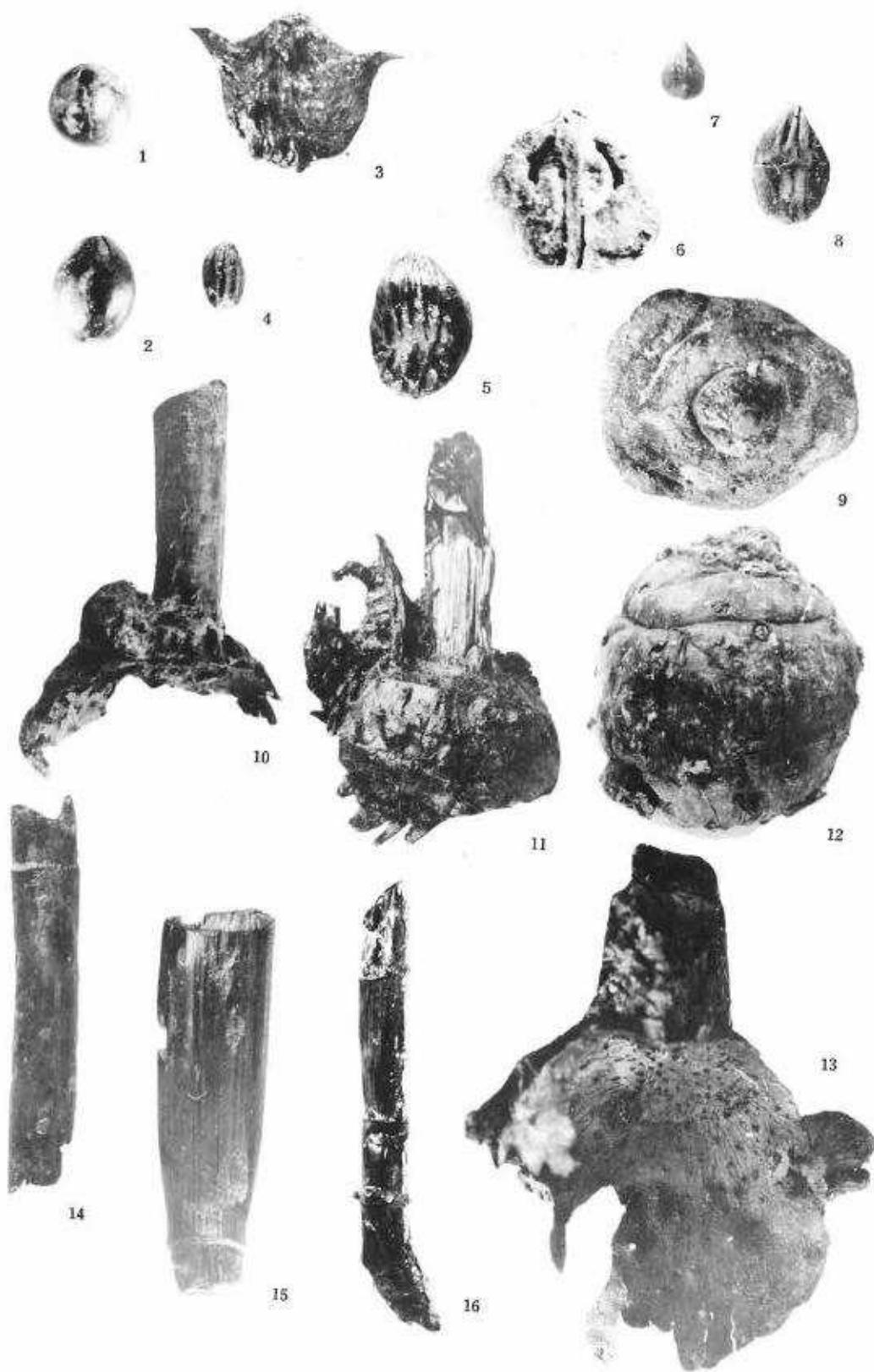
- 1 *Coccoreis placentula* EHRENBURG
- 2 *Diploneis ovalis* (HILSE) CLEVE
- 3 *Ceratoneis vaucheriae* H. KOBAYASHI
- 4 *Meridion circulare* AGARDH
- 5 *Gomphonema parvulum* KÜTZING
- 6 *G.* *acuminatum* EHRENBURG
- 7 *G.* *gracile* EHRENBURG
- 8 *Hantzschia amphioxys* (EHR.) GRUNOW
- 9 *Synedra ulna* (NITZSCHE) EHRENBURG
- 10 *Eunotia praerupta* EHRENBURG
- 11 *E.* *monodon* EHRENBURG
- 12 *E.* *arucus* EHRENBURG
- 13 *E.* *pectinalis* (KÜTZ.) RABENHORST
- 14 *Navicula mutica* KÜTZING
- 15 *N.* *bacillum* EHRENBURG
- 16 *Tabellaria fenestrata* (LYNGB.) KÜTZING
- 17 *Cymbella tumida* (BRÉB.) V. HEURCK
- 18 *C.* *tumidula* GRUNOW
- 19 *C.* *turgida* (GREGORY) CLEVE
- 20 *Pinnularia gibba* EHRENBURG
- 21 *Rhopalodia gibba* (EHR.) O. MULLER



図版第31図の説明

1. 2 *Brasenia schreberi*(ジュンサイ)の種子×4
- 3 *Trapa natans L. var. bispinosa*(ヒシ)の種子×2
- 4 *Buckleya cf. joan*(ツクバネ)の種子×1.7
- 5 不明種×3
- 6 *Vitis* sp. (ブドウ属)の種子×6
- 7 *Polygonum thunbergii*(ミゾソバ)の種子×2
- 8 *Cucurbita cf. moschata*(カボチャ)の種子×2.2
- 9 *Diospyros kaki*(カキ)のがく(へた)×2.3
- 10.11.12.13 *Scirpus maritimus*(ウキヤガラ)の塊茎×1.5
- 14.15 *Phragmites communis*(アシ)の茎×1.3
- 16 *P. communis*(アシ)の根茎×1

図版第31図

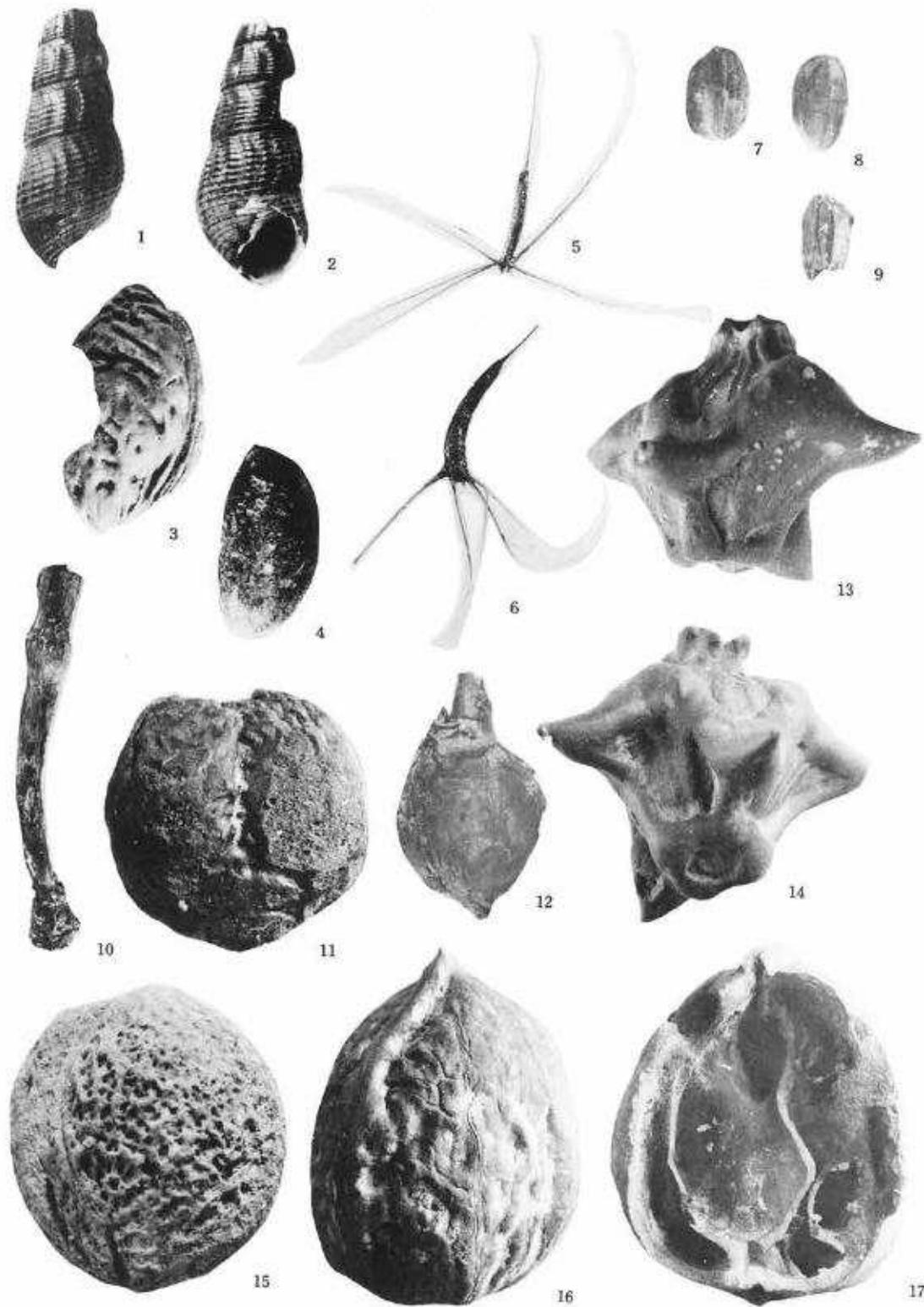


大型植物遺体

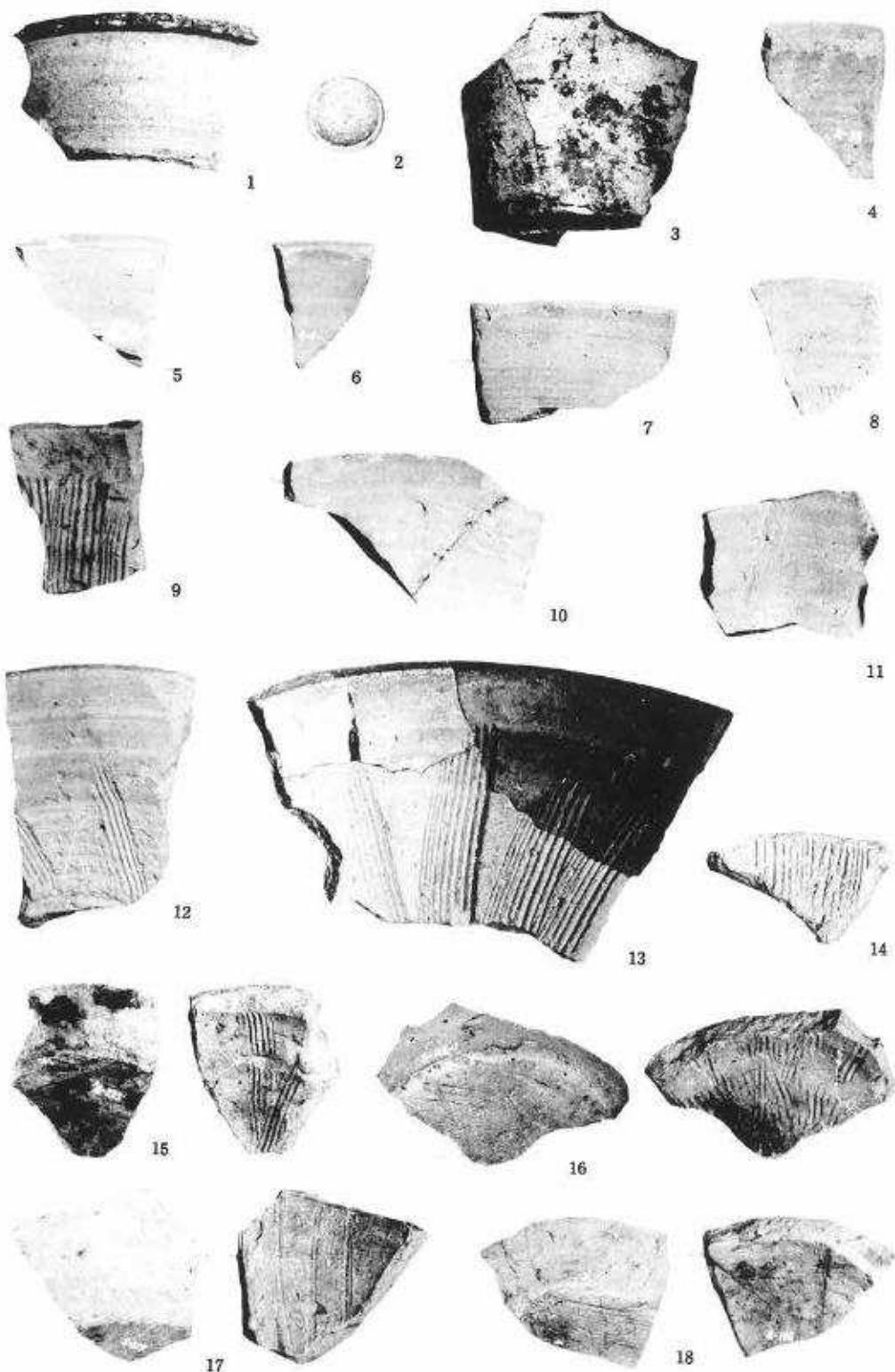
図版第32図の説明

1. 2 *Semisulcospira bensoni* (PHILIPPI) (カワニナ)
- 3 *Prunus persica*(モモ)の核果×1.7
- 4 *Diospyros kaki*(カキ)の種子×1.7
5. 6 *Trapella sinensis*(ヒシモドキ)の種子×1
7. 8. 9 *Oryza sativa*(イネ)の種子(コメ)×3.3
- 10 *Phragmites communis*(アシ)の茎×1.2
- 11 *Fagus crenata*(ブナ)の殻斗×2.7
- 12 *Salix* sp. (ヤナギ属)の枝にできる虫コブ×1.8
13. 14 *Trapa natans* L. var. *quadrispinosa*(オニビン)の種子×1
- 15 *Prunus mume*(ウメ)の核果×2.9
16. 17 *Juglans mandshurica* MAXIM var. *sieboldiana*(オニグルミ)の堅果×2

図版第32図

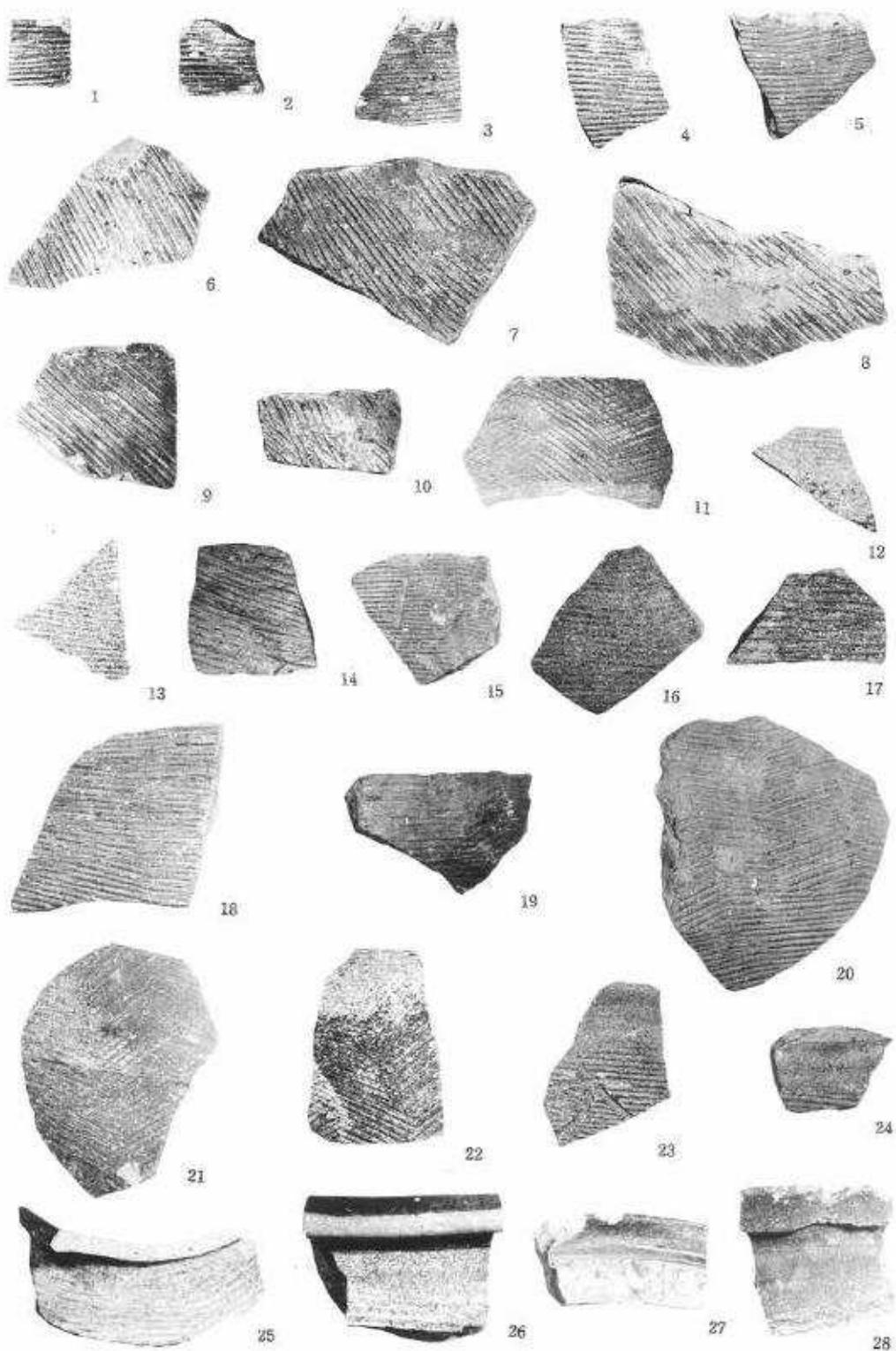


図版第33図



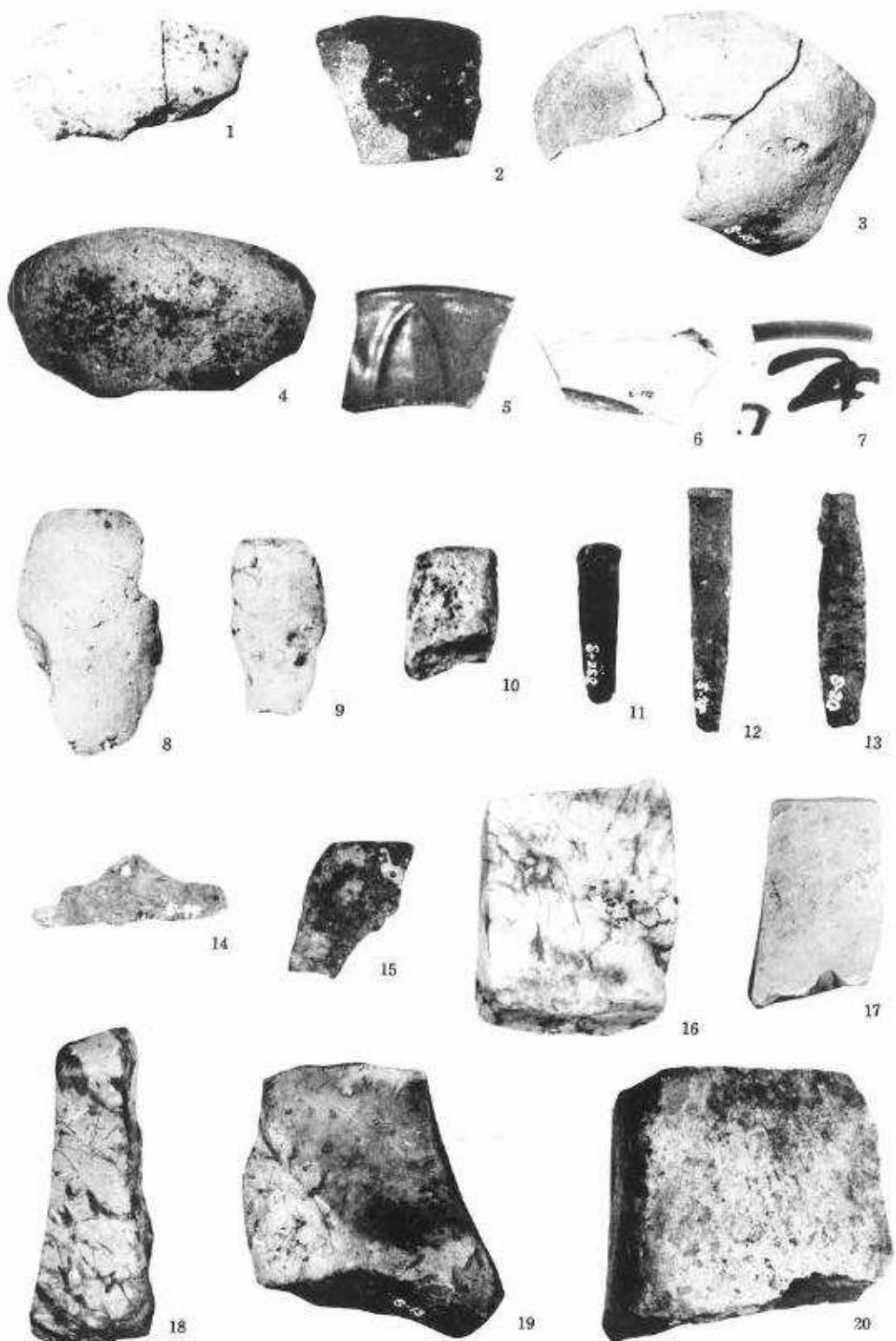
須恵器 (1・2) 陶質土器 (3~18)

圖版第34圖



陶質土器

図版第35図



土師質土器・磁器・土錘・鉄製品・砥石



半ノ木遺跡付近の航空写真

図版第37図



遺跡の遠景

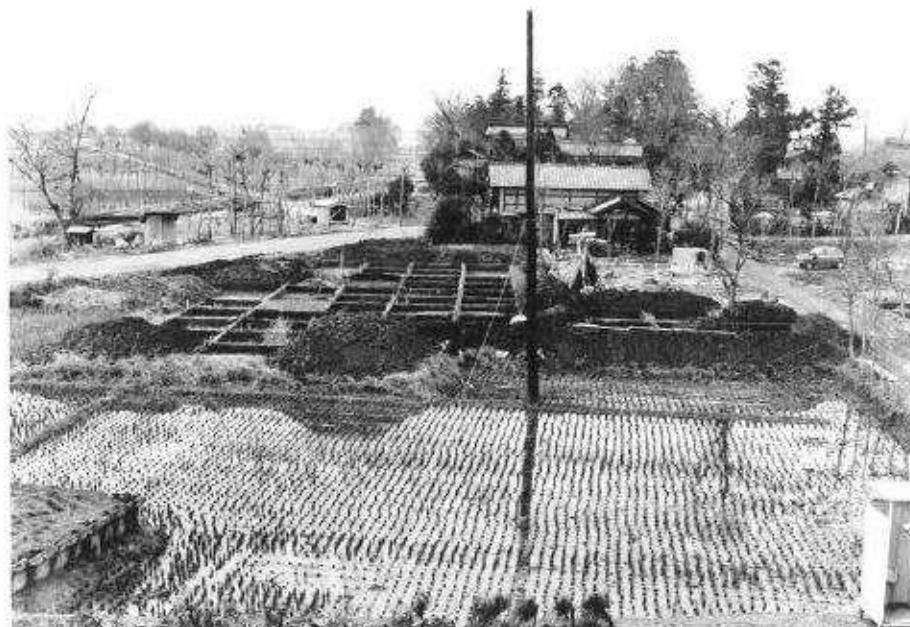


遺跡の近景

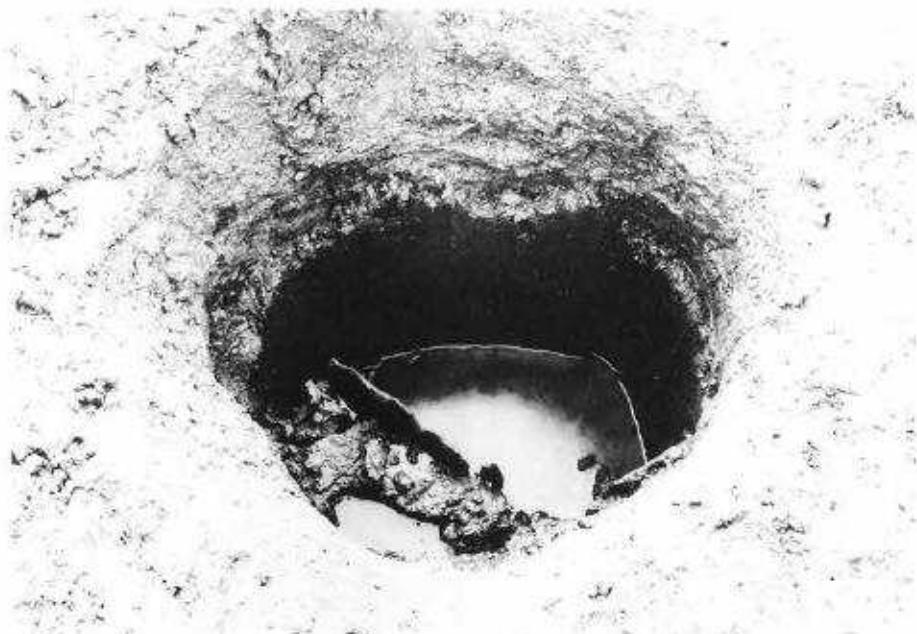
図版第38図



第1次調査グリット



第2次調査グリット

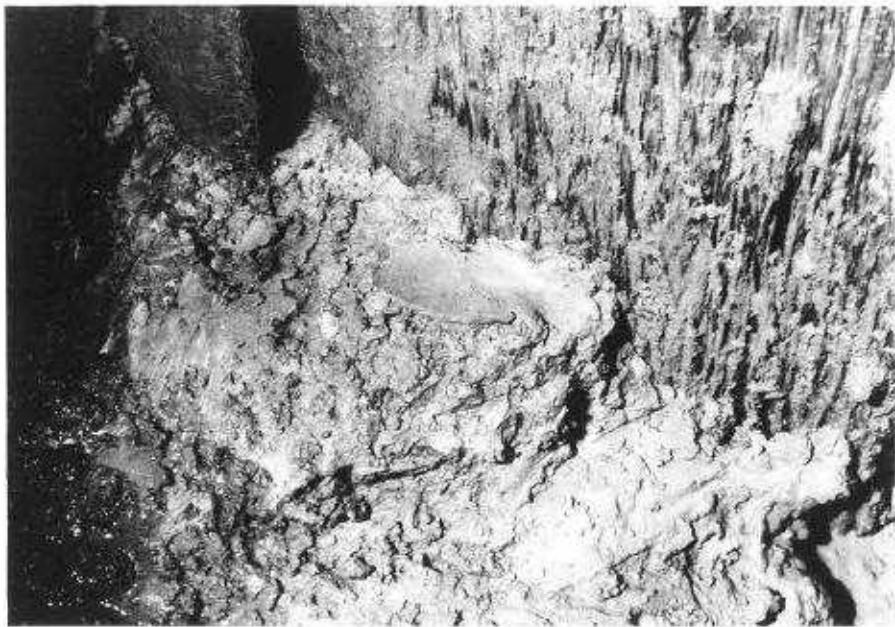


第1号井戸



第1号井戸断面

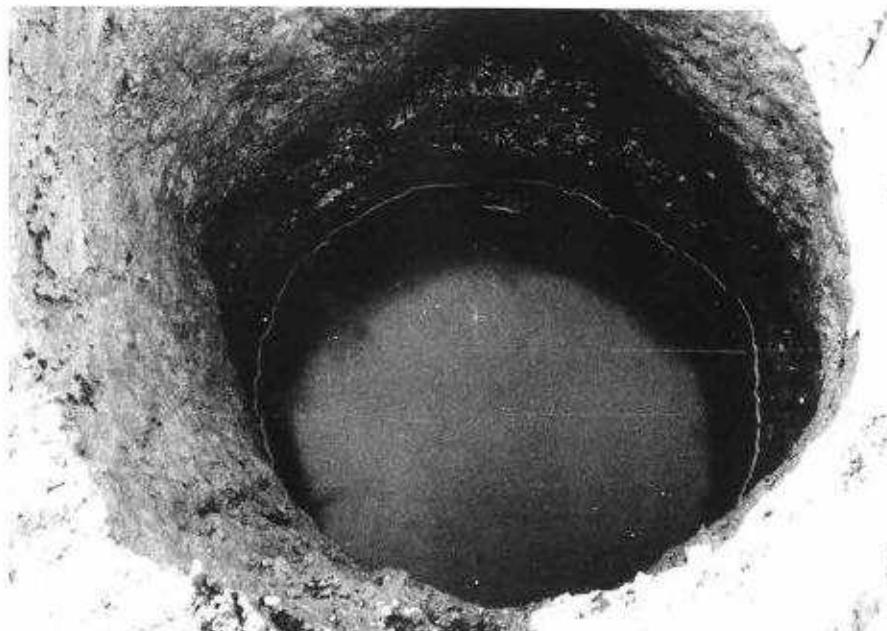
図版第40図



井戸枠の外側から出土した土器



第1号井戸 丸木舟の井戸枠  
1~3 軸先のある部分 4~8 中間部  
9は4の舷のはぞ穴拡大写真



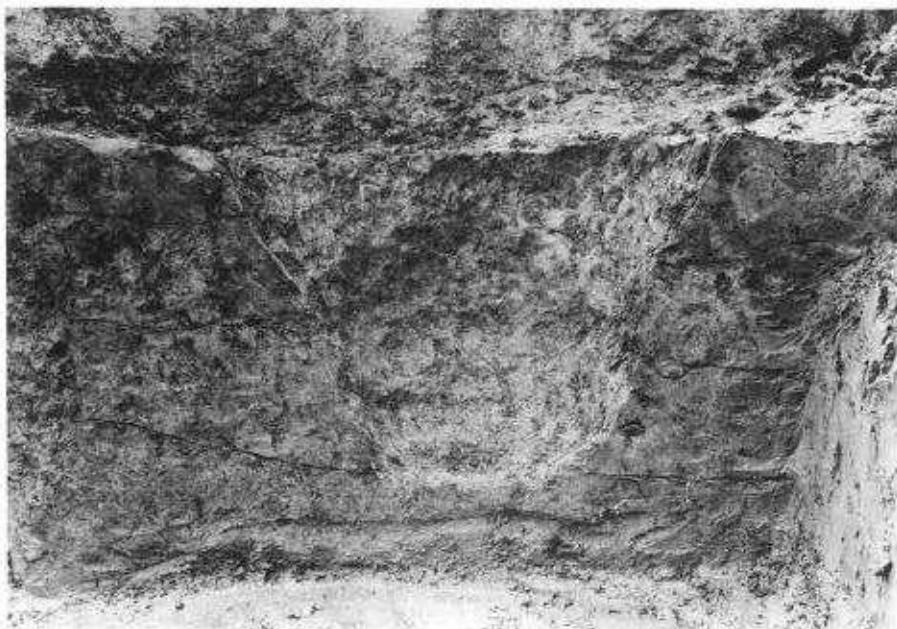
第2号井戸



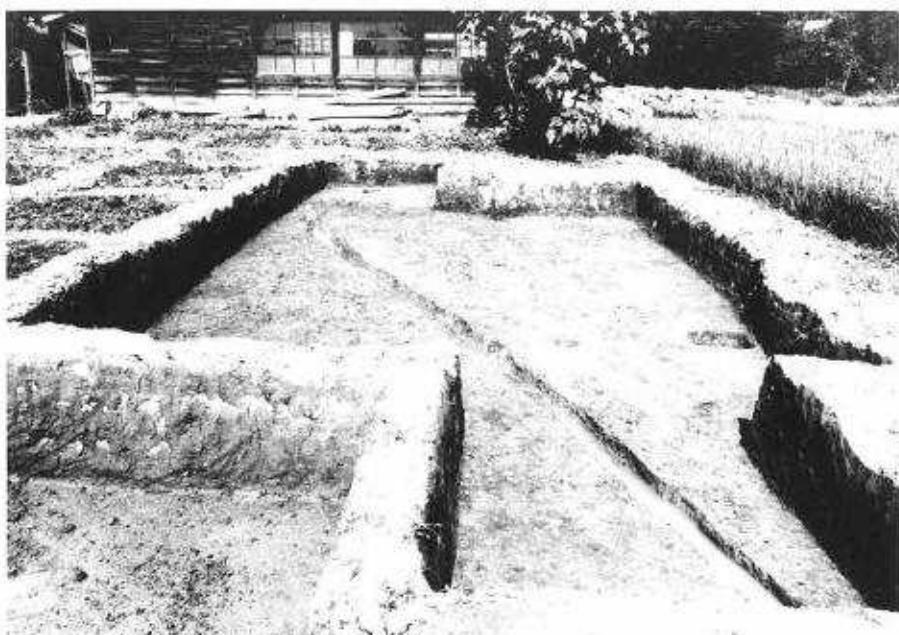
第2号井戸断面



第3号井戸



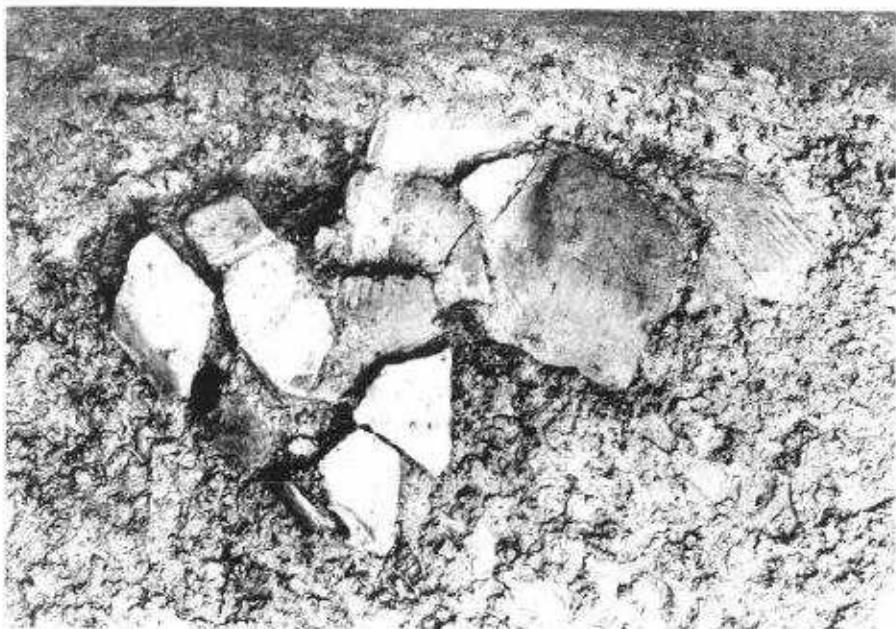
ピット状透構



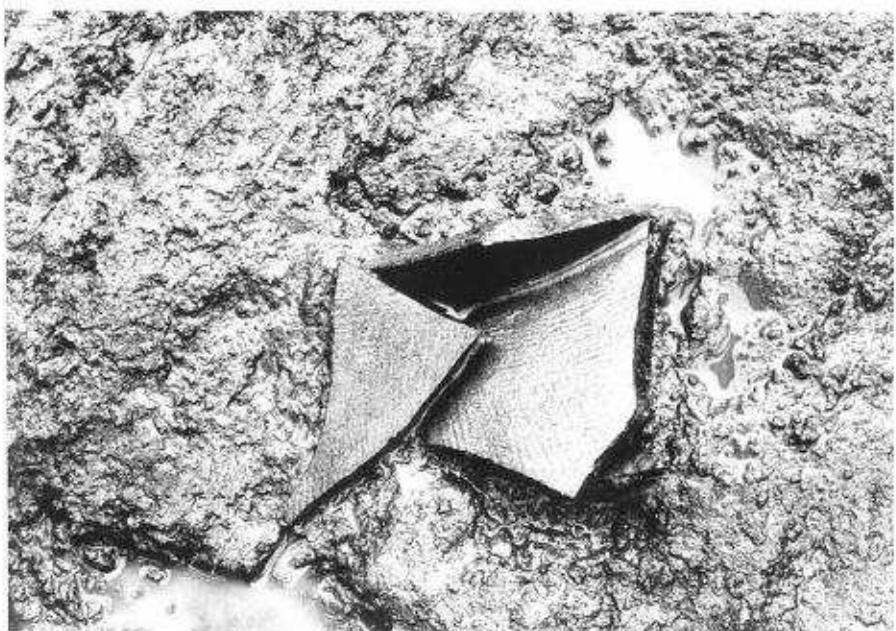
第1号溝



第3号溝



土師器長胴甕の出土状態

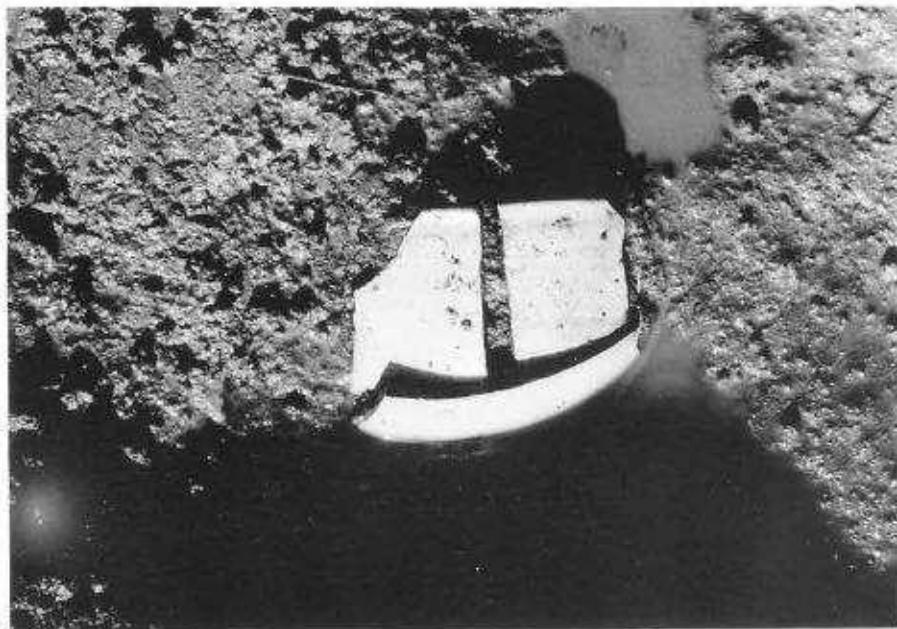


須恵器甕の出土状態

図版第46図

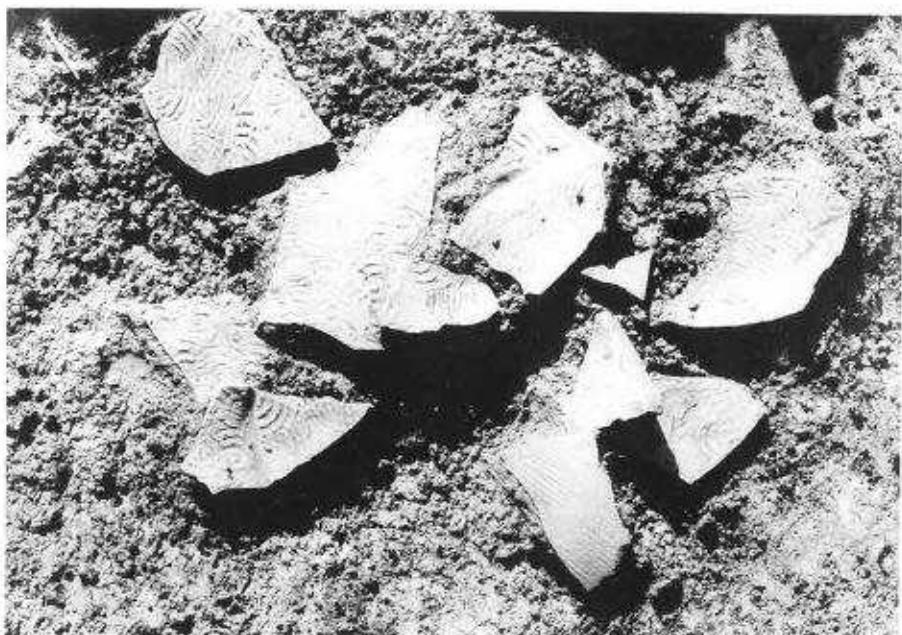


第10号ピット出土の土師器



住居址出土の綠釉陶器

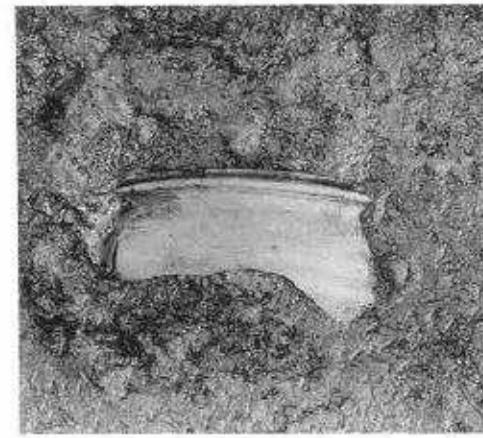
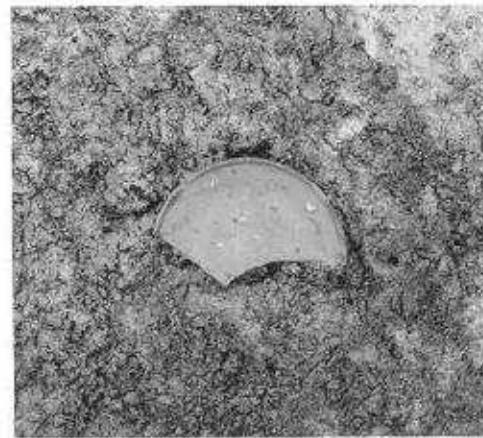
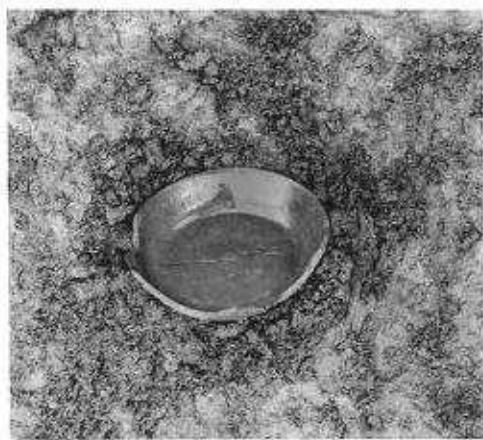
図版第47図



須恵器大甕底部の出土状態

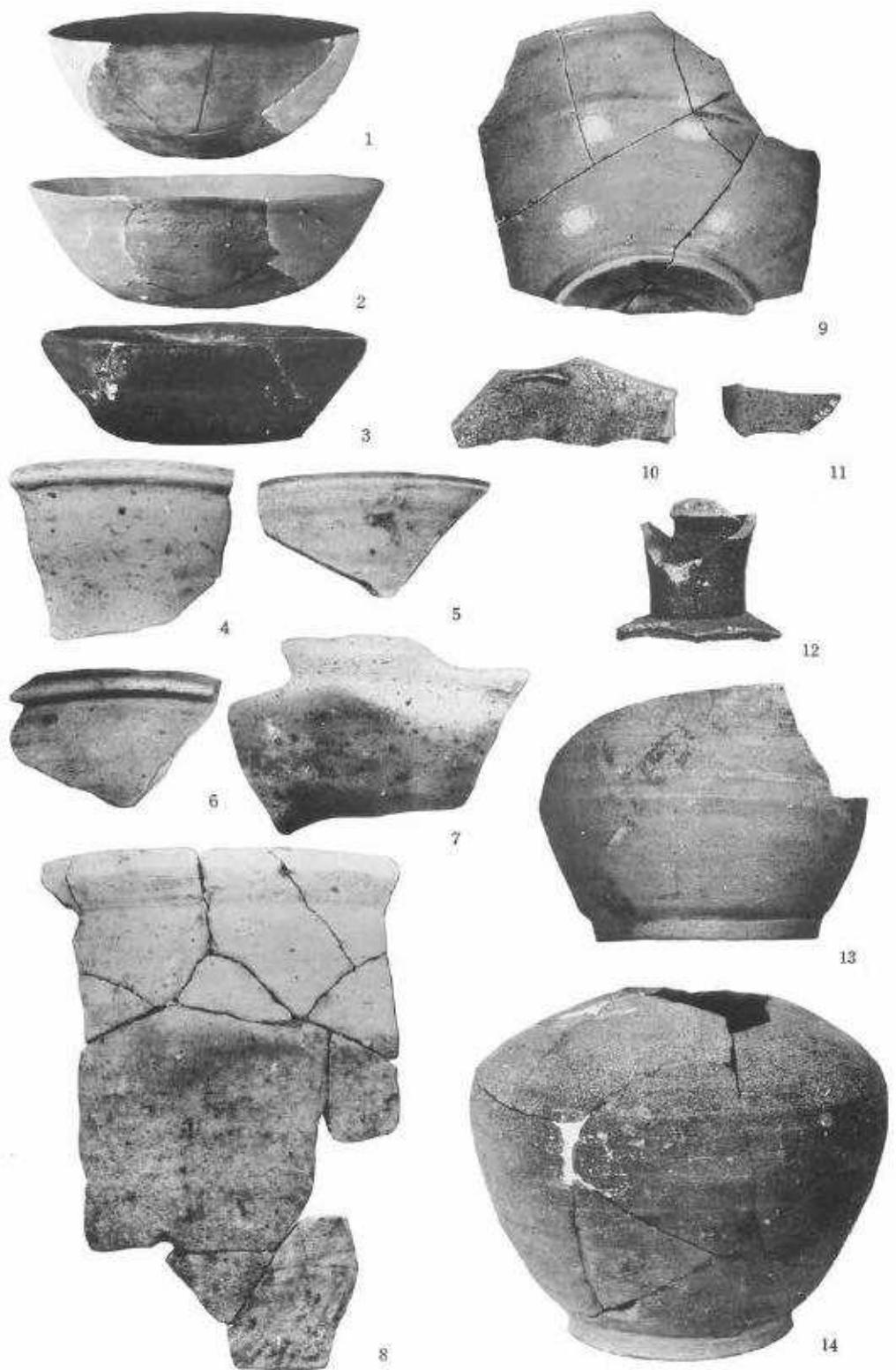


須恵器の出土状態



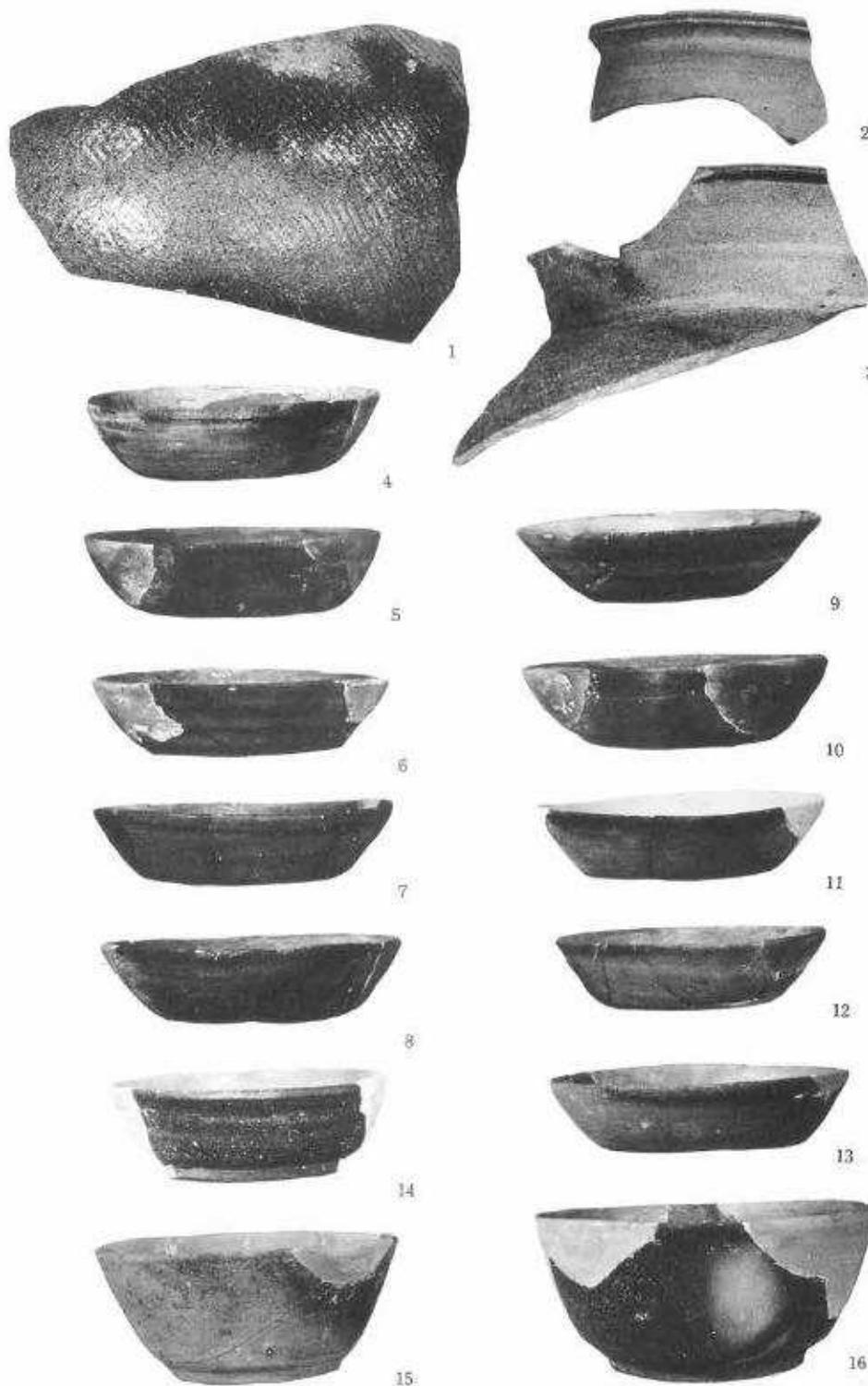
須恵器の出土状態

図版第49図



出土遺物（土師器・彩釉陶器・須恵器）

図版第50図



出土遺物（須恵器）

埋蔵文化財緊急調査報告書第1

埋蔵文化財発掘調査報告書

北陸高速自動車道

— 1973 —

昭和48年3月25日 印刷

昭和48年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 ①長谷川印刷

新潟市学校町通1番町6

TEL 2933099番

## 埋蔵文化財発掘調査報告書正誤表

ページ	行(欄)	誤	正
例言	下から 3	保久常晴	久保常晴
例言	下から 3	川辺昌一	河辺昌一
10	13	図版第 6 図	図版第 7 図
14	13	図版第 16 図 3	図版第 15 図 3
16	5	図版第 16 図 11	とる
16	11	図版第 16 図 1	図版第 17 図 1
16	下から 10	図版第 15 図 8	図版第 16 図 8
18	17	図版第 15 図 11	図版第 16 図 11
20	10	図版第 17 図 3	図版第 18 図 3
22	16	図版第 19 図 3	図版第 18 図 3
27	1	図版第 16 図 4	図版第 17 図 4
32	3	図版第 16 図 3	図版第 15 図 3
42	下から 13	第 11 図 5	第 10 図 5
77	18	第 5 図 1 ~ 20	第 5 図 1 ~ 19
78	第 9 図	黄褐色粘土層	5・黄褐色粘土層
78	第 9 図	橙灰色粘土層	6・橙灰色粘土層
78	第 9 図	茶褐色砂層	7・茶褐色粘土層
78	第 9 図	橙褐色粘土層	8・橙褐色粘土層
78	第 9 図	灰褐色粘土層	9・灰褐色粘土層
78	第 9 図	青灰色粘土層	10・青灰色粘土層
81	下から 4	第一類	第 1 類
83	下から 8	第一類	第 1 類
88	1	図版第 39 図上の	図版第 39 図下の
88	7	第 12 図	第 11 図
93	8	図版第 43 図	図版第 46 図
94	12	12 ~ 15	12 ~ 16
95	8	8, 10	8 ~ 10
98	下から 14	図版第 1 図 14	図版第 50 図 14
100	1	第 21 図 1 ~ 13	第 21 図 1 ~ 14
102	10	図版第 49 図 3	図版第 50 図 3